百世の師ヒルティー

小池辰雄著作集

第五巻

⑤ヒルティ

百世の師ヒルティー

小池辰雄著作集

第五巻

この『百世の師ヒルティー』を
その若き日にヒルティーを愛読された
わが国、教育界の泰斗
天野貞祐先生に謹んで捧ぐ

一九七七年晩夏——小池辰雄



ベルン時代のヒルティー(クララ・フォン・ラッパルトの素描)

はじめに

およそ二十代の青年男女にして、いかに生くべきかといった人生問題を真面目に考える者がとりあげて読むべき本の中にどうしても入れなければならないのは、ヒルティーの著作である。否、そればかりではない。ヒルティーは、人生の旅路においていつなりとも、その言葉に耳傾けて親しむべき師であり、友であるにちがいない。

筆者も旧制高校時代からヒルティーを愛読し始めた。本郷三丁目の福本書院にヒルティーの „Für schlaflose Nächte“（『眠られぬ夜のために』上巻、下巻）を注文したところ、二冊で九円、当時（一九二五年）の私の小遣いが月に十円であったから、これを買ったら、他に何も買えなくなったことはいまだに記憶にのこっている。この本が高価であったので、それだけ一所懸命に読んだ。この本にくいついたのは高校三年のときであった。その後もくりかえし読んだので、本のとじが崩れ、ボロボロになっている。とうとう読むだけでは満足できず、いつのまにか上巻は翻訳

してしまっていた。

ヒルティーは、道徳の根底に宗教（キリスト教）を置いている。宗教哲学という概念があるように、宗教道徳という概念も当然あって可いと思うが、ヒルティーは正にこの宗教道徳をよく考察し、よく実践して、その考察と体験から確信を以て語っている。すべて本当のものは告白であると思うが、ヒルティーの著作も、言葉の深い意味で告白である。

今世紀の初葉、東大の哲学教授であったラファエル・ケーベル博士が、その『続小品集』(„Kleine Schriften, Neue Folge“) でヒルティーを論じておられるが、その中で「ヒルティーの著作のどれを繙いてみても、どの本においても、また殆んどどの頁においても、人々は明瞭に、単純に、断乎として語られている著しい思想に出会う。これらの思想は、ある力強い確信に基づいており、内的生活の領域において非常な人間知と個人的経験のあることを証している」と語っておられる通りである。

ケーベル博士はまた、「ヒルティーは私の生涯の伴侶となった。私は彼と交ることいよいよ永ければ永いほど、いよいよ以て彼を尊重し、彼を愛することになる。我々の見解や共感の向きにおいて相異はあるが、そんなことに拘りなくである」と言っておられるのも同感である。

福音書にまざまざと絵巻物のごとく展開しているイエスの言動そのもの、ありしままの原始の、そして現在的なキリスト・イエス！　これこそがヒルティが慕いてやまず、語り伝えんとし

てやまないキリストなのである。

ヒルティーは聖書をからだで読んでいた。けっしてあたまで研究してものを言っているのではない。「わたしのことばは霊である、生命である」といったイエスのことばをたましいで受けとり、いのちとして喰ったのである。だからヒルティーを通して天来の権威ある思想が、豊かに生命的に流れているのである。

最大の宗教家イエスが、いわゆる宗教くさみのない大自然のごとき人物であることを、多くのひとびとがみそこなっている。そしてこのイエスのあらゆる言動の奥にひそんでいる秘密は愛であることをヒルティーはよくつかんでいる。

昼間活動するときは神の愛の力でうごき、夜眠るときは神のふところに全身を托して眠ったイエス。その呼吸をうけとってヒルティーも生きた。「愛はすべてにうち勝つ」とのヒルティーの標語は、敵をうち負かす意味ではない。相手を荷ないあげ、救いあげる力をもった愛である。そしてこれこそは人生と世界をほんとうに美しくする原始力なのである。万人が実は愛に飢えている。愛の言動のみが平和以上の歓喜の花を世に咲かせるものである。ヒルティーの百花繚乱のことばにこもる愛が、読者の人生の旅路の力とならんことを！

そのためにもこの第五巻を手引きとして、読者が原書乃至訳書によってヒルティーに親しまれんことを！

最後に一言しておこう。私がヒルティーを敢て「百世の師」と称える所以は、現代のいわゆる民主主義があまりにも根幹のない浮草のようなものであるので根幹をもったヒルティーの言説には言の正しい意味で権威があるからである。

ではあるがヒルティーをただ「百世の師」として仰ぐのではなく、——そんなことはヒルティー自ら断るにちがいない——ヒルティーが何を根幹として語っているかを確っかりつかみとることこそ眼目なのである。すると万代の師は神の言行を体現していたキリストであることを悟るであろう。そうでなかったら、空しいことになる。

一九七七年七月七日

武蔵野にて

小池辰雄

目次

はじめに 1

カール・ヒルティーの生涯素描 9

ヒルティーの幸福観（主著『幸福』をめぐって） 25

仕事と幸福（『幸福』第一巻） 27

仕事の仕方 28

エピクテトスの語録 35

幸福追求のあがき 43

幸福とは何か 50

人生と教養（『幸福』第二巻） 59

「わが民を慰めよ」 61
罪と憂い 68
教育とは何か 86
人生の諸段階 94
超越的希望 110
人生と信仰（『幸福』第三巻） 118
信仰とは何か 119
ヒルティーの人間観（晩年の著作をめぐって） 127
地上の天国（『眠られぬ夜のために』上巻） 129
天恵の諸力（『眠られぬ夜のために』下巻） 137
詩人論・教育論（『書翰集』） 146
ダンテ 147
人間を育てる芸術 154
霊的キリスト教（『新書翰集』） 162

より強度のキリスト教 163
読書論（『読書と演説』） 171
神経衰弱について 180
病める魂 189
永遠の相の下に（『永遠の生命』） 197
愛は一切に勝つ（『力の秘密』） 205
ヒルティーの本質的なもの 213
ヒルティー『眠られぬ夜のために』（上巻抄訳） 221
ヒルティー『永遠の生命』 305
ヒルティー『力の秘密』 355
おわりに 438

カール・ヒルティーの生涯素描

父は医師、母も軍医の娘。このヨハン・ウルリヒとエリザベットの間に一八三三年二月末日にカール・ヒルティーが末子として生れた。ところは山紫水明の国スイスのザンクト・ガレン州、ライン上流の谷間、ヴェルデンベルクという小ざっぱりとした町である。この町はラテン系が多く、父はグラウビュンデン州の都クールで開業医として働いていた。彼は同種治療法（ホメオパティー）や食餌療法（ディエテーティック）に長けた名医であった。母は才能豊かな、特に詩的才能に恵まれた、そして神秘的霊性の敬虔な婦人で「彼女のかんばせは心の透明な窓のようで、その崇高なたましいは、やわらかい光となってその心の窓から現われていた。その純な碧い眼は親しげにまた平安に満ちていた」とハインリヒ・アウエルが伝えている。ヒルティーの信仰の質が使徒ヨハネ的で神秘性が深く、神との霊交からくる歓喜と愛の強さ、詩才にも恵まれていることなどは母から受け継いだものである。偉人の母が大方素質の優れた女性であることは、この場合も正にそうであった。ヒルティーが十一歳のときこの母が他界したことは、彼をいよいよ内面的にした。二十五歳のとき父も長逝した。

ヒルティーは六歳で小学校に入学。兄や姉とクール市で楽しい少年時代をおくる。彼はしかしやや蒲柳の質であった。家系と環境がやや貴族的であった彼は、小学校生活についてこう告白している、「我々は、後になって始めて学ぶことになろうことを、小学校で見ることがしばしばある。ところでまた他では見られないような、多くの貧困な家庭の、足るを知った忠実な勤勉な生

活を見ることが出来る。そして私の不動の民主的（庶民的）な信念は主として貧しい同級生との交りやそれらの家庭の状態を観察した結果であることを告白することが出来る」と。

十一歳で州立のギムナジウムに入り、一八五一年にその学校の卒業試験（アビトゥール）に抜群の成績で合格し、ドイツのゲッティンゲン大学に入学した。

この大学で彼は三つの学期（ゼメスター）即ち一年半をローマ法、歴史及び哲学の研究に当てた。当時はヘーゲル哲学が優勢であったが、彼はカント哲学に傾倒した。カントの『純粋理性批判』を最も根本的な哲学書となし、教養に哲学的訓練の必要を自覚した。ゲッティンゲンからハイデルベルクに移って、一八五四年まで更に法学の研究をつづけた。ドイツの大学は休暇がたっぷりあるので、ドイツ国内を大いに徒歩旅行もした。同年『原告及び被告の刑事訴訟に関する原理に就いて』という論文を提出した。即ちローマ法及教会法の研究によって法学の学位を獲た。更に彼はロンドンやパリーの大学に進学し、図書館に日参して研究に資する傍ら、外国人の生活を観察し、外国語の修得にも利するところがあった。そればかりでなく、彼は同時代の著名な人物にめぐりあう機会も得た。しかしそれはむしろ彼に失望的な結果をもたらした。「新聞や書籍によって知った多くの著名な人は個人的に知ることによって大方マイナスであることは断言できる」と彼は吐露している。

学業を一通り終えたので彼は一八五五年から謂わば彼の第二の故里なるクール市において十八

年間弁護士として活動することになった。

彼は専ら道義的見地から、正しい事件や誠実な人々の当然の権利の確保のために弁護士として活動することを使命としていた。狡猾なる者や不正な事件に対しては飽くまで反対の立場に立って弱者や虐げられた者の味方となった。彼は弁護士をおのが天職とすら感じていた。何度生れかわっても自分は弁護士となると告白した。義のために戦う愛の人たる彼の人格のおのずからなる声である。弁護士という職がらについて彼はこう語っている。

「実際社会では信用というものはそう速くたやすく来るものではない。とりわけ弁護士や公証人に対してはそうである。その反対に官吏や政治家においては政党や民衆がこれに援助を与える。けれどもその信用は極めて仮空的なもので、単なる党派的根性にすぎない。弁護士や公証人は最上の人物たることを要求され、単にある党派所属とか、市民権があるといったことではダメである」。

彼は法律の専門家だけあって、「今日は以前よりも更に人生の各方面で正義が要求されていることは確かである。これがためには正しい精神の法律家が一層増加することを要する」といっているが、なお現代への豫言の如くに響く。

一八五七年、彼はヨハンナ・ゲルトナーと結婚した。彼女は国法学者ガスターフ・ゲルトナーの娘で、著名なプロイセンの法律家、枢密顧問官ジモンの孫女にあたり、愛国家エルンスト・モ

ーリッツ・アルントの名付けの子である。ヨハンナはヒルティーにとって打ってつけの良妻であった。彼女はヒルティーの最善唯一の秘書でもあった。ヒルティーの個人的幸福は彼女によって百パーセントに満たされたと申してよいことは彼の次の言葉が裏書きして余りある。「私自身、もし来世があるならば、かつて地上において見知った人で、無条件に何がなんでも再会したい人は、私の有であったわが妻の外には一人もいない。これは彼女が私自身の最善の本質の一部を成していた証拠であって、この本質は彼女の不在以来最早不完全なものになっているのである」と。

ヨハンナ名秘書の存在はともあれ、彼自身、電光の如き迅速な理解力と優れた記憶力のゆえに、仕事は確実にまた容易になされてゆくのであった。その無駄のない規則正しい生活様式、而もゆとりのある生活振りの源動力は、確乎たる信仰と真理に対する情熱にあった。

スイスの風習に従い、ヒルティーもまた軍籍に就いた。一八六五年に歩兵士官となり、陪審判事即ち州軍法会議の判事を勤め、一八六二年には大尉に昇進、旅団陪審判事となり、スイス連邦法院幹部に転任した。七六年には少佐となり、師団大判事に任ぜられ、八六年に大佐に昇進、九〇年最高陪審官代表となり、一八九二年にスイス陸軍の裁判長の重職に就いた。死に至るまで彼は軍籍を離れず、十七年間裁判長として、模範的周到と誠実とをもって、軍事裁判の最高責任者、指導者の責務を果した。スイスのあらゆる裁判官の尊敬と崇拝の的であった。ヒルティーは

最高陪審官時代、一時間も休暇をとったことがなかったとのことである。

他面彼は一八七三年に、スイス最大のベルン大学の正教授となり、連邦法及スイス歴史の講座を担当した。「民主政治の理論家と理想家」という論説を発表して、スイス諸州及スイス連邦において、憲法、組織的法規、及び国家の条約に関しては、国民投票の必要を力説した。これはスイス連邦の諸主都の注目するところとなった。ヒルティー博士は、当時の尊敬すべき国法学者であり、まことの愛国者であったワルター・ムンツィンガー教授の唯一の価値ある後継者と認められた。ヒルティーは今や全国民の精神的指導者、教育家として、おのずから尊敬を受けるようになって来た。

彼は大学についてこういう理念を抱いていた。「大学は謂わばかまどであって、そこにはつねに学問の火が保たれていなければならない。この火は、時の風向きに惑わされることなく、静かな焔をもって燃えつづけ、ただに努力精進する青年のみならず、すべての人の心をあたため、輝かす役割を果すものであらねばならない」。これは一八八二年、学長就任演説の中で述べた一句である。

一八九〇年以来、このベルンの国法学教授は、その故里の選挙区ヴェルデンベルク・グラープ及びトッゲンブルクの国民議員及び代議士となった。国会議員として自由思想の民主党員であったヒルティーは政治上の敵味方から非常な尊敬を受けていた。

彼はまた国際法の方面の権威者でもあり、ベルン大学法学教授ヒルティーは、ヘーグにおける永久仲裁裁判所設立後に、この諸国民の〈アレオパーク〉―（アテネの有名な裁判所の故事に因んだ表現）―に招聘された。

彼は死に少し先だって次の如き、注目に価する見解を吐露した。即ち、「この国際会議はあまりに大きいために、却て困難で、効果が緩慢である。また英独間の商業的精神（商売根性）、日米間の名誉心（野心）、勢力意識の深い間隙は、どんな平和会議によっても決して取り除かれるものではない。これはただ上からの他の霊が、もう一度人類の中に来臨することによってのみ除かれるであろう」と。「上からの他の霊」とは、神の聖霊のことである。「もう一度」とは、かつてキリストが昇天したあと、聖霊がキリストの弟子たちの群に降臨したことを念として、「もう一度」と言ったわけである。これはヒルティーの遺言的な豫言として、各国民が、特にその為政者たちが、今日こそいよいよ胆に銘すべき言葉である。

そしてヒルティーは更に「平和は、まず第一に平和を愛し、平和を来たらせる力ある多くの個人の心に成り立たなければならない。そうすれば平和は諸国民の間にも次第に成り立つものであって、それまでは決して平和は成り立たない」と確言している。人間のあらゆる問題は、結局心の問題に帰一する。

その心の問題と生涯を賭けて取っ組み、且つその明察と卓見と実践を遺していった百世の師表

をヒルティーにおいて我々は見る。

大学教授また軍の法務官としての職域における活動のほかに、ヒルティーはスイスの政治の領域でも著しい仕事を成し遂げているので、その方面のことも生涯の素描の一環として書き加えなければならない。

一八七五年、四十二歳になった彼は『スイス連邦政治に関する講義』(Vorlesungen über die Politik der Eidgenossenschaft) という本を出版した。この著はスイスの建国以来の諸種の政治思想を紹介しつつ論評を試み、あわせて将来の政治のあるべき姿および実施上の諸注意を示したものである。

更には『スイスに関する公開講義』(Öffentliche Vorlesungen über die Helvetik) を一八七八年に著した。これは、崇高なる愛国の至情を吐露し、義しい民主主義の政治を布くことを唱道している大著述である。すなわち昔のスイス連邦のような理想のない政治が存続し得ないこと、国家はその理想を外国から借りてくるようなことではダメであり、また単なる抽象的瞑想から編み出したようなものでも力がないことを論証している。彼がこの著作において、いかに歴史家としても秀れた力量を具えているかが実証されているとのことである。

ところで彼の政治上最も重要な著述は、彼が編集主任であり、主筆であった『スイス連邦政治年鑑』(Das Politische Jahrbuch der Schweizerischen Eidgenossenschaft) であった。これは一八八

六年以来、彼が世を去るまで、毎年確実に規則正しく出版され、平均六百乃至七百頁、全二十三巻の大著作である。しかもこれは出版のため国家から何らの補助金を受けていないのであった。真の国民的著作としてその地味な光をいつまでも放っているものである。これを見てもヒルティーの誠実な精力的な活動振りは驚嘆に価する。

（ここに一言附記したいことは、一九七三年九月他界された法学出身の優れた聖書研究家にして伝道者なる塚本虎二先生は、この浩瀚な年鑑をすら所持しておられたヒルティーの研究家でもあったということである）

著作上ばかりではなく、社会的活動の面でも、ヒルティーは種々の公益上の仕事を果した。彼は積極的な婦人参政権のために運動を起し、その他婦人問題の解決、進展に心を用いた。また婦女売買防止のために論戦したり、飲酒喫煙の害を唱えたりした。一九〇八年スイス国民が絶対多数をもってアブサント酒禁止令を採択したのは、主として彼の力によったのである。

彼は救世軍の活動に対するあたたかい理解者でもあって、『最善の道』(Der beste Weg) という著作をそのためになした。彼はひそかにアルメニア人にも補助の手をのばしていたことが、彼の死後アルメニア孤児院の報告書によって知られた。それによると、「我らは心よりの感謝の念をもってベルン大学教授ヒルティー博士を追憶いたします。著作家にして神の人なるこの偉大なる魂は、身を卑うして、見栄えのないアルメニアの孤児たちを顧みて下さった。多年にわたり彼は

一少女のために規則正しく年々二百三十フランを支払い、この少女が孤児院を去ることができるようになるや、彼は次々と第二、第三、第四の孤児たちを求められました。そして九月十五日には我らに手紙を送って第五の孤児を求めました。その際にこう書いておられたのです。『私はかなり快方に向っているので、年末まで生き延びることができそうに思いますから』と。それから正に一ヵ月の後、（一九〇九年）十月十二日に彼はその心からの願いを遂げ得ないで、たましいの故里に帰られました。彼は孤児院にとっていつまでも忘れられない存在であります。殊に彼の愛によって心身ともに祝福された四人の女の孤児たちのこころにいつまでも」と。（この稿は主としてハインリヒ・ロッキー氏の小伝〈独文〉に拠った）

これは余談であるが、私は東大の独文学科の学生時代、大学からの帰途、本郷からお茶の水へ出ると、時折神田の古本屋街に道草を喰うのが何よりのたのしみであった。私たちの学生時代には、神田の古本屋には洋書が一杯あった。その点この頃は何とさびしいことか。学生が洋書を読まなくなったためであろう。翻訳ものの氾濫のためでもあろう。ヒルティーの著作はさきにも触れたように、水戸高校時代からスタートを切りはしたが、殆ど全部、大学時代に神田の古本屋でおのづから買いあつめてしまった。独乙の古典詩人のものも、キェルケゴールも、ダンテも、英米の詩書も神田の古本屋で見つけた。小遣は殆ど全部書籍に代った。そのためか、大学三年間で

コーヒー店に入ったのが多分三回くらいであった。

さてところで、彼の主要著作を一応ここに紹介しようと思う。

彼の思想は体系的にではなく、実践的実存的な生活における体験と思索と読書から渾然としてくりひろげられているものであるから、著作の年代を追って、それぞれの著作の重点または特色ある言辞をえらび出して論述してみたいと思っている。そしてそれは宗教道徳方面の主要な著作に限ることにする。

ヒルティーの名を世界的ならしめたものは、何といっても彼の主著『幸福』(Glück) 全三巻である。第一巻は一八九一年に出版。彼の五十八歳のときである。人生の体験も思索も読書も豊富にして円熟した頃に宗教道徳について筆を動かし始めたことを思っても、いかにその内容が含蓄のある秀れたものであるかがうかがわれるわけである。

彼の全著作を通して第一に感ずるとこは、彼がいかに聖書を精読し、精通していたか。その引用の仕方がいかに適切であり、また自由であるか。まことに驚嘆すべきものである。

第二巻は一八九五年（六十二歳）、第三巻は一八九九年（六十六歳）出版で、四年毎に出版されているところを見ても、彼の仕事振りの一端がうかがわれる。

『幸福』全三巻のあと、『眠られぬ夜のために』第一巻 (Für Schlaflose Nächte I) が一九〇一年に出た。因みにこの本の第二巻は、彼が他界してから十年も経った一九一九年に刊行された。こ

の本は『幸福』のような論説集ではなく、本文は三百六十五日に区分され、一日一短文を読むようになっている。彼自身の詩文も散在している。著者は第一巻の序文の終りでこう書いている。「ここにある思想は、どれ一つとして私自身の思索と私の生活経験とに基づかないものはない。しかしこれは眠られぬ夜か、少なくとも特に苦難の日に読まれねばならない。これらの思想はそういうときに読むに最も適わしい」。

ケーベル博士は、毎朝これを読むことを楽しい日課としておられた、ということである。毎日の生活に何らかのよき示唆や励ましなどをそこから読みとられたからであろう。私も「眠られぬ夜のために」というよりも、朝か昼間の余暇に読むことしばしばである。

次に一九〇三年に『書簡集』(Briefe) が出た。これは書簡の形式で書かれた論説集で、「教育の仕方」、「友情論」、「ダンテ」、「神の国はどのようにして来るか」の四編から成っている。

つづいて一九〇六年に『新書簡集』(Neue Briefe) が出版された。その内容は、「法かなさけか」、「不幸中の幸」、「女性賛否」、「強度のキリスト教」「天国」の四編をふくんでいる。

次に小品をいくつかあげると、まず『読書と演説』(Lesen und Reden) が年代はさかのぼって、一八九五年に出ている。これは実は二つの論説から成っている。第一は「読書論」(Über das Lesen) であり、第二は「話術の公然の秘密」(Offene Geheimnisse der Redekunst) である。

一八九七年に出たのは、『神経衰弱について』(Über Neurasthenie) で、今日いよいよこの文明

病になやまされている都会人にとって、これは大いに耳を傾けるべき論説である。

それから十年の後に、即ち一九〇七年に『病める魂』(Kranke Seelen)が出た。これは、『神経衰弱について』の姉妹篇とみることができよう。ノイローゼにかかった娘をもつ一人の婦人に手紙の形式で語っている。現代の日本婦人も、こういったヒルティーの言説に耳を傾けて、問題の所在とその根本的解決の那辺にあるかを探知すべきである。

彼の生涯の終りが近づいた一九〇八年には、『永遠の生命』(Ewiges Leben)、正題は『永遠の相の下に』(Sub specie aeternitatis)という論説を書いた。

これは彼の召天の年、一九〇九年に書かれた最後の著作『力の秘密』(Das Geheimnis der kraft)と姉妹篇を成すと申してよい。

この両篇はいかにも彼の晩年を飾るにふさわしい珠玉の二篇である。

彼は実に「永遠の生命」を体験し体現して、此岸から彼岸へ、この現世から永遠の天国へ、それはあたかも、仕事部屋から茶の間へ入るように入っていった。そういった人生の一切の「力の秘密」は何であるか、そのことを最終の作品が、遺言の如く語っている。

そのことは彼の墓碑名として刻まれている句がいみじくも指示している。曰く、

〈AMOR OMNIA VINCIT.〉

「愛は一切に勝つ!」

けだしこの「愛」の内実は無限無量なるものである。この最終の二篇は私も愛読してやまざるものである。(本書に収録した)。

ヒルティーは福音書を最も愛読した。彼は生前に、四福音書の本文を自由に採択しながら、『キリストの福音』(Das Evangelium Christi mit Erläuterungen von C. Hilty) を編集し、これに彼らしい注釈を附記した。そしてこれは彼の死の翌年、一九一〇年に、彼の遺志にもとづいて刊行された。

以上が彼の宗教道徳的著作の主題であるが、なお忘れてならないのは、さきにも述べたように、一八八六年から地上を去るまで、即ち一九〇九年まで『スイス連邦政治年鑑』に寄せた多くの論文の中で、「スイス的教育の根本思想について」、「結婚の神聖について」、「商業道徳について」、「新聞界の教育について」、「老年について」、「スイスの将来」、「歴史における主観的要素について」、「永遠の平和」などの論説も、その論拠はいずれも、福音的信仰から発していることにおいて一貫している。

ところでひとつ遺憾に思うことは、スイスにおいてどうして『ヒルティー全集』少なくとも『ヒルティー著作集』を出版しないのか、という一事である。あるいはドイツのレクラム版になぜ載らないのか、ということである。日本では白水社が『ヒルティー著作集』を出しているわけであるが。

ヒルティーの幸福観——主著『幸福』をめぐって

仕事と幸福（『幸福』第一巻）

これからヒルティーの宗教道徳的著作の山地にわけ入ることにする。私が特に山地というのは、彼は決して抹香くさい宗教論をしたり、かたくるしい道学者的道徳論をするような人ではなく、彼の著作を読むと、生き生きとしたおごそかさと豊かさをもって読者を元気づけ、力強くさきへさきへと歩ませる想いがするからである。

そこには森厳な山林あり、木の下路あり、岐路にはハッキリした指標があり、渓流があり、岩根こごしき路を昇れば、豁然として緑の原野がひらけ、花咲き匂い、鳥は飛び交い、湖が白雪の山を映している。宛然パラダイスである。それは、スイスという山紫水明の山里に生いたった、心は清く、魂は熱いこの人の言説であるからである。

大体において著作の年代に順ってあたってゆくが、私が意図するのは彼の論説を概説するのではなく、彼の論説にぶつかってその中から自由に語らせていただくということである。引用する訳文は原則として白水社版『ヒルティー著作集』によることにする。

仕事の仕方

『幸福』は、三巻よりなる大著で、むろんヒルティーの代表著作になっている。第一巻は八章よりなって、巻頭の論説は "Die Kunst des Arbeitens"「仕事の仕方」である。ヒルティーは全生涯を通じてよく仕事をした典型的な人であるから、この論説が巻頭に載ったのも偶然ではない。彼にとって生くるとは仕事をすることであった。本当の幸福は仕事の結果として得られるものではなく、正に仕事をしているそのこと自体の中におのずから感ぜられる醍醐味である、というのである。開巻の言は、

「仕事をするのも一つの技術であるが、この技術はあらゆる技術の中でももっとも大事な技術で

ある。ひとたびこの技術をよく理解すれば、その他一切の知識や技能の獲得がきわめて容易になるからである」。

正しい仕事の仕方はといえば、まず休息との正しい関係ということになる。それで彼はいう、「ほんとうの休息は、活動のさなかにのみ生ずる。精神的には、仕事が着々と発展したり、課題が為しとげられたのを眺めることによって生じ、肉体的には、毎日の睡眠、毎日の食事、また無上の休養のオアシスたる日曜日といったもので、自然的に与えられる中間的な休みの時に生ずる。こうした自然的な休息にのみ中断をゆるすだけの、絶えざる有益な活動の状態こそ、地上におけるもっとも幸福な状態である」。

ヒルティーは日常生活の動と静の関係をこのように極めて自然に受けとり、そこにおのづから楽しみがあることをほのめかしている。人間のいとなみは何ごとにせよ、それが本ものとなってくるとおのづから楽しみを伴う。動と静との調和のとれた関係、それは更には動中の静、静中の動といった消息にもなり、静動一如の呼吸ともなってゆく。

日曜日を欧米では伝統的に休息の日として遵っているが、日本ではそれがしばしば破られる。言うまでもなく欧米では宗教的な意味をもっているからである。即ちイスラエルにおける天地創造の神話が示しているように、神が六日で創造の業を果して、七日目に安息したことから、七日目ごとにくる安息日を厳守することになった。イスラエルでは金曜の夕から土曜の夕までを安息

日となし、キリスト教では十字架の金曜から三日目にあたるキリストの復活の日をこれにあてたわけである。即ち安息日は教会に通うと否とに拘らず、心身を神の中に安らうことを以て真義とする。それゆえ、安息日は本質的には六日間の週日の勤労に対する原動力を静かに体受する日なのである。日本の若き人々が、偉大なる宗教的古典を読むなり、大自然のふところに入って冥想するなり、そういったことを決然と始めるようになってもらいたいと思う。

始めるといえば、ヒルティーが、仕事の秘訣として第一に挙げていることは、「着手しうる」ということである。ゲーテもファウストをしてヨハネ福音書開巻の一言 „Im Anfang war das Wort." 「元始に言ありき」を „Im Anfang war die Tat." 「元始に行為ありき」と訳させているように、文句をいわずに、何はさて措き、仕事にとりかかるという一事、この決然たる行為こそ肝腎であるといっている。インスピレーションも仕事をやり仕事の間に起ってくる方が多い。創造的な着想なども仕事の間にこそ油然として湧いてくる、といっている。全くその通りだ。私事で恐縮であるが、私は日曜の聖書講筵を三十余年つづけているが、語っているうちに天来のひらめきを受けること殆ど毎回といってよいであろう。彼はまたこうもいっている、

「完全にその仕事に沈潜し、われを忘れることのできる者は、最も幸福な労働者である。ある対象をつかんでこれを表現しようとすれば、まったくその対象で全心全霊が充たされてしまう芸術家、自分の専門以外にはほとんど何ひとつ眼に入らない学者、いやきわめて狭い活動領域におの

れの小天地を築いているあらゆる種類の変人たちすら、そうである」

要するにヒルティーも仕事を生命賭けでやる人々に大いに敬意を表し、惜しみなく評価し、極めて幸福であるとしている。こういう姿は想うだに魂の力である。

『徒然草』の第一八八段で兼好法師もこういっている。

「されば、一生のうち、旨とあらまほしからん事の中に、いづれかまさるとよく思ひ比べて、第一の事を案じ定めて、其の外は思ひすてて一事を励むべし。一日の中、一時の中にも、あまたの事の来らんなかに、少しも益のまさん事を営みて、其の外をばうち捨てて、大事を急ぐべきなり。何方をも捨てじと、心にとり持ちては、一事もなるべからず。一事を必ずなさんと思はば、他の事の破るるをもいたむべからず。人の嘲りをも恥づべからず。万事に代へずしては、一の大事成るべからず」

と。類型的なレッテル大学生の多い現代日本を、兼好法師は霊界で慨嘆しているであろう。

我々の独協大学には、今頃天界でネクタールでも酌み交わして法師と真理の放談をしておられるであろう哲人教授があった。土居虎加寿先生である。宗教哲学的思索と読書と執筆に寝食を忘れて没頭された。ヒルティーのさきの文章に正に該当する学者である。最近、遺著『時間と永遠』が筑摩書房から出版された。これは謂わば先生が世に投ぜられた爆弾である。世界の第一流の神学者、哲学者、文豪、仏僧等と取り組んで縦横に論じておられる。土居先生はフィロゾフィ

ーレンに生命を燃やし尽くされた。先生の風貌は枯木の如くであったが、先生の言説は龍吟して玄妙な響きを発している。釈尊の愛弟子アーナンダに先生は特別な関心を寄せておられたようだ。それは丁度キリストの愛弟子ヨハネに関心の深かったヒルティーと一脈通ずるものがある。両者の文章の行間には深い情熱が漂うている。

ヒルティーは仕事の道を六項目にわけて適確に説いている。ゲーテが『ファウスト』の三四〇、四一行で

「人間の活動はすぐたゆみがちになる。
すぐ絶対的な安息を求めたがる」（手塚富雄訳）

といっているように、ヒルティーも「人間は誰でも天性怠惰である」と断じた。であるから仕事に対する「義務感と愛情」が第一に必要だ。それには克己、自己超克がなされねばならぬ。第二は、仕事への習慣の力を体験しなければならない。第三は、キリストのあの有名な言、「明日のことを思いわずらうな、一日の労苦は、その日だけで十分である」（マタイ七・三四）を引用して、要するに一日一日なすべきをなせ、ということである。内村鑑三先生は「一日一生」といった。ゲーテも『ウィルヘルム・マイスター』の中で

„Du im Leben Nichts verschiebe !
Sei dein Leben That um That !“

「あなたは生活で何ごとも遷延しなさるな！
あなたの生活が仕事また仕事であるように！」

といっている。第四は、「仕事を取換えることは、必要な休息とほとんど同じくらい元気を回復させる」といって、一つの仕事から他の仕事、―勿論そこには何らかの有機体的連関があることがのぞましいと思うが―に移ることが能率的だというわけである。第五は、力の節約で「新聞の読みすぎ」だとか、どうでもいいような会合や宴席など、余計な人づきあいを避けること。第六は特に精神的な仕事は、反復して練りあげることが肝腎であるとしている。「精神は、それがひとたびこの沈潜（Versenkung）という真の勤勉努力を知るならば、停止することなく働きつづける」といった彼の言葉は彼の体験の告白のほか何ものでもない。

現代社会は、そして特に都会生活は、さまざまな娯楽機関や享楽の巷や、テレビ、ラヂオ、週刊誌、料亭、飲屋、喫茶店、百貨店等々、時間つぶし、気ばらしにこと欠かぬような仕末だが、そういったものから知らず識らずの中に精神的公害を受けている。生涯をかけて、国家社会に何らかの貢献をしたいという使命感を着実に生きようとする人間にとっては、仕事こそが「最善の、最も快適な、最も報酬の多い、しかもその上最も安価でもある時間消費法」である。

ヒルティーはこの論説の最後を次の一句で結んでいる。「未来は勤労に属する。いつの時代でも、支配は勤労の手に帰するのである」。この場合「勤労」の原語はアルバイトであるが、この

「アルバイト」は当今しきりに用いられているアルバイトと混同してはこまる。

ヒルティーは極めて健全な民主主義を前提としてこう言っているのであって、いわゆる労働者階級と労働を云々しているのではない。いかなる社会人であろうと、老人から小学校の生徒にいたるまで、働くこと、仕事をすること、勉強をすること、研究をすることすべてをふくめて「仕事をすること」と彼は言っているわけである。

さてヒルティーは触れていないのであるが、仕事を研究、学究の面で考えてみると、ドイツにおいて学問的研究の労作がなされる場合、一人の学者がある研究書を書くと、その弟子が、そしてそのまた弟子が、といった具合に歴史的に研究を積み上げてゆくという現象を一つの著書においてみるは、まことにたのもしい美しいことと思われる。横の共同作業のみでなく、このように縦の共同作業がわが国においてもなされて然るべきであろう。勿論そういう例がいづれかの学問的分野においてあることとは想うのであるが。

ところで、イエスは最大の働き人であった。彼は言った、「わが父は今にいたるまで働き給う。我もまた働くなり」(ヨハネ五・一七)。しかもこの言は、ユダヤ人が厳守していた安息日に、三十八年間の重病人を一瞬にして癒やしたのを、ユダヤ人に責められたとき、イエスが発した言である。イエスの仕事は専ら、イエスが父と呼んで全幅の信頼を捧げていた神の言を伝え、神の業を体現することであった。この場合もイエスにとっては言即行であった。一言発すれば言下に重病

人が癒されてしまうとは。人の心身の救済が彼の仕事である。そしてこの仕事のエネルギーは何処からくるか。神からである。何によるか、祈りによってである。祈りとは何か、全存在を神の中に投入することである。親鸞も弥陀の本願の助力といった。落下する水力によって電気エネルギーが得られるように、たましいの世界こそ絶対界から無量のエネルギーがくる。そこにイエスのはたらきの秘訣があった、源泉があった。

エピクテトスの語録

『幸福』第一巻の第二番目の論説は「エピクテート」(Epiktet) と題するもので、ギリシャ語原名は「エピクテートス」である。紀元五〇年頃生れ、一三八年に歿したストア派の哲人。奴隷の身分であったが解放された。ドミティアヌス帝の哲学者追放（八九年か九二年）に遭い、エピルスのニコポリスに学校を建てた。彼は著作をしなかったが、弟子たちが教説を集めて本に編集した。

ヒルティーはエピクテトスの言説を青年たちの修養上、必読の古典の一つとして尊重した。丁

度我々が昔、論語や孟子をそのような古典として教えられたように。このことは東西において今でもそうであるべきである。国際や国家の政治や経済の状勢の変転に振りまわされるような思想の波ではなさけない。人間のたましいの尊厳と本当の自主性というものはそんなものではないはずである。

ヒルティーがこの論説でとりあげたエピクテトスの言説のうち、特に著しい若干のものにあたってみたいと思う。（番号は本論説の番号である）

（七）　航海の途中で、船がしばらく港にはいり、君が水を汲みに上陸し、その途中で貝殻や球根などを拾うようなことがあっても、しかしいつも君の考えは船に向けて、舵取りが呼びはしないかと、振返って見なければならぬ。そしてもしかれが呼んだら、何もかも捨てなければならぬ。さもないと、羊のように縛られて（反抗的な、あるいは逃亡した奴隷のように）船に投げこまれてしまう。

同様、人生にあっても、君に愛妻や子供が与えられたら、これをよろこぶのはいいが、しかし舵取りが呼んだら、船に向っていそぎ、すべてを抛ち、何物も敢えて顧るな。

君がすでに老人なら、決して船から遠ざかるな。舵取りが呼んだとき、取り残されぬように。

この譬話はなかなかうがったものと思う。船の舵取りとは、謂わば船長である。それはこの場合公的な社会的団体の長でもあり、国家の元首でもあり、次元を高くすれば、宗教的な絶対者である。この譬話に奴隷のことがでてくるのは、彼自身がそういう身分であった体験から来ている。

民主主義のはきちがいから、利己的な個人主義、謂わば「身勝手主義」が横行跋扈している現代日本を思う。要するに公利公益を顧慮しない傾向が強いために、公害が諸般の事象において生じているわけである。公害はそれが有形無形いづれにせよ、因って来たるところは即ち私利私慾に在る。船の生活は正に共同体の自覚なくしては成り立たない。それは互に助け、互に忍び、共に苦しみ、共に歓ぶという人格的相互信愛のきづなの堅い社会であろう。すべてが運命を共にした「諸共(もろとも)関係」とでも申すべきものであろう。船体の鋲が一つゆるむことも油断ならぬように、船員一人の怠慢もゆるされぬものであろう。

この船長と船員の消息は、パウロがコリント人への第一の手紙第十二章で、キリストとエクレシア（召団―普通は「教会」と訳されているが、本来は神に召し出された者たちの団体という意である。ルターは「教会」、「キルヘ」―これも本来は「主に属する者」の意―が実存共同体たるの本義からずれてしまっているのを見て、エクレシアを「ゲマインデ」共同体と訳している）の関係を人体に譬えて、キリストを首、エクレシアを体と見なしたのと類似している。

生命的有機体たる体において、これを構成する各部分は皆特殊な任務をもった五臓六腑、四肢である。決して全体主義的、画一的、類型的、一体ではない。全体を構成する個体の存在と意義、任務と使命は夫々である生命的全一体、信義信愛を根本性格とした共同体、それがエクレシアであり、船の船員共同体であり、社会的諸団体であるはずである。

ところが、現在の日本の社会の諸現象はどうであるか。闘争、要求、不信、偽善、矛盾、虚構、紛糾、混迷、等々の極限状況に近いものが錯綜している。

このエピクテトスが「何もかも捨てて」、「すべてを抛ち」といっている私心なき献身的な気魄に注目しなければならない。これはストア的克己の精神が宗教的な棄身の気魄と火花を散らしている消息である。ルターの宗教改革のあの有名な歌の「おのがからだも、妻も子も、とらばとりね」といった歌詞の精神とも相通ずる。

個体の尊厳と自由を認めこれを愛惜する全体、全体のためには責任を自覚しておのれを献供する個体、全体は生命的有機体的人格共同体としておのづから秩序をもつ全体。こういったものが本当の民主主義というものではないか。否、民主主義などというイズム的意識を超えた人間の社会的実存のすがたではないか。

（二三）万一君自身から背いて外へ向い、世間の気にいろうとでもする気が起きたら、君は君の正しい状態を失ったのだ。つねに哲学者で実際にあることをもって満足せよ。誰かにそれ

と見てもらいたかったら、自分自身で見ておけばいい。それで十分である。

デルフィのアポロ神殿の銘は「グノーティ・セアウトン」（「汝自身を知れ！」）であった。エピクテトスのこの言葉は、単なる自己認識を問うのではなく、実存そのものに厳しく迫るものである。すなわち「汝自身であれ！」といって実存をうながす迫りである。真の民主的精神は自分をいつわって、「自身から背いて」、自分でなくなるようなことを厳に戒めるわけである。そのことは我執的自我主義ともちがうし、自己を超克せんとする克己の精神と矛盾するのでもない。

茄子がもし胡瓜に成ろうとしたら、それは「自身から背き出る」ものである。茄子はどこまでも茄子として茄子の生ずべき土壌に成るべき季節に成るところに茄子の全さがある。胡瓜についても同じ理である。その相対的、特殊的存在が、その相対性、特殊性を失うことなく、しかもその相対性、特殊性において無量、無限なる絶対性を体現せんとするところに、真の「汝自身たれ」の限りなき精進がある。それが「つねに哲学者で実際にある」ということであり、それがまた宗教的精進とも通ずる精神である。ヒルティーがエピクテトスのこのような言葉を愛する気持はこんなところにあると推察してよいと思う。

ドイツ人は概して自意識の強い国民である。私がハンブルグにいたとき、マヨールの特別展覧会が開催されたことがあった。日本人だったら、直ぐワッサワッサと推しかけてゆくだろう。ところが彼らは、自分が本当に見たいという芸術的関心がなければ、おつきあいに、または人真似

的に観にゆくことはしない。一年間ハンブルグでそこの日本学の大学生を相手に暮した揚句に、一教授が私に一年間の感想を訊いたので、私は言下に、ドイツ人は実に自意識の強い国民だと感じたこと、そしてそれが責任感と結びついて、社会道徳が行われていることをほめた。しかしまた自意識が強すぎると、それが自己主張と結びついて、むだなあらそいとなる、反目となるといったことも申し添えた。その教授は「その通りです」といってうなづいていた。

「汝自身たれ！」ということは、「汝自身を知れ！」と相表裏する自覚である。それを実存した大哲人は実にソクラテスであった。知行一如の人で彼はあった。ところで「汝自身たれ！」で忘れられないのは、同じくヒルティーを尊敬しておられた三谷隆正先生の「汝自身たれ」の一文である。その中から左のくだりを引用し御紹介することにしよう。

「日本人は余りに集団的に動き過ぎはしないか。日本の社会は個人の独特なる個性発揮に対して、余りにも寛容を欠き過ぎはしないか。学会を見ても、芸術界を見ても、事業界を見ても、何という個性の暴圧、流行の跳梁であるか。学問も流行、思想も流行、芸術も流行、事業も流行、流行を追はずんば人にあらずである。現代の若人達の関心の専ら集りつつある所は何であるか。滔々たる流行圏外に屹立して、剛毅に自家の個性と其個性の衷より迸る所の真実なる要求とに従ひつつある魂がいくたり居るか。老いたるも若きも、日本人は余りに自分自身でなさ過ぎる…何故もっと大胆に自分自身であろうとし、自分自身の考えを考えよう

としないか。…私は固く信じて居る。私が私として此大宇宙に貢献し得る最大の業績は、私が私自身である事であると。…私は私のみの全うし得る独一無二の天職を持って居る。良かれ悪しかれ、私は私として天下一品である。何を好んで他人の物真似をしようぞ」。

同じ文章の中で三谷先生はヒルティーについてこう記しておられる。

「私は数へ年二十九の夏から其翌年の春にかけて、養痾の為め再び湘南の某地に行った。その時私は健康的にも精神的にもひどく行詰って居った。その時私を援け起して、私に大人の心を与えてくれた者はカール・ヒルティー先生であった。私は先生の其方面の著書十数種を片端から貪り読んだ。二十代から三十代にかけて、我々が青年から中年にかはる頃の実際的指導者として、ヒルティー先生位いい先生を私は他に知らない」。

エピクテトスからの引用とそれに対する私の敷衍的論述は以上でとどめておく。ヒルティーは五二項目をあげているが、そのうちの僅か二項目を右に掲げたにすぎない。しかしエピクテトスは道徳哲学的限界のものである。そのことはヒルティーも認識している通りである。であるから、ヒルティーはこの論稿の終りで次のように述べている。

「徳はこの世における唯一の幸福であり、悪徳は唯一の不幸であり、総じて内面的財宝は、人間の力の左右しうる決して失われることのないものとして、あらゆる偶然にゆだねられている外面

的財宝よりも、はるかにまさる、ということである。……

救いは歴史的であって、哲学的（思推過程）ではない。それは他の歴史的事件と同様、一回的で、取消しのできない、人間の意見から独立した純然たる事実にもとづく。そして、この事実を受けいれること、すなわち信仰さえも、それを求めて手をさしのばす者に、与えられる或るものであって、しかもすべてのものに平等に、教養ある者もなき者も、賢者も愚者も、比較的有徳な者も粗野な罪びとも何のけじめもない。

自分の力による徳というものを、キリスト教はまったく信じない。神のみこころに従った生活は、それに先立って、たえず自己中心的な傾向をもった自然的存在（それが優秀であるか粗野であるかは、なんら実質的差別をなさぬ）の完全な変革を要求する。その変革によって、以前には（実りなき）努力であったものが、いまや新しい天性に即応することによって、自然になり容易なこととなる」

かく語ったヒルティーが聖書の次の著しい諸章を参照するように指示しているので、読者は是非繙いて参照していただきたい。即ち、イザヤ書第五五章、ガラテヤ書第五章、ロマ書第三、第八章、また特にヨハネ福音書第三章等である。

ヒルティーは更に註の中でこういっている、「ストア主義では、正しい意欲は、自己自身に対する不断の厳酷な強制であるが、キリスト教の場合は、人間の内的自然（性質）の変化にある、

悦ばしい必然であることである」。

正にその通りである。それゆえにこそ「福音」であって、単なる「教え」ではない。

幸福追求のあがき

『幸福』第一巻第三の論説は、「絶えず悪者と戦いながらも策略を使わないような処世の道は、どうしたら可能か」。第四は、「良い習慣」。第五は、「この世の子らは光の子らよりも利口である」。第六は、「時間をつくる方法」。第七は、「幸福」。第八は、「人間とは何だろう、どこから来て、どこへ往くのか、金色に光る空の星のかなたには誰が住んでいるのか」となっている。第七の「幸福」(Glück) の冒頭で彼はこう言っている。

「哲学的見地からはいくらでも反対できると思うが、人間が意識にめざめる最初の瞬間から、意識の消滅にいたるまで、最も熱心に求めるものは、やはり何といっても幸福感である』。

まことに人間の本能的要求は生きることであり、その生きることがしあわせな生き方にあることは万人の願うところである。たとえ儀礼的な言葉となっていようとも、手紙やハガキで「御多

幸をお祈りします」とか、年賀状で「高堂の万福を祈り奉る」とか書いて挨拶するのもその一つのあらわれである。

ヒルティーは幸福を求める道に、外的なものとして、富、名誉、生の享楽一般、健康、教養、学問、芸術などをあげ、内的なものとして、疚しくない良心、徳、仕事、隣人愛、宗教、偉大な思想や事業に従う生活などを挙げているが、勿論これらを全面的に肯定しているわけではない。「富」について、ヒルティーは「富める者の神の国に入るよりは、駱駝の針の孔を通るかた反って易し」（マルコ一〇、二五）の句を引用している。

因みに附言しておきたいことは、この「針の孔」というのは、実は現実の針の孔のことではない。私も永いこと針の孔のことだと思っていたし、注解書にも別に書いてないので、喩えとしては余りにも針小棒大過ぎる表現だとは思っていたが、イエスはやはりそんな比喩の仕方をなさっわけではなかった。というのは今から十二年前（一九六二年春）、ドイツからの帰るさに、イスエラルを訪ねた際、エルサレムの古本屋で、そこの主人にこの句を、ユダヤ人はどう解するかと思って、ちょっと問うてみた。するとその老人は即座に微笑を湛えながら、こう答えた、

「あの頃『針の孔』という名の非常に狭い門があったのです。それでキリストは大きな動物の駱駝が狭い門『針の孔』を通るのは容易なことではないので、あのように言いなさったのです」

と。それを聞いた瞬間、私も釈然として解けたわけであった。

財富は幸福への外的な道の最たるものと普通は考えられる。個人にしろ社会にしろその福祉が財富によることいかに多きかは言うまでもない。しかしまた財富ほど人間の心を虜にして、さまざまな誘惑や犯罪に陥れるものもない。それがさきのキリストの言のあるゆえんである。

ヒルティーが外的なものの中に「学問」を数えているのは、おそらく科学の進歩が文化文明を築きあげているプラス面を見てのことであるが、これが恐るべき武器を作り出しているマイナス面をもっていることは周知の如くである。

また「芸術」をとりあげているのは、芸術がもたらす「美的享楽」の面を幸福の一手段と認め得るとしても、それは真の幸福への道とは認め難いとなし、ゲーテがエッカーマンに語った言葉、「結局、私の生活は苦労と仕事以外の何物でもなかった。言ってみれば、わが七十五年間に、ほんとうに楽しかったのは、ものの四週間もなかった。それは転がり落ちる石をはてしなく押しあげている〔シシフォスの〕ようなものだった」を引用して芸術追求のはかなさを語っている。しかしこの引用の仕方は、角度をあやまっていると思われる。これは、大詩人ゲーテが、彼らしく人生と取っ組みながら生涯を芸術に賭けたその努力精進の告白とみるべきで、この告白は決して悲しむべきものではなく貴いものではないか。ヒルティー自身、この論説の最後に、

「われわれとしてはかく言おう…よしその一生が労苦と勤労であったとしても、それにもかかわらずなお貴きものでしたと。これが幸福なのだ！」

といって結んでいる。そのこころに、ゲーテの生涯は正にあてはまるのではないか。

ともあれ、文化文明がエクセントリックな行き過ぎとなり、不健全な低下現象が増大して、「健康な野蛮を敢て甘受するという時が来るであろう」と予見し、オーストリアの詩人ペーター・ローゼッガー（一八四三―一九一八）の次の句を引用しているが、これは正に現代日本に対して覚醒をうながす予言的な言葉ではないか。

「やがては、裕福な都会人は百姓の土地を買って耕作をやり、労働者は荒地を開墾して耕地を作るという時代がやって来るだろう。かれらは知識をふやすのはやめにして、肉体的な仕事を愛し、それによって逞しい人間になるだろう。かれらは、また以前のように独立した、名誉ある農民社会が成立しうるような法律をつくるだろう。そして〈無学な百姓〉というきまり文句はなくなるだろう」。

この句を引用したあとでヒルティーはこう言明している、「少くとも、自然復帰の時代、単純素朴愛好の時代が、再び近づいていることだけは確実である」と。世界はもっとはやくヒルティーのこの警告に注目すべきであった。ゲーテも既に、人類は自分のつくった文明のために逆に行きつまりを招来する時がくることを警告していた。神と大自然に対する畏れと親しみを体感していたゲーテを我々は見そこなってはならない。

さて次にヒルティーは、さきに挙げた幸福への内的な道、すなわち、義務の遂行、徳、疚しくない良心、仕事、公共的活動、愛国、善行、人間愛一般、教会的な考え方などの道によって「青い花」〔浪漫的幸福の象徴〕を求める人々の方がはるかに賢明であるといっている。しかし彼はそのあとで、果してこれらのものを真に実践できるかという角度からの設問で、例えばこう言っている。

「つねに義務を怠ることのない人間の疚しくない良心は、諺によると、安眠の枕だといわれる。……我々はまだ一人もそうした人を知らない。我々の考えでは、かつてただの一日でも、自己の義務を完全に果した者はいない」。

これはカント哲学の義務観念のおごそかさと相通ずるものである。ヒルティーは更に愛や善行について次の如く言っている。

「愛、そしてこれと切離せない公私のいわゆる善行、それはまことに素晴らしい言葉である。使徒パウロがその手紙の最も有名な個所で〔コリント前書第十三章〕愛はすべての真実な生活の初めであり終りである」と叫んでいるのを、我々はまたよく理解する。……愛は、神的なものの一部であって、人間の心に生ずることができないものである。愛を有つ人は、それが自分の固有のものでないことを、はっきり知っているであろう」。

すなわち真の愛は天来のものであって、生れつきの人間は自己愛とからみついた愛し方しかで

きないというキリスト教の根本理念を告白している。

次に仕事についてヒルティーは次の如く述べている。

「仕事は人間の幸福の一つの大きな要素である。いや仕事なしでは、単なる陶酔でない真の幸福感は絶対に人間に与えられないという意味では、それは最大の要素ですらある。……仕事なしでは、実にこの世に幸福はない。しかし消極的にこれを取れば、この命題は完全に正しいけれども、さりとて仕事がそのまま幸福であり、従って仕事なら何でもきっと幸福にみちびくというなら、それはまたさらに大きな誤謬である。……聡明な人ほど自分の仕事の欠点をよく見抜いていて、その日の仕事が終ったとき、〔創世記第一章の天地創造の神のように〕「見よ、すべて善かった！」ということのできた人は、かつて一人もいなかった。だから、大声で叫ばれている労働讃美の背後には、たいがい自他を仕事に馳りたてる拍車か鞭のようなものが隠されているのであり、大きな誇りをもって「労働者」と自称する人も、結局みな「労働規準時間」を切りさげようと考えている。もしも、労働すなわち仕事そのものが本来幸福と同じ意味なら、かれらはできるだけ時間を増加しようと努めるであろう」。

これらの言葉は現代の世相に対しても、肯綮にあたった、しかも反語的な辛辣さもふくんでいる言葉ではないか。労資いづれもがまことの幸福が奈辺にあるかを認識せずして、いたづらに財

をめぐっての賃金闘争をくりかえす悪循環をやっている。勿論単なる認識ではどうにもならない人間の根本問題があるが、そのことに触れるのはここでは控える。

さてこの項の終りにヒルティーはこう言っている。

「あらゆる者の中で最も不幸なのは、単にいづれかの宗教的教派に属することによって幸福を求め、結局ひどく幻滅を感ずるにいたる人々である。こうした人々の数はたいしたものである。というのは、あらゆる宗教団体は、その果し得る以上のものを約束する傾向があり、ありとあらゆる種類の魚を一つ網でつかまえようとするからである」

これは当時の制度的教会キリスト教の無力さを嘆いているわけであるが、このことは現代においても一般には殆どかわりがないのではないか。問題は教派や教義や信仰箇条や礼拝様式や制度如何といったことではなく、カトリックもプロテスタント諸派も、原始の使徒たちの信仰の次元に立ち帰ることにある。第二の宗教改革を必要としている。ヒルティーもこの項の脚註でこういっている。

「それをどうしたらいいのか。…キリスト教の新たな単純化によってなされるであろう。そのためには、キリスト自身の言葉以外、何らの教義をもほとんど必要としない。……キリストの言葉は、さながら生けるもののように直接に、人間にはたらきかけるという現実の霊の

独自性を有っているからである」（○点は筆者の傍点）

これは注目すべき言葉であるが、これがどうして可能であるかの問題も、今は触れないで措く。

ともあれ、幸福追求の如上のさまざまなあがきも結局真の幸福に到り得ない「欺きにみちた道」であるとヒルティーは断じている。そして人類が有史以来、幸福を探求してきた跡は大体以上のようなものであって、個人の人生経験からも大方察知できるところであるといっている。（ただし、筆者がここにとりあげたのがその全部ではない）。

然らばどういう事態が真の幸福に到達させるのであるか、真の幸福とは何か。

幸福とは何か

ヒルティーはこの「幸福」の論を二段に分けて論じているが、別に標題はない。そこで前段の一には「幸福追求のあがき」と題したが、後段の二は「幸福とは何か」と題して、ヒルティーと共に考えながら、私自身の考えも告白させていただくことにする。

「幸福の第一の、不可欠の条件は、倫理的世界秩序（eine sittliche Weltordnung）に対する確固たる信仰である」

老子が「天網恢々疎にして漏らさず」と言い、シラーが「世界歴史は世界審判（史）である」と謳い、聖書が「最後の（神の）審判」を宣しているように、現実の現象面の矛盾、不合理にも拘らず、倫理的世界秩序は厳として存する、という「確固たる信仰」は、ヒルティーが強調するように是非ともなければならない。にも拘らず、現実は、武力が国際間ではものを言い、権力が国家では義しいかの如く、暴力や策謀が社会では幅を利かせている。それではどこに幸福の保証があるか。この現実をどうするか、となると、人間に罪性がなくなるまでは、現実はつねに矛盾と不合理である。然らば幸福は人間界の現実面に対しては、如何なる道をもってしても期待し得ない、という自明の結論となってくる。

ヒルティーも引用しているように、ダンテの『神曲』の地獄の門に掲げられている詩句は、残念ながら、また厳かにも、地獄のみでなく、この煉獄的現世の深刻な一面である。すなわち、

「われは悲痛の都への入口なり。
われは永劫の苦悩への入口なり。
われは滅亡の民への入口なり。
義は高き創造主を動かせり。

聖なる力と至高の智慧と、
根源の愛とによりて我は造られたり」

（『神曲』地獄篇、第三歌一―六行）

現世は何と「悲痛」と「苦悩」と「滅亡」の渦潮の如くではないか。そこに屹立する幸福の岩は何であろうか。それはもはや客観的な対象的な現実に求められるべきものではなく、主観的な、主体的な内的現実に求められるべきものである。

それはメーテルリンクの「青い鳥」よりも、もっと内なる世界に求められるべきものである。それをヒルティーは単なる情感の世界にではなく、行為の世界に見ている。すなわち正しい仕事のうちに、まじめな仕事のうちこみのなかに。そこには健康的な楽しさがある。それが幸福である、というのである。日々の仕事が楽しく行われるところ、そこにおのずから幸福感が伴う。してみると、実は幸福は求められるべきものではなく、まじめに働くところにおのずから伴ってくる幸福感が幸福なのである。

さてヒルティーは日常生活において勇気（ムート）と謙遜（デームート）をあわせ持つ必要がある、といっている。そして使徒パウロの言、「私が弱いときにこそわたしは強い」（第二コリント一二・一〇）を引用しているが、「弱いときに強い」というパラドックス（逆理）は、勿論宗教体験から発せられた言である。悪や自我になかなか勝てない性来の自己の弱さをキリストの前に明

けわたすと、我執という罪を荷って贖ったキリストから、聖霊の力が臨んでくる。その消息が「我れ弱きときに強し」なのである。であるから、信仰の現実においては、真の勇気（強さ）は謙遜（弱さの自覚）の人においてこそ現ずるのである。神の前に平伏すたましいに天来の力がくるからである。その最たる者は誰あろう、イエス自身であった。であるからヒルティーが勇気と謙遜とをあわせ持つという二段がまえの言い方をしているのは、道徳的な次元ならばそれでいいが、宗教的次元においてなら、正しい言い方ではない。勇気と謙遜とは相表裏しているからである。「喜びは、これを追求してはならない。喜びは正しい生活にあっては全く自然に生じてくるものだ」とは、幸福についても言えることである。しかし、この喜びも幸福も内面的なものであって外面的客観的なものは必ずしも伴わない。

旧約聖書の預言者エレミヤが、「悪人の途の栄え、悖れる者のみな幸福なるは何故ぞや」（エレミヤ一二・一）という疑問を神に向って発しているが、この「幸福」は客観的状勢を指して言っているわけである。ヨブ記においても、義人がなぜ禍害に苦しまねばならないか、ということが重要な主題となっている。地上は矛盾だらけである。

「一般的に、最後に言いたいことは、およそ地上的なものは、これをあまり重要視してはならないということである」とヒルティーが言うのも、けだし、正しいことと、客観的な幸福とが、決してパラレルに因果関係を成しているわけではないからである。かりに外的状況において幸福の

連続であるとしても、もし精神的な内的な幸福感の裏づけがないとすると、必ずや何らかのさびしさや幻滅の悲哀的なものを感ずるはずである。それは、人間の心の世界、たましいの世界は、実は外的な幸福で満足できぬものをもっているということの反証なのである。幻滅をもし感じないとすれば、その人は内面的世界のかわきを知らない人で、それこそ本当に不幸な人だ。それはいつかあわれむべき極限状況か破局におちいるであろう。

さてヒルティーも、いわゆる幸福などは、却て不幸の因ともなるあてにならぬものとの判断から更に歩を進めて、「ここで読者にもう一つ大きな真理を告げたいと思う。それは不幸は、人生にどうしても必要なものだ、いやいささか逆説的に言えば、不幸は幸福に必要なものだということである」といっている。

この「不幸は幸福に必要なものだ」という言葉の「幸福」は内面的な心の幸福のほかのものではない。

そしてヒルティーは註して、「間断のない幸福のごときは、キリスト教はこれをどこにも約束していない。…この世を超克する平安を約束する」といって、外的幸福をキリスト教は問題としていない。内的幸福即ちたましいの平安（これを「平和」と訳してはいけない）をこそ問題としていることを明かにしている。そしてヨハネ一四・二七「われ平安を汝らに遺す、わが平安を汝らに与う。わが与うるは世の与うる如くならず、汝ら心を騒がすな、また懼るな」を引用している

が、この平安は、神と人間の縦の関係が立っている境地で、その内実は聖霊の内住している事態である。

苦悩や不幸は人生につきものである。ヒルティーの言うのには、不幸には三つのねらいがある。そして同時に三つの段階をなしている。

「第一は罰」。これは行為そのものに内在する自然的帰結である。「第二は浄化」。即ち不幸は、心をより真剣な態度に変化させ、真理に対する感受性を喚起する。「第三は自己吟味と強化」。不幸や艱難は神、キリストの力を受ける極めて大切な事態の機縁をつくる。

ヒルティーは患難・不幸は内的な幸に必要である、といっているが、唯物思想的な人は、患難や不幸をすぐ社会機構の問題の面にのみ問うて、そこに責任や欠陥を見て、内面の世界、人間性そのものを自省し掘り下げてゆくことをしない。ヒルティーは更に使徒パウロのロマ書五・三の「患難をも喜ぶ」を引用して、パウロがどのように患難を通して、内面的幸福を体験したかをほのめかし、これは体験しない人には絶対につかめない、といっている。そしてこの幸福は「道の行手に横わる獅子である。その姿を見て、たいがいの人々は引返してしまう」と妙な言い方をしている。この譬は実はダンテの『神曲』にでてくる表現で、ダンテは、あの場合獅子を傲慢の象徴として描き、人間がこの悪徳にうち勝てない、という意味で語っているわけだが、ヒルティーは患難を通して得るべき幸福の象徴として逆用し、これをかち獲るためには勇気が必要だという

わけである。そして「真理への愛と正義への勇気、これがあらゆる真の教育の柱石である。これがなければ教育は何の役にもたたない」と確言している。その勇気、その愛は、「天国は烈しく攻むる者これを奪う」（マタイ一一・一二）というキリスト自身の言の「烈しく攻むる」原動力ではないか。

「勇気こそ、あらゆる人間の性質中、幸福を得るために最も必要なものである。これは全く確実である」とヒルティーは断言している。そして更にギゼーラ・グリム（旧姓フォン・アルニム）の言、「幸福とは神と共にあることである。それに到達する力は、魂の声なる勇気である」それよりほかの幸福は地上にはないと結論している。「神と共に在る」という幸福は全く次元のちがった幸福で、要するにこの次元の幸福でない幸福は、うつろいゆく、あてにならぬ幸福で、一般に考えられている幸福はみな浮雲の如きものである。ところで「神と共に在る」が本ものであるためには、聖霊の内住が土台であることを一言しておこう。

この神との共在の幸福は、「実在」であり、「事実」であって、その他を顧みない心となれば、おのずから現在する「内的平安の流れ」である。「この流れは年をとると共にますます強大になり、われわれ自身の霊魂を実らせたのちには、また他人にも注ぎうるものである」。ここに極めて大切な註をそのまま掲げておこう。

「幸福とは、もはや外的運命に依存することなく、それを完全に克服した、この不断の平安であ

る」と。ヨハネ一〇・一〇、マタイ八・二九。ダンテ『神曲』煉獄篇第二七歌一一五―一四二行へブル書四・九。これがあの普通晦渋とされている「私の求めるものは幸福（グリュック）ではない、祝福（ゼーリヒカイト）である。という言葉の意味である」読者は是非、聖書及びダンテの如上の個処を参照していただきたい。

現世の旅路をダンテは浄罪山（浄火山）の登山をもって描いているが、真の幸福のためにはいかなる患難も突破せんとの覚悟と実践を要する。患難を経ずしてまことの幸福が得られたためしがない、と断言している。

この道は山の下の方が嶮しく、上に進むにつれて勾配がゆるやかになって、労苦が愉悦に変ってゆく、とダンテはプルガトリオ（煉獄篇）第四歌で詠っている。

以上をもってヒルティーの『幸福論』第一巻の「幸福」という論説の要点を辿りながら述べさせていただいたが、終りに一言したいことがある。それは、ルター訳ドイツ語聖書において、幸福（Glück）という訳語が用いられているのは、旧約で七ヶ所、新約では絶無である。しかも旧約の七ヶ所は、いづれもグリュックという訳語は不適当と思われる原語である。これによってみても、聖書は「幸福」―現世的外面的ないわゆる「しあわせ」的な幸福を問題にしていないということである。してみると、ヒルティーは、この「幸福」（グリュック）という言葉を全く逆説的に用いているのであることを、読者はよく胆に銘じている必要がある。むしろヒルティーはグリュ

ックにおいて、さきほど註にでていたようにゼーリヒカイト（祝福）（私はときにこれを恵福と申しておる）という宗教的内実をもった意味に解しなくてはならない。しかも、真の祝福、恵福とは、正にイエスが山上の垂訓で告げておられる心根の事態で、それは、むしろ隣人を愛し、敵をも愛する献身的な、楽身の担いの心根において極まる。真の幸福（恵福）すら実は追求さるべきものではなく、人を助け、救うところにおのずから伴う歓喜であり、感謝であり、讃美である。自ら幸福と感ずるようなものではない。

人生と教養（『幸福』第二巻）

『幸福』第二巻は次の八つの論説から成る。

一、罪と憂い
(Schuld und Sorge)

二、「わが民を慰めよ」
(„Tröstet mein Volk")

三、人間知について
(Über Menschenkenntnis)

四、教養とは何か

（Was ist Bildung ?）

五、高貴なる魂

（Vornehme Seelen）

六、超越的希望

（Transzendentale Hoffnung）

七、キリスト教序説

（Die Prolegomena des Christentums）

八、人生の諸階段

（Die Stufen des Lebens）

右の論題を見ても感ずるように第二巻の内容は充実している。そして全三巻の中で第二巻が最も深く宗教的である。なかでも第一論説「罪と憂い」が最も深く宗教の本質的な問題をとりあつかっているので、これを省くわけにはゆかない。がむしろこれは第二論説のあとでとりあげることにする。

「わが民を慰めよ」

「わが民を慰めよ」。この題名は旧約聖書イザヤ書第四十章の冒頭の、〈「汝ら慰めよ、汝ら慰めよ、わが民を」汝らの神（かく）言い給えり。〉という第一節から採択されたものである。周知の如く、イザヤ書第四十章から第五十五章までを「第二イザヤ書」と呼び、その著者は「偉大なる無名者」と呼ばれたりしている。紀元前五八七年にユダ王国はバビロニアに滅され、半世紀に亘る「バビロニア捕囚時代」の苦難を忍ばねばならなかった。しかし紀元前五三八年にペルシャ王キロスがバビロニアを滅ぼすと、彼は捕われのイスラエルの民をエルサレムへ帰還させた。この無名の予言者、第二イザヤは多分捕囚の末期に現われたものと推定される。その彼が、神の言を聴いて伝えた最初の言が即ち、「汝らわが民を慰めよ」であったのである。ヒルティーは即ちこの言葉をこの論説の終りに近い部分で引用している。そのことはあとで触れることにする。

この世の害悪、人生の不幸、これらは絶えることがない。丁度空の雲のようなものである。雲の去来が定めなきように、害悪も不幸も定めなく襲ってくる。詩篇第三十七篇第五節に、「汝の

路を神にゆだねよ、彼に依り頼まば之を成し遂げ給わん」とあるが、この句を主題にしてパウル・ゲルハルト（一六〇七―一六七六、ルターに次ぐ独乙の讃美歌作者）が次のような表題の讃美歌を作った。"Befiehl du deine Wege und was dein Herze krankt"（「汝の路と汝の心をなやますものを神に委ねよ」）。その第七節の中の詩句「神しろしめし給いて一切を幸いならしむ」をヒルティは引用して言うのに、世の中はそう楽天的に運ばれはしないと。それはヒルティーの言う通りだ。しかし神に一切を托して神の力で生きるならば、そこに相対的な幸を越えた幸があることは事実であろう。しかしそこには必ず苦難があることも事実であろう。

世界は歴史の終末に至るまで、善と悪、正義と不義が相並んで存続するにちがいない。そのことはヒルティーが引用しているように、キリストの「麦と毒麦」の譬話がいみじくも語っている。読者は是非マタイ福音書第十三章二四―三〇節及び同章三六―四三節を参照していただきたい。どれが本当の麦で、どれが毒麦かはいづれハッキリするときがくる。それまではほうっておけ、というのである。黒白がハッキリする期をキリストは「収穫の期」となし、それは「世の終り」であると言っている。現世がいかに矛盾や混沌や偽善や詐偽で渦巻いているかをキリストは百も承知であるから、こういう譬話を語ったのであった。

正岡子規の歌に、「庭もせの草かりかねつ撫子の花やまじると思ふばかりに」というのがあるが、ところせきまでの雑草を刈りたいが、うっかり撫子まで刈ってしまうと可哀そうだから、撫

子の花が咲くまではほうっておこう、といった子規の心がこれに通う思いがする。

ヒルティーは「キリスト教の理想主義」という表現をもって、これが、この世のどんな威力や暴力にも屈しない精神力をもったものだとしている。キリストの「恐るな小さき群よ、汝らに御国を賜うことは、汝らの父の御意なり」（ルカ一二・三二）という言葉が深いなぐさめであり、その内容はキリストの次の言葉、即ち、「神の国は見ゆべき状にて来らず。また『視よ、此処に在り』『彼処に在り』と人々言わざるべし。視よ、神の国は汝らの中に在るなり」（ルカ一七・二〇、二一）が最も明確に示している、となしている。まことにその通りと思う。それなら「キリスト教の理想主義」という表現はむしろ躓きであって、「キリスト教の現実主義」といった方が当ると思う。福音は最も強烈な神に在る現実だからである。神・キリスト・聖霊・我れ乃至我らの内在関係が本当の信仰的現実であるからである。これが現実とならない限り、神の国が我らの中に、ということは空言となる。

さてヒルティーは「この世」の力の強大を語り、「上は高尚な無神論的哲学の最高の僭越から、下は野蛮きわまる利己主義の最も賤しい本能に至るまで」、この世を構成する諸因子のデーモニッシュな力に対して、「怖れを知らぬ者とならねばならない」と言い、それには善の勝利の確信を抱いた「英雄的精神」（Heldentum）を以て戦わねばならない、となし、「こうした英雄的な精神こそ、あらゆる人間的特性の最高のものであり、この地上における一切の喜びの最上のもの

のである」と断じた。そういう意志的人間に生れついた人はいいが、私のような性来の弱虫はどうしたらいいのか、ということになる。善の究極的勝利は確信できるが、そのために戦う勇気が乏しい人はどうしたらいいか。

そこでヒルティーはグライフスヴァルトのエトリ教授の旧約聖書のヨブに関する講演の中の次の一節を引用している、「個人的人生経験の前哨において問題となる肝要なことは、大きな御国の戦においてもそうであるが、神に錨を投げ入れた信仰（der in Gott ankernde Glaube）がはたして最高の道徳的力であるか否か、そしてそれは悪の世界支配的勢力を、なかんずく利己心という根本悪の力を打ち破るだけの力を持つものかどうかということである。この一点において勝利がかち得られるならば、その勝利は全体に役立つのである」。こういう言葉を引用する限り、ヒルティーといえども、悪との戦の英雄的精神がそう簡単に現在し得るものとは思っていないわけである。であるから、ヒルティーはそのあとでこういっている、「神との結合は、あらゆる個々の人生において、この地上における最高の力として確証されねばならない」。即ち手放しの英雄的精神が貴いのではなく、また必ずしも強いのではなく、神との結合こそ、最高の力を発揮するものであることを告白しているわけである。そして彼はいう「神との結合は、自由意志によって求められねばならず、またつねに自由意志によって確保されねばならない」と。

ヒルティーが自由意志を重んじていることは、彼の諸論説にしばしばうかがわれるところであ

るが、その点彼にはダンテとも、またカントとも相通う面がある。パウロやルターは意志的な人間であったが、おのれの自由意志をむしろ否定して、奴隷意志に変質した。彼らは神、キリスト、聖霊に圧倒されて、聖霊を受けて神・キリストの意志におのれを托することによって、神の力、キリストの力がはたらき、真の勇気を振うことができたのである。そのような奴隷意志こそ真の自由意志である。聖霊のあるところに自由があることをパウロもルターも告白している。誰よりもイエス自身が、「汝の意志を成らしめ給え」を彼の祈りの中心となし、おのれの意志を神に投げ入れていた。これこそが「神に錨を投げ入れた信仰」というものなのである。であるから、ヒルティーが自由意志をかなり肯定的に持しているところに一面の問題性はある。しかしヒルティーには他面において自由意志をもかなり投げ出している論説もあるから、一概に言いきることは出来ない。ヒルティーのような本当に生きている人というものは、しばしば言の上では矛盾をもっていても、深い現実では言の矛盾、概念の不整合を越えて渾然たる力と調和をもっている。

そこでさきほどの「神との結合」(Gottesgemeinschaft) は、信仰の具体的現実としては、神との直接の結合は我々罪びとのなし得ることではないので、キリストとの結合である。それも罪のゆるし、贖罪の恩恵のゆえに可能なわけで、結合を可能ならしめる実体は聖霊である。聖霊を受けることによってキリストとの結合は可能となり、それが神との結合ともなっているわけであ

る。聖霊とは何ものよりも力強い霊であるから、そこに真の英雄的精神が湧いてくる。パウロの「われ弱きときに強し」とはこの間の消息を語っているものである。聖霊に在る実存においては乙女と雖もおかすべからざる強さを有つ。しかも聖霊は最も深い愛の霊であるから、この強さは悪に勝ち、人を助け救ってゆく。真の英雄は相手を滅ぼすのではなく、相手を担いあげる者である。キリストの「敵を愛せよ」とはこの勇である。

それはそれとして、旺盛なる信仰的情熱に溢れていた大詩人ブラウニングの『アソランド』の跋詩を思い出したので、ここにその後半の詩句を掲げよう。

断じて背を向けたことなく、胸を張って前進し、
未だ曾て雲の霽れるを疑ったことなく、
善がそこなわれても、悪が勝つとは夢にも思わず、
倒れるは立ち上るため、敗れるはより能く戦わんため、
眠るは醒めんがためと確信していた人。

人々の活動せわしき真昼どきに
見えなくなった此人に歓呼を以て挨拶してくれ、
「胸を前に背をうしろにして前進せよ」と！

「努めよ、栄えよ！」と叫んでくれ。
「急げ――戦い進め、旅をつづけよ、
彼岸においても此岸の如く！」と。　（私訳）

ブラウニングはたましいの世界の大乗的な人物、勇敢なる信仰の戦士であった。彼こそはヒルティーのいう英雄的精神の典型的な一人であった。この辞世の詩さながらの気魄で彼は彼岸に文字通り大往生した。

戦闘的な歓喜の生活を送る秘訣は、神命に兵卒の如く服従して進むことと「神が人間のもとに宿り給う」ようにすることである、とヒルティーはいう。パウロもテモテ後書第二章三節で、「汝キリスト・イエスのよき兵卒として我と共に苦難を忍べ」といっているように、神命に「ハイ！」とハッキリ応えて行動すること、あたかも軍隊生活の兵卒の如くであれ、というのである。そしてヒルティーは「立派な軍人は、最も単純な人々だから最もすぐれたキリスト者であることが多い」と言い、マタイ福音書第八章の百卒長の例を引用している。ヒルティーは別のところでゴルドン将軍の信仰を激賞しているが、全くその通りで、蘆花の『ゴルドン将軍伝』を私も感激をもって読んだことを憶えている。日本の武士道精神がキリスト教信仰へのよき前提であることは内村鑑三先生も喝破しておられた。

ヒルティーが「神が人間のもとに宿り給う」といっている消息はさきにも述べたように、具体的にはキリストの聖霊の内住のことである。兵卒的な絶対服従と聖霊の内住の両者が身についてきたら、本当の平安が臨む。そこにはもはや怖れも疑いもない。

神のふところに抱かれているような深いなぐさめ、神の力で自由に前進する勝利のよろこび、そういった消息が、イザヤ書第四十章に無比の美しさ豊かさをもって描かれている。それゆえにヒルティーはこの章の冒頭の句、「汝らわが民を慰めよ！」をもってこの論説の標題としたのであった。

「汝のみ腕我らを抱くとき始めて我らはまことに自由！
罪の衝動より解き放たれ、汝の胸に固く結ばれ、
汝の愛にあつく恵まれ、幼児の如く故里に帰らん」

（私訳）

罪と憂い

罪（SCHULD）

私の原書の扉を開いたら、「一九二六年五月、東大独文科一年」と記してある。もう一九七五年になろうとしているから、かれこれ半世紀も昔のことである。そのあとでも読みはしたが、今度読んでみて、昔のアンダーラインの箇所や聖書の引用句の書き入れなどのところへくると、感激が新たである。

罪と憂い、「この二つを除去すること、まことにこれこそは、幸福を求める人間の努力の核心であり、主としてこれを目ざさないいかなる哲学も、宗教も、経済もまた政治も存在しないのである」とヒルティーは明言する。そしてこの二つの大敵の第一は罪である、と断じている。これには誰も異論がないはずである。

論題の「罪」の原語は Schuld が用いられている。このシュルドという語はゾレン（sollen）と同根であるから、なすべきことをしなかったり、なすべからざることをしたりするあやまち、といった性格の言葉である。義務を怠り、責任を果さない在り方に関わる。だから「負い目」とも訳される。Sünde という語よりも道徳的な性格を帯びている。ジュンデは全く宗教的な深みをもった語で、「万人は罪びとである」というとき、この罪びとは Sünder である。聖書を見ると、やはりこの Sünde の方が圧倒的に多く用いられている。しかしイエスの「主の祈り」における

「我らに負債（おいめ）ある者を我らのゆるしたる如く、我らの負債をもゆるし給え」という句（マタイ六、一二）の「負債」は Schuld で、法的な金銭上の負債の概念を道徳的な負い目のことに用いているわけである。

また我々が宗教的な罪（ジュンデ）を犯したときに感ずる罪感が「負い目」「苛責」というシュルドである。であるから、ジュンデが罪の原因面で、シュルドは罪の結果面であると見てよい。宗教的な意味でなくても、「ごめんなさい」「すみませんでした」などと、相手に迷惑をかけた「負い目」をゆるしてもらう角度の挨拶は、ドイツ語でやはり „Entschuldigen Sie !" で、「シュルド」（負い目）を除いて下さい」といった表現であるところをみてもわかるわけである。ともあれ、この論説をよんでみると、シュルドを罪過一般に用い、特に義務、責任の事態と関わりの深い意味に用いていることも感ぜられる。

「およそいかなる人間にも、峻厳な現実性をもって一つの感情が生きている。それは義務と罪（苛責）とがあるという感情、そして罪は、単に義務を忘れたところについてゆくばかりでなく、義務の忘却それ自体のなかに罪は宿っていて、その結果は、もしもなんらかの手段によって（単なる哲学的考察のようなものでは駄目だが）それをまぬがれるのでなければ、数学的確実性をもって負い目ある人の頭上に降りそそがずにはいないという感情である」それはまことに厳粛な感情である。ルターの良心宗教、カントの道徳哲学の気風と相通ずる特にドイツ的な意識である。

現代の日本人においてこのようなおごそかな意識が果してどの程度あるか。責任観念が稀薄になって、いたずらに要求意識が強くなっている傾向が児童や少年においてすら見られるのは寒心に堪えない。両親の育児に、学童の教育に、もっと厳正な面があって然るべきと感じている。「義務と罪とは、ひたすら、人格的・超世界的なただ一人の神を是認することによってのみ理解される」。ヒルティーのこの断然たる言葉は極めて注目に価する。ただ彼がこの超越神をいう場合に、それが霊神である点も強調してもらいたかった。もしキリストが言っているように「神が霊である」ことを明言しないと、神と人間の関わりが成り立たない。超越だけであると、これは無縁の神となってしまう。神との関わりは神が霊的存在であるから、そこに神秘的な関わりの消息が成り立つわけである。ここではその問題に深く関わる遑がないからやめておく。

人格神を是認するといっても、それは第三人称的な角度ではあり得ない。人格是認は一対一の第二人称関係においてのみ可能である。即ち我なる人間が、汝なる神に対して義務を果しているか否かの実存問題となる。換言するならば、汝の言、汝の命令、汝の要求、宗教的な言葉でいえば聖意、本願を我れが受けてこれを果すことが義務の最も深い意味である。それが遂行できないことが罪、負い目なのである。その汝が人間の場合は人間関係でそこに道徳問題があるわけである。

この聖書を完全に成就したのはイエスのみであったから、万人は罪びとで、救済を要する。そ

れゆえに私は、万人は本来宗教人である、というのである。「宗教」レリギオという言葉自身が「再結」を意味するように、正に神仏との再結を万人は要するわけなのである。

ヒルティーはある詩の断片を引用している。その後半をここに掲げてみる。

今やこの「必然」と「当為」とは
わが意志の表現なることをさとれ。
「必然」は物質に与えられたるもの、
「当為」は自由なる生にのみ与えられたり。
「必然」は奴隷の鎖にして
それは物質に与えられ、
「当為」は叫び声、
生の崩えいづる場所への叫び声なり。

「わが意志」とは神の意志のことである。自然界・物質界の必然（Müssen）と人間界・道徳界の当為（Sollen）とはいづれも神意の表現である、という。自然界には自由意志がなく、動物は本能で動くから、必然の世界である。ただ自由意志を与えられている人間は Sollen（ゾレン）当為、即ち「まさになすべし」と決意して動く、それを踏みあやまるとそれが罪である。それは神に対してまた人に対して罪を犯した、負い目あるものとなったということである。手ばなしでは、こ

の問題はいつまでも解決できない。宗教的な救済にあづかっても人間は地上では罪なき状態には到達できない。

ヒルティーもこの詩の作者も語っていないのであるが、「必然」にもう一つの必然があることを申したい。それは宗教界における必然である。それは霊的必然であるから、私はこれを霊然と呼んでいる。即ち神霊に全托して生きる生き方には神意の霊的な力がはたらくから、その聖霊の力で動くが故に霊然とはいうのである。これは天的な必然であって、当為の自由によって選択するのでなく、神意の力に托身する在り方、内在の聖霊の力で動く在り方で、そこに本当の自由がある。

さてヒルティーは「あらゆるこの世の重荷のうちの最も耐えがたい重荷」である罪からの解放の方途はどこにあるかを次のように探ねている。

まず第一に、「はじめはたいがいがかりそめの想念にすぎないから」その最初の瞬間に抵抗して罪を襲退せよ、それが我々の道徳的義務である。たしかにそのようにして勝つことも出来る。しかしそれで勝ち抜けるなら問題は簡単であるが、現実はそんなものではない。

そこで「第二の忠言」として、ダンテの『神曲』のプルガトリオ（浄罪山）第九歌の浄罪山の山門の箇所を指摘して、まづ平伏して謙虚な心をもって浄罪山の山門を門衛に開いてもらい、それから神への一すじの信頼をもって山を登るように、人生の旅路を歩むべく勤告している。ダン

テはこのとき白刃の先端で額に七つのP（Peccata）即ち、傲慢、嫉妬、忿怒、怠惰、貪欲、暴食、邪淫の七罪の徴を刻みつけられ、この七つのPが山を登るにつれて消されてゆくことになる。

懺悔（Reue）と共に神のめぐみ（Gnade）に対する信頼の心が大切であるといい、同じく「浄罪山」（煉獄）第三歌の次のくだりを脚注に引用している。その前半をここに掲げよう。

二ところ致命の傷にうつそ身を
貫かれたる後に、この身を、よろこびて
罪を解く「かれ」に、泣きつつ、委ねまつりき。
わが罪は恐しかりき、されど、涯なき
聖恩にいと大いなる腕のあれば、
立ちかえる者を受け容れたまふなり。

―「浄罪山」第三歌一一八―一二三（竹友藻風訳）

罪のために心身ともに致命的な傷を負いつつもなお全身を神のあわれみに委ねることが救いへの道であることを語る。詩篇第五十一篇の「砕けた心」、ルカ福音書第十五章の放蕩息子の「立ち帰り」、即ち「神の恩寵を求める勇気と希望」を失うなとヒルティーはなぐさめ、はげましている。

そして「懺悔（Buße）の本質は、一方では、はるかに困難かつ稀有なる回心（Umkehr）の完全な意志であり、また一方では、それには自力以外の他力を必要とするという確信である。他力、それなくしては、ついに回心の意志さえも往々にして単なるよきもくろみにすぎないのである」といっている言葉はまことに注目すべきものである。「回心」メタノイアというのは、心意の向きを転ずることで、神、キリストに向って全心全霊を向けることで、積極的な性格のもの、それを普通「悔改め」といっているが、この「懺悔」においてもヒルティーは、その本質は積極的な性格の「回心」だと言っているわけである。そしてこの回心の意志すらも他力を必要とする、といっているところが大切なポイントである。

他力の主体は誰か。「キリスト、それは神みづからが、歴史的に眼に見える姿においてこの世に送りたまえる救済者にほかならない。それゆえにこそ彼を回避することは許されないのである。けれども、打ちひしがれた魂よ、だからといって君は厖大な〈キリスト論〉を必要としないのだ。……ただ実践的方法によってのみ、しかもこの方法によって確実に、心の奥底から湧きあがっている〈主よ、われを救いたまえ〉という単純な祈りが君に道を開いてくれることを経験することができる。しかもこの道は、これまでは君のあらゆる教会万能主義や、君の至難な懺悔の行為をもってしても、君には十重の鉄扉をもって閉されていた道である。この門を、君のために開いてくれるのは、福音書にあるあの一つの偉大な、絶対的な言葉である〈わたしに来る者をわ

たしは決して拒みはしない〉（ヨハネ六、三七）」。

キリストは無条件に罪びとを抱く、キリストの許に心を砕いて来るいかなる人をも。十字架上の一方の盗賊は傲慢であった。しかし、他方の盗賊は心砕けて「聖国に入り給うとき、私を憶えて下さい」と願った。その瞬間キリストは無条件にこういった「おまえは今日私と一緒にパラダイスだよ！」（ルカ二三・四三）と。福音の気合はここにある。本願のあわれみである。

ヒルティーはパウロのような十字架の贖いということをいわない。ヒルティーの信仰のたちはヨハネ的である。力あるキリストの無条件的な愛、めぐみ、あわれみの中で罪のゆるしを受けつつ、全的な信頼を以て神・キリストの力にあづかりつつ、善意志を尽して前進してゆく、といった実存がヒルティーの在り方であり、人生道であった、といってよいと思われる。

ある意味では親鸞の「弥陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、往生をとぐるなりと信じて、念仏まうさんとおもいたつこころのをこるとき、すなはち摂取不捨の利益にあづけしめたまふなり。…弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへに」といった『歎異抄』のこころと相通ずるものがある。ヒルティーはこの「罪と憂い」の論説の前半、主として罪に関わる部分をダンテの叙情詩を掲げて結んでいるので、その最後の四行を紹介してこの項を終ろう。

「万軍の主よ、絶えてわれを見すて給うな、
願わくはわが師よ、慈悲をもてわれを救い給え、

ありとある敵よりわれを救い出し給え、
われはただ汝のもとにのみ安けく憩い得れば。」

憂い（SORGE）

罪と憂いは人生の二つの最大の禍悪で、しかも「罪はしばしば憂いの根本原因であるばかりでなく、罪を犯したという気持をまったく感じない場合には、重い憂いに耐えることは比較的容易」である、とはヒルティーの言う通りと思う。彼が註記の中でいっているように、人間の精神的な健康も、肉体的な健康も、この二つの禍悪によって最も深くそこなわれることも事実が証明する。そして「禍悪の最大なるものは罪である」と詩人シラーも思想詩の中でうたっている。

であるから、罪の問題の根本的解決をすることが、身心の健康と幸福にとって最も重要であることが明白である。そのためには何としても信仰の現実において救済にあづかっていなければならない。万人は死に至るまで根底においては罪びとに過ぎない。仏教でいえば大慈大悲の角度の「南無阿弥陀仏」「南無妙法蓮華経」の他力か、禅的なさとりの自力かによるのであろう。キリスト教ではキリストによる贖罪の絶対恩寵によるわけである。どの道、罪業の信仰的、宗教的解決の道によらねば、人間は罪からくる憂いを消すわけにゆかない。

「われ（わが罪を）言いあらわさざりしときは、

終日悲しみ叫びたるが故に、わが骨ふるび衰えたり。
…われ言えらく、わが罪を神に言いあらわさんと。
かかるときしも汝わが罪の邪曲をゆるしたまえり」
（詩篇第三十二篇より）とあるように、神に向って告白するとき、神は無条件にゆるし給う。その消息をこの詩人は、

「このとがをゆるされ、その罪を掩れし者は幸なり。
不義を神に負わせられざる者、心にいつわりなき者は幸なり」（詩篇三二・一）

とこの詩の冒頭に告白している。これはアウグスティヌスの特愛の句で、彼があのドラマティックなたましいの遍歴を終えて地上の生涯を閉じるとき、壁にこの聖句を掲げて神に感謝しつつ、天界に往生したという。

パウロが、「それ神に従う憂いは、悔なきの救を得るの悔改を生じ、世の憂いは死を生ず」（コリント後書八・一〇）といっているとき、「神に従う憂い」とは、何でも神に正直に告白し、自分をキリストの贖いにぶちまける角度の消息である。そうでない「世の憂い」即ち人間的な憂いは、消えたかと思うとまた生ずる雲のように、結局身心を蝕む。それは心身の枯死をもたらすことになる。

ヒルティーはまた、例えば生活苦といった現実からくる憂いが罪を誘発すること、即ち罪と憂

いの相互関係の因果が逆になる場合も指摘している。これは今日の深刻な世界的不況の現実において、大なり小なり、現われている事実である。

「ほかの人もみなそれをやっている」という、心の中のサタンのささやきに負けるところに、多くの社会悪がエスカレートし、蔓延してゆく現象は、日常にいろいろ見受けるところである。その点で、日本は劣等国のレッテルを貼られても仕方がないほど、なさけないありさまである。「禁煙」と明示してあるのに、喫煙する者がそこかしこにあるとか、シルヴァー・シートの明示があるのに、老人・弱者に譲ることをしない若者が絶えないとか、乗てるべからざるところに煙草の吸い殻を棄てたり、屑箱があるのに、平気で空罐を投げ棄てたり、こんなことを数えあげるのも恥かしい次第である。

社会、社会、といって小学校からうるさく教えているその精神が那辺にあるか、甚だ疑問である。権利や要求や利用意識ばかり増長して、義務や責任や自律自制の面が正しく身についてゆくのでないなら、禍である。それこそ憂うべきことである。ヒルティーが「社会問題はまもなく宗教問題によってとってかわられ、これによってのみ解決されるであろう」と註の中で言っているが、本当にそうでありたいが、わが国においてはその実現の見込はなかなかつきそうにない。けれども、宗教的次元からでなければダメであることを、そのことに気づいている人々はハッキリ明言してゆかねばならない。私も機会あるごとにその角度から言ったり、書いたりしている。

ヒルティーは、さきにも触れたように憂いにうち勝つ道は、信仰にあることを明言し、「神は信実であり、(Gott ist treu.) 信頼し得る磐である」と多分詩篇第十八篇の聖句を想いつつ語っている。「そしてドイツ人はこの信実をこそ、キリスト教やイスラエルの契約理念の知識が、かれらの勇敢な祖先の耳に達するはるか以前に、超感性的な力として体験していた。そして、もしもキリスト教が、ゲルマンの諸国民がつねにあらゆる人間的諸徳の最美なるものと見なしていたこの信実 (Treue) とうい種族の特質を、十分にとり入れていなかったとしたら、おそらくわれわれは千五百年後の今日なお、古代の神々のもとに帰りたいという誘惑を感じるであろう」といっている言葉は極めて注目に価するものと思う。神の信実に対しておのれの信実をもって応える。ドイツ人固有の根深い特質としての信実 (トロイエ) の貴さを、ヒルティーはしばしば論説の中で語っている。

相手を裏切らない。相手に対してまことを尽す。相手を本当として信ずる。そういう人格関係の根源として、神と我との関係をして関係たらしめている信実、そこに信仰があり、そういう信仰者たる自分は主観的には誠実 (Wahrhaftigkeit) の人であらねばならないことも当然である。対自的には誠実、対他的には信実、そしてその他者が神であるとき、神をまことととして受けとるところに信仰がある。但し、いくらドイツ人でも人間である限り、自分の側からの信実が完璧であるわけではない。信実においてドイツ人に負けないユダヤ人も、その歴史において惨澹たる跡

をのこした。神からの信実を体受してゆくところに、人間の側の信実が生かされ、強められてゆくわけである。

日本人の固有の特質は、何であろうか。今ここでそのことに深く立ち入ろうとは思わないが、人間の知情意の三面で、日本人が概して質的に特色としているのが情の面とするなら、やはり純情型の民といってよいのであろう。純情型に意志的な信実があるとき、それは極めて美しい人格と思われる。日本の武人の中にそういう型の人が最も多くあったように思う。そこに宗教心があるとき、最も秀れた美しさが現ずる。第一級の宗教人はこのような人々であった。

漱石さんの『草枕』冒頭の、あの有名な、「智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい」を想い出す。人の世は憂いだらけだ、問題だらけだ、というわけ。二十世紀の文化・文明は、智が往きすぎて科学による機械文明の高度の発展となり、その複雑怪奇な網に欲情がからみつき、意地の紛争、闘争がこれをぶちこわして行けば、しまいには破滅が来るばかりであろう。

自然そのものが既にそこなわれて、自然に帰るにも帰りようもないふしがある。しかしまだおそすぎるということはない。何といっても一番憂うべきことは、このような現実を招来してしまった人間そのものの心の問題である。このような世界的な憂いの問題は、ヒルティーの時代ではまだ現実には感じられなかったが、もろもろの憂いの問題の解決が、信仰の次元から発しなけれ

ばならないことは、この論説において力説されているところである。

信仰による憂いの解決の聖句や実例を、彼は丹念に聖書の中から指摘している。原書第三〇頁にたくさんの引用個所が羅列されてあるが、ここに紹介することは省略する。

「信仰は憂いを去らしめる、という聖書のこうした確証を文字通りに取ることのできる人は、たしかに、そのほかのいかなる不正な助けも、さらには人間の助けさえも、それにさきだって求めない人にかぎられるのである」と断言しているヒルティーの神体験のおごそかさを思うべきである。

そして彼はトーマス・ア・ケンピスのあの『デ・イミタチオーネ・クリスティ』(『キリストに倣いて』)の中の次の節を引用している。

「わが子よ、私は悲しみの日にお前を慰める主である。思い煩うときは私のもとにくるがいいのだ。ほかでもない、お前がかくも遅く私のもとにくるというそのことが、天からの慰めを妨げるのである。なぜなら、お前は敬虔な心で私に助けを求めるにさきだって、次から次と他のあらゆる慰めの泉を探し求め、そしてお前と私との外にある物につねに助けを見いだそうとしているからである。―そしてついにお前は、およそ信じてくるものであれば、いかなる人をでも救うのが私であり、しかも私だけであること、また私のほかにいかなる正しい助けも、いかなる忠言も、いかなる永続的な救いもないことをさとるであろう」という著しい神からの言葉である。

さきほど私が詩篇第三十二篇を引用したように信仰は、祈り、神との会話、すなわち神への全身的投入がなければ、本当の現実の力とはならない。本当の祈りでは、聖書の言がおのずからはたらきをなす。それゆえ聖書はつねに読んでいなければならない。ならない、などといっても、これは読まないではいられない現実のことを私は申しているのである。ご飯を誰が食べなければならない、というだろうか。我々の肉体は食べないでは生きてゆかれない。そのように我々のたましいは神の言を食べないでは生きてゆけないのである。そのことが本当となったら、それが信仰の現実なのである。聖書を読むことは、同時に祈ることなのである。だから聖書の言が霊的な生命力となってくる。「わが言は霊なり生命なり」というキリストの言はそのまま真理であり、真実である。

このような信仰の現実においては憂いの対象が、たとい相対的現実において客観的にあろうとも、それはもはや本質的には憂いではなくなっている。憂い、不安、というものは、こちら側のことであるからである。樽の中の無一物のディオゲネスはひとつも不安でなかった。何でももっているアレクサンダー大王の方が却っていろいろ憂いがあったにちがいない。彼が哲人ディオゲネスを深く思ったところを見てもわかる。

しかし相対的現実としての憂いごとのない人生はない。そこでヒルティーもこう言っている「憂いとともに、しかも多くの憂いを持ちながら、憂いなしに生きること、これこそわれわれが

身につけなければならない生活術である」。

ヒルティーは憂いがある意味で必要であるという認識のもとにこういう。「惑わし」(Betrug)というものを、日常生活の中で経験するわけだが、これは、第一に、傲慢や軽薄にならないため、第二に、他人に対して同情をもつため、第三に、神を信じ神の助けを求めることを力づよく我々に却って教えてくれるからである、という。

次にヒルティーは憂いに対する人間的な救助方途というものを次のように考えている。

第一の最上の方途は、忍耐と勇気。「いかなる困難も、われわれがそれに対する態度を確立し、実際にそれをわが身に引き受けるや否や、しばしばその姿を消してしまうということは、顕著な経験的真理である」。

そしてまた労働は勇気を与える。不必要な憂い、杞憂といったものは怠けのだらしない生活につきまとう。その際、飲酒などによる「気ばらし」が一時的に憂いから解放の作用をしようとも、あとは更に悪く押し返してくる。

第二の方途は、神に祈願すること。生ける霊的人格としての神への祈願が有効であることは論は俟たない。

第三の方途は、足るを知ること。これは主として経済的憂慮の内容に対してである。現代文明においてこのことは深く自覚すべき面であろう。耐乏の精神である。質素、節約の心構えであ

る。

私は卒直に申したい。方途はともあれ、いかなる憂いもなやみも、神の前にそそぎ出すことこそ肝要である。神はいかなる憂いもなやみも聴き給うからである。神の救の本願に洩れる憂いもなやみもないからである。かくて罪も憂いも何かあらん。神、キリストにあるがままで帰依しゆく者には、問題はあれども無きにひとしき根源現実が開示され、心身ともに光の中を、光に包まれ、光につらぬかれて進みゆくこととなる。

「そのとき天はわれらの前に開け
地獄はわれらの背後に横たわる。
われらは信じ愛し希望することを得
歓喜と平安と安息は与えられ、
欠けたるものはすべて補わる。
現世と永劫とを通じて救いこそは
われらの失われざる財宝なり」。

教養とは何か

「神言い給う。『見よ、日至らんとす、その時我れ饑饉をこの国におくらん。これはパンに乏しきに非ず、水に渇くに非ず、神の言を聴くことの饑饉なり』」（アモス書八・一一）

北王国イスラエルの末期、即ち紀元前八世紀の末に、南王国ユダの曠野の預言者アモスが、イスラエルの主都サマリヤに現われて預言をしたが、その一句をヒルティーはこの教養論の冒頭に掲げた。

これは正に現代において、ヒルティーの時代よりも更に切実に耳傾けて聴くべき預言者の警告ではないか。

健全な教養の中心には道徳的叡智と意志の力がなければならない。しかもその奥には宗教心が備っていることを要する。そのためには宗教心の源泉たる神の言を深く受けとるのでなければたましいが枯れてしまう。

現代の文明社会生活の源泉が石油であるとしても、自然人間生活が農産物を軽視してはあり得ないことは自明である。このアンバランスのため極限状況が迫りつつある日本を想うと実に寒心に堪えない。そういった政治の問題が起きるのも、実は健全な教養が政治家に欠けているからである。しかし政治家だけに責任があるのではない。民主主義国家と自称する国民一人一人の責任である。そうなると何といっても青少年の教育にたづさわっている教育者の責任が最も重いわけである。

国民が真の教養を身につけた国民であるためには、教育者自身が健全な教養を身につけ、それをもって青少年の教育にあたらねばならぬわけである。

ヒルティーもその時代を憂えてこういっている、「現代の教育は一生涯学び続けることに対する心身の力および喜びを生ぜしめずに、ただこうしたあらゆる能力を早いうちに鈍らせ、掘り崩し、あまりにも脆弱な組織の神経質な世代を育成しつつある観がある」と。これは受験勉強に追いまくられているわが国の教育界の現状にそのままあてはまるような言葉ではないか。

「一般教養の最も大切な成果は、各人の人格を健全に、しかも力づよく発達させて、ついには内的に満ち足りた、完全に充実した生活を営ませることにある。それなくしては一般教養は、各人のためにもまた国家のためにも、かくべつ決定的な価値を持たないであろう」。まことにその通りである。それゆえ教養如何は、国家の最も重大な問題である。

「教養」(Bildung)とは語源的には、「本来無形の未熟生硬な状態から新しい状態への形成」ということである。言いかえると、教養とは、素の状態が、それの到達し得る最高の状態へ生成されてゆく事態をいう。三つ児のたましい百まで、というが、教養ある人に形成されてゆく第一段階は実に胎教から始まり、満三歳頃までの深層意識への教育、それは言語的な意味をもってするよりも、もっと奥のハートと行為をもってする教育で、これこそ最も大切であろう。特に母親が深い祈り心をもって幼児を育てるところに或る決定的なものがあろうと思われる。ヒルティーはこのことには触れていないけれども、アウグスティヌスやルッターの母はそういう祈りの母であった。教養の深い偉人の母は殆どみな心の深い母であった。

ヒルティーは青少年が、教養ある人間に形成されてゆくのに大切な三つの要素を次のように考えた。

第一は、生来の感性と生来の利己主義とを、より高い関心事によって克服すること。

第二は、心身の諸能力の、健全な、均斉のとれた育成。

第三は、正しい哲学的・宗教的人生観。

そしてこれら三つのうちの一つを欠くならば、人間の衷にある或るものが萎縮して、より良き発達を遂げることができない、と言っているが、正に然りと思われる。

第一についていうならば、「あらゆる真の教養の究極目的は、誰でもがみな自分のうちに持っ

ている感性的重力と、利己心とから人間を解放することである」。それは、人間が元来感性的な存在として現世の生活を始め、本質的に精神的（霊的）存在として現世の生活を終るべきであるからである。そして来世において、より良き条件のもとに更に生を持続すべきものである。このような霊肉の戦に勝つことが教養の目的であるなら、そこにはどうしても単なる道徳の力では解決のつかぬ問題がのこる。それゆえ、教養の問題に宗教の力が必要となってくる。

「人間の精神的（霊的）本性が感性的本性に対して、また自由な人間的な博愛的な考え方が狭量な利己的な考え方に対して、心の奥底の傾向としてすでに決定的な勝利をかち得ていないならば、そして現実において日ごとに新たな勝利を獲得することがないならば、人間の真の幸福などは全く考えられないのである」とヒルティーは確言している。相対的な限度なら、道徳的な意志の力で精神的勝利を得ることが考えられないでもないが、決定的勝利となるとどうしても宗教的霊的な力の内在を必要とする。

第二についていうなら、日常生活において智情意のはたらきが均斉のとれた様相を示していること、それと並行して肉体のはたらきも精神生活に順応して健全に行われることが大切である。

“Mens sana in corpore sano”

この格言は一般に「健全なる精神は健全なる肉体に（宿る）」と解せられているが、本来はそうでなく、男児が誕生した際に、神々に祈る心であった。即ち与えられた健全な肉体に健全な精神

も宿るように！　即ちいかなる労苦にも堪え、死をも恐れない強靱な心身の男児であるように！との祈り心の言葉であった。それはともかく、心情の健全な人にはおのずから健康な体がそなわることの方が本質的である。「病は気から」というように、気が病んで病気となり、気が健かになって病が退散することはしばしば事実である。教養がある、という言い方の中には、心の健かさが重要な要素であることは確かである。

第三についていうなら、健全なる意志力、知性、感情及び肉体は、以上の心がけで、ある程度までは得られる。しかし本当に健全なる精神の域に達するためには、超感性的世界にたましいが息づき、その霊的な力にあづかることを要する。そうでないと「真の教養」に到達することはできない、とヒルティーは明言している。

「人間の感性的素質と生来の利己主義とはあまりにも強力であって、人間自身の外に住む、そうした力の助けを借りずに、全くの自力では克服しがたいものなのである」と確言しているが、これは全く真理で、要するに人間は救済を要する存在なのである。であるから現実の社会は、世界は、慾心の渦のために混沌複雑怪奇な様相を呈している。

人間が生来賜っている意志・理性・感性それ自体は肯定さるべき賜物である。ただ意志と感性が我執と慾心となってはたらくので、これを罪性としてこれと戦わねばならないところに道徳の問題、ひいては宗教の問題が生ずる。自律自制を以て正当な秩序と調和ができれば問題はないの

だが、これが真に出来ないから、宗教的解決の道が必要なわけである。キリストや釈迦によるキリスト教や仏教のある所以で、人類の歴史の終末までこれは不可欠の道であるにちがいない。

ヒルティーも人間が、「肉慾や利己心に打ち克ち」がたき所以を述べ、「だからこそ、人間生来の一切の力よりも強大な或る力が、人間存在に干渉しなければならないのである。そしてこの力こそ、人間が自分自身を克服することを可能ならしめ、また、自分のよりよき自我に叛逆する禍悪にくらべれば、一切の外的禍悪はもはや恐れるに足らないとする境地に到らしめるものである」と断然たる判断をくだしている。それにはハッキリいうと、聖霊の体験を必要とする。ヒルティーはこの事態を「宗教の神秘的な真理」といって、この体験がない限りその力がわからないと明言している。ヒルティーの神秘的体験は全くヨハネ的であって、パウロの体験の仕方とは角度がちがうことをここに一言しておく。ヒルティーのは、神学的に言うならば、パウロ的な十字架の信仰体験の面がうすく、生命的合一体験である。パウロにおいてはハッキリと十字架を経ての受霊（聖霊のバプテスマ）の神秘体験である。どの道、キリストの霊生にあずかることにおいては一つである。ヒルティーがここでヨハネ一・一二の「ただ神によりて生れる」という聖句を以て「秘密を開く鍵」といっているのをみても彼の神秘体験が直接性的であることが察せられる。このような新生体験をすると、別人の如くなる。しかも「そうなってはじめて、彼の内なる生来の賦才も智識もほんとうに生きて来て、自他の幸福に役立つことができる」といっている。

「真の教養の道」をこのようなたましいの根本問題から始めていることは、筆者も全く同意同感である。このような真の教養の実証として、彼は第一に「精神的健康と力とが徐々に増大してゆく」こと、第二に「一種のより高い聡明さがあらわれてくる」こと、第三に「人間の器量がその独特の偉大さを加えてゆく」こと、としている。

ものごとを認識して中正を得、また判断して肯綮にあたるばかりでなく、創造的なものが展開し、助成や深化、拡大や包摂の作用が生ずるものである。真に教養を身につけた人はそのような弾力性のあるたましいの人である。そして隣人・社会・国家ひいては世界のために「献身的」な生き方をする。現代においてはシュバィツェルの如きがその典型的な人物である。その学問、その論説、その音楽芸術、その医療伝道において真に教養の備わった人で彼はあった。

真の教養人には一種の偉大さがおのずから備わっていて、人を威圧するのではなく、人がおのずから信服し、おのずから影響を受ける態のものである。真の教養人は宗教的次元が深く、本当の平安をもっているから、そこには人を平和ならしめる力がある。謙虚であることと、権威があることとが一如なのである。深くして広く、熱烈にして寛大である。

ヒルティーはまやかしの教養とまことの教養を比較して、大体次のような点を掲げている。

（一）生活態度がはなやかで、物質的に「贅沢」なのはあやしく、「気品」があり、くつろいで一種の「簡素」さのあるのは本もの。

（二）本を飾りもののようにならべ立てているのはあやしく、よく分類し、しかも「多読」している人は知識を有機体的に備えているから本もの。

（三）「騒々しい不作法な態度」を乗物や料理店などであらわす人は教養の欠けている人。

（四）働くことを厭う有閑的な人、困っている人々を何らかの手段方途で助けようともしない人々は、どんなに教養がありそうでもまやかしである。その反対が本もの。

（五）名誉や財宝のため、仕事に狂奔する人は教養の大敵。「やむを得ない事情もないのに、日曜も平日も全く一様に働き続ける人は、毎日何もしない人と同じく、無教養な人間と見てまちがいない」。日本ではもっと日曜を、大自然に接するとか、宗教的な探求をするとか、に用うべきではないか。

（六）金銭に対する態度。

（七）交際における態度。

（八）他人に対する毀誉褒貶。これらの態度によって教養の深浅がわかる。

ヒルティーは結論的に次のように述べている。

真の教養を身につけるには、実践的に、良き習慣を身につけることから始めるか、哲学的に、生活態度における真偽を思惟を以て認識し判別する行きかたに従うか、宗教的に、無限無量者及びそこから来る力を直接に探究し体験することによってこれを行うかである。最も本質的な道

は、最後の宗教的な道であって、他の二つの道の行きつくさきは、結局この最後の道である。「真の教養の秘訣、そのための発端と真の鍵とは、利己主義の、特に享楽欲の克服にあるからである」。かくてヒルティーの教養論は始めと終りが宗教的な深みの世界に帰一している。

人生の諸段階

この論説は特に教育にたづさわっている人々に非常に参考になるものであると思っている。「人生のあらゆる時期に、それぞれ独特の所産を堆積して、それを人間の中にとどめておかなければならない。子供の頃には子供らしさをとどめておかなければならない。これがなければ、人間は決して完全な、他人によい影響を与えるような者となることはできない。また、青年時代には、活動力の源泉たる情念の新鮮さと感激性とをとどめるべきであり、壮年時代の男女は、あらゆる思想や感情の円熟と、すでに成就された行為によって鍛えられた性格の堅実さとをとどめおかねばならない。かくしてこそ老年もまた、慰めのない衰頽ではなくて、ありしままのすがたの人生をおだやかに所有し、あるべき姿の人生を大観しながら、さらにすばらしい更に先の発展へ

の準備となり得るのである。これが老年にふさわしい使命なのである」

これは実に含蓄のある言葉ではないか。ある意味においてこの論説の要をしかと把えているようなことばである。

幼少年時代の子供らしさというものが、どうだろう、この頃は随分そこなわれているように思う。日本においてはテレビの悪影響が蔓延しているようである。子供の無邪気さ、素直さ、純真さ、子供らしい夢想、美しい心情、といったよさが随分いがめられている。小利巧なあたまのはたらき、打算的なものの考え方、先ばしった社会意識、危い闘争意識、素直な返事がなかなかできない心の高ぶり、まじめな読書をする集注力の欠如、等々、憂うべきありさまである。テレビ内容をどのように判断し、然るべき制限をもって子供に見せるべきか、教育者にも親にも、責任がある。

ことばの深い意味で真に偉大な人間には、死に至るまで童心があった。本当の無邪気さ、純真さ、というものが失われてしまったら、それは人格の致命的な損失である。

次に青年時代。青年にして感激性のないほど青年らしからぬものはないと思われる。自分の天性に即した方面の真理探求への情熱、自律的に行動する強靱な意志力、大自然や芸術や人間に対する美しい情感（友情と恋愛）、健全なる運動によって体力を鍛える意欲、そういったところに青年の生命があろう。青年にしてそのような在り方から逸脱してバランスを崩すならば、心身の破

局をまねく危険にさらされる。

次に思考力の充実した壮年時代が来るわけである。そのときにヒルティーが言うように「あらゆる思想や感情の円熟と、すでに成就された行為によって鍛えられた性格の堅実さ」というものが本当に具わるのは、なみ大抵のことではない。少なくともそういった内実に向った在り方でなければならない。そのためには諸方面の一流のものの読書と地みちな仕事の実践が重要な要素であろう。

かくして迎えられる老年期において、過去をある種の満足と感謝をもって想い、現在をしづかに自覚し、未来—即ち死と死の彼岸の世界—に対する心備えと天的な希望を抱いて、更に矍鑠として仕事をいとなみ、死してなお已まざるの意気は、地上の生涯の終りまでもちたいものである。

ペスタロッチの墓碑銘には、彼の言葉を掲げて、

„Für sich nichts, alles für andere.“

「自分のためには何も求めず、一切は人のため」

とあるそうであるが、この言葉の真義は、自分を形成することが、同時に他人のためであるといった自他一如の無私の在り方といってよいであろう。ヒルティーが人生の四期夫れ夫れの重要な成果を要約して指摘したが、そのような自己充実が本ものであるためには、それが同時に他者

に向って全的に開かれたものでなければならないことを申したいために敢てペスタロッチの言葉を引用した次第である。

次にヒルティーは、一般的な判断において幸・不幸とか順境・逆境という方面から人生を概観すると三つの時期を考えることができるとしている。

すなわち逆境のため青年時代を苦闘して鍛えられた者は、順境に暮した者よりも、概して成功した壮年時代をもつことが多いが、曇りない晩年が持続して来ることはむしろむづかしい。これに反して、黄金の青年時代を送った者は、殆んど必ず奮闘的なしかも嵐の中をゆくような中年期を迎えることになり、そのあとでは比較的平穏な晩年をすごすようになる。「苦あれば楽あり」といったわけで、苦―楽―苦、楽―苦―楽、といった傾きが人生の三期、青―壮―老にあるというのである。ともあれ人間は生涯のどこかで大いに苦難の時期を通って鍛えられることが肝要であると彼も言っている。「患難汝を玉にす」との諺の通り、およそ偉大なものにして患難なしに達せられることはあり得ない。

「幼年時代が楽しいものであれば、その残照は一生消えない」と彼が言っていることは注目に価する。であるから、幼少にして父または母を失った子供、特に母親を失った子供、況んや両親にはやく別れてしまった子供に対するあたたかい福祉施設乃至は近親の温情ある個人的な保育の意義は極めて重い。幼少時代を苛酷な運命にさらされると犯罪への可能性がつよくなるであろうか

らである。

要するに順風を真帆に孕んで前進するときも、逆風になやまされて苦闘し力漕するときも、人生万般、経験する者の心次第で、それがプラスの体験となるかマイナスの経験となるかである。「神を愛する者にとっては、その生涯のすべての出来ごとは、それがいかなる種類のものであっても、必ず益とならずにはいない」というパウロの言葉は体験上の真理である。これのもっと霊的な力強い聖句がペテロの書翰の中にある。「愛する者よ、汝らを試みんとして来れる火の如き試煉を異なることとして怪しまず、かえってキリストの苦難にあづかればあづかるほど喜べ。汝ら彼の栄光の顕われんときにも喜び楽しまんためなり。もし汝らキリストの名のために誇られなば幸なり。栄光の御霊、すなわち神の御霊汝らの上に留まり給えばなり」(ペテロ前書四・一二―一四)。苦難を欣然として受け、これに耐えしめる力は天来の聖霊にある。使徒たちは皆、この力で勝った。パウロが幾度か死ぬほどの苛酷な迫害に遭いつつも、屈せず、勝ちぬいたのは全く聖霊の内住の力によったのである(コリント後書一一・二三―三一)。

さきにもちょっと触れたが青春に感激性と夢がなかったらおしまいである。そういう青年は青年ではない。ロングフェローの詩に《EXCELSIOR》「更に高みへ!」というのがある。雪中アルプスの山嶺を登りゆく一青年の姿を詠ったものである。またフィヒテの『独乙国民に告ぐ』の中にも、太陽目ざして翼を張って天翔けりゆく鷲のすがたに独乙精神をなぞらえているところが

ある。理想追求の古典的精神が薄くなっている現代青年を残念に思う。民主主義のはきちがえにより平板化、類型化、現実打算化のためであろう。

「子どもたち、とりわけ男の子の教育と性格形成とのためには母親が家族中の決定的な要素であるということ」これはすべての女性が胆に銘しておくべき一言である。勿論、いわゆる教育ママになれなどといっているのではない。「人の母たることは最大の事業である」とワルト・ホイットマンも言った。「歴史は女性がつくる」という言葉も多面的な意味において真理である。前回も触れたように、偉人の母は殆んどすべて心の深い、あたたかい、そしてしっかりした女性であった。第二の国民をつくる者は母である。その意味からも女子教育の重大性を想う。夫婦生活において妻が夫に依存することは事実であるが、依存しながら夫の力となっているのは妻の愛であり、母としての子供に対する訓育である。言の最も正しい深い意味で女性の愛というものは夫を支え、子供を育てる二重の役割を果すわけである。独身女性にしても精神的な母として、愛がなかったら失格である。

ヒルティーは家庭の在り方についてこういっている。「何代か続いて利己主義的であった家庭には天罰がくるという約束はまちがいなく的中する」と。いわゆるマイ・ホーム主義の家族的利己主義は決して幸福でない。あの家庭にゆくと心が楽しくなる、気が休まるといった家庭、門戸の開け放たれた、胸襟を開いた家には幸福の花が咲く。愛の太陽が燦々と照って明るいからであ

る。

人生の諸段階は、最初に述べたように、精神生活の充実してゆく諸段階であって、単に年齢的なことをいっているのではないから、ただ瞬間的現実をおもしろおかしく暮し、飲んで、食べて、寝て、起きることのくりかえしの生活ができさえすればよいといった人々には、人生の諸段階というものはない。

人生の四段階についてヒルティーは更に次のように語っている。第一段階は、常識的な考えにあきたらず、なんらかの哲学的探求をする時期である。第二段階は、永遠の超自然的な真理へと転向する時期である。第三段階は、たましいの新生、回心であって、ここから本当の進展がいとなまれていく。最後の第四段階は、予言者ゼカリヤの第一四章七節にあるように、人生の「夕暮になってなお光がある」という約束の通りになってくる時期である。

「第一段階を終った青年は、理想にむかう清純な精神をもち、良心に背徳の烙印を押されることなく、労働の喜びと、無数の有益な職務上の知識とを持って立たなければならない。第二段階は、正当に経過すれば、三つの大切なものの獲得に捧げられる。即ち市民としての地位と、品格のある結婚と、健全な宗教的・哲学的人生観とである。第三段階は、人生の戦闘における試煉の時期であって、これこそは生涯をかけた仕事を行うべき本来の時期である。第四段階は、真の成功による人生の載冠であり、そしてついには、この人生からさらに広い活動圏へと移ってゆくの

である」。

右の言葉は実に人生の諸段階に対する本質的な在り方として胆に銘すべきものである。第四段階から、次の次元の異った世界へ入り往く心備えと希望について、ヒルティーは註に、ヨハネ黙示録二・一〇・一一、七・一四―一七、二一・三―八、一九・六、ローマ八・一三等を挙げているからここに附記しておく。読者自ら聖書を繙いていただきたい。

またヒルティーは教育上の注意として、唯物的な世界観や、形式的な宗教を青少年から遠ざけるべきこと、また自然科学的に傾きすぎたものの考え方も不可であるし、あまりに早くまた多くの宗教的用語や行為を教えることの不可もあげている。また心身を清純に保つために、肉慾的な見聞の有害も述べている。この点現代の肉情的な刺戟の氾濫はとどまるところを知らぬが如くで、今までにも歴史が示している文化文明の末紀的現象ではないか。真の宗教的な人間形成の前段として古典的教養の必要をヒルティーはここでも強調している。わが国で言うならば、日本の古典的文学及び漢籍がある。とにかく現代のように週刊誌及び漫画雑誌の氾濫の公害は言語に余るものである。

「もし教育が青年の心に、理想にむかう精神を植えつけ、そして二三のよい習慣のほかに、一切の低俗なものを嫌う精神を支えることができれば、それで教育はその最も大切な義務を果したというべきである」と言い、且つどの道「自己教育」を自らいとなまない者はひとかどの人間には

なれない、といっている。そして青年は真剣に一事を追求せよ、副次的なものは一切顧みないひたむきの精進が肝要である。という主旨のことをいっているのは正に同感である。そしてその「自己教育」の姿勢は何かといえば、利己心の克服にあることをトーマス・ア・ケンピスの自己否定のくだりを引用して述べている。要するに宗教的突破の事態である。

「ほとんど二千年来続いてきたもの、すでに幾百万の教師や著述家の精神を動かしてきたもの、そして今もって莫大な費用を惜しまず海外に運ばれて、まだそれを知らない諸国民に伝えられているものが、その本場で、しかも世界の最も教養ある諸国民のあいだに知られないようになってしまったというのは、まことに奇妙なことである。それとも、キリスト教の精神、いやむしろその意味がわがヨーロッパ諸国において一般に知られそして承認されている、とわれわれは主張することができるであろうか、また主張しようと欲するのであろうか」。

キリスト教にしろ、仏教にしろ、一般には有名無実的になっている。ヒルティーもここで、ある者はキリストの復活は迷信にすぎないと言い、ある者はキリスト教会は一種の社交団体だと考え、ある者は一種の僧侶政治と見ており、ある者は、キリスト教は一つの学問で神学上の諸問題のためどうにも結論出ない仕末のわるいものとして敬遠する、などの状況を挙げている。「今日、キリスト教は、大部分のキリスト教徒にとっては、教会の教え、学校の教えにすぎない」。この

ヒルティーの嘆きは今日の欧米において更に一般的な現状であろう。

一九六一年春から六二年春にかけて一年間ハンブルグで暮して、私もそんな感じを受けた。ルター教会にかなり忠実に通ってみたが、青年が極めて少数で、最も多いのは中年以上の婦人であった。聖書研究会（Bibel - Stunde）に列席したら、副牧師が私にも担当を依頼したので、数回語った。すると副牧師が、「あなたはどうしてそういう心境になりましたか」とたづねた。私は体験した祈りの次元のことを語った。それで教会新聞に書くようにたのまれたので、「聖霊のバプテスマ」と題して一文を草した。その文の中で、私は自分の聖霊体験を述べ、現代キリスト教の盲点は、水の洗礼を形式的にやるだけで、大方聖霊のバプテスマの何たるかを知らないことにある。それゆえ須らく使徒的信仰の次元を追求すべきことを力説した。聖霊のバプテスマは棄身の祈りによらなければ受けられるものではない。また謙虚に求める人は、聖霊に満ちた集会において聖霊の人の講話を聴いている間とか、その人の按手によって、聖霊のバプテスマにあづかるものであることは事実が証明する。

ヒルティーは聖霊のことに言及していないけれども、キリスト教にしろ、仏教にしろ、現代宗教界の弱体化は、霊的次元の低下にあることは明白である。今や第二の宗教改革が起こらなければ、人類の精神的危機はいよいよ深刻の度を増すことになろう。

「人類が科学とその不断の進歩とを高く評価するのは当然であるが、しかしわれわれの生活領域

から、またわれわれの行為の動機から、科学的に証明できないものはなんでも切り捨ててしまうことにでもなったら、人類は非常に退歩してしまうであろう。こんにち多くの知識人はこういうことを理想としているが、これはまちがいである」。科学万能的なものの考え方、知性の過大評価が、人間の慾性とからんでおそるべき結果を孕んでいることに気づかないでいる。その一方人間の中にかくれている霊性を侮蔑する傾向をもっていることは禍なるかなである。ヒルティーも「われわれの霊的自我は、むしろ解明し得ないものに根ざしている。だからもしこの霊的自我から、この解明できないものが、信仰の点で奪い去られることにでもなると、その埋め合わせに、なんらかの迷信が持ち出されることになる」といっている。そういう現象は、社会状勢の不安と共にいよいよ顕著である。

「霊的なものにおける真の力はすべて神のものなのである。だが信仰は、こうした力に呼びかけ、こうした力がこの地上にあらわれ得るようにするのである」。これは正にヒルティーの言う通りである。そしてヒルティーは更に註記してこういっている。「神の力は、ほんとうの善の一切を自らわれらのうちに創造せずにはやまない。またそれを欲するのである。……我々は自分を神やキリストの手にゆだね、自分の家の鍵を全く無条件に、神の手に渡さなければならない。そうすれば我々は神から愛を与えられるであろう。その愛は、いかなる人間も自ら自分に与えることのできないものであるが、しかしそれは、人間を変えるところの原理である。こうして我々は、自分

ではついに破壊できない利己自愛を棄てることができるのである」。これらの言葉は極めて注目に価するものである。ただここでヒルティーが、「原理」といっている言葉がちょっと躓きになる。「原理」ではなく、原始力とでも言うべきところである。なんとなれば、人間の中に巣喰っているデーモーニッシュな自我の力は、「原理」（プリンツィープ）などで崩れるものではなく、神・キリストから来る霊的な愛の原始力によらなければどうしようもないからである。そのことは、パウロもルターもその宗教体験で告白しているところで、キリストの十字架が示している贖罪愛と聖霊が祈りの場で降臨してくる生命的な愛の実力がそれで、これを私はキリスト・聖霊の原始力と申しているのである。

これを裏返して言えば、「キリスト教は、打ち砕かれぬ心の持主、謙虚な気持になりきっていない人に対しては何の作用も及ぼさず、せいぜい空虚な人に対しては何の作用も及ぼさず、せいぜい空虚な形式にとどまるということもまた、同様に真実である。」しかもこの「砕かれた心」とか「謙虚な気持」とかいう事態も、十字架のキリストの砕けの心、謙虚そのものを信受するとき、はじめて「なりきっている」というどん底の現実が与えられるのである。「打ち砕かれた生活、いわば生涯の全設計をつらぬく割れ目のようなものは、内的な意味では決して損失ではない。それどころか、これこそはキリストに対する信仰が最もよく栄える地盤である」。正にその通りである。

人生の内的段階において以上のような境地に達すると、それは明かに深い谷を越えて、一つの高き峠に達したというべきものである。ヒルティーはこれを大体において青年期の終りか壮年期の初期に起るものとみなしている。

今や新しきいのちの言葉
聖書（みふみ）よりむねに注ぎぬ
いやまさる真理の光われを導き
いよよ明るき峯に昇らんとす
はやわれはわが目ざす目あてを見たり
ゆく道はさすらい——もはや冒険にはあらず

このようにヒルティーは「朝風」という詩の中で詠っている。ダンテがその『神曲』の浄罪山登山において記しているように、人生の登山において、登りゆけばゆくほど、勾配はゆるやかである。何らかの意味で自己突破をしたたましいは「新生」をおぼえ、次元的相異を自分の過去に対して感じ、登山の脚が軽く自由になっているのを覚えるわけである。それでもなお人間というものは、性来の弱点をもってはいる。そういう矛盾構造ではあるが、天来の霊的な力は躓いたり転んだりする脚を必ず前へ前へと進ましめる。

そういった人間の日常生活における自己自身における劇的構造にも拘らず、従来の自分に対す

る「本質的な一つの差違はつねに認められる。…つねに平安の領する確実な地点が出来る。…その結果、おのずから自他にする忍耐力は強まり…あらゆる物事の核心を見抜く眼はますます正確となり、したがってそこから正しい人生の知恵が生まれてくるのである。…そしてあるのはただ全生涯を立派に終ることができるのだという確信である」。

しかし確信の根拠は何か、「日々刻々に新しく生まれ、…つねに生きて現前している」信仰の真骨頂にある。サタン、「この世の君主」なる悪霊の力は「非常に強大なもの」であるから侮ることは出来ない。と同時に、キリストはこのサタンに完勝したから、キリストに全的に信頼する限り、毫もおそれることはない。信仰生活において、おそれとうたがいは敗北をまねく。

とにかく壮年期は「堅忍と勇気」を以て戦い抜くことが大切で、それにはサタンよりも「さらに強大な一つの力、すなわち神の力、真のキリスト教によって人間のうちにはたらく力」で戦うのだとヒルティーも明言している。

「この時期においておそらく最も注目すべきことは、神の支配と自由とが人間において結合することである」というヒルティーの言葉はいかにもヒルティーらしい。即ち人間の自由意志が神の意志の線に合致することをのぞんでいる。この点ヒルティーはプロテスタント的でもなく、またカトリック的でもないようなカント哲学的な味がする。「人生のこの段階には、いかなる原則も教義も一切なんの役にも立たぬ」と言っているところに、彼の好い意味での自由さがある。

「あらゆる真の成功およびあらゆる真の幸福とは、要するに自由な人間の意志とこうした神の秩序との自由な合致にほかならない」という言葉は、孔子の「わが欲うところ法を越えず」より更に積極的であり、宗教的であることはまちがいない。

「救が我々の上に起こり得るためには、我々はまず自分自身の所有、すなわちあらゆる形の利己自愛から自由とならねばならない。これは、多くの段階を通り、多くの十字架を経て、徐々に我々の上に成就される困難な事業である」という意識と自覚は極めて重要なもので、ヒルティーは一般に考えられているような安易な「自由」を語っているのではない。

そしてヒルティーは更に社会問題のことをとりあげ、「その解決は、決して教会や国家によって行われるものではなく、無限に多くの個人の道徳的力や個性的愛によってのみ見出だされる」となし、いわゆる組織の力にたのんだり、イデオロギーで推したりすることではなく、社会を構成する個の道徳的自覚、宗教的実存の重要性をハッキリ語っていることは、歴史の終りまで不滅の真理であると思う。

さて最後の老年期に入ることとする。ヒルティーは老境生活に三種類が普通考えられるとなしている。その第一は人生享楽派の余生で、利己主義的な無為徒食の生活。第二は、人生の大部分を勤勉に働いて、然るべき蓄材の上に悠々自適できる老境で、趣味に耽ったり、回想録を書いたり、その他楽しい会合などでくらす無害な晩年。第三は、より高い生への前進の生活で、つね

に「鋤から手を離さず決して過去を振り返らず」（ルカ九・六二）、死の関門を突破してなお来世に勇躍せんとの生活態度である。このような第三の人生道を往くのが本当に価値ある人生であるとなしている。全く然りである。これはシェクスピアの『ヴェニスの商人』に出てくる三つの小箱の第三のものに比すべきもので、見ばえのない箱ではあるが中味の充実したものである。

またヒルティーはこう言っている、「神がほんとうに関心を寄せ給う人はみな、その生涯のさまざまの時期に、何度でも改めて一種の熔鉱炉の火をくぐらなければならない。このような熔鉱炉の焔のみが、ダンテの言うように、霊を成熟させる」と。まことに然りと平伏して思う。

「黙せよ、苦しめよ、耐え忍べよ。
汝の苦しみを誰にも訴えるな。
断じて神を疑うな、
汝の助けは日々に来るぞ。」（ルター）

「このような試煉から、まづ、徹底的に謙虚な人、もはやいささかの思いあがりもない人間が生れてくる。」このようなのは、今の世の権利と要求であらそいの渦を巻きおこしているような人々とはおよそ次元のちがった人々である。そこにはいわゆる宗教臭みのない円満さがある。仏教的に言えば円現の相である。それは、キリストから「わが友よ！」と親しく呼ばれているような在り方である。

超越的希望

『幸福論』第二巻の中ではもう一つ、この「超越的希望」を取り扱わねばならない。というのは、第三巻に「信仰とは何か」というのがあり、更にはヒルティーが地上の生涯を閉じる直前に、愛について書いた「力の秘密」というのがあって、以上三者で、パウロの言う信・望・愛が論じられているわけであるので、この論説「超越的希望」を割愛するに忍びないからである。

地上の生涯がどんなに幸福であっても、死そのものをどうすることもできない。その場合、死はあたかもa＋b＋c…という生涯のプラスを大きな括弧で括ってそれにマイナスの符号をつけるようなものではないか。人は死んでも事業は残るとか、肉体は塵に帰しても偉名は後世にたえられるとかいってみたところで、その人自身のたましいはどうするのか。

さりとてエピクロス的アタラクシア（内的平静）にせよ、ストア流のアパテイア（無感動）にせよ、それらは一種の諦念であって、死に対する突破でも勝利でもない。

これに反して死を超越するところの希望があるならば、「死は親しみのある厳粛な使者であって、疲れた旅人にその旅路の終りを告げ、一歩一歩汗を流して登ってきた山の頂きから、やがて遙かな新しい世界を展望し得る日も近いことを告げてくれるのである。」冬枯れの枝に春の芽ばえを見る眼。枯骨が神霊の息吹きに甦るを信ずる心（エゼキエル三七・一―六）、「起きよ、光を放て。汝の光来たり、神の栄光汝の上に照り出でたればなり」（イザヤ六〇・一）との声を聞く耳。これらに死に勝つ消息があろう。そのような、現実を超越する希望はどうして得られるのか。

「死の問題は、あらゆる人生問題のうち最も重要なものである。これに対する態度こそ、すべての人の人柄を最もよくあらわすものである」。「また死に対する恐怖は、あらゆる哲学に対する最上の試金石である」。ヒルティーは更にこう言っている、「死は、創造の大調和のなかにあって、調子はずれの大声でわめき立てるわざわいでは断じてない。それどころか、むしろ一種の幸福である。すなわち、そもそも善が悪と戦わなければならないこのような人間世界が存在し得るのは、まさにこの死あればこそなのである」と。これは深い洞察の言葉である。即ち死は逆説的な解決である。ある人々には審判への門であり、ある人々には救済への門となる。換言すれば、地獄ゆきか、天国ゆきかの岐路である。

そうなると、実は死そのものが問題なのではなく、地上の生き方こそ問題で、希望も安易にも

てるものではない。地上で正しく生きるべく、努力精進をなした人は、死の彼岸において「いっそう高貴純粋な生への不断の前進」をなし、「きわめて自然な、無理のない生の継続」をすると思われる。そこで今私が引用したいのはゲーテがエッカーマンに語った言葉である。

「ひとは七十五歳にもなると、時には死を思わずにはいられない。私は死を思うと全く平安である。というのは、われわれのたましいは全く不壊の存在だと確信しているからである。たましいは永遠から永遠へと活動しつづけるものだからだ。それは太陽に似ている。太陽はわれわれの肉眼にはただ沈んでゆくように見えるが、元来決して沈むのではなく、絶えず輝きつづけているが、われわれのたましいもこれに似ていると思っている。」(一八二四年五月二日)。

「われわれの生の持続に対する確信は、私においては活動の概念から生じている。というのは、私が生涯の終りまで絶えず活動しつづけていれば、現在の生存形態が私のたましいに耐えられなくなった場合に、自然は私に別な生存形態をあてがう義務があるからである。」(一八二九年二月四日)。

大天才ゲーテは、彼の畢生の大詩篇『ファウスト』の中でも言っているように、(一一九三四―一一九四一行)、彼自身一生を貫いて努力精進してやまぬたましいであった。右の彼の言葉は彼にとってまことに自然な告白であった。

大自然において神性の融けこみを見ていたゲーテにとってこの確信は単なる希望以上のものであると思うけれども、「生の永続」に対する一般の希望は希望というよりも念願と言いたい。ところが聖書が語る希望は、ある確実なる実証乃至約束から来ている天与のものである。

それはイエスのもっていた「永遠の生命」である。キリストが永遠の生命の実体であり、身証者であることは、彼が十字架の贖罪死を遂げたのちに、霊体をもって現われた復活の事実が何よりの証拠である。ヒルティーはこの事態を次のような表現で語っている。「もしも未来のいのちがないならば、キリストの全人生観は大きな誤りの上に立つことになるであろう。人格（ペルゼーンリヒカイト）の復活ということは、キリスト教の与える最も疑うべからざる、最も決定的な約束の一つである」。ヒルティーはこの「人格の復活」という表現において、天下に唯一人しかない個々人の個性の尊重を意味すると共に、その個々人が単に地上の肉体的存在の復原にあづかるといったようなことではなく、そこには「人間の全存在を深くゆり動かすような強烈な変化がぜひとも必要である」と言っている。キリストの霊生にあづかれば、そうなることはパウロもヨハネも語っているところで、パウロの特にコリント前書第十五章やヨハネ福音書第五章・第六章を是非繙いていただきたい。そしてこのような「強烈な変化」は、聖霊のバプテスマを受けると、地上において既に内的に質的に起きているのである。

神霊の加持にあづかった旧約時代の預言者や詩人たちも、「全存在を深くゆり動かすような強

烈な変化」を来たしていた。たとえばヨブ記の主人公ヨブの叫び、「われ知る我を贖う者は活く。後の日に彼必ず地の上に立たん。わがこの皮、この身の朽ちはてん後、われ肉を離れて神を見ん。我自ら彼を見奉つらん。我が目、彼を見んに譏らぬ者の如くならじ。我が心これを望みて焦がる。」（ヨブ記一九・二五―二七）の如きは、既に贖罪主キリストを想見しているような驚くべき超越的希望の告白ではないか。

もしも信仰がなかったならば、つまりは、われわれの感覚をもってしてはつかみ得ない超感性的なものに対する信頼を欠くならば、われわれは自分の生涯の全目的を達成することができない。それは希望をもち得ないからである。「人間の好悪の感情にもとづく愛よりも、はるかに強い愛の力―それはコリント前書第十三章の愛―が必要であり、しかも、おそらくこうした愛の力こそ、生を創造し、また生を維持する要素であり、死をさえ克服し得る要素である。…このような信仰、このような愛をもってしても、〈神の民のためにまだ安息が残されている〉というたのしい希望がないならば、われわれの地上の生涯において、四方八方から押しよせてくるいろんな強大な障碍には耐え得ないであろう。」

これらのヒルティーの言葉を聞いていて今引用したいのはパウロの次の言葉である。「我ら信仰によって義とせられたれば、我々の主イエス・キリストにより、神に対して平安を得たり。また彼により、信仰によって、今、立つところの恩恵に入ることを得、神の栄光を望みて喜ぶな

り。然かのみならず、患難をも喜ぶ、そは患難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生ずと知ればなり、希望は恥を来らせず、我らに賜いたる聖霊によりて神の愛、われらの心に注げばなり。」（ロマ書五・一―五）

「永生についてわれわれが知っている最も信頼すべきことはキリストの復活である。それは歴史的に立証される証蹟である。しかも当時のたいていのいわゆる歴史的事実にもまして、立派に証明されている事実であるばかりか、哲学的にも道徳的にも要請されるところの一つのあかしである。…ゆえにキリストの復活は、一切の超越的希望の基礎であると同時に、一切の真のキリスト教の根底であり、また永久にそうである」

イエスが「永遠の生命」の実体であるということは、彼が罪なき人であったからである。罪の価は死なり、というパウロの告白の如く、イエスは罪なき実存をもって、死を経ずしていきなり天界に往生するはずであった。しかし彼の十字架の死は贖罪のためであったから、この死を突破して霊的生命に溢れて甦ったのは当然至極のことであった。

ところでヒルティーは、「滅すべからざる労働の力と労働の喜びこそ、永生の最も確実なしるしである」といって、神と共に働く実存に不滅の価値を置いている。この消息はさきのゲーテの考えと相通ずるものがある。

しかし永生に対する本当の希望は超越的なもので、さきにも触れたように、希望は天界から与えられるものである。そして希望の確証は贖罪の恩寵の現実にのぞむ聖霊である。聖霊が内在するところに永生がある。聖霊が活現するところに救済がある。聖霊こそ不滅の霊であるからである。聖国に対する希望の祈り、「聖国を来たらせたまえ」は、聖国が内在していなければ空念仏となる。聖国の内在とは、とりもなおさず聖霊の内住の事態である。即ち超越的な聖霊が内在的な聖霊となることに即して超越的な希望が内在的現実となる。超越的希望たる神の新天地の到来が、現にその核のすがたにおいてわが胸三寸の中に聖霊の現実として到来しているので、超越的希望が必ず実現するという確証をもっているわけである。ヒルティーはこのようには語っていないが、私はかく告白せざるを得ない。

さきにヒルティーは「キリストの復活は一切の超越的希望の基礎である」となしたが、その希望は当然、聖霊を受けることによって、現実となるということを私は今語ったわけである。キリストの十字架と復活と聖霊とは、きってもきれぬ三相一貫の関係にある。我々にとっては、キリストの十字架は信仰の土台、復活は希望の内実、聖霊は愛の現実である。即ち十字架・復活・聖霊は、正に信・望・愛の実体である。

永生がどのような状態であるか、様相であるか、そのようなことを想像することはむしろ徒らである。ある特種な霊視のカリスマを賜った人にはある程度示されもしよう。ヨハネの黙示録に

は、そこに霊視の事態が描かしめられてはいるが。それと雖も、将来終末の現実において果してそのように現われるかは別問題で、むしろ黙示録の内容は、最後の審判や新天新地の暗号の如き象徴である。

「この地上にて神の中にそれを見出だしたる者は
ふたたび彼の中にこそ見いださん。
まことの愛に結ばれたるものは
愛これをとこしえに結ぶを得ん。
信仰は見ることとならざるべからず、
而して希望の備えたるものは
しばしの時の流れの後に
確かなる受領とならん」

牧師　エフラー作

人生と信仰（『幸福』第三巻）

『幸福』はこの第三巻で終る。本巻は一、二つの幸福　二、信仰とは何か　三、「わが汝になさんとするは驚くべきことなり」　四、苦難を通しての勇気　五、現代の聖徒　六、われらは何をなすべきか　七、孫たちに幸あれ　八、高きをめざして――八つの論説から成る。そのうち最も大切な論説はここに取りあげた第二論説「信仰とは何か」である。第六「われら何をなすべきか」がその姉妹篇といって可いが、この第六論説の中で著者自らこう言っている、「単に機械的な、一般的・皮相的な信仰の代りに、真実な、個人的な信仰をおこすのが現代の重要な課題であり、それはこの『幸福』第三巻の唯一の存在理由でもある」と。そこでこの「信仰とは何か」に著者と共に取り組んで、第三巻を終りたいと思う。

信仰とは何か（Was ist Glaube?）

神の実在とか、キリストの受肉とかいうことを、自然科学的認識や哲学的思惟で証明しようとしたり、納得しようとするのは見当ちがいである。しかしそういう角度から知識人や学者は宗教の事態をもとりあつかう傾向があるので、彼らは自ら「信ずることは出来ない」と判断する。宗教はそれとは範疇も次元もちがうのである。パウロはそれを「眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思わざりし所なり」という旧約聖書の預言者イザヤの言を引いて語っている。パウロは更につづけて、「神これを御霊によりてあらわし給えり。御霊はすべてのことを究め、神の深きところまで究むればなり。…」（コリント前書二・四―一五参照）。聖書の語る現実は神的ドラマの現実で、神の御霊の次元を体受するまではつかめない。そういう次元であるから信仰によらなければそこへ入ってゆくことは出来ない。信仰ということよりも信入といった方が本当は適切である。

ヒルティーが、この論説を書いていたのは、正に十九世紀の幕が降りようとしていたときで、

本当の信仰がいかに乏しくなって来たかをしきりに嘆き、二十世紀は果して如何と憂いている。

信仰は認識でも推測でも理解でもない。「信じようとする意志！」そこから信仰は始まる。キリストは断然たる言葉を放った、「為し得ばと言うか。信ずる者には、凡てのこと成し得らるるなり」（マルコ九・二三）。信仰の対象は絶対者である。無条件者である。それに全存在で信じかかれば、そこにおどろくべき霊能が臨む。そういう呼吸をキリストのこの言葉があらわしているのである。

「キリスト教はすでに長いあいだ、あまりにも単なる〈教説〉と化してしまい、無数の人々はキリスト教の実力を見ることがないために、その教説にもう耳を傾けようとしない。人間は、百聞するよりも一見したことを信ずるからである。」ヒルティーのこの言は既に四分の三世紀を経ている今日いよいよもってその通りである。今や原始キリスト教に、使徒的信仰の次元に、帰入することを要する。世界の諸処で、そして日本においても、その動きが見え初めている。もうカトリックのプロテスタントの、といっている時期ではない。信仰がキリストに直結する霊的な飛躍をしなければならない。

聖書は“The Book”であるよりもむしろ端的に私は申したい、“The Drama”であると。劇文学としては成るほどシェイクスピアは世界最高であろう。しかしものすごい霊的な次元の内容をもったドラマとして聖書はけたちがいである。それゆえに神劇（オラトリオ）、劇中の劇、と

申したい。だから信仰は、この聖書という劇中に自分を投身して身読することによって直ちにその現実に入り、直ちにその気合で日常生活で行動する、これが信仰である。キリストが弟子たちに「我に従へ」と言ったとき、弟子たちは「直ちに従った」これが信仰で、信仰は実は信、交、信行と書くべき内実なのである。信と行とが一如の現実で、どんなにその行が破れたすがたであろうと、それは問題ではない。信仰それ自身が内的な烈しい行為なのである。

ここにルターの『ロマ書の序文』の中から著しい言葉を引用しよう。「信仰は我々の中における神的なわざで、これは我々を変革し、新たに神から生れしめ（ヨハネ一・一三）、それで旧きアダム（性来の我れ）を殺し、我々をその心、情緒、思考、更にいろいろな能力において、全く別な人間と成し、且つまた聖霊をも共にもたらす神的なわざである。おお、信仰とは何という活き活きとした、活動的な、行為的な力強い事態ではないか。それゆえ、信仰は間断なく善き行為をしないではいられないのである。」いかにもルターらしい力強い言葉である。

プロテスタント信者が「信仰によって義とされる」といった信条に甘んじているような在り方では空念仏と同じである。ゲーテも当時のキリスト教が既に観念化した「言葉と信仰のキリスト教」となっているのを見て、もっと「心情と行為（Gesinung und Tat）のキリスト教」となりたいものであると言っている。

ヒルティーも「モーゼ、パウロ、フランチェスコ、ルター、ウェスレー」等の名を挙げて、力

強いキリスト教でなければダメだといっている。使徒ペトロ、パウロ等の信仰が、いかに実存的であったかは、使徒行伝に歴然たり、である。これみな聖霊の力を受けている信仰の姿だからである。「神の国は言葉にあらず力にあり」とは正にパウロの言葉であった。天来の御霊の力を受けている信仰の相においては、その人の天賦の技能や才能がいよいよ力を発揮し、またひとを助けたり救ったりする愛の力としてはたらく。

ヒルティーは言う「およそこの謎のような人生を渡ってゆくためには、大別して四つの道しかない。宿命論、克己主義、利己主義および信仰である。…第一の道は無感覚にし、第二の道は冷酷にし、第三の道は粗悪にする。第四の道だけが地上で凡そあり得る限りの善にして幸なるものである」と。

そして信仰の健全な過程としてヒルティーは、まず「善の勝利」を信ずることが、人生の戦で極めて大切であることを主張している。次にはそのような善の勝利の背後の根拠として神への信仰が湧く。そして神への信仰の中心としてキリストへの信仰が生ずる、となしている。これに反して「善を根本原則として、善そのものである聖霊を事実として力として信じようとしない人、あるいは、根本からそれに反抗の態度をとる人には、キリストの言葉によれば、弁解の余地がない。」すなわち「聖霊に抗う罪はゆるされない」とキリストは言っているのである。

「キリスト教の信仰の核心は、キリストの復活である」とヒルティーは強く言っている。「しか

も、この歴史的事実が本来キリスト教のすべてであった。使徒たちにとって、もしキリストが十字架で死に、墓に葬られたままで終ってしまったのであれば、世の人にキリスト教を宣べ伝える勇気を彼らは決して持つことができなかったであろう。」正にその通りである。復活のキリストの「証人」であることをペテロを筆頭に、使徒たちは幾度か宣言している。パウロもコリント前書第十五章でそのことを強調している。

ヒルティーは言う、「本来われわれの唯一本当の関心事である現実の世界歴史において、キリストの十字架は善の最も恐るべき敗北であり、キリストの復活は善の最大の勝利である」と。しかし、キリストは十字架を贖罪の死としてこれを自ら受けた。イザヤ書第五十三章の予言を聖意として特にゲッセマネの祈りにおいて受けとった。どん底的な敗北のすがたの十字架は実は最大の愛の担いの姿である。最大の勇者の逆説的な敗北の相であることを見そこなってはならない。十字架が単にイエスという宗教的人物の殉教の死であったとするなら、イエスの復活は模範としての復活となり、我々に生命を与える関わりはもたなくなる。しかし、キリストの十字架と復活は、贖罪と永遠の生命の事実として、我々に切っても切ることの出来ない事実として関わりをもっているものである。そのようなのっぴきならぬ救済の関わりとして全存在的に身受することをこそ信仰というのである。

パウロが、「私はキリストと共に十字架された。私はもう生きていない。キリストが私の中で

生きている。（すなわち）私を愛して私のために自分自身を与えて下さった神の子への信仰に在って私は生きているのだ」（ガラテヤ二・二〇私訳）、と告白しているのが正にこのことである。パウロのこの言で、「キリストが私の中で生きている」とはどういうことか。それはキリストの聖霊が内在していることにほかならない。それを「みたまのキリスト」といってもさしつかえない。要するに、十字架と復活と聖霊は三相一貫している。このことは前にも述べた。一般にキリスト教がなぜ観念化したかというと、こういう啓示の事実を現実として本当に体受していないからである。キリスト教の「教」がつまづきなのである。「教」えではない。むしろ「道」である。「われは道なり、生命なり、真理なり」というキリストの告白の通りである。キリスト道である。日本人は正にこの「道」の民ではないか。茶道、華道、書道、弓道、剣道、柔道という伝統的精神の角度からキリストを受けるところにキリスト道がある。

「キリストが、山を移すことができ、どんなことも不可能ではないと言われた力ある信仰、キリスト自身が持たれた信仰は、生れつきの自己愛をことごとく放棄し、自分の意志を完全に神に引き渡すことによって、はじめて生ずる。これこそがその信仰に到る唯一の道である。この点を見失ってはならない」とヒルティーがずばりと言ってくれている。これは信仰の胸突八丁である。しかしこれを突破しないと聖書の現実はつかめない。預言者も使徒たちもそれぞれの在り方でここを突破している。

仏教でも同じことである。それが何宗であろうと宗教の本当の次元は没我にあるからである。自己突破である。さきのパウロの告白も実はその突破された現実から出ている告白である。「私はキリストと共に十字架された」がそれである。ヒルティーはこの転換の事態に「決断」とか「勇気」とかいうことを語っているが、それだけでは実はなかなかできるものではない。むしろ深い祈りが不可欠である。十字架・復活・聖霊の本願的啓示的事実を、現実として体受するにはどうしても深い祈りの態勢が必要である。ある人は泌み入る如く、ある人は波状的に、ある人は電撃的に自己突破をさせられる。しかもこのことにおいて人間は死に到るまで劇的構造、矛盾構造の中にいる。そうであっても聖霊がひとたび臨んだかぎり、必ずやこの三日月的地上の存在は満月になることを約束された確実性をもっている。それが福音的に言えば恩恵による、仏教的に言えば本願による、信仰の現実である。

あの温顔のヒルティーが更にこう言っている、「真の無欠の信仰というのは、火の燃える炉の中に投げ込まれたあの三人の信仰にほかならない。神は、どのような方法をとられても、救い出し得給う。そしてもしそれをなし給わなくても、やはりわれわれはこの世の金の偶像を拝まない（ダニエル三・一七・一八）。このことが起れば、どのような人生、最も単純な人生においても、多くの驚くべきことが体験され、やがて眼に見えない世界を、もはや疑うことができなくなるであろう。」

実存的体験なきところに信仰は空念仏となる。信仰するとは本当に生きることである。体験から語っているヒルティーのこれらの言葉は深く味わうべきである。生活を通して然りと言うべきである。

「神の恩恵、召命、救済、聖霊の賦与、これなしには、一切の人間の道徳的知恵に凡庸さが附着し、その実践は不安さをまぬがれない」。ヒルティーのこんな言葉は、日本のような、ただ民主主義をお題目にしているような現実、道徳すらも尊厳を失っている現実には別世界のようにひびくでもあろう。筆者も嘆息せざるを得ない。日本人の最大の問題はたましいの世界に心の眼を向けることである。

ヒルティーの人間観——晩年の著作をめぐって

地上の天国（『眠られぬ夜のために』上巻 „Für schlaflose Nächte“ I）

『眠られぬ夜のために』は、上、下二巻で、いずれも一年、三六五日に区分されていて、宗教的随想集といった性質のものである。ここに紹介する上巻は、一九〇一年、今世紀の夜明けに初版が出た。著者六十八歳のときである。

本巻は筆者も座右において愛読している書の一つであるが、かつて筆者がこれを翻訳しているので（『ヒルティー著作集第四巻、眠られぬ夜のために』〔一〕白水社版）今回の引用文はそれによることとする。

その訳書の解説の中でこう書いた、「彼がいかにその深遠な信仰、円熟した人格、富豊な人生体験、浩瀚な学識、卓抜なる見識などをもって多面多彩に、縦横無碍に、この三百六十五の短文

を通して語りかけてくるか。人生万般のこと、人間一切のなやみに対して彼はたのもしい権威と深い愛をもって語ってくれる。」

大方の読者は—筆者もそうであるが—別に眠られない夜があるわけでないであろうが、著者の言葉から、なぐさめや、はげましや、道しるべや、さまざまな注意や心がけなどを承ることが楽しいから、眠りも更に安らか、目覚めも更にさわやか、というわけであろう。何よりの精神生活の糧である。

まづ上巻の三六五の随想から、ほんの一部分を紹介し、筆者の所感を述べさせていただく。

一月一日

「つねに偉大な思想に生き、末梢的なことは軽視するようにつとめよ。これは、一般に言って、人生の多くの苦難と悲哀を最もたやすく乗りこえさせる道である。最大で同時に一般に最も解り易い思想は、今やキリスト教の形における神信仰である。

しかしまた昔から今まで、いじけた余りにも狭いキリスト教がある。これはキリストの本質に、教説に、いささかも、あるいは全くは適合しないものであって、そのためにすでに多くの気高いまた教養の高い人々をキリストの教説から遠ざけてしまったのである。

もしあなたが人生の幸福を心がけているならば、神学や教会主義をもってキリスト教に代

えてはならない。まさにあなた自らキリスト教をその源泉に即して求めよ。すなわち福音書の中に、しかもその中でも特にキリスト自身の言説の中に求めよ。実にキリストの言説はどんな哲学にもこれに較ぶべきものを見ない。」

元日劈頭の言葉として実に適切な内容と思う。真に「偉大な思想」には、何らかの精神（霊）的な力がある。それを受けそこなうと、いくら「偉大な思想」に接してもダメである。キリストは「わが言葉は霊なり、生命なり」と言った。キリストの言葉は実は思想以上のものである。キリストの言葉を観念的に受けとる限り、いつまで経ってもその真義はつかめない。言葉という現象を通して、それが発せられている根源現実、根源の霊的人格の中に信じ入る質の受け方をするとき、キリストの言葉が驚くべき生命的なものであることを体感体受するようになる。

「神学」（Theologie）や「教会主義」（Kirchlichkeit）が生きた信仰を妨げるものであることはヒルティーが注意している通りである。ゲーテもそのことを『ファウスト』の中でなじっている。勿論、神学も、言の深い意味においての神学ならば、信仰の羅針盤たる役割を果す重さをもっているといえるから、大切な学問であることは言うまでもない。「教会主義」とヒルティーがいっているのは、教会の組織や制度や信条や祭儀などにとらわれた在り方のことで、大切な生命的な在り方に硬化現象を起こさせるものである。「教会」とはそもそも本質的にはどういうものか、ということを同じくスイスの現代神学者エミール・ブルンナーが『教会の誤解』（Emil Brunner:

Das Missverständnis der Kirche) という本で解明しているが、一般の教会が、本来あるべき教会―聖霊と聖言による信仰者の人格共同体―のすがたから逸脱して、いわゆる「教会主義」的存在となっているために、ヒルティーも攻撃したわけである。ヒルティーは、しかし、そうだからといって教会はダメと否定しているのではない。教会が「教会主義」的な教会になったらダメだというのである。わが国では、「無教会主義」的無教会となったらダメだと申したいわけである。

大切なことは「自らキリスト教をその源泉に即して求めよ。」キリスト教の原点に帰入することである。それは正に「福音書のキリスト自身の言説」に直接体あたりすることである。私に言わせると、言説のみでなく、キリストの言動一切である。キリストという神の現象体そのものの実存に帰入することである。信仰とはそのような劇的な体あたりで、福音書のキリストに体あたりして降参すること、キリストを体受し、キリストに帰一してゆくことにある。パウロやヨハネやペテロは、そのような質においてキリストを信受した。ヒルティーがここに唱えているこころもそういうところにあると思う。

一月十三日

「地上の天国は、人間が神と絶えず想いを一つにすることのほか、何ものをも最早切願しないときにのみ始まる。来るべき天国も、この他の何ものでもあり得ない。しかも、人間がこ

の心情なくしては、そのような天国に適い、そこに安住できようとは、理性的にも全く同様に認められ得ない」。

神意と一つになるにはどうしたらいいか。自分をあるがままキリストの中に投げ入れることである。どこから投げ入れるか。十字架という門を通してである。おのれを棄てる、とは、贖主キリストの中に棄てることである。かくて我意が棄てられると神意なる本願が入ってくるから、「神と想いを一つにする」ということになる。絶えずそのようになるのは勿論容易なことではないが、祈り心がそれへの道である。そこに「地上の天国」が現ずる。そしてこの天国はつねに隣人にわけ与えられなければならない。神意は必ず深い愛に基いているから、本願の愛が隣人に流れてゆく。かくて本当の「地上の天国」が展開してゆく。

二月七日

「福音書が聖霊と名づける霊を、おのが生活に獲得することのみが重要である。そうすれば、この霊がそれから先の一切をなす」。

実に断然たる言で、私は満腔の然りを以てヒルティーのこの言に応えたい。私は二十歳のときにキリスト教に入信したが、永いこと「無教会」の流れの中にいた。しかしどうも何か欠けている。信仰のすじはいいのだが、どうも信仰が硬い。本当の力、本当の愛、本当の生命からどうもずれている。頭や心ではわかっているが、何か突破されていない。十字架のあがないというが、

本当に自分が十字架されていない。それは祈りが足りないためであることがわかった。キリストの十字架の下における棄身の祈りを体験して、俄然突破が来た。突破とは何か。聖霊が私を突破し、突入して来たのである。これが聖霊のバプテスマであった。全身が霊撃を受けてしびれた。合掌の手が離れない。このようなみ霊のバプテスマの最も強烈なものをパウロが受けた。それは使徒行伝に三度告白されてある。聖霊に突破された私自身は有難や八方破れである。

聖霊は何ものとも替えられない。これは私にとっても、存在や実存の原動力、原始力であるからである。聖書がそれ以来楽に読めるようになった。福音書のキリストが本当に力となって来た。ありがたくて仕方がない。聖霊のバプテスマを受けたのが五十歳のときであるから、それから二十一年（一九七五年）が経った。相対的人間小池がどうであろうと、そんなことと関わりなく、しかも逆説的には深く関わりつつ、聖霊に生きている隠れたる私は、誰が何と言うとも、正に霊止（ひと）なる小池として天国人である。これは絶対恩寵の現実で、いつわりなき告白である。これは救済の事実の告白のほかの何ものでもないからである。

爾来、使徒的信仰、福音の原始に、原点に帰入せよ、と叫んでいる。世々のまことのキリスト者は皆聖霊の人であった。キリスト教史の底流をなすものは聖霊の流れである。この地下水は何ものもこれを犯すことが出来ない。聖霊はまた火である。この霊火はいかなるこの世のあらしもこれを消すことができない。聖霊は神・キリストの霊である。一切を蔽い、一切を包み、一切に

滲透する力をもった実に自由自在な霊である。

二月二十五日

「上を仰ぎみる純一で全く正直な愛のまなざしは、どんな美しい形式的な祈りよりも、これを受けて下さる者にとって、価値があることは確かである。我々もまた小さな子の、然り、また小さな動物さえもの、そういう印象深いまなざしを、あらゆる美辞麗句よりも愛する」。

本当にそうだ。イエスが「汝ら幼児の如くならでは天国に入る能わず」と喝破されたのは、幼児の純真な心に、まなざしに神が宿るからである。幼児には国境がない。どこの国の幼児を見ても可愛い。イデオロギー以前の世界であるからである。大人がもう一度超イデオロギーの世界に入って、そこの神霊の気を吸ったら、万人は愛の世界を展開することになり、そのときこそ戦争はやむであろう。平和平和などといって、がなり立てることはなくなるであろう。平安がたましいに臨んでこそ、世は平和をさわがなくとも平和になってゆくであろう。いと小さき存在をあなどる者は地獄（ゲヘナ）に堕ちてゆくことになる。小さき存在は守護天使に護られている。

七月十三日

「最大の仕事も、それを分割し、いつもただ一番手近かなものだけを眼中に置けば、小さな

ものになる。」

これは本書最短の言。仕事の秘訣ズバリである。

九月二十七日

「人間との交際、然り、さらには神のあらゆる被造物との交渉における唯一の正しい原則は、何ものをも徒らに苦しめず、あらゆるものに同情をよせ、いかなるものにも安けさと生の喜びを与え、しかもまた、そのことが自分の本分をみたし、単に生をむさぼることのないようにもとめることこれである。」

こういう宗教的な心根からの良識と生活態度が日本にはいかに乏しいことであろう。

十月七日

「我ら一たび全く愛の国に踏み入らんか、この世がどんなに欠けたものであろうとも、なお此処は美しく豊かなものとなる。この世はもっぱら愛を生きるための機会から成り立っているからである。」

この極めて短い言葉にヒルティーのハートが輝いている。珠玉の一言である。然り、愛の国は、愛を生きる人、人助けをする人のまわりに展開する。

天恵の諸力（『眠られぬ夜のために』下巻）

この『眠られぬ夜のために』下巻は、著者の令嬢メンタ・ヒルティーの編集によるもので、上巻出版よりはるかにおくれて一九一九年に刊行された。一九〇九年著者歿後十年のことである。編者はこう語っている、「神の近くにあって労働する――これのみが、おそらく今ようやく我々がその真っただ中にあると思われるこの〔第一次〕大戦の結果が果してどうなるかという不安を乗り越える力をあたえてくれるのです。

それとも私たちはすでに、あらゆる事物の社会的変革という、太陽のもとにまだ一度も存在しなかったなにものかを目前にひかえている午後のおそい時刻に生きているのでしょうか。……」

メンタ・ヒルティーのこれらの言葉は、奇しくも現在の世界、とりわけ日本の前途に対してある暗示的な、予言的なひびきをもっている。

二十一世紀は現状のままでは迎えられそうもない終末的な二十世紀の末期にさしかかっているからである。

一月二日

「われわれはつねに神の手の中にあったし、いつまでもそうである。このように考えるなら、われわれが死とよぶこの滞在地の変更は、なんら重大ではなく、おそろしいものではなくなる。」

現世における宗教的道徳的実存において、神の手の中に在るという実感をもって生きているなら、死は本質的な問題でなくなる。神の手の中にあるという神秘的現実は永遠性をもっているからである。

一月六日

「どんな人も銘々祝福の泉（Segensquelle）とならねばならない。一方からは神の祝福が、個性（Eigenheit）によってさまたげられることは少しもなく、流れいることができ、さらにまた自分と接触するすべての人にむかって流れ出てゆく。このことが果されない限り、どんな人も一生の仕事を大部分やりそこなったことになる。」

ヒルティーが「幸福」（Glück）を主題としながら、「祝福」（Segen）を特に問題としていることを見そこなってはならない。即ち、実は祝福（ゼーゲン）が土台となっていないところには、本

当の幸福（グリュック）がないということである。即ち、神の祝福を受け、隣人を祝福しないところに幸福はない。ところでこの祝福という訳語は、神からのときは恵福と訳したい。ちょうどそれは、神とのやわらぎの関係を平和といわず、平安というべきであるように。

一月九日

「愛があればあらゆるものを克服することができる。愛がなければ、一生のあいだおのれ自身や他人と戦争状態をつづけることになり、結局疲労し、ついには厭世、あるいは人間憎悪にさえなりかねない。しかし愛はつねに、最初は困難な決意であり、つぎには、それができるようになるまで、神の手に導かれて長く絶えず学ぶことであって、我々はこの愛を自然に、あるいは生まれながらに持っているものではない。人間が愛をついに所有するとき、他のなにものにもまして、愛はその人間に力をあたえてくれるばかりか、知力と忍耐をもあたえてくれる。なぜなら愛は永遠の存在と生命の一部であり、あらゆる地上のものとちがって老化することがないからだ。」

極めて注目すべき言葉の一つである。ある意味でヒルティーの本質をここに見る、といってよいと思う。このような愛は聖霊のバプテスマを受けると泉の如く湧いて尽きないことを発見するであろう。人間の罪や性癖がその泉の口をふさぐことはあろう。しかし、わるかったと平伏すと

きには、愛の泉はそのふさいだ石を吹き飛ばすのである。

ヒルティーが別なところで愛を語っている際にこう言っている、「我々の内部からのみ生ずることは、力に欠け長つづきしないが、神の霊と結ばれるとき、その霊が我々の内部にはたらいてひき起すもの、それこそがよく、それのみが生きる力をもったものである」（一月十六日）。

一月二十日

「真のキリスト教には雄大荘厳なものがある。しかしキリスト者や、特にプロテスタント教会の牧師や宣教師のなかには、そのことをほんとうに洞察も経験もしていない者がたくさんある。……ルターやメランヒトンやカルヴァンに見られるよりももっとこころのひろいキリスト教というものが、いまこそようやくあらわれているのだ。」

まことに同感である。教義や信条に厳密になりすぎたり、神学に重点がおかれすぎたり、聖書釈義をことさらにしすぎたりすると、宗教のもつ深い神秘的奥義が見えなくなり、狭隘になる。その点内村鑑三は雄大荘厳なるキリスト教に対して心眼のひらかれていた人物であった。

高大深遠な宗教性のことになると、むしろ東西の偉大な芸術家に学ぶべきものが少なからずある。

二月十一日

「正統信仰（オーソドックス）が人生の目的、目標ではなく、この点は宗教改革時代もひどい思いちがいをしている。そうではなく善良になること、できるだけ実際に神に近くなることを果すことこそ目標である。しかし真のキリスト教はまぎれもなく、そこにいたる一番近い、最上の、それだけが真に神ののぞみどおりの、歴史的にあたえられた道である。……われわれの思想体系などは神にとってなんら障害ではなく、神の霊の息吹きに触れれば、ひとたまりもなく破れ去る蜘蛛の巣にすぎない。」

ヒルティーは神を身近かに感じて生きていた。そこに人間の善良さ、健全性がおのずから成ってゆく。神の愛が生命の源として体感されてゆく。人間の思想体系がどうのこうのではない。「われ思う故にわれ在り」といった人本的思想からくる体系ではない。そんなものは活ける神の霊の息吹きの前には破れ去る蜘蛛の巣にもひとしい、とは何たる痛快な言葉か。温厚なヒルティーのたましいの中には烈々たるものがやはり宿っている。かく言ったところでヒルティーが信仰に根ざしている重厚な神学や哲学を嘲っているなどと誤解してはならない。

二月十二日

「最初の使徒時代の天恵の諸力はなお確かに存在する。それは一時期さかんになった唯物論

的時代思潮のために多少後退しただけのことにすぎない。

この力を有する人々はしかし、それをきわめてよく知っており、他の人々も本能的に彼らにそういう力があることを感じ、思いあやまることがない。ただこういう力はぜひとも用いられねばならず、いたずらに存在するだけであってはならない。それによって諸君の希望するような教会の革新も生ずるので、教会会議やさまざまな会議、諸結社や小教会などによって生じはしないだろう。多数の人間のなかにこういう霊の力がなければ、なにごとも無益なものだ。

あなたがこの活力を区別しようと思うならば、この力の最上のものは、聴きとどけられる祈りである。なぜならそれは他の諸力、すなわち、病者を癒やし、罪をゆるし、未来を予算する力をふくむからである、これらの力も祈りによって神からのみさずけられるもので、自分自身のただ一度かぎりの力によって得られるものでは全然ない。」

ヒルティーは使徒行伝やパウロの手紙などに書かれている現実をそのまま卒直に受けとめている。

「天恵の諸力」と訳されている言葉は（die Gaben）という簡単なドイツ語であるが、これは日本訳聖書では「たまもの」と訳されている言葉で、ギリシャ語ではカリスマ（又はカリスマータ）で、天与の霊的能力のことである。

現代の教会ではこういうカリスマ的霊能が殆どはたらかない。使徒行伝の現実、換言するならば、使徒的信仰の現実が二千年前と同質的に現前しているし、そうであるべきだ、とヒルティーは断乎として言い放っている。これは筆者も全く同感である。「聖霊のたまもの」といって、パウロがコリント前書第十二章と第十四章で詳しく述べている事態がこれで、そういう霊的な力が現代のキリスト教界に稀薄になっているのは、要するに一般的に申して、聖霊のバプテスマを本当に体験していないことに起因している。

はなしは少しはずれるが、近頃「超能力」ということが実験されているが、念じ入る次元において、あのようなことが起るのは何も疑うに及ばない。こういう現象を疑うのは、科学的実験やそういう思惟方式だけが真理性をもつように思っている現代人のむしろ霊性の低下を自ら暴露しているにすぎない。

霊的能力こそ実に多様で、驚くべきものである。聖書の現実は旧約聖書においても新約聖書においても、むしろ霊的次元がその現実であって、祈り心をもって全身的にうちこんでゆかない限り、聖書の現実に本当に共感することは出来ないのである。私自身、聖霊のバプテスマを体験したあととそれ以前とでは、ハッキリ聖書の把握の仕方がちがっていることを告白することができる。聖書には形容詞がないことがわかった。聖書はまだまだ伝えようとしている霊的次元を伝え得ないで呻き叫んでいるようなものである。文字や言葉の奥のひびきや現実に触れると、キリス

トが「わが言葉は霊なり、生命なり」と言っていることがうなづけるのである。解釈がどうのこうのと単なる言葉のせんさくで聖書の現実がつかめるはずはない。

ヒルティーも更にこう言っている、「これらの霊的能力を用いなくても多少うまくいけるとおもうような人は、思いちがいも甚しい。また何らか他の生の財貨をこれらの力と同等にみなしたり、これらの力より好む人でも同じことだ。」

問題は実に聖霊のことである。聖霊を受けて、それから展開することろのカリスマ的能力がひとによってさまざまであることはパウロが語っている通りである。大切なのはどこまでも聖霊それ自体である。いわゆる超能力は、念力的な力としてあるし、また悪霊的な魔力もあるから、そういう霊的現象を追及することはむしろつつしむべきである。聖霊は十字架の贖罪を受けるところに臨む霊であって、キリストの十字架と聖霊をわけてはならない。

まことの信仰の現実は、観念でも御利益でも霊力追求でもない。十字架と復活の生命と聖霊が現実であることのほかの何ものでもない。そしてこの聖霊から展開する霊的能力は愛のはたらきをなすことのほかの何ものでもない。その愛のはたらきは、精神的、肉体的な欠陥を癒やすはたらきともなり、また社会的な諸現実における人だすけとなっていろいろな公益をいとなむであろう。霊的信仰の戦とはそういう愛のはたらきをいう。この愛は深く義を蔵している。だから、きびしい愛でもあり、深い執り成しの愛でもある。何とも名状しがたいものである。

三月一日

「ある人間の真の偉大さは、彼が善の、あるいは―もっとはっきりいえば―彼という人間を通じて語りまた振る舞う神の霊の、完全な道具かどうかという点にある。その人がこのことをみずから悟れば悟るほど、彼はますます確実におのれの道を最後まで歩み、ますます多くのことをなし遂げるであろう。たとい世間が彼を全然理解せず、あるいは部分的に、徐々にしか理解しないであろうとも、そんなことは問題ではなく、それどころか、きわめて有能な人々は大抵死んでからようやく理解されている。」

ヒルティー自身そういうたぐいの人であったと思われる。聖名にあってヒルティーを心から尊敬する。

到底書ききれないことは各項の私の嘆息である。『眠られぬ夜のために』上下二巻、その味は限りない。

詩人論・教育論（『書翰集』《BRIEFE》）

この『書翰集』は一九〇三年に出版されたもので、書翰の形態をとった四篇の論説集である。前の二篇は女性に宛てたもの、後の二篇は男性に宛てたもので、私信の形式ではあるが、内容は公信で、読者各自に語られているものとして読まるべきものである。

その第一篇は、「人間を育てる芸術」（教育の仕方）で、実生活において親たる者がいかに子弟の教育に当るべきかの道を諄々と説いたもの。今の日本の家庭教育にあたっている親の必読の文字と申してよい。ヒルティーの教養の豊かさがあふれている。

第二篇は「友情論」で、交友のこと、結婚のこと、神との交りのことなど自由に語られている。ヒルティーは本当に実生活の深い智慧者である。言うまでもなくその秘訣は聖書の真理が身

についているからである。

第三篇は「ダンテ」で、ヒルティーが聖書を除いて最も愛読したのはダンテであった。同様な意味においてグラッドストーンがホーマー研究家であったように。ダンテをつかんでいる点において、いわゆるダンテ研究家もヒルティーにはかなわない。

第四篇は「神の国はどのようにして来るか」で、人間の歴史がいかに誤謬や欠陥に満ちたものか、人本主義的な現代精神の危機性等に触れ、終末論的「神の国」の真義を説いている。

ところで本書の過半が第一篇の「教育」論で、最も重要なものであるが、まづ第三篇の「ダンテ」を先にとりあげることにした。次に「教育」論をとりあつかうことにしたいと思っている。それでこの『書翰集』は終ることにする。

「ダンテ」《DANTE》(1265—1321)

ゲーテ学者の一権威グンドルフは世界の三大詩人としてシェクスピアとダンテとゲーテを挙げているが、劇詩人としてシェクスピアが世界第一であることは、何びとも異論のないところであ

る。次に言の最も広汎な意味における精神文化の象徴的存在として、ゲーテの右に出づる者がないことも識者の認めるところと思う。さてダンテはどういう人物か。中世に左脚をとどめ、近世に右脚を踏み込んだ巨人に譬うべきか。旧き世界と新しき世界に架橋して雲表に頭頂をもつ虹霓に譬うべきか。高邁なる宗教性と深刻なる人間性を具有している彼の人格は独一なものといってよいと思う。

ともあれ、この三大詩人は驚歎措く能わざる形態と内容をもった詩的宝庫である。夫々比較を絶するものである。ゲーテを代表するものは『ファウスト』であり、ダンテは『神曲』そのものであるといって過言でないわけである。私自身はドイツ語を専攻してゲーテを相手としていることを有難い運命と思っているが、もしそうでなかったらイタリア語をやってダンテと取っ組んでいたであろう。比較を絶するがゆえにこそ、私はゲーテを読めばゲーテとなり、ダンテを読めばダンテとなる、といった具合に深い親しみを感じている。こんな小さい私にどうしてそういうことが可能かというと、キリストの無量光をもってどれをも読むことができるからである。人間の型からいうと、ラファエル、ゲーテ、モーツアルト。これに対してダンテ、ミケランジェロ、レンブラント、ベートーヴェン、ブラウニング、ロダン。前者は叙情的調和型、後者は劇的矛盾型といったらよいだろう。しかし、ゲーテもダンテも宇宙的な偉大な魂だから、決してある類型的な判断を以て限定することはゆるされない。もう一つレオナルド、バッハ、ブレイクといった天

的神秘的な型もあろう。

さてヒルティーの「ダンテ」案内の一端をこれから御紹介することにしよう。これは某ドクターがヒルティーにダンテを読む心得をたづねたことに対する返答なのである。彼はダンテ文献ならいくらでも教えてあげることができるが、文献をあさってみたところで却て途方に暮れてしまうから、大切な心得は、「聖書に対すると同様、ダンテに対しても、銘々が自分で手引きをつくらねばならない」といっている。ダンテを読むに最も適当な年輩は、ダンテの『神曲』の起句が語っているような、「人生の旅路半ば」即ち三十五歳前後である、となしている。しかし大学生時代から喰いついて結構だと思う。ダンテが博識だからといって、読者もそうでなければというものでは勿論ない。

「芸術は天才的なものなので、同質の、直観的把握によってのみ理解されるものです。芸術家自身は、決して学者めいた熟考によって仕事をするものではない。…事物の尺度は芸術家自身のうちにあり、事物を絶えず霊的な眼で見ています。……詩的霊感、――それは大方全く無意識のうちに正鵠を得、的確に正しいことを書きあげてゆく精霊（ガイスト）のうながしと閃きで、これがなければ、真正な詩人も預言者も存在し得ないのですが、――学者というものはそのような霊感について正しい観念を全く持っていません。」

ヒルティーは一流の法学者であったが、詩に対する深い洞察と理解をもっていたことは、右の言葉を見ても瞭かである。

彼はまたいわゆる「ダンテ通」(Dantekenner)になったり、熱狂的な「ダンテ屋」(Dantist)になるな、と警告している。

学識方面の詳註のある『神曲』としては、スカルタッツィーニのもの(原文)とフィラレーテス(独訳)のものを推挙している。更に詳しく知るためにはクラウス(Kraus)の『ダンテ、その生涯とその作品』(独文)及びスカルタッツィーニの『ダンテ辞典』を勧めている。私もこれらを手にしたことがあるが、いづれも実にすばらしい本である。ヒルティーはイタリア語が堪能で、原詩の中でいかなる翻訳も到底あらわし得ない箇所を引用するときは原詩のまま掲げている。ダンテと取っ組みたいと思う若き読者は是非イタリア語を勉強されるが好い。

「ダンテは、聖書と同様、自分で読まなければならない本であり、何度もくりかえして静かに思いをひそめることによってのみ、しだいしだいに入って行けるものなのです。人間にあたえられる最高の祝福は、先頭を切って先駆けしたり、あるいはあとを追うことは許しても、代理はきかないものなのです。」

全くその通りだ。どんな勉強でも虎の巻をたよりにしているような「あんちょく」なやり方では本当の実力はつかない。自分で辞典をコツコツ索くとか、自分で工夫して内容を整理すると

か、自分で図書館に通って参考書を発見するとかして、積みあげでゆく心がけが大切である。

世紀末的乃至終末的な様相の現代においてこそダンテの『神曲』の三界の中、「地獄」、「煉獄」の両界はいよいよその真実性、現実性をもって迫ってくるではないか。その第三の「天国」への「高貴な生活」の指標として、道案内としてダンテは親しき先導者となってくれよう。ダンテは人間のあらゆる現実の直視者、警告者、共感者、同情者、忠言者、激励者等になってくれる。ヒルティーはこう言っている「あなたは、まずこの詩篇の偉大な文学的美に打たれ、ひきよせられて、おそらくは結局、次のことをさとられるに至るでしょう。すなわち、真実に〈神に仕える〉ことが、あらゆる人生問題の唯一の解決策であるということです。」ヒルティーは若い真面目な読者に、極めて博識な註解者の一人なるトマセオの次の詩句を引用してダンテに親しむことを勧めている。

「ダンテを読むは、これ一つの義務なり。
そは反復熟読を要す。
そを感じ得るは偉大さの徴候なり。」

シェクスピアは無的な実存で、作品を通してこれがシェクスピアの本質である、といったものは出て来ない。そういう意味でシェクスピアは即世界的宇宙的といえよう。ダンテの『神曲』は彼の時代の立体的反映と彼の全生涯の告白である。そういう極めて具体的な現実を通して世界と

宇宙が、歴史と神の国が投影しているのである。そういう角度においてゲーテはダンテと軌を同じうしている。

ヒルティーは、ダンテの生涯とその時代について語っているが、それをここに紹介することは到底スペイスがゆるさない。むしろその中の著しい言葉を引用するにとどめる。「真の文学は体験によってのみ生れるものであり、そして、これは絶体的にそう言いきってよいことですが、偉大な様式の文学は、ただ大きな外面的苦難、あるいは大きな精神的苦悩を通してのみ生れてきます。この苦悩なしに詩的感動の真の源泉は開かれることなく、真正な芸術の天国に行きつくためには、詩人みづからが、地獄と煉獄とを通過している必要があります。」

ダンテの外的苦難は、フィオレンツァ市の内紛たるゲルフォ党とギベルリノ党の闘争の渦中に身を置かざるを得なくなったことで、それが更に黒白両党の紛争に展開し、政争のみならず道義的頽廃もひどく、いづれの党にも与し得ない義人ダンテは竟に故里を追われる身となり、流浪十九星霜の旅路の辛酸を嘗め尽すことになる。この流浪の旅において心血を濺いで書いたのが『喜曲』(La Commedia) 一巻であった。時の詩人ボッカチオ (一三一三―一三七五) がこれを『神曲』(La Divina Commedia) と名づけたわけである。「ダンテ」(Dante)! これは素と「デュランテ」(Durante)「耐え忍ぶ者」の意とか。正に彼は最大級の文字通りの忍者であった。

彼の内的苦悩は何であったか。それはゲーテの大詩篇の結句である „Das Ewig-Weibliche“

「永遠に女性的なるもの」の権化たるベアトリーチェ（Beatrice）に対する悲恋であった。少年ダンテの心をとらえたこの美女はやがて人妻となり、早世したが、詩人十八歳のときから二十七歳の頃までにものした一巻の叙情詩集『新生』（La Vita Nuova）の末尾に、未だ嘗て一女性について書かれたことのない詩篇を創作せんとの決意を披歴している。これが即ち『神曲』という不滅の大詩篇と成った。

そのような外なる苦難と内なる苦悩が経緯となり、原動力、源泉となって、劇的大叙事詩『神曲』は成就したのであった。

ヒルティーは更にダンテの全著作に言及し、次に『神曲』概説のようなことを語ったあとで、地獄篇、（Inferno）、煉獄篇（Purgatorio）、天国篇（Paradiso）の要点的な各論を述べて終っている。神秘的瞑想の資質豊かなダンテが、各篇の終句を星（Stelle）で結んでいるのは、まことに象徴的である。この大詩篇百曲は、神的な義と天的な愛を骨の骨、肉の肉としていると申したい。私にとっても『神曲』は、聖書を措いて、特愛の詩である。「ダンテの苦難」と題した論説――ダンテの生涯と『神曲』のことをとりあつかったもの――を、筆者は第二巻『芸術のたましい』に載せたので、御参考までに申し添えます。

（一九七五・八・二八、ゲーテ誕生記念日に）

「人間をそだてる芸術」〈Die Kunst der Erziehung〉(教育の仕方)

この論説はヒルティーの宗教道徳論説中、最長のものである。「某地のある婦人にあてて」という見出しがついているように、家庭教育を内容としたもので、実は母の育て方に教育の一番大切な重点があるというねらいにおいてヒルティーが懇切に語っているわけである。二十三の項目にわけて語っているが、重点をとらえて紹介するにとどめる。

教育といっても、人間の天性は個性的なものであるから、一定の規準に従って画一的にすべきものではない。教育はそれゆえ「一種の芸術」と見てよい。「すべて有能な教育者がおしなべて学者ではなく、芸術的天性の持ち主であった」からである。

教育の目的は、自己完成に甘んずるような態のいい個人主義にあるのではなく、他人のため、社会のために何らか貢献する善意をもった人格を形成してゆくにある。現代の日本を見ていると、親切心や奉仕の精神や犠牲的精神がいよいよ欠如しつつあると思うので、ヒルティーの意見に全く同感せざるを得ない。現代日本のテレビ、漫画雑誌等の商業主義によって、怪獣や怪人や

悪党や爆発的武器などが、いわゆる表現の自由という名のもとに無制限的に乱用されている事態。これがどれほど少年、少女、青年の心をゆがめ、情性をそこない、敵意や無感覚や薄情な傾向へと追いやってゆくか。実に寒心に堪えない。

ある学校で「塩狩峠」（三浦綾子原作）の映画を見せたところ、主人公信夫の実存とその犠牲的な死に対して涙をもって感激する生徒がむしろ少なく、感激する者を嘲笑する者があり、厳粛な気持になるような場面で笑ったりするという有様であったと聞く。

この一例をもってしても、日本の文政にもっと厳然たるものを要求したい。少年少女むきのテレビの内容の検討と時間の制限がなければならない。母親たちが真に教育を思うなら、結束してこのような現象に対して声を大にすべきであろう。

現代日本の家庭教育で、親が子供にいろいろ手伝うことを命令しないで、気ままにしておく面の多いのは、彼らが自由のはきちがえをする誘因となっている。鍛錬がもっとなされねばならない。ヒルティーもこう言っている、「現代の教育が、若い人たちの性格を何ら鍛えるところなく、いたずらにそこばくの知識と観念をあたえるだけで、人生の艱難に対して何の準備も確固たる拠りどころも与えないままに人生へ放り出し、ために最もすぐれた者でさえも、いくたの誤りをおかした後に、ようやく自ら正道を見出さざるを得ないということは、その最大の罪であります」と。

ヒルティーは教育の第一段階においては、青年が人生の目的として考えるのは自己自身のうちなるものによるのであるから、それを鍛え伸ばすようにすべきであるといった意味のことを言っているが、これは私も平生、天賦の才能のあるところに天職があると申して、家庭においても学校においても、その点をよく認識して鍛え伸ばしてゆくようにしよう、と努めているのと同軌であると思う。

ヒルティーは第二段階として、自己教育の自覚を語っている。自己教育は、むしろ自己を棄ててかかるという気合が大切で、神意に従うこと、神が自分に期待し給うところを祈り求めてそこに生きること、それは必ずや人々のためにも生きることとなる。このような在り方に教育と人生の究極の目的があるとなしている。——このようなことは当人が宗教心に目ざめない限りむづかしいが、二十代に人生の真義を宗教的に是非ともつかんで欲しいものである。

また教育の道に最も大切なものは愛である。それは「やさしい鞭」か「きびしい鞭」といった表現であらわされるような愛、時と場合や、子供の素質や性格によって、あるときはやさしい鞭で、あるときはきびしい鞭で愛するという愛。それは愛に義の要素を欠いてはダメという意味である。

さて茄子は茄子、胡瓜は胡瓜であるように、人間の性格も才能も天賦のものだから質はなかなか変らない。ただそれをどのようにあつかい、善き方向に伸ばしてゆくかに教育がある。それゆ

え教育には忍耐を要する。短所を叱るよりも長所をみとめ、激励して大いに伸ばしてやる方が大切である。そこに子供の愛と信頼が湧く。このことは教育上極めて大切な点の一つである。

「教育はまさに一種の偉大な芸術です。ほとんど神の恩寵のたまものです。」とのヒルティーの言葉はまことに意味深遠である。一個の若きたましいを愛し、それを神のものとして顧み、いかにこの存在――それがどのように未熟なものであろうとも――を一つの神品に育てあげるか、という教育は正に「偉大な芸術」である、ということを彼は言わんとしていると思う。学校の場合は、私立学校においてそういう教育精神が発揮され易いと思う。

さて母親において一番大切なのは祈り心に基いた愛である。フランチェスコ、アウグスティヌス、ジョン・ウェスレー、ルター、ゲーテ、シラー、枚挙に遑ない偉人の母たちは皆祈り深い女性であった。

子弟を義しいことに対する強固なたましいの人、自分がやろうと思うことに対する不屈な意志の人、弱者や不幸な人に対するあわれみの情の深い人に育ててゆくところに人間形成の重点がおかるべきである。知育の面にしても学校の諸教科の授業において、どれだけ憶えたかの量的な面よりも、いかに学びとるか、どれが重要な点であるか、いかに考えてゆくかという質的な面に重点がおかるべきである。

ヒルティーは人間の生活における自然のことに言及し、「自然とは何ですか。それに生命をあ

たえ、それを支配している神の霊をぬきにした独立した自然とは一体何でしょうか。」といっている。神の力と神の栄光のあらわれとしての自然、これは正に旧約聖書において極めて著しく啓示されている自然観である。ゲーテもこれに基づいて、もっと卒直に自然における神性を直視している。

「神らしきは、宇宙をみふところの中に動かし、
自然を己が内に、己れを自然の内に抱くこと。
されば、神の中に生き、動き、在るものは、
神の力、神の霊を失うこと絶えてなし。」

これはゲーテの『神と世界』という晩年の詩集の「序詩」の中の一句であるが、ゲーテの神・自然・人間の一如的消息をよく言いあらわしている名句であると思う。現代の世界がいかに自然を害しているかを思うにつけ、深く味わうべき詩句である。人間生活の手段として、自然を勝手に利用することをのみ考え、自然を尊重し、自然を愛する気持が極めて稀薄になっていたために、自ら招いた公害現象であるからである。「神的世界秩序」、私に言わせると、物理法則、道徳律の奥の霊法、これを無視すると、人間界も自然界も害われてゆく。換言すれば宗教心を失いつつある第二次大戦後の世相は次第に狂いつつある。

悪魔の支配は打ち破られ、

その要求は拒絶された。

彼に属するものはすべて投げ与えよ、

そして告げよ、「この心はキリストの住家なり！」と。

「今日問題なのは、このすべてということである。現代はこの徹底を欠いており、とりわけわれわれの教養階級が最もこの点に欠けている。あなたが断固たる決意でこれをなさらなければ、あなたはいつまでたってもペシミズムから出られないでしょう。」如上の言葉は、今日いよいよもってあてはまる警告である。

ヒルティーが「とどめるすべもなく近づいてきているこの危機」と予言している事態は、ヒルティーの死後間もなく、第一次大戦という悲しむべき現象としてあらわれた。第一次大戦後、再び軍備は拡大し、竟に第二次大戦という痛ましい事態を招いた。この戦後もまた軍備はけたちがいな質のものに拡大している。もしこれが爆発すれば一瞬にして世界は破滅を招く極限状況に迫りつつあるとは！　人間の罪性の深さよ。

「宗教はそれ自体、全く人間を超えた力であり、威力であります。宗教をぬきにして人間の改善と昂揚に実効をおさめようとするが如きことは、すべて一個の幻想にすぎません。これは私の確乎たる信念なのでありますが、動物的な、堕落した、ゆがめられた人間を、倫理学や、人道主義や、訓練だけで改善矯正することは出来るものではなく、本質的には真のキリスト教の力による

以外に手はありません。」この断乎たる言葉は、正に然り、と照応せざるを得ないものである。「神を無視し、神の影響をぬきにして、いわゆる進化してゆく人間本性がどんなものであるか、その正体がやがて完全に示される時が、いずれはやってくるでしょう。」という言葉は、全く現代を暗示しているように響く。この「進化」は全く逆説的で、「退化」「低下」「頽廃」を意味するものではないか。

キリストが「幼児の心をもたないと天国に入れない」と言ったが、ヒルティーもその意味で童心を尊んでこう言っている。「世にはこの真の子供らしい無邪気さを生涯失わないで持ちつづけている人がありますが、こういう人はきまって最もすぐれた部類に属するのであり、時には最も知性的な人々のなかに入るのであります。とりわけ婦人にあっては、この天真な心は、品性の根本特質をなすものであり、全くそれをもたない場合には、女性としての最大の魅力を失うのです。」

それから「よい品性の主なる要素は誠実と同情であります。」誠実と同情、これがある人は本当に信頼できるし、人に親しまれる。男性でも女性でもそうだ。

更にヒルティーは生きることについて、「人生は勤労と勇気と自己克服とをもとめるものであることを、早くから子供たちに知らしておく必要があります」と忠告している。

「虚栄はおそらく人間天性のうち最悪のものでしょう」と言い、「愛と誠実と感謝は人間の最も

すぐれた特質であります」と言っている。少年から青年にかけては、「男の子の場合ならば勇敢と理想が、女の子ならば清純、世話好き、愛らしい性格が、肝心かなめ」だとしている。

ヒルティーのこの「教育論」は延々としてつづいているが、最後に次の言葉を引用して終ることとする。

「時代はまず何よりも〈母〉をもとめている、とかつてナポレオン一世が言ったそうですが、これは現代にとっても完全に真理です。その通りです。すなわち、真面目な、勇敢な、崇高な心根の母親をもとめているのです。そういう母親なしには、どんなすぐれた子弟教育にも穴ができることは確かです。…男子の教育にくらべ、女子の教育が比較的軽視されているということは、現代の最大の誤りのひとつであると思われます。」

ヒルティーの右の言葉はそのまま現代日本への忠言、警告として傾聴すべきものである。第二の国民を育てる内的原動力は母親にあることを想うとき、筆者も腸よりこのことを、全国の女子教育にたづさわる方々に大いに自覚していただきたく、告げ報せたい。

霊的キリスト教（『新書翰集』《NEUE BRIEFE》）

本書は一九〇六年に出版されたもので、内容は

第一、法か同情か（Recht oder Mitleid?）

第二、不幸中の幸（Glück im Unglück）

第三、女性賛否——（Für und gegen die Frauen）〔附〕ジェノアのカタリーナ

第四、より強度のキリスト教（Intensiveres Christentum）

第五、天国（Paradiso）〔附〕ジャン・ドゥ・ベルニエ。

第四の「より強度のキリスト教」が、五つの論説の中で一番重要なものと思うので、これを選んだ。

より強度のキリスト教

ヒルティーはこの論説の劈頭において、独創的にして生命的な聖霊の重要性を語っている。それでこの論説が何を語ろうとしているかが見当づけられる。その第一頁の脚註で彼はこういっている。「元来、キリストの霊のみが、教会のキリスト所属如何を認めさせる実際的にして、かつ唯一の根拠であり、少なくとも使徒パウロの見解に従えば、そういうことになるのです」と。即ち、ロマ第八章九節でパウロが、「キリストの霊を宿さざる者はキリスト者に非ず」と明言しているからである。それゆえ、聖霊が宿っていない教会は教会ではない、ということになる。

もともと「教会」（キルヘ）とは「主に属するもの」の意のギリシャ語から来ているから、聖霊の権化ともいうべきキリストに属する者が、聖霊を宿していなかったら、その名に価しないことになるわけである。ところが現実のキリスト者も、教会も、そういう次元からずれている場合が多いので、ヒルティーがこの論説で、その点を焦点として「より強度のキリスト教」と言わざる

を得なかったのであろう。「より強度の」intensiver という形容詞は、文字通りには「より内向的な」という意味で、元来内向的、内包的、求心的といった性質の語であるから、個人のたましいの中心に関わる意味をもっている。

「キリストのキリスト教」は、独創的な、個人的な、生き生きとした根源的な力あるものであったとヒルティーは強調している。「これまでにこの独創的なものを担ってきた人々は、たといその人たちの生活には多くの困難が避けられなかったとはいえ、自分自身とも、神とも、一つになって働き、人の心に宿り得る最も高い思想に満たされた将来、より偉大な将来に向って、人間の生活が確実な一歩一歩を歩んでいるというよろこびを味わってきたのでした」。

真の「独創」も、「神と自分自身と一つになる」といった境地も、聖霊のはたらきのあるところでこそ生じる事態である。そして聖霊のはたらきは、その当初において熱狂的な現象となることをヒルティーは認めている。しかしこの「熱狂」(Enthusiasmus) は、このギリシャ語の語源が示すように「入神」であって、人間的な情熱による熱狂と混同してはならない。深い祈りに発するものであって、正に天来の霊感霊動によるものである。

要するに、聖霊のバプテスマを本当に受けた体験をもつ人は、そのような現象が正に啓示的なものであることを知っている。そしてそれを内燃の不滅の焔たらしむるためには、不断のしずかな深い祈りを要する。そこに始めて「霊的人格」が形成されてゆくのである。ヒルティーが「よ

り強度な」というのは、聖霊によらなければ、従来の一般のキリスト教から突き抜けられることができないことを意味しているのである。使徒的な信仰の次元に立ち帰れ、というわけである。

ヒルティーは、この論説で、めずらしくも十字架の「贖罪」のことに触れ、パウロ的贖罪観を評価している。けれども彼はそれよりもキリストの復活を強調し、キリストの復活の生命に信仰の根拠を置いている。

そして活ける神及びキリストとの合一という神秘主義（Mystizismus）が、宗教一般と同様、極めて大切なことを語っている。そこにヒルティーのヨハネ的神秘思想が彼自身の体験の告白としてあらわれている。聖霊体験のことをヒルティーは次のように言っている。「人間的、自然的な霊とはまったく異った霊が、人間の心の内に宿るこの独自の宿り方は、伝達形式によっては伝えることのできない、いやそればかりか、ほかの人に完全にわからせることが殆んど不可能とさえいわなければならないような、きわめて個人的なものでしかあり得ません」と。

神秘思想にもいろいろあるが、聖書の中でも「福音書は言葉の最上の意味での神秘主義」であると言い、これに次ぐものとして、タウラーやトマス・ア・ケンピス、更にバンヤン、ジェノアのカタリーナ、アッシジのフランチェスコ、テルシュテーゲン、ハウク、ブルームハルト、コレンブシュ、ゴルドン・パシャ、ブース夫人等となしている。ルターやカルヴィンは勿論聖霊体験者ではあったが、プロテスタントの正統派は聖霊体験から観念的な信条信仰の方向に走ってしま

った。

さて福音書及び全聖書の中心たるキリストについて、ヒルティーは、まずいかなるキリストの像も感心できないとし、キリストは全くその霊的な本質においてつかまねばならないと、次の如く明言している。

「キリストの霊的な本質は、完全に理解可能なのであり、したがってあなたはほかのどのような人間に対しても、そのような理解の仕方をすることはなく、またそのような理解の仕方をするはずもないほど完全に、キリストが語ろうとするものの内にキリストを理解し、それに全く同意するにいたることができるのです。……もしも、あなたがキリストの霊をすっかり正しく理解し、もはやほかに何も望むものがなくなるに至った時に、あなたは本当の力強いキリスト者であるのであり、それ以前においてはまだそのようなキリスト者であるとは申せません。しかもこのようなことがキリスト教の本質でもあるのです。一旦そこに到達したならば、それから先はほかのものを探しまわる必要はありません。同様に、キリスト教の本質を理解するために、キリスト論(Christologie)の如きものをわたしたちは必要としないのです。」

右の言葉はまことにヒルティーらしい断然たるものである。ある意味で正に蹟きの言葉でもある。「キリストを完全に理解することが可能である」という事態は、聖霊を宿すたましいとなるまでは不可能であり、聖霊を宿すに至っても不断の祈りを必要とする。祈りの面をヒルティーが

語っていないのが、むしろ不思議に思われるくらいである。キリストが神意をつかむときには、つねに祈り心であられたからである。我々もキリストの心を心とし、キリストの言葉を言葉とするほどに、全くキリストをつかむためには、平伏した魂となって、彼の中に自分を棄ててかからねばならぬからである。

ヒルティーの言う「理解する」という言葉が、あたまの理解ではないことに注意を要する。「完全に」という言葉も質的な全的であって量的ではない。キリストは無限無量の実存者であるからである。ヒルティーが上掲の如きことを言うので、神学者は一般にヒルティーを高く評価しない。即ち神学をヒルティーはあまり評価しないからである。神学がとかく信仰の事態を、観念化させ、硬化させる弊害をもっているので、ヒルティーはこれを排除したいために、神学を一応斥けるわけである。私に言わせてもらうなら、神学一般、とくに組織神学なるものが、血の通っていない傾きがあるので、神学そのものを考察しなおす必要があろう。有機体的で且つ劇的矛盾構造のものが要求されねばならぬと考えている。

書翰の形式をもって書き送っている相手に対して、ヒルティーは更にこう語っている、「あなたは、あなたの心を完全に神にゆだね、そしてこの決意を全うするために、あなたの心を神学的に構成されたキリストではなく、歴史的キリストにゆだねなければなりません。……このキリストの御導きのもとにあってはじめて、あなたの哲学的、神学的教養は、また真の価値を回復する

ことにもなるのです。キリスト教の真に深い意味は、単なる教えでもなければ、単なる研究でもなく、使徒パウロが言うように、〈平安と聖霊における喜びとである〉と申さねばなりません。」正にその通りであるが、ヒルティーがここでいう「歴史的キリスト」とは、単なる相対的な「歴史的」ではなく、啓示史的歴史的であって、それは同時に終末的現在のキリストとして現在において臨在するキリストのことである。

こういった私の表現は、生きた神学的自覚によるもので、決して観念ではなく、信仰の現実を適確に表現しようとしたわけである。啓示の現実とその真理を信受することに基づかない神学というものがあるなら、それは偽りの神学である。生きた植物界を学的に叙述するものが植物学であるならば、矛盾や誤記などの混在している生きた霊的な書物である聖書を、信仰に基づいてロゴス的に解明せんとするのが神学であろう。問題はこの「ロゴス的」の性格と内容にあると思われる。勿論、学的な把握と表現が霊的現実を表現しきれるものではない。

日常生活において仕事をするに当り、「神の近さ」(Gottesnähe)をたましいに感じていることが極めて大切なことであり、そうでない生活は空しい。また「真の日曜日は来るべき次の週全体のための力」を与えるもので、そのためには、日曜の礼拝が、真に霊的な内容のものでなければならない。そうでないような形式的な礼拝ならやらぬ方がましで、自分で聖書を身読した方がよい、といった角度のことをヒルティーも語っている。

「現代の知識人を満足させるためには、普通ありきたりのキリスト教よりも、より強度のキリスト教が必要であるということを、最早決してあいまいになさってはいけません」と言っている。しかもこのような強度のキリスト教はどういうたましいに入ってくるかというと、「神はその恵みを、例外なしに、心のへりくだる者のみにお与えになるのです。神はご自分と張り合うようないかなる大げさなものをも許し給わず、それと絶えず戦われるのです」、といっている。

正に然り。この「大げさなもの」とは自己拡大の角度のことで、これがサタン的衝動なのである。パウロが「われ弱きときに強し」といったように、神の前に平伏するところに天来の力が来るのである。「より強度の」キリスト教を受けんためには、「より弱き」者、否、実に「無きが如き者」、正に無者に徹することである。その無者が実はキリストであったから、私はキリストを無者と呼び奉るのである。そこに無限無量の力があった。神の力であった。我々はこのキリストを体受しさえすればよい。「より強度」など申さなくても、おのずから質的には最も強度のキリスト教となってゆく。キリスト自身の中にあるという霊的現実であるからである。使徒たちがそれを身を以て証言しているのが新約聖書の福音書以外のすべてである。福音書はキリストずばりの現実である。であるから新約聖書というドラマの中に投身して身読するのが最短距離なのである。

「キリストの教会は、キリストがみこころとされたそのままの教会であったことは決して一度も

ありませんでした。……今や再び近づきつつある宗教改革の時代が従事していることも、このことにほかなりません。……キリストがおっしゃった意味における神の国とは、内なる国であり、人間の心の内における神の支配と力にほかなりません。これは外的生活と直接的に何のかかわりもありません。……神の国は、すでにそれ自身、天国に上げられないうちからこの地上で体験せられる将来の人生の一部に外ならないのです。……このような霊の国を地上の現実の中へ力強く引き入れることがキリストの仕事であったのです。」然り、アーメン。

読書論（『読書と演説』Lesen und Reden より）

『読書と演説』は一八九五年に出版されたもので、「読書論」（Über das Lesen）と「話術の公然の秘密」（Offene Geheimnisse der Redekunst）という二つの論説から成っているが、前者だけを取扱うこととする。

見出しの註に「この論説は、元来著者がある青年会からこのテーマの指定を受けて、請われるがままにおこなった講演である。したがって主として、人生を真剣に考えようとする若い人たちを目ざしたものである。」と書いてあるように、これは講演の原稿をもとにしたものと思われる。

著者はまず、グーテンベルクの印刷術の発明による書物が、いかに個人の精神的独立と自己形

成のため重要な役割を果して来たか、そしてこれが「特にプロテスタンチズムの力と自覚の基礎」となったかを語り、ルターの宗教改革の有力な武器となったこと、そしてまた「現在の我々全部の歴史的基盤となっている」と明言し、これなくしては原始キリスト教も確然たる存続がのぞまれなかったであろうとまで言っている。ヒルティーは直接言及していないが、それらの出版書の中心は聖書、ルター訳聖書が出来あがったことである。書中の書、「この書」(Die Bibel)が一般民衆の書となったことが、中世から近世に移ったということである、といって過言でない。

教養の最も重要な手段たる読書について、ヒルティーは自分の読書経験に基づき、三原則を挙げて次の如く語っている。

第一則　多読すること

それは必要な知識を身につけるため、また同時代のみでなく過去の諸時代にわたって、人間の生活と思想との正しい見通しを得るため。これが一般教養のため必要なことである。

多読は、これによってあらゆる時代のあらゆる種類の優れた人物と親しく交わることを得させる。そこには東西もなく、古今もなく、国境もない。自在にその時そこに魂を遊ばせ、自由に今、此処に人物を登場させる。

読書の世界では、「私たちは気分に応じ、希望に従って、あらゆる世紀から、そしてあらゆる

地方から相手を選び、相手を変えることができるし、相手がひとりであろうと、数名同時であろうと、自分の好きな時に好きなように相手を迎えて、望みの時間だけ相手の言うことを聞き、その一語一語を心ゆくまで熟慮して、それからその先の話を聞くことができる。こういうことは、同じ時代に生きている人たちと親しく交際する場合に於てさえ、全く不可能である。」

第二則　良書を全部自分で読むこと。

そのための前提乃至必要条件として、

第一、「規則的に、すなわち毎日例外なく一定の時間、半時間でもいいから読書をする習慣をはやくつけること。これをせめて二十年も続けたら、すでにその人はその国の学識者のひとりとなるだろう。」このような読書の楽しみは、普通のレクリエーションの大半とは全くちがった豊かさをもったものである。自己教育に読書の習慣をつけることは極めて大切である。

第二、「無用のものを一切読まないということ。これが読書のかなめだとさえ言ってよい。」

「現在読み物としていわゆる文化民族の間に最も幅をきかしているものの大多数は、そうした無用の読み物に属しているからである。就中、新聞はどれもこれも例外なく、その一部以外は読まずにおいて一向さしつかえない。さらに、あらゆる絵入雑誌の過半数とあらゆる長篇小説や短篇小説の大部分、」とヒルティーは言っているが、これは日本の現状にそのままあてはまる言葉で

あろう。

わが国では俗悪低劣な漫画雑誌やそういう漫画入りの大方の週間誌の氾濫ばかりでなく、テレビにも同様のものがあるため、幼少年者の神経や性情に悪影響を及ぼしていることは、前にも述べた通りで、国民の社会教育上、由々しき問題である。禍なるコンマーシャリズムである。

これとは反対に、「古典」といわれる書物が全部「古典」として読まれるに価するとはかぎらない。古典的名著の中にも、謂わば古ものとして読み過ごしてさしつかえない部分がある。よく本を読む人にはその判断が直覚的にわかるものである。旧約聖書のなかにすらそれはある。大著は愚著だ、などという皮肉な言葉もあるように、部厚な本を読むときは第一回目は少し速く目を通して、籾殻と穀粒とを吹きわける読書感覚を養うことも必要である。

ヒルティーは「哲学書や神学書の大半」は穀粒が少ない、といっている。わが国とは多少事情がちがうようである。

第三、「悪いものは絶対に読んではならない。」

悪いものを研究すると、人間の持っているよい精神がだんだん死滅してゆく。……人間の悪しき状態をことさら研究したがるのは、大抵そういう状態へおちいろうとする気持がまだ残っているのを粉飾するための口実である。」

第四、「書物はできるだけ原語で読まなければならない。」

「心の深い独自な書物であればあるほど翻訳しにくい」からである。言語系統がつらなっている欧米だから、ヒルティーの言うように、「原語」で彼らは比較的楽に読めるだろうが、我々がゲルマン、ラテン、スラヴ、セム系統の本をどれも原語で読むとなったら大変な語学力を必要とする。乏しい語学力で苦しんで「原語」で読もうとするよりも、優れた翻訳書で読むに如かずであろう。しかしこの頃の若い人々に於て、どれかの外国語のものは原語で読もうという意欲の甚だ乏しいのはいかにも残念なことである。そのことは神田の古本街に、昔とちがって洋書が激減しているのを見てもわかる。特に詩書となったら、翻訳では原語のひびきをつたえるわけにはいかない。日本語の詩文としての別な味は出せるけれども。

ともかく原作（翻訳であろうとも）第一主義は極めて大切なことで、原作「について」書かれたものは、概して第二義的以下の意味しかもたない。しかし、私は思う、「に就いて」書かれたものでも、原作を正しく読むよき手引きとなることは充分あり得る。「に就いて」書かれたものでよき本は、原作を充分こなし、原作「の中から」語っているような、「に就いて」が「の中から」と一体になっているような書物で、これは大いに参考になる。古典的な書物の解説書には、その意味で、解説書自身にまた古典的なものもある。新約聖書の解説書としてのベンゲルの「グノーモン」（Bengel: GNOMON）の如きはそれである。

ヒルティーはこういっている、「聖書はいうまでもなく、ダンテにせよ、ゲーテにせよ、ある

いはカントにせよ、ショーペンハウエルにせよ、彼らの著作の周囲につもりつもった数多くの、一部分全然見当はずれな、あるいはうそだらけの余計な論議を読みつくす暇で、彼らの全著作を十回読んでその全内容をこまかに覚えることができるのである。その上原作を読めば、実際に何が書いてあるか書いてないかということが、自分ではっきりわかる。」全くその通りにちがいない。ヒルティーはこれを実行した人である。我々が東大独文学科の学生であったとき教授であられた青木昌吉先生や木村謹治先生の独乙文学史の講義で感服したことは、先生方が大切な原書はこれを読んで、講じておられたことで、あちらの文学史のやき直しではなかったことであった。

第三則　一切の良書を正しく読み、反復熟読するということ。

これは上掲の二則に対する第三の「大条件」である。と彼は言っている。そして本を正読し、精読するためには自分の本であることがのぞましい。ひとから借りた本や図書館の本では、ラインを引いたり、書き入れをしたりすることができないからである。我々の内面生活を決定するような本は、自分の生活や生命ときりはなすことができないから、自分の本として蔵書の中の大切なものでなければならないのは自然の理である。ヒルティーも正に同じことを註の中で語っている。

以上が読書心得の原則的なものとして実践さるべきものであるが、ヒルティーは更に次のよう

ないろいろなことを語り添えている。

読書は「ひとり静かに」いとなみ、心になにか、それをきっかけとして、考えが浮かんできたら、読むのを中止して、じっくり考えることが大切である。読書が思索を喚び起さないようでは、その読書はあまり価値がない。内容についてメモをとることは結構だが、原本にじかに書き入れた方が却てその本に親しましめる。

あまり価値のない本の中にも、時に注目すべき部分がある。そういうときは、本の整理のためにも、その部分だけ切りとって、他は紙屑籠の中に投げ入れることも悪くはない、と彼はいう。

ヒルティーは「明け方の一時間と日暮れ方の一時間とを読書のためにとっておいた、といっている。早朝や夜の読書には「一番いい考えが浮んでくる」と彼はいう。

「読んでいる間にいやになったり、疲れてきたりしたら、すぐやめるがよい」が、「読み始めてすぐやめてはならない。」とにかく読書しようとしない「怠惰の念こそ一切のよきことの最大の障害である」。

青少年のある時期に偉大な人々の伝記を読むことは大切なことであるが、彼らが「永遠者と関わり合いをもってゆく神秘な部分」を深くつたえている伝記というものはなかなか見当らない。「抽象的な哲学」は、古代近代を問わず、一種の「迷宮」であるから、それらを通り抜ける一つの安全なアリアードネの糸は、あらかじめ正しい世界観を確保しておくことである、とヒルティ

ーはいっている。その「正しい世界観」がそれではどうして得られるのか。太陽の光でものを見るときに間違いがないように、霊界の太陽の光たるキリストの福音がもつ真理の光、聖霊・聖言の光による。小主観からはずれて見ることができるようになるからである。

ヒルティーは哲学界では、何といってもカントの『純粋理性批判』から読みはじめるがよい、と言っている。「最も学問的な最も根本的な最善の本」であると明言している。この哲学界の大燈台である『純粋理性批判』を最初に翻訳された我らの天野貞祐先生に深い敬意を表せざるを得ない。

ヒルティーはまた次に歴史書のことを語り、単なる客観性の歴史書でもなく、傾向的イデオロギーによる歴史書でもない、高次な芸術作品と同次性的精神性をもったような歴史書をのぞんでいる。カーライルの『フランス革命』や『オリヴァー・クロムウェルの書翰と演説』はそういう種類の名著として挙げている。この二著は私も大学時代に少しくかじったことがある。クロムウェルの手紙のある部分は感動して抜き書きもした。

ヒルティーは更に「新聞」に関して、政治家や外交官の書いた「回想録」的なものに就て、「歴史小説」について、さらには、自然科学方面のダーウィンの『進化論』や社会科学方面ではマルクスの『資本論』などを正しく読むことにも言及している。どの方面のものにせよ、歴史的に認識してゆくことが大切である。その点で哲学史を学ぶことは諸学を学ぶ上に大切な前提であると

いってよい。

最後に一言しておかねばならないのは、読者が書物そのものと直接的な関係を保つことと、読書が知識や教養だけに終らず、読者の実存的「行為」に花咲き果を実ぶところに読書の地道な目的があるという一事である。このことは聖書をはじめ、諸々の宗教的古典の場合に最もあきらかである。このことについてもヒルティーは多くの頁を用い、力強く述べているが、ここには残念ながら省略せざるを得ない。

神経衰弱について（ÜBER NEURASTAENIE）―（一八九七年出版）―

「同一の人間が善をなし得ると同時に極悪をも犯しかねないということがどうしてありうるのか。しかも枚挙にいとまがないくらいしばしば、同一の人間のうちにこの二つのものが隣り合わせに並存している。そして両者を区切る分水嶺は極めて狭い。あたかも澄んだ湖と濁った湖との、アルプスの二つの湖水から流れ出る水が次第に離れて行って、しまいには二つの異なる大洋に流れこむようなものである。これらの事物における日常の経験に対して、われわれの教育の力全体も何と無力であろう！、…今日神経衰弱（ノイラステニー）と呼ばれているものに限らず、偏執病（パラノイア）、妄想病、精神錯乱と呼ばれているものまでもが、一般に信じられているよりはどんな人間にも身近なものであり、従って絶えずこれを遠ざけるようにしなければならない」。

ヒルティーが問題としていた一九世紀末の頃の社会状況より、現代ははるかに深刻な精神的危機の時代といわざるを得ない。神経衰弱（ノイラステニーはギリシャ語のノイロン＝「神経」とアステネイア＝「衰弱」から来ている合成話）や一般的な表現の神経病（ノイローゼ）、ヒステリー、癲癇、時折見かける躁鬱病、特に鬱的現象は普通の人でもややもすると起るようだが、その他精神の不安定性、酒を飲むとその不安定性が歴然とあらわれ、カッと怒ったり、無闇に笑ったり、変にからんで来たり、といったことは、よく見うけられるところである。

こういった神経の多岐的現象も要するに精神と肉体のいろいろな内的関係や状況、周囲の環境や人間関係に起因するところであろう。そういった問題はヒルティーも論及してはいるが、医学的、特に精神病学的な専門のことはヒルティーも医学者ではないから、その論の当否を私は知らないが、彼が、神経病の問題もその深い原因は精神、こころの在り方から来ると見ていることは真理であると思う。

「かかる精神異状から人類を救い出し、人類全体がすでにはなはだしく失ってしまったところの精神、肉体の健康に対する感覚や理解力をさしあたり再び作り与えることこそ、キリスト教成立期におけるその主要な課題であった。当時の病状を書き記したいろいろなものを見ると、現代のものと驚くばかりに似かよっているのである」。

神経衰弱が生ずる過程としてヒルティーは次のようなものを挙げている。「それは最初は肉体

的な、予防できる原因から起っている。怠惰、アルコール、とりわけあらゆる性的障害、まちがった見解、たちのわるい読書、誤った教育、きちんとした仕事をしないただのお上品な寄食生活、怪しからぬあるいは不倫な性向、正しい観念や正しい充分な労働の欠如、不断の過労等がその最初の因となりがちである。それに加えてなお、健康なものにも不健康なものにもおしなべて存する或る種の遺伝的素質が因となることもある。」いかにもヒルティーの言う通りだと思う。神経衰弱へのこれらの諸因に対する時機を得た抵抗、自制が極めて肝要である。そうでないと次第に道義心が欠けて来て、生活に対して無気力、無関心、無責任といった所謂三無主義的精神状況となり、それが既に神経衰弱の徴候であるわけである。それのみでなく、「残忍、醜悪、背理、卑猥、嫉妬、悪意」といった諸悪へと精神の異質な頽落を来たしたりする。

ヒルティーは更にダーウィンの進化論やマルクスの無神論的唯物論や、ニーチェの権力意志的哲学論と因果関係を成す精神的乃至肉体的異常性、危険性などにも論及している。そしてこういっている。「自己の肉体をもたえず純潔にかつあらゆる汚辱から自由に保持しようと努め、ありふれた官能的存在よりも一段と立派なかつ尊敬すべきものに高めようと心がける人間だけが、自己の精神を純潔に、あらゆる汚辱から自由に保持しうるであろう。肉体の醇化は、肉体を精神活動の一つの完璧な道具となすものであるから、これなくしては、精神の肉体に対する支配などはそもそもありえようはずがない。」

しかしそのような健全なる精神と健全なる肉体の関係はいかにして現実となり得るかという問題になると、どうしても宗教的な力の世界に入らなくてはならないことになる。神経衰弱という症状が医学的に説明され、その起因が解明されても、それで神経衰弱が治るわけではないことは自明で、問題は精神力を現実に支える根源の実在に触れるか否かに関わる。

ところでヒルティーが、精神力といってもそれが自力的なものではなく他力的なものであることに着目しているのが大切な点である。すなわち彼はこう申している、「福音書中にはむしろ弱者の優越を確言している個所がそれこそ数知れずある。そしてまた、史上最も活動的であった福音の先駆者や継承者たちが、いちじるしく精神上および肉体上の弱点から全く免れていなかったことは、最も大きな実例によってたやすく論証されるだろう。のみならず旧約聖書においてさえもすでにひんぴんと、健康そのものもまた超自然的影響を受けやすいどころか、その影響に左右されるもの、従って霊（精神）的な方途によって獲得されたり、失われたりする付与物であると記述されている。」ヒルティーは諸欠陥、弱点の例証として、出エジプト四・一〇、第一コリント二・三、九・二二、第二コリント一・八、九・七、一二・七―一〇、詩篇一四、七・一〇、一一、三三・一七、三五・一〇等を挙げている。更に使徒パウロを「拡大性偏執症」があったとか、古代の預言者、詩人、哲学者の大部分にもそういう傾向があったとかいう説を必ずしも否定していない。「偉人は例外なく、その青年期にはときどき憂鬱症であった」とさえ彼はいってい

る。ルターにもゲーテにもそういう時期があった。また超自然的な力の影響については、出エジプト一五・二六、三三・二六、申命記七・一五、第二コリント一六・一二、イザヤ六〇・二九―三一、マタイ九・一二などを挙げているが、聖書には枚挙にいとまないほどである。

ところで常人において、自然的な力が最もよく保持されるためには、「神の掟に従った理性的な生活」といっている。ここに「神の掟」（ゴッテス・ゲボーテ）といっている言葉は、むしろ「神の言」と言った方がいいだろう。要するに聖書につたえられている神の啓示的な言のことである。神の言に従う従順な態度は最も健全な在り方であるからである。それを「信従」といえば適切であると思う。こういう平常の健全な心の在り方を忘れて、事態がおかしくなってから湯治だの、薬用だの、休養だの、と応急的なことをしてもそれは本質的な治癒にはならないことを彼は述べている。

「精神の力が肉体を支配する。なぜなら精神の力は、非常に多くの場合に、病的な肉体の素因を、少くともそれが極めて有害な働きをするのを排除するから。……将来の医学もまた体力の保持と再生のこのような精神的手段に一層大きく注目するに至るであろうことは微塵の疑いもない」、と彼は明言している。現代の医学者たちが果してそのことに本当に気がつき、それを医学上の重要なポイントとして掘りさげているかを私は知らない。私の感じでは医者自身が宗教的なたましいとなって、その実力を体験していなければ無理な気がする。

またヒルティーは俗悪な社交が、非常に不健康であることを挙げているが、酒やたばこや女の渦巻いているような交りがそうであることは論を俟たない。楽しい健全な社交はいいが、「孤独は人間にとって最大の不幸である」といったカーライルの意見にヒルティーは反対している。勿論絶対的孤独、たとえば牢獄の独房の如きは、神との交りがなければ人を狂気に追いやるであろう。大自然を相手としたり、読書の世界に沈潜している孤独は、いい加減な社交よりはるかにたましいを豊かにするものである。これに反して、コンマーシャリズムの氾濫しているテレビの、特に幼少年少女に対する精神的公害や、多くの俗悪な諸雑誌に中毒、麻痺しているような現代日本青年の一般状況はどういうものか。神経衰弱への道をたどっているのではなかろうか。

ヒルティーが最も強調している健康法は、「働くこと」である。それを解明してみれば、学生は人生の目的をもって勉強することであり、成人は定まった職業をもって規則正しく働くことである。天賦を自覚して、天職に励むところに、神経衰弱などののぞきこむすきはないであろう。

しかしまた人間の社会は複雑であり、怪奇ですらある面があるから、ことはそう簡単でもない。いろいろな運命環境、交際上の変化が起る。そんなときにこれに自在に対処し得るためには、真に神の前に平伏して、キリスト（仏教なら仏陀）と直結しているたましいであることが何といっても最も肝要な一点である。たましいがここに焦点を結んでいる限り、どんなことがあっても、その現実に対処し、乗り切り、運命環境に天国を現じてゆくことができる。炎々として燃え

る不滅の天的愛がそこに現ずるからである。

不幸や苦悩すら、そのような生命力には逆に役立つとヒルティーも喝破している。「幸福」論者ヒルティーの「幸福」をこの世的な「しあわせ」ととりちがえてはならない。

苦難や苦悩の中にすら歓喜はあることを彼は語っているし、使徒たちも皆そのことを聖書の中で語り且つ証している。聖書の人物は、神の、キリストの、旺盛な生命力にあずかって歓喜しているから、あらゆる苦難を突破した。要するに神経衰弱は信仰衰弱から来る可能性といって過言でないであろう。

詩人ダンテもあの苦悩、苦難を通して書いた大詩篇を「喜曲」といった。ベートーヴェンも一時は自殺せんとしたほどの耳聾の苦難を担いながら大歓喜の第九交響曲をものした。

「幾百万の人々よ、相抱けよや！
この接吻を全世界に及ぼせ！
はらからよ—星の幕屋の彼方には
愛の御父ぞ住み給う」

というシラーの「歓喜に寄す」の詩句を高らかに唱わしめているベートーヴェンの烈々たる人間愛に現実をもって応えない人類が、いくら年末にこれを演奏したところでベートーヴェンもシラーも知らん顔ではないだろうか。（第二巻『芸術のたましい』に「歓喜に寄す」の全訳を掲げておいた

ので御参考までに。）

神仏の霊的現実をいい加減にしている二十世紀がどうなってゆくか。天に呻きと怒りと、言い難き警告がある。

「およそ神経にとって最も健康なものは、純粋な喜びである。……神経病者や半狂人の大多数に何よりも欠けているものは愛である。」正にその通りであろう。

その大歓喜のおとずれが、キリスト降誕の際に天からひびいてきた天使の声であった。そしてキリストの実存と全福音の内容である。何ものをも救ってやまない力強い愛である。どんな精神的な問題もなやみも荷っている十字架の贖罪愛であり、復活の生命力であり、聖霊の無限無量の内実である。

ヒルティーは懇切丁寧に神経衰弱に対する予防や対策を更に語って尽きないが、それらの内容を縷々ここに紹介する要はないであろう。

彼が、むしろめづらしく崇高なる芸術や芸術品のことに言及しているのは注目してよい。芸術的な美の世界は、自然界の花と同じく、ひとの心をよろこばせ、たのしませることに大いに役立つことは論を俟たない。

「精神および肉体を極度に高揚する作用をもつ最も気高い生の歓びは、善行であり、そのかぎりでは本来何びとも殆ど全く〈歓びのない〉生存を嘆くにはあたらぬはずである」という言葉は極

めてヒルティーらしいものである。これが本当の「強壮剤」で、この強壮剤たる善行をもって、何でもない「ひそかな生涯」を、ベートーヴェンが古今を通じてこの最も美しい曲として歓喜に献げたあの壮大な交響曲に形成することができるのである」と喝破している。

病める魂（KRANKE SEELEN）

この『病める魂』（複数形）という論説は、一婦人に語りかけた形態をとっている。そしてこれがこの前の『神経衰弱について』の姉妹篇であることは著者自らが註記しているところである。神経性疾患は、個人差が非常にあるので、個性的な扱いかたを要するものである。しかも相手が婦人であるのでヒルティーはいろいろな場合を想定して、いとも細やかに述べている。それはこの前の『神経衰弱について』の場合と同様である。

「およそ『神経病患者』というものは、多少の差はあれ、すべて病める魂の持ち主である。そしてこの魂からなおしてかからねばならない、ということです」と、彼はハッキリたましいの問題に焦点があることを指示している。であるから「病める魂は、まちがいなく肉体を弱めるので

す」といっている。

このような病的現象は、「あまりにも文明化した」現代のいたるところに見受けられる。それは「知性でも、啓蒙でも、享楽でも」なおせるものではない。それは力、生命的な力、愛の力によらねばどうしようもない、とヒルティーも明言している。それではその力は何処からくるか。

このことにおいても一般の人々は確たる解答をもっていない。それは体力でも、智力でも、財力でもない。道徳的意志力である、という人もあろう。それはしかし真の底力とはならない。力は上から臨む。力は内から湧いてくる。換言すればそれは、キリストからくる。うちなる聖霊から来る。

そしてヒルティーは、「不可能という言葉は私にはない」と言い放つことの実際出来た蓋世の英雄ナポレオンが、孤島セント・ヘレナでその生涯の終末にあたって聖書を繙き、しみじみと述懐した言葉を掲げているが、その全文をここに紹介せざるを得ない。

「福音書には不思議な力がある。言うにいわれぬ作用がある。心を魅すると同時に理性にも訴える或る温かさがある。福音書の内容にふかく思いをひそめると、まるで天空でもながめているときのような気持になる。福音書は書物ではない、行動能力をそなえた生きものである。そしてその普及に反対するすべてのものを引きさらってゆく力さえ持っている。この書は特にここの私の机の上におかれてある。私はくりかえしこれを読んで倦まないであろう。毎日、私はおなじ喜び

をもってこれを読む。

キリストは語る。かくしてもろもろの世代は、血のきずなよりもさらに緊密な、さらに深く、心こまやかな絆によって彼に属するのである。彼は愛の炎を燃え立たせる。これによって、何よりも強力な利己、自愛は打ち滅ぼされる。われわれは彼の意志のこうした奇蹟から、この世の創造的な言葉を読みとらずにはいられない。キリストの最大の奇蹟は、疑うべくもなくこうした愛の国である。

あらゆる時間的な限定を打ち破って、人間の心を眼に見えないものへと高め、かくして天と地との間に不壊（ふえ）の絆を創ることができたのは、ひとりキリストのみである。なぜなら、卒直にキリストを信ずる者は、すべて、こうした不思議な愛、自然を超越する高次の愛、単なる人間悟性をもってしてはいかんともしがたい現象であるこうした不思議な愛を感ずるからである。それは、この新しいプロメテウスによって地上にもたらされた聖なる火であって、偉大な破壊者である〈時〉でさえも、それを消すことはできないのである。……全世界で愛され、畏敬され、伝道されているこのキリストの永遠に活ける国と、この私のひどいみじめさとは、本当になんというちがいであろうか。」

以上のナポレオンの言葉のあとで、ヒルティーは、「これが、近代の本当の力の大天才が、力およびその源泉についてなし得た最後の洞察だったのです」と結んでいる。

ナポレオンは意志の力も、英知の力も十二分に備えていた人間であった。しかしそれも、キリストの天来の愛の力の前にはかぶとをぬがねばならなかった。さすがはナポレオンである。彼は正直にかぶとをぬいだばかりでなく、キリストの福音の本質を洞察し、その火の如き愛の力に感動している。その点で普通のキリスト者は到底及ばない。

神経性疾患の原因は多種多様で到底挙げきれないであろう。多少類型的に挙げてみれば、遺伝的なもの、幼少年時代における家庭的不幸、悪友などの圧迫や誘惑、試験地獄のなやみ、就職難、失恋、不幸な結婚、性的欠陥や不満、対人関係からくる精神的苦悩、失業からくる経済的困窮、交通事故や危禍からくる身体障害等々、人の世は何と「なやみの路」であり、「涙の谷」であるか。

そうであるからこそ運命や環境に揺り動かされてへこたれるようなことのない強靱な精神を自ら鍛えあげるよりほかに道がなく、それにのみ生き甲斐というものがあるわけである。外的な幸福を追う者は人生の真の勝利者とはなれない。外的幸不幸は雲の如く去来してやむところを知らない。反之、内的な幸は誰でもがもち得る天国である。

それゆえに問題の解決は専ら強靱なる精神力の体得にかかっている。その一つの方途としてヒルティーは恒常的に仕事をすることを挙げているが、仕事といっても自分の天賦の才能、天性に即したもの、少なくともそれが鍛練され、活用され、発揮され得る方向のものであることを要す

るであろう。また現代社会は半面において、非常にめまぐるしい忙しさをもったものであるので、それに対処するには動中の静、静中の動の呼吸を自ら体得して、あくせくしないことが肝腎である。そのような静動の呼吸、生活の上での精神と肉体の調和がどのようにして体得できるか、ということになれば、どうしても宗教的心境を内にもつことを要するわけである。

「神をもつ信仰生活こそ、からだの養生と並んで、治療にはどうしても必要なものなのです。そうした信仰がなかったら、根本的な治療などはまったく不可能なのです。これは、今日の医学といえども認めざるを得ないところです。なぜなら、神経疾患というものは、純粋に肉体的・自然科学的に説明できることがらではないのですから。」

信仰心がもつ精神力は、天来の神霊によって始めて本ものとなるのであって、人間のあらゆる現実を真に支配し得る根源的なものである。十字架による贖罪を果したキリストが降した聖霊がそれである。このような信仰に生きる「第二の我が、その人間を通して考え、語り、そして行動するのです。しかもそのやり方は、しばしば光り輝くばかりすばらしいもので、こうした精神と親密な、あるいはそれを感受しやすい第三者の眼には魅惑的とも見えるのです。」

「健康回復法」の第一ともいうべき方途は「よく眠ること」である。睡眠不足は万病の因といってよいであろう。ヒルティーの『眠られぬ夜のために』も、精神的健康を得てこそ安眠ができること、安眠ができると肉体的にも健康が回復されるから、そのような霊肉渾然たる健康のために

書いた名著である。

ヒルティーはめづらしく自分自身のことを相手の婦人に次のように語っている、「私自身、生まれつき非常に華奢な、殆ど虚弱といってもいい子供で、特に心臓が非常に弱く、筋力もわずかだったのです。学校に行くようになって、筋肉の力を要することが多くなると、私はよく病気になりました。しかし段々健康になって、ついには標準を越す年齢にまで達したのです。こうした私の生涯の結果は、私の家が健康的であったことと、神の恩寵とによるほか、主として次の三つの事情によるものと考えます。

すなわち、過度にわたらない規則正しい労働と、健康的な静かにおちついた人生観と、それから、非常にうまくいった幸福な結婚生活とです。このほかになお、秩序を守る習慣と、特に、中年以後の禁酒禁煙もいくらか役に立ちました。だがいづれにしても、魂の健康が、肉体のそれをもたらしたのです。断じてその逆ではなかったのです。」

次にヒルティーは神経性病者には、いかに看護をする人の人間性とそのやり方が大切であるかを語っている。「この病気を理解し、そのあらゆる段階と特質とに応じて対処する心得のある、細心な、分別のある、だが何よりもまず理解の深い看護者および看護婦が必要なのです。それには、いろいろな気持のいい習慣を持つこと、せっかちでないこと、態度ものごしがどぎつくないこと、鋭く高い声を出さないこと、また朗かな気質をもつことも必要です。……」などとこと細

かに述べている。この種の病人には「本当に善良な、みづから確固たる信念を有する」看護婦が必要である、といっている。またその朗らかさで病人を自然に笑わせることができれば、それがいい薬である、と言っている。更につけ加えて、「善良な新教の救恤看護婦（ディアコニッセ）や、カトリックの愛徳会修道女とかに見られるような、本当の心のやさしさや無私無欲、これによって病人は、それまで住んでいた世界とは多分全くちがった平和の雰囲気の中に導かれるのですが、こうした雰囲気は、あらゆる他の〈風土の変化〉にもまして病人の再生に役立つのです」と語っている。ヒルティーは註記して、あの『眠られぬ夜のために』も「そのような看護婦のもとめに応じて書かれたものです」と告白している。

さて日常生活において朝起きがけになすべきことは、まず神の前に平伏して祈ること、聖意体現を期してスタートを切ること、これがその日の仕事や諸般の苦労に対する大なる力となることをヒルティーも語っている。

仕事につかれたとき、一番結構なのは上等なコーヒーと軽いお茶である。特に心臓の弱い人には、アラビヤ・コーヒーが非常に有効である、などとヒルティーが自分の経験と嗜好から語っているのも面白い。

アッシジのフランチェスコは、自分の肉体に向って「驢馬君」と呼んだそうである。「肉体」のロバ君は主人たる「精神」を担い、その意に従って歩くという僕である、というのである。そ

れもおもしろい主従の関係であるが、鞍上人なく、鞍下馬なしというように、実は主従の両者が渾然として一体、無意識的な妙境に入ればそれが一番健全であろう。

黙示録にも描かれているように、二十世紀の人類の危機は、物欲と肉欲の奴隷となり、神を無みし、唯物的全体主義か、享楽的自由主義かに滔々と流れるところにあろう。人心のすさびとみだれの果ては恐るべき戦乱となる。第三次戦争は世界の破滅をもたらす。今や人類は本質的に精神と神経の中心外れの病状を来たしつつある。一隻の潜水艦の核兵器で一国を壊滅できるとは！もはや単なる武器ではなく、文明の狂気から作られた狂器とでもいいたいものである。

今の世に欠けている最も重大なものは神を畏れる心である。今の世に最も必要なものは天来の神霊による力である。

永遠の相の下に (SUB SPECIE AETERNITATIS)(『永遠の生命』)

原書の正題と副題はこの通りであるが、訳としては逆にした。この小冊子は一九〇八年の降誕節のすこし前に出版された。すなわちこの『永遠の生命』は、彼の宗教的論説の最後の『力の秘密』と共に晩年の珠玉的姉妹編を成すものである。

もし人生をこの世限りのものと思うなら、そこからは力強い明るい生き方は出て来ない。「永遠の相」をもっているのが人生である。一見はかない人生が決してはかないものではないことを悟るためには、永遠の相が儚い相の奥に秘められていることを悟らなければならない。

ルターの宗教改革は、罪と死のとらわれから福音的自由をとりもどしたところにあるが、キリ

ストの十字架の贖罪と復活と聖霊降臨によるこの霊的自由をもつ永遠の生命は、一方「文芸復興」の潮流がかもし出した単なる人間的、現世的、「官能的歓楽」の自由とは質が異なる。現代の世界は、言葉の深い意味における「永遠にして不断の存在の光明界」を再びとりもどさないなら、本当に危い。

「永遠の生命を信ずるか信じないかは、一般に信仰か不信仰かに対する本来の基礎である」、とヒルティーは強く宣言している。しかしこの「永遠の生命」とは、どこまでもキリストが実証した「永遠の生命」のことであって、漠然と「永遠の生命」といっているではない。

共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）において、イエスが歓喜のおとづれ、即ち福音として語っている主眼は「神の国」（マルコ、ルカ）であり、「天国」（マタイ）である。そしてこの「神の国」「天国」の内実は如何。「永遠の生命」が即ちそれである。ヨハネ福音書が最も端的にこの「永遠の生命」を語っている（ヨハネ三・一六、三六、四・一四、五・二四、三九、六・二七、四〇、五四、一〇・二八、一七・二、三等々）。

「比較的教養のある鼠族は、全く唯物的な人生観の船が沈みかけてきたので、今やすでにこれを見棄てつつある」とヒルティーは言っているが、「船を見棄てて」さてどこに依りすがろうとしているのであろう。「鼠どもが船を棄てる」というドイツ語の表現は、「万策尽きた」こと、「運命がきわまった」ことを意味するので、著者は多少皮肉まじりに用いたと思われる。

新しい拠りどころは、ローマの詩人的哲学者ルクレティウスか、大文豪ゲーテか、大哲人カントか、ショーペンハウェルか、ハルトマンか、ニーチェか、とヒルティーは名をあげたが、文学も哲学も人ひとりを救うことは出来ない。永遠の生命を与えることは出来ない。というのがその背後にかくされた結論である。

拠りどころとなる「千歳の岩」は聖書だけである。「これは、文明の、人類の、歴史的なしかもすでにいくたびとなく個個人のまた諸民族の生活において実証された遺産」である。

さて「永遠の生命」はどういう角度から問題とさるべきであろうか。「人間の天国と地獄とは、神からの距離のいろいろな段階なのであって、それは〔死と共に〕今やあきらかになる。われらが、〔今生において〕在るところのものとして、〔来世においても〕いつまでも在るのである。いわゆる死は霊的人格が肉体的人格の外被を脱ぎ去るに過ぎない」。そこで大切なことは「地上の生活態度」であるから、地上の生活を、ごまかしなく、まじめに、謙虚なたましいとなって、神への信仰心をもっていとなんでいることが極めて大切なこととなる。審判は自分自身の在り方がまねくものだからである。恵福も同じく自分自身の在り方に与えられるものである。それゆえ「霊的人格の形成」こそ深く念とすべきことである。

この世でまじめに生活し、人のため尽した人たちは、死を怖れることはない。この場合、死は彼岸における幸なる新生を約束するものであるからである。地獄と極楽、地獄と天国、仏教やキ

リスト教でいわれるそういう彼岸の世界は、地上の生活がこれを決定する、ということは畏るべき真理である。こういうことは若い人々が真剣に想うべきことがらである。宗教に対して敬遠か、無関心か、ことさらの回避か。現代の教育の欠陥をゆゆしきことと思う。

「恐怖の王は死ではなく、赦されていない罪過と、その結果、陰惨な慰めのない神からの離反へと心ならずも転落することである。」

死を突破して永遠の生命の生活に入りたいのは誰しもの根源的なねがいにちがいない。それは、万人が本来宗教人であるということではないか。万人が宗教人であるなら、どうして平常神仏を相手の生活をしようとしないのか。永遠の生命の実質を既に現世において味わい知り、体得するに如かずである。神仏から離反しているような勝手な利己的生活をしていると地上の生涯が「さまざまな悲惨の、全く不要な矛盾だらけの総体となるであろう。」

祝福された存続生命（死後の生命）は、「より大なる完全性を目的とする活動また前進展開であろう。特に一切の事態が帰着する愛においての完全性を目的とするものであろう。」

死について、ゲーテがエッケルマンに語った一つの個所（一八二四年五月二日、日曜日）をここに紹介しておきたい。「そこで彼（ゲーテ）は非常に快活に言をつづけた。《七十五歳にもなると、ときおり死を思わずにはおられない。私は死を思うと全く安らかな心地になる。というのは、私の確信によると、我々のたましい（ガイスト）は全く不滅の性質をもった存在で、永遠から永遠

へと活動し続けるものです。それはあの太陽に似ています。太陽は我々の肉眼にはただ沈んでゆくように見えるけれども、あれは本当は決して沈むのではなく、絶えず輝きつづけるものであるように》と」。ゲーテも「完全性」を追求してやまない明るいたましいであった。この「完全性」という表現はゲーテの好きな言葉では「エンテレキー」（充満）であり、聖書的表現でいうと「プレローマ」（充実）で」それ神性のプレローマはことごとく形体をなしてキリストに宿れり」（コロサイ二・九）と事態をいう。東洋的表現だと「円現」といいたいわけである。

「神を信ずることは、永遠の生命を念ずることと密接に結びついている。そこで教会が、この永遠の生命をその信仰の教えの中で他のすべての教説よりも先頭に立て、永遠の生命の確信を人々のうちに力強く振動させないならば、ほとんど不気味にひろまりつつある無神論を有効に克服することに、現代の教会は決して成功しないであろう。……神なくしては、また神から遠ざかっていたのでは、個人においても国民においても、その生活に祝福という神秘的要素が欠ける。この祝福がないなら、何ものも栄えず、最大の興隆も最高の文化も遂にはただ禍害に陥り、破滅に終るばかりである。」

神自身が永遠の生命の主体であり給うから、信仰が本ものであれば、神自身と共に永遠の生命にあづかり得るわけである。しかしこういっても一般にはこれがどういう現実であるかがつかめない。具体的にはキリストという現に霊的実存としてある永遠の生命者につらなることが理実と

なっていなければダメである。それはどういうことか。それはヨハネ福音書第十五章に語られている枝と自分が成って、キリストという根幹につらなることである。ギリシャ語の「メネイン」という言葉がつかわれているが、「の中に止まる」とか「の中に宿る」とかいう語でキリストと「イン・アイナンデル」の関係、即ち相入関係に入ることである。それはどうして可能か。祈りの世界で聖霊を宿すことである。み霊なるキリストを宿すことである。聖霊が内住してはじめて永遠の生命の何たるかが体感できる。その場は私に言わせれば、飽くまで十字架のあがないの場である。自我のあがなわれたる現実をハタと受け入れた場である。あるがままの我にして、しかも我なき恩恵の無の場である。そこに無限無量の永遠の生命が宿る。仏道の南無阿弥陀仏と全存在をもって念仏する場と相通うものである。

ヒルティーがこの論説で用いている「霊的人格」というものは、このような祈りの現実を通して鍛えあげられてゆく。「人間の運命は、この現世の生涯だけのものとして理解されようとするなら、説明のつかない場合がいくらでもある。それでは宗教も哲学も慰安の利目をもちようがない。」だから、霊的生命をうちにもって、相対的現実の浮沈を超克し、絶対次元の質をもつに限る。来世に永遠の生命が待っているといった希望も、勿論艱難にうち勝つ一つの要素ではあろうが、それより大切なのは、力強い霊的生命力を現に有つことである。これは聖霊を宿さないと現実とはならない。そしてこの霊的生命力の質は愛である。ヒルティーは、パリサイ的な祭司や長

老たちに対して放ったキリストの鋭い言、「よく聴け、取税人や遊女は、汝らよりも先に神の国に入る」を引用して、「来世においては、現世で非常に軽視されていた人々が、有名な教父たちや現世で聖者と見なされていた人々よりも、しばしば高位におかれ、また先進しているであろうことも充分あり得るのである。問題は愛する能力いかんにあって、これのみが来世において判断の尺度を成すであろう。その他のなにものも問題とならないのである」と断じている。

ひとは、特に晩年においては、「心根を全く純潔にすることを努めるより優ってなすべき真剣なことはもはやないのである。」本当の平安はそこに生ずる、とヒルティーは語り、ゲーテの「旅人の夜のうた」を引用して、その歌に祈求されている「天来の平安」は、永遠の生命を信ずるところにのみあると結んでいる。

「財富、高貴、各種の名誉などのような外面的優越はみな、〈永遠の相のもとに〉観察されるならば、ただちに価値を失うことは自明の理である。」永遠の生命を信受することなくしては、「人道主義」や「博愛主義」を主張しても果を結ばない。教育も哲学も宗教すらも今生限りの相において論ぜられ、語られている限り徒らである。医学もまた「天治人療」をわきまえずしては却て人体を害い、ひとをして病気に対する恐怖、死に対するおそれを抱かしめ、過度の心労や保健に気を労せしめ、心身を疲らせる。

「無際限の享楽欲と歓楽。…無同情が原則となり、少数者の超人主義が台頭する。…生活の絶え

ざる焦燥と不安。…」これらのことは現代においていよいよ事実となっている。「絶望的な悲惨」の現象が瀕発している。反之、「人々は、この地上ですでに永遠の生命の中に在ることと、その精神の方向と心根とを自覚するいなや、直ちに自分の思索と行動が全く別様になっていることに気づくであろう。」

「自由意志をもってする愛で、神の意志と最高度に合一して生きた人は、地上に有史以来今日まで勿論唯だ一人、キリストがあったのみである。…彼の超現世的な全存在、その肉体死からの復活すらも、彼には自然的なことであって、世人が普通見なしているような並み外れたことでは決してなかった。それはまさに彼が絶えず神の霊に満たされていたからであった。神の意志に順うなら、程度は低くとも、われらすべてそのように成るべきであり、成ることができるのである。」

愛は一切に勝つ（『力の秘密』DAS GEHEIMNIS DER KRAFT）

『力の秘密』は一九〇九年の降誕節直前に出版されたもので、彼の召天はその年の十月十二日であったから、この小冊子は彼の遺言的著作で、しかも、その内容は、彼の全著作の奥義に済当るもの、正に生活と生命の「力の秘密」、力の源泉をとり扱っている。彼のたましいの本質ともいうべきものであります。

原文には番号も小見出しもないが、左のように区分してみた。

一、善への力は何か。二、現代社会の愛の欠乏。三、いかにして愛に生きるか。四、自己放棄。五、神に近づく。六、美の虚しさ。七、神への信愛。八、悪霊の実在。九、愛の力の増大こそ全世界の急務。一〇、現代文明爛熟の危機。一一、苦難の体験と愛。一二、愛には怖れなし。一

三、小さきものへの愛。一四、愛は一切に勝つ！

善をなす力、それは何か。体力か、知力か、財力か、思想か、社会政策か、国民経済か、国家か、憲法か、道徳か。否、これらのいづれでもない。「教養の有無に関わりなく、誰れにでも達せられ、いかなる特性も要らず。……その素質が第二の天性に成り得るほどに錬成可能なものであること要する」。そのような領域は宗教的なものの外にないようだ。ヒルティーはこういって現代最も大切なもの、否、凡そ人類が、そして人間が、最も必要としているものは何かの、根本課題に迫るのである。

「絶望と誇大妄想との間を動揺している我らの時代を、再び愛を目的として教育することは、今極めて主要な問題となってきたことが、私には全く疑いないことのように思われる。」すべての社会政策も愛が根底になければ「空談議に過ぎない。」

「世界は今や唯一の方法で救われ得るのみである。すなわちもっと愛が、それでもっと生命力が、もっと幸福感が、増大して再びこの世界に入りこむことによってのみ。」

「全世界とその利己的な精神とがすでに愛に逆らって立ちはだかっている」のに、愛はどのようにして育ち得るのだろう。愛、自己愛は誰でも持っている。しかしここにいう愛は、それとは正反対の愛である。単なる教育はこの愛を育て得ない。この愛は「超自然的援助」を要する。この

愛への「第一歩は自己否定」であるからである。「自分をいつも神の味方に立て、従って自分自身に対して反対党となる」ことがこの自己否定の道である。「神の味方に自分を立てる」とは神の力にあづかることを内容とする。「人間が性来もっていない愛（アガペー）」が神から来る。この愛が人間の間に本当の平和をもたらし、歓喜を呼び起こす力をもっている。いわゆる宗教的な、または起徳的な人は、ややもするとパリサイ的な傾向が強く、あたたか味を欠く。

しかしかえって欠点の多い人々が、一度び回心するやいなや、「聖者の域」に達することがしばしばある。そしてそういう人々が本当に天来の愛によって人を愛し、人を助け、人を救いへと導く。パウロもアウグスティヌスもアッシジのフランチェスコもその著しい証者であった。

キリストは、神を霊としてまた父として、親しく交った。神の実在性、現実性を実存的に体験するまでは信仰は本ものでない。信仰が本ものであるというのは、神の愛を現実に体受することと一つである。

これはヒルティーの言葉ではないが、「神は愛（アガペー）なり」とヨハネが言うとき、「人は愛ではない」ということである。自己否定とは実はこの自己認識なのである。神の愛の体現者キリストを十字架に磔けたという歴史的事実がこれを実証している。即ち自己愛（エロース）が神愛（アガペー）を否定したことである。十字架は人間のそのような罪性の象徴であると同時に、神の、キリストの愛の象徴である。十字架が自己犠牲の贖罪愛たるアガペーと、自己肯定のエロー

スとの象徴とは何たるおどろくべき逆説そのものではないか。十字架にこそ、エロースがアガペーの中に変質変貌する救の秘義がある。神愛を力として全身を貫いて動いていたのがイエスである。使徒パウロは、このキリストの十字架の愛をハタと受けとめ、ロマ書八章の後半でそのことを絶叫している。「力の秘密」は正にこの神の愛、キリストの愛にある。この十字架の愛と不可離であるのが聖霊の力である。実は聖霊の力の中に十字架の愛が解け込んでいるのである。現実の人間においてはアガペーとエロースは劇的有機体的構成をなしていることを一言しておこう。

ヒルティーが言う「神の近親感」も、具体的にはキリストの近親感が本ものとなるまでは難かしい。ヒルティーが一面においてパウロにおけるキリストの愛の力を認識しながら、パウロ的にキリストを告白せず、直接に「神の近親感」を強調しているのは、ヒルティーがキリストの神体験をそのままヨハネ的に受けとっているためであろう。そのような「神の近親感は一切の現実中の最も偉大にして、最も澄明にしても最も圧倒的な現実である」といっている。私に言わせていただくならば、聖霊に在ってのキリストの近親感である。むしろパウロと共に、「われキリストの中に、キリストわが中に」という内住感である。一如感である。しかもそれは正にヒルティーも言う如く、「全く自己の貧弱さを自覚させられ、神の近親を自分の価値に帰するようなことは思いもよらないものである。」

神、キリストからの愛は、反射するごとく神、キリストへの愛となって応え、且つ隣人や被造

物への愛として流露する。それが新しい自然性となってゆく。このような事態が現代に最も欠けている消息であるとヒルティーも言っている。神の愛は「永遠の焔」とも表現されるが、それは聖霊のことでもある。聖霊の愛の火は消えないどころか、何ものをも燃やさないではやまぬ力強いものである。そうなってくると、「神と共に生きる方が人間と共に生きるよりもはるかに容易である」。神には何ひとつ隠され得ない（詩一三九篇参照）。神には平伏して何でも打ち明けられる。そのようにして神に親しむがよい。神はそのような砕けた魂を審判し給わない。深い思いやりをもって認めたり、ゆるしたり、助けたり、はげましたりし給う。神を畏れ親しむとはこのことである。

そのような「打ち明けた心のほかに神が求め給うものは愛を措いてはない」。この愛は別な言では「信実」（TREUE）である。裏切らない真心である。これを信愛といってもいい。要するに信仰と愛が一如不二なのである。

人間が何故に良心をもちながら無力であるかといえば、悪の霊が、サタンが実在して、力をはたらかすからである。人間の中に「悪魔的要素」があることは事実である。社会の諸々の害悪、罪悪は、この悪魔的要素の複雑怪奇なはたらきによる。財宝、女色、名誉、権勢、武力などを、悪魔的な力がさまざまな方法で利用する。これに勝つものは、悪魔に勝ったキリストの力、神の力のほかにはない。要するに神仏の力によらねば、人間はこの悪の力には勝てない。宗教が絶対

に必要であることは自明である。現代世界は真剣に宗教への立ち帰りをしなければ危い。「単に教会制度の改革とか、新哲学とか、自然科学的認識とかが問題であるのでは断じてなく、われらは今や全世界に愛の力を増大すべき急務の前に立っている！」。

神の愛は苦難を通してその実力をあらわす。だから神の愛に生きる者は苦難を通して世に貢献する。その最大の実証者は何といってもキリストの福音の証者パウロであった。ヒルティーもキリストの「私の弟子となろうと思う者は、日々自分の十字架を負って私について来なさい」（マタイ一六・二四、マルコ八・三四、ルカ九・二三、ヨハネ一二・二五）という四福音書に明示されている「この一言を注目せよ」といっている。天来の力は日々新たに来る、日々新たに祈り求める人に！　祈りこそ「力の秘密」であるといってよい。祈りはキリストの中に自分を投入することである。聖霊の神秘の現実である。この聖霊の愛に「力の秘密」が宿っているのである。

この愛のあるところに怖れはない。聖霊の愛の内住しているところには恐怖も心配もその影が消えてしまう。それのみでない。人間の心に往来する諸悪がすがたを消してゆく。諸善もこの愛の中に渾然と融合される。この愛は罪に苦しむ者、泣く者に近よってそれを救い、パリサイ的偽善者どもの味方には決してならない。

この愛は、聖憤に燃える焼き尽くす炎である。この愛は社会的に卑賤な人たち、心身の弱者、虐げられたる者を深く思い遣り、それらの人々に力を与え、なぐさめを施す陽光となる。

「ひとはおよそ人間を見るに、そのあるがままのすがたをもってし、愛をもって忍耐深く祈求しなければならない。これがあらゆる教育と社交の原則であり、またその目的である」とヒルティーは明言している。

「郵便配達人、市街掃除人、点燈夫、……犬や猫」そういう存在に対する親しみの心、仕事は何でも愛をもってする、こういったことを実践し、且つ言及しているところにヒルティーの愛の奥床しさ、本当の人間味がある。

「ひとは人間を個人的に遇しなければならない。交際や教育には類型的鋳型はない。教育は芸術であって、教育者は芸術家たるを要する」とは味わうべき言葉である。

人生の諸々の苦難にうち勝つものは、天来の愛の力、これを体験体現した者が真の勝利者。しかもこの勝利は人を負かすことではなく、苦難を通して人を助け、世を担う勝利である。どん底の愛であって、人に、世に、何と評価されようとそういう相対界に絶した境地の愛である。

唯だ一人とどまるとても、
この人はうち勝たれ得じな。
これぞげに愛の力ぞ、
ものみなにうち勝つ愛よ。
「愛は一切に勝つ！」

AMOR OMNIA VINCIT.

これがヒルティーの最後の文字であった。彼の墓碑銘が永遠に語っている。

（一九七六年三月二五日記之）

ヒルティーの本質的なもの

誰か一人の人間の本質が何であるかを断定し得よう。しかし本質的なものが何であろうかについて私見を述べることはゆるされよう。その意味で私はここにヒルティーの本質的なものについて論説的にではなく、感想的に述べてみようと思う。

彼はその『眠られぬ夜のために』第一巻の三月二十六日の項で、「私が最もよく理解した人々は、キリストでありヨハネでありダンテである。……」といっている。この三人の名がまずあげられているところに彼の本質的なものをうかがう秘鍵を直観する。ヒルティーの著作が決して単なる頭脳の所産でなく、それは言の深き意味で実存的告白であることを感知するなら、彼の本質的なものは、あの頭脳の明敏にも拘らず、頭脳の面にあったのではなく、心魂の相にあったこと

を知る。そして彼の「最もよく理解した人々」が、やはり彼と同質的本質を具有する人々であったことは理の当然であろう。彼が劈頭にキリストを名ざしているところに、ある決定的なものを見たいと思う。キリスト――ヨハネ――ダンテという系譜は、歴史的にはさらにエレミヤへ、さらにホセアへと遡ることができよう。

キリストの使徒ヨハネと使徒パウロと使徒ペテロの三人をその本質的なるものに従って表現するならば、ヨハネは愛、パウロは信、ペテロは望の使徒であるといってよかろう。しかもこの三者は皆その源泉をキリストにもっている。あだかも太陽の白光が分光されると虹のような多彩の光を現じ、しかも紅、黄、青等それぞれ特殊性において白光の本源の光が内蔵され底光を発しているように、パウロの信とペテロの望とヨハネの愛は円環関係をなしてキリストにおいて焦点を結び、キリストという実存そのものに帰一する。それは論理的統一ではなく有機体的連関である。

ヒルティーがキリストを理解したというとき、彼の「理解」(フェルシュテーエン)はヘブライ的聖書的な「知」であって、預言者ホセアまたエレミヤにおいて深くそうであったように、人格的に、霊的に、全実存的に「知る」ことである。またヨハネ福音書一〇章一四、一五節の「私の羊はまた、私を知っている。それはちょうど、父が私を知っておられ、私が父を知っているのと同じである。そして私は羊のために命を捨てるのである」といった深い生命が生命を知る知り

方である。おのが意志をキリストの意志に全托してキリストの意志を知るのである。わが魂の呼吸をキリストの聖霊の呼吸の中で呼吸せしめて、キリストの霊生の呼吸を知るのである。パウロがあの「愛の讃歌」（コリント人への第一の手紙第十三章）で申すところのエピグノーシス（霊知）である。このような「知」はパウロにおいてもヨハネにおいても同じである。ただヨハネの知は托身的な愛の質であり、パウロの知は托身的な信の知である。そこに人格性の相異があり、把握の構造に相異が生ずる。パウロの「信」が、あのような罪の自覚を契機とした死生転換の、十字架、復活及び聖霊の深刻にして光輝ある信仰内容とその神学的展開の内実を豊かにもつ有機体的構造として独特の雄健さをもつものであるに対して、ヨハネ的な「愛」は、内感的、直観的に体受されまた体現される実存態として、身証的、実践的であり、それはまた共同体的に限りなく展開する霊的生命の相として神秘的な深さをもつものである。

ヒルティーは、そのようなヨハネと同じく、「キリストの胸によりそう」在り方に生きていた（ヨハネ一三・二三）。実にキリストのふところにその心は座を占めて呼吸をしていた。そのような在り方の秘密は、それではどこにあるのであろう。イエスは洗礼のヨハネからバプテスマを受けるまで、青少年時代の永い沈黙の時をどのように過ごしてきたか。そこにおいてイエスの魂が成長してきた秘義は何であったか。それはまさしく祈りのほかの何ものでもなかった。「時が満ちた」とは、イエスの側においてはイエスが祈りの人として充分の成長を遂げたことを意味する。

であればこそイエスの受洗は単なる水のバプテスマではなく、み霊のバプテスマとして、父より豊かに聖霊をそそがれ、サタンとの乾坤を賭する荒野の一騎打となったのであった。ヒルティーも祈りについて多くを語らない。彼が所謂「主の祈り」が徒らな空念仏になっている教会礼拝の現状を嘆いているのを見ても、所謂「お祈り」にはあきあきして、祈りについて多くを語りたくなかったのであろう。キリストのふところの中に、密室や山間のしずかな祈りで親しく祈り込み、聖霊のしずかな深い臨在、内住にあずかり、真の生命力や天的な智恵を賜り、そのような天的諸力の場において冥想思索し、豊富な体験と浩瀚な読書の果をよく消化し、変貌化体せしめ、さらにそれを地みちに日常生活で血となし肉としたればこそ、天来の権威をもった愛しみの心で真理を語り得たわけである。彼がこうした真理の告白を『幸福論』をもって世に訴え始めたのが五十八歳であったことを見ても、いかに彼の言が魂の祈りと生活の中から泉の如くあふれ出たものであるかを知る。

いかに彼がつねに新たに神とキリストに内奥の祈り心をもって近づいていたかは『眠られぬ夜のために』(I)二月十三日の項を読んでもよくうなずかれ得る。また彼の思索がいかに祈りと密接に関連していたかも彼の証言であきらかである(同書五月二十九日の項参照)。

神とキリストの愛を幼児の如く全的に受けて死に至るまで聖化栄光への道を辿り、死の関門を、旧約のエノクの如く、新約のパトモスのヨハネの如く、きわめて自然に通り抜けて天国に入

っていった彼の天的自然さは、彼の白髪の老顔にただよう童心慈眼にも予表されていた。彼はたましいの世界でのすべての矛盾も葛藤も、その豊かな教養も体験も実務も、すべて福音書のキリストの現前において聖書という溶鉱炉で溶解し、鍛錬し、浄化することを心得ていた。それはいわゆる分析でも総合でもなく、観念的な厳密さでも神学的な正確さによるのでもない。薬草や蜂蜜が不思議な治癒力をもっているように、無色透明な太陽光線が驚くべき生命力と浄化作用をもっているように、ヒルティーは全キリストの白光的な生命を呼吸して、信仰とはいかなる現実であるかを証示し、真理をよくかみしめて人生万般の事象に対して判断をくだし、ねんごろな愛の心をもって誰にでも道しるべの燈火をかかげている。彼はこのように「われは道なり真理なり生命なり」の主体たるキリストを身受身証するたましいであった。

彼はまたこんなことを喝破した。いわく、「われわれの思想体系などは神にとってなんら障害ではなく、神の霊の息吹きにふれればひとたまりもなくやぶれ去るクモのあみにすぎない」(『眠られぬ夜のために』II二月十一日参照)。ともあれ、彼の言説にカルヴィンのような神学的思想構造を要求するなら、それは要求ちがいである。それは丁度ヨハネにパウロ的な十字架の解明が欠けているといって非難したり、イエスの「放蕩息子」の譬話に十字架がないからキリスト教的でないと批判するなら、それは見当ちがいであるのと同然である。

いかなる天才といえども量的に神の完全に到着し得るものではない。イエスすらも地上ではき

わめて貧しきたましいであった。否、実に魂の貧しさのきわみ、無的実存であったればこそ、神という無限なる天国者が彼の中に来臨したのである。それゆえ完全性があふれていた。「幸なるかな、霊の貧しい人、天国はその人のものであるから」とのイエスの言は、根源的には実にそのようなイエス自らの実存の告白であったのである。ヒルティーもまたそのように、愛そのものなるキリストの中に浸って歩いていたこと、あだかも磁場の中の磁鉄の如くであった。彼のいう「幸福」も、そのように、天国を地上に体現する現在的終末の現実を証示するものであり、神の栄光の身証ということにおいてその真義を見るべきものであろう。そのような消息を語る言として、私は『眠られぬ夜のために』(I)の十月七日の彼の言を深く愛する。

「我ら一たび全く愛の国に踏み入らんか、この世がどんなに欠けたものであろうとも、なお此処は美しく豊かなものとなる。この世はもっぱら愛を生きるための機会から成り立っているからである」と彼の愛の魂は息吹いた。愛の国とは、キリストのみ霊の臨在し、内在するところであり、神的な無私の愛の体現される到るところに現在する現実である。すなわちそれは、一切の宗派や主義が黙し、世界観も社会説も、神学も教義も決定権をもたず、ただ誠心無私なる愛が体現される国である。神が親しくそこには共に宿るパラダイス的現実である。外的にはどんなに人間的な破れがあろうとも。しかし自己義認的なパリサイ的な偽善はこの国のものではない。

聖意体現を祈る無私の祈りの魂に白熱するこのような愛！　これこそ歴史の終末に、偉大なる

壮美なる大実存共同体を招来すべき原子核的なものである。これがヒルティーが生涯を賭けて証言身証した愛であった。個人主義でも全体主義でもない。目ある者はヒルティーの文字の奥から光ってくるこの愛の光を見、心ある者は彼の言の背後に滴るこの愛の涙を知るであろう。彼の墓碑銘の永遠の一言「愛は一切に勝つ！」とは、実に万人救済の悲願であり、キリストの本願を語るものである。悲惨なる罪の世を担いあげる神の小羊の愛の勝利である（ヨハネ一・二九）。かかる愛の芥種一粒となったヒルティーなればこそ、彼の言は百世に亘って、万人の胸に愛の灯を点じゆくであろう。

（一九五九年九月三〇日）

ヒルティー

眠られぬ夜のために（上巻抄訳）

○一月七日

侮辱する者をすべて赦してやれということは、我らの主の言行により、また我らの経験によって、疑いもなく確かめられている。すなわち経験によれば、執念深いにくしみは自分の内的生命を蝕み、にくしみの相手方よりもむしろにくしみを抱く者に、更に多くの害を与えるものである。

けれども時には、即座に完全に赦してしまい難いことがある。ところで、「自分はまあ赦してはやれるが、決して忘れるわけにはいかない」とか、「神があなたを赦して下さるように」とか、そういった言い草を伴う生半端な偽善的な赦しは、崇高な気持の人にふさわしくないことであり、このような赦しを安らかに受け容れたまわぬ神に対して冒瀆である。

そんな場合には、少なくとも暫らく復讐を棄てて、神にこれを委ねるのがはるかに善いことである。そうすれば神は、然るべき理由のある限り、適当な時期にきっと間違いなく、しかもきわめて適確に復讐をなし遂げてくださる。人間はこの方がしのび易い。そうすると傷ついた感情も、その感情がもはや復讐の計画で養われない限り、時の経過と神の恩恵によって次第に宥めら

れるものである。

ヘブル一〇・三〇、三一(1)。申命三二・三五。詩篇三七及び七三。イザヤ四六・一一、四九・二三、五五・一一、六〇・一四。エレミヤ一一・二〇。

たとい思想上でも他人と諍いをするな。これはしばしば実際の言い諍いよりも心情をいためつけるものであり、多くの内的な不安の原因となる。ユダヤの諺にもある通り、特に「おのが愛する者たちを怒るは、頭のてっぺんに狂気の種を播くものである」。

審くな

悪い人はすてて措け、諍いもすてて措け、
君が使命でないことはすてて措け。
君は知ってるか、神の救済の思念を、
神が誰れを回心させようとするかを。

神が彼らを救おうとしないなら、
君にとって充分ではないか。

彼らは恩恵にあずかり得ない
重い鎖をしょっているのでないか。

光も淡い幸福のさなかにあって
彼らはつねに禍害を憂いている。
その頭上には絶えず審判の
剣が懸っているのを見る。

彼らをゆだねよ、義しい審判人に。
君の道をためらわず往け。
神は凡俗な思想を抱く
時流作家ではない。

（1）「活ける神の御手に陥るは畏るべきかな」

○一月八日

「私は（今）これを忍ばねばならない、けれども至高者（いとたかきもの）の右の手は（やがて）凡てを変え得るのである。」[1] 詩篇第七七のこれらの言を、誠実な心と全き同感をもって賛同し得る人は、自分の苦難を乗り越えて、内的平安と平静に到達しているのである。それはストア学者[2]が教えるように、単に外見超然たるのみではない。ところがこれらも実際にはめったに起るものではない。

エレミヤ一〇・二四、一五・一一―一三。同胞教団讃美歌一七二。

あなたがのぞみまたねがい求めるものが、すべて直ちに成るというわけにはいかない。あなたにも他の人にも、あらかじめ生長し強化すべきものがなお幾つかある。そして恩恵の奇蹟の場合でも、多少は自然の道に従って行われねばならない。我々が何かを具有しているということは、自己感情にとっては唯一の主要事ではない。或るものをかち得るという確信、堅い信仰は、成就された所有にほとんど劣らぬものである。

「確く信ぜよ、君がため
最善がさだめられてあることを。
君が意志さえ妙えに鎮かなら、
なべての苦悩から解き放たれる。

時期が来たなら、神の救助は
力強くもつん裂き臨む。
君が悲嘆を恥ろうときが
はからずも来るであろう。」

（同胞教団讃美歌六三六）

（1）〔訳者註〕これは原典詩篇七七・一一〔邦訳では一〇節〕の本書ドイツ語原文を私訳した。邦訳では「その時わたしは言う、わたしの悲しみはいと高き者の右の手が変ったことである、と」とあって意味が全くちがう。原典の学的な読み方からは邦訳の方が真に近いが、ルッター訳はれそ自体として棄て難い味をもっている。

（2）〔訳者註〕ストアはキュプロス島出身のヅェーノーン（紀元前三三五―二六三）がギリシアのアテナイの中央広場の彼の講堂につけた名「ストア・ポイキレー」に由来しているが、ストア学派は実践倫理がその根幹で、認識論は感覚説であり、形而上学は自然的汎神論的一元論である。宇宙理性（理法）としてのロゴスが万有に遍在し、秩序、調和、目的の原理として働く。それは必然的宿命的であると同時に摂理でもある。人間の道徳は、宇宙理性の分身たる人間理性に基づいて行動するところに存する。即ち自然法と人間法とは相即する、合理性即合自然となす。そのような合宇宙、合自然、合理性の生活がアパティア（Apatheia）で、一切のパトス（激情）から超脱した心境で、これを道徳の理想とした。ストア的禁欲といわれるのもこの理念によるわけである。この派の主な人物は、ギリシアではクレアンテス、クリシッポス、ローマではセネカ、エピクテトス、マルクス・アウレリウス・アントニヌス帝、などである。

○一月二十八日

列王下五・一五―一九。ダニエル三・二八、六・二七。創世三・六、一六。[1] 文明国民の宗教史をイスラエル民族宗教史から全く分離することは、決して成功しないであろう。イスラエルの宗教は、我らの見解によればキリスト教においてその必然の「改革」を見たわけであるが、ユダヤ人はこれを不当な革命と見なしている。それはあたかも旧教（カトリック）の新教（プロテスタント）に対する関係に似ている。これらの歴史的対立関係が将来いかにしてさらに高き統一に融合されるものであろうかということを、読者自ら考えてみるがよい。この事が起るであろうことは確実である。何となれば、この三つの信仰告白はすべて全く同一の根源と出発点とをもっているからである。その根源と言い、出発点というところのものはすなわち「イスラエルの神」であって、唯一の「真の神」で、我々の表現を以てすれば、人間の理解力をはるかに超越した或る事実〔このような絶対界から相対界への下降的事実を啓示的事実という〕に関する唯一の完全な人間的把握というべきものなのである。「神に楯つく真似をする」ことはすこぶる容易で手軽なことである。今日これを敢てする多くの者は、権勢ある人間に対してはその半分の勇気もない。彼らは無神論を厳罰に処するような国家秩序があったとしたら、その中では沈黙してしまうであろう。しかし我らは、彼らに詳しく定義づけられた神の解釈のいかなるものにも反対する或る種の権利を保有するという相対的是認を、彼らに拒むことはできない。なんとなれば、このような神の解釈はいつも余り

にも偏狭な、従って誤ったものを伴っているであろうから。神は全く確かに、かつて人間が考え出したあらゆる「神の概念」よりも無限に偉大なものである。

それ故に今日は、我々の教義学や哲学を全部押除けてしまって、我らの子女に単純に歴史的な「イスラエルの神」と「キリストの神」とを信ずることを教える方が善いと思う。この神は、すでに古代の最も強力な諸王すらも是認することを余儀なくされた事実的出来事において自らを証明しており、今日もなお全く同様におのれを感知せしめる神なのである。

道徳的世界秩序が、昔も今も自由意志性に基づくものであり、この自由意志性あるがゆえに、悪も善も生起するにまかせて、善が全く善であるときにのみこれに勝利を保証し、時にはまた悪によって悪を滅ぼす術を知り、「死者をして死者を葬らしめる」[2]ことができるものである。ということは、如上の神にのみ相応わしいことであって、これは我々にはしばしば、この小さき我々人間どもの倒錯した在り方造り方に対する崇高な皮肉のように思われる。この我々小さな人間どもは、そのはかない「哲学」や「政治」をもってこれを変え得ると思っているのであるが。詩篇二・一―四。出エジプト三・六、一三―一六[3]。

（1）〔訳者註〕創世三・六、一六は出エジプト三・六、一六の誤記と思われる。モーセに自現したヤハウェーの言で、独一の啓示神、歴史の主宰者たる神が、モーセを選びの器として召命した重要な個所で、この場合、引用個所としてふさわしいわけである。

（2）この句は実はギリシャ語原典の誤謬で、アラミ語（キリスト自身の言葉）では「死者は葬儀家に葬らしめ

よ」であった。（第一巻『無者キリスト』七八頁参照）

（3）〔訳者註〕「わたしは在つて在る者」、「わたしは在る者」というヤハウェー（イスラエルの神）の名のり出でが示されている個所で、極めて重要。この「在る者」という邦訳の原語は「ハーヤー」という語源から来る語で、一般に「存在する」の意とされている。「ヤハウェー」というイスラエルの神の名（従来の邦訳で「エホバ」と訓んでいたもの）も、同じく「ハーヤー」から由来するものと解せられる。「ハーヤー」からの派生語名詞たる「ヤハウェー」は「存在者」「実在者」で宜しいわけだが、むしろ「実存者」という訳語を以て啓示神たる性格をあらわすべきものと考える。そしてこの「実存」の意味は、「わたしは在る者」、「私は（自他を）在らしめる者」、「私は自現する者」。従来の訳「わたしは在つて在る者」ではなく、「わたしは在らしめて在る者」と訳したい。それはヘブライの文法的に必ずしも無理ではない。「他を」の場合は「在らしめる」のであるから、《der ins Dasein Rufende: Schöpfer》創造者の意となり、再帰的な意味をふくめる「自を」の場合は《der sich offenbarende, eintretende, lebende Gott》生ける啓示神の意となる。そしてこの啓示神は同時に創造神であるから、この両義は実は不可離で、「ヤハウェー」は啓示、創造、実存の神の意となる。これは聖書神学的に正しく、ヘブライ語の弾力性からみても考え得られることである。

○二月四日

厭世主義者（ペシミスト）(1)は言う、世間にはどうも愛が余りにも少なく、利己主義（エゴイズム）(2)が余りにも多い。だから我らはこの憐れむべき人類を見棄て、これを軽蔑しようとおもう、と。

前提は論議の余地もなく正当であるが、結論はそうではない。だからこそ、少なくとも我々は能うかぎり、愛を増し、利己主義を減じたいとおもう。

しかしながら次のことは絶対に確実であると思う。すなわち、あなたがたが何ものにも優（ま）して

神を愛し、従ってまたすべての被造物を当然優しくいつくしむ或る別な心を得るのでなければ、あなたがたが宗教とか人道とか人類愛などについて語るところはすべて、むしろ空虚な喋舌である。そうなると、人間の本性の基を自然的利己主義に置いている唯物主義の方が、あなたがたが教会的にものを考えるか否かを問わず、諸君にとってもより多く真相に忠実な思想体系である。この「別な」心のみが能く利己主義に打ち勝つのであるが、これは誰れも生れつきもっているものでもなければ、また経験によれば、思索や意志のいかなる努力によっても得られるものではない。これがすなわち、人は人間知識と生活経験とをもちながら、何故に人間の外部に立つ力による解放とか「救贖」を受けねばならぬかという理由である。この救贖は、ともかくすでに旧約聖書に幾回となく約束されているところである。

イザヤ四八・一〇、六五・一七―二四。六六・一二―一四。エレミヤ二四・七、三一・一―一四、三三。エゼキエル一一・一九、二〇、三六・二六。

もしあなたがそれを体験しなかったら、誰があなたに説明しても駄目である。だがこれは誰でも体験し得るのである。

なるほど印度の或る賢明な言はこう言っている、「無知の半分は思想の交換によって打開される。残余の半分は哲学の精進で駆逐される。その余りはすべて自己省察の光の中で消え失せる」(ヨガヴァシシュタ)。まあやってごらんなさい。だが私はあらかじめ言っておこう。この方法で

は、なお依然としてあなたにとって不満足の著しい残骸が残るであろう。

（1）〔訳者註〕厭世主義者《Pessimist》この語の語源《pessime》（ラテン語）は「最悪」を意味し、何ごとも悪くとって、この世を徹頭徹尾邪悪なものとする悲観論者である。悪の首魁はサタンであるから、ものごとを悪くとることは自らサタンの配下に入ってゆくことになる。これと対照的な者がすなわち楽天主義者（オプティミスト）《Optimist》で、《optime》「最善」を意味する語から来ている。ライプニッツの楽天主義は有名である。しかし、真の楽天はキリストという天国体を信受するキリスト者に臨む。またキリスト者は、キリストなくしてはおのれが罪のなわめから解放され得ぬ「最悪」の事態の者であることをも知っている。

（2）〔訳者註〕利己主義《Egoismus》は、ギリシア語の「エゴー」（「我れ」）から来た語。「自己」「主我」の意義で、要するに生れながらの人間は、利己主義者である。それが罪の罪たる所以である。被造物たる人間、その本質が神の「似すがた」と言われる人間が、神の意志を行わんとせず、自己の意志を立てんとするところに、罪がある。この自己を主張する心に対して、天意を求め天愛に従わんとする「別の心」こそ、真の天的自由を与えるものであることを著者は指摘する。

（3）〔訳者註〕「別な心」《ein anderes Herz》サムエル上第一〇章にサムエルの執り成しによって、サウルに「新しき心」が与えられて「新人」になったことが書いてあるが、キリストの霊が新たに臨むことによって「新生」するとき、この「別な心」が来たわけである。パウロが第一コリント一五・四七で「第二の人」といっているのも、この「別な心」の人のことをいう。ヨハネ第三章でイエスがニコデモに、「人新たに（上から）生れなければ」と諭されたのも同じ事態である。

○二月二十四日

人間のあいだの友誼と愛情とは、この関係の最良の場合ですらきわめてしばしば起るように、上品な享楽欲に堕してはならない。むしろつねに相互の内的進歩を眼中に置かなければならな

い。

急激な内的進歩は、強烈な震憾的事象[1]を通してのみ起る。それゆえ、そのような進歩を望むならば、このような震撼的事象に出遭うことをひどく懼れてはならない。

（1）〔訳者註〕その決定的なものは聖霊のバプテスマである。

○二月二十六日

人間のあらゆる性質の中で最善のものは信実（Treue）である。信実は、ほとんどあらゆる他の性質を償うとも、それ自身は何ものによっても償われない。

この性質は、遺憾なことに、人間にはむしろ稀に、動物にはよりしばしば見られる性質である。従って人間はこの重要な点で、事実、動物に優っていないわけである。あらゆる他の事にもまして、このことがあれば、生きとし生けるものの段階的発展の可能性を私は納得し得るであろうが。

また概して言うと、高等動物よりも人間の方が恩を知ること稀である。それ故に他人の感謝を期待しないがいい。しかし自らはつねにその名誉ある例外者でありなさい。忘恩の最も普通の形は、訪問とか、その他あらゆる感謝の義務の「是認」をもってすでにその義務を果したと考える

ことである。君主国家において勲章授与という形でなされるが、それによって関係はかえって逆にさえなるのである。このような余りにも安価な支払を、できるだけ避けて、むしろ貸したままでいなければならない。

○二月二十八日

いわゆる「内的な戦い」というものは、きわめてしばしば、人間の我意の、これに対立していることの瞭かに認められる神の意志への戦いのほか何ものでもない。しかも我々はその際、神を我らの意図に賛成せしめ得ると思っている。民数二二、三一・八、一六。

舟出

事は起った。私は此世を立ち出でた！
その杯は千々に砕けた。
わが小舟は岸辺を離れた。
水涯(みなはて)にかそけくも陸(くが)がほのめく。
見渡せば路もない奇(くす)しき海よ。

わが嗣ぐべきもの今よりは希望一途。
わが地位は君らの執るにまかせよ。
君らに現世はあれ、わがために聖国開けよ。

私は敢てした、久しい課題を、
悩ましき時間を経て熟慮ったことを。
わが巡礼の舟あしは陸に着くまじ、
永遠の祖国を見出でるまでは。

月桂の枝はわがために花を咲かせない。
柏葉の環もわが額を飾らない。
この世かぎりの労作はいたずらである、
永遠の冠を私はなお見出で得るのみ。

遙けく高きこの目標夢ではないか。
霧にもまがうかの線条は岸ではないか。

よし然るとも、私は崇高い戯事に耽るのではないか。
この荒い大海原を越える道が果してあるのか。

小暗い舟路の果に荘厳の神都を見得るか。
患難はいかに重くとも、私はこの路を往かざるを得ない。
汝、わが生みの故里よ、地よ、いざさらば！
苦痛は暫しだが、歓喜は永遠である。

（1）〔訳者註〕一八三三年二月二十八日はヒルティー誕生の日である。しかし彼のたましいはここに第二の誕生を詠っている。

○三月一日

利己主義は、宗教と一致せざること最もはなはだしいものである。それゆえに我々が、どんなものでも正当にかつ心安らかに所有しようとするならば、それをば必ず一たび（少なくとも内的に、しかも時には外的にすら）明け渡して、さて新たに神から返していただかねばならない。それほど宗教とは相反するのである。財産、栄誉、名声、健康、働く力、家庭、生の喜び、皆そうでないものはない。然り生命そのものすらこの例外ではない。もしこのようにして神から受けとるのでなかったら、すべてこれらの財がかえって我らを破滅に陥すこととなり得るのである。これがい

わゆる「試煉」の意味である。それは、我々が果して自発的にこのことをなそうとしているのか、またなし得るかを試験するものなのである。創世記第二二章(1)。

これらの試煉はこの断固たる善意志をもって終局にまでもたらされないかぎり、その役割を未だ全く果したとは言えないのであって、神が我らに恵み深くあられるなら、試煉はその役割を止め得ない。人間がついに不平を言うことをやめないものだから、神が試煉を早期に終らせたり、あるいはそれどころか、その人が全く休安に置きっ放しにされるならば、それはまことに善くない徴候である。このような人は、神に見棄てられた人で、確かに破滅に向っている人である。それにもかかわらず、彼らはしばしばこの世の幸福者と見做され、また時には全く自分でもそう思い込んでいるが、目ざめた時にはもう遅すぎる。

(1)〔訳者註〕信仰の胸突八丁ともいうべき記事。すなわちアブラハムが独子イサクを神に献げる劇的場面である。

弥生の雪

冬去りて
春も来がての中間時、
生命と大気と光を求めて

わが心死ぬばかりなり。

すべてわが思念
深き抑圧に蔽われて、
苦悩と憂慮と重き仕事の
軛の、われをさいなむるあり。

大地はその旧き苦悩をもて
我を深く圧倒す。
花を夢みて春を謳えば
新たに散るか雪の華。

さあれ、雪に埋もれて
緑の芽生頭を擡ぐ。
主よ、汝が秘かなる計らいは
必ずや現われざるを得じ！

今ひとたび降り往け
（ヨハネ黙示三・一）
高嶺を去りて最と深き谿底に往け、
今ひとたびの降路を敢てせよ。
遍歴のため汝が心根をまたも鍛えよ、
安息の冠は未だ汝が有ならず。

汝が志操なお堅からず、汝が思念明らかならず。
主は汝が鍛錬を解くを得ず。
行いて獲るを得ざりし賜を、
苦難に甘んじてこそ捉えんとせよ。

○三月十二日

晨より夕に至るまで、つねにただ神の意志のみを行えよ。そうすればあなたはすでに地上において、現世の目まぐるしいこと、歯車のような生活の迷路からあなたを天上の国へ導き入れるア

リアードネの紐を手に持っているというものである。

神の意志が必ずしも直ちに明白でない場合にはあなたは神の意志を探し求めなければならないが、その探し求めることの中にすでに祝福があることに留意せよ。

○三月十三日

最も幸福な生活においても試煉と憂慮とはなかなか多くあるものであるが、これを堪え難い重荷と見るか、それともおのが主義を実行し修練するために神から賜った機会と見るかは、ものの感じ方にとって大きな相違である。しかも結局すべてはこのような感じ方如何に関わるのである。

この後者の把握の仕方はただ信仰をもってのみ可能なことで、またそれは信仰のもたらす最も著しいプラスの一つである。

希望(のぞみ)

十字架は重い、けれども不思議だ、
それがきみを担っている、きみはそれをほとんど担わなかったのに。
最初(はじめ)は真っ暗だ。けれども終末(おわり)に

真昼が待っている。——そこへ到る路の名は「断行」。

我らの力微なりとはいえ、きみの托身している
主の力は偉大である。
きみの星は闇の夜に輝ようている、
「今日」に死んだね——「明日」は生命だよ。

○三月十五日

イザヤ三〇・一五、一八(1)。

主は、あなたのために恩恵を施し得る日を待っている。だからあなたは決して心配したり、将来の計画を立てたりして、そんなことで大事な大事な仕事の時間を沢山無駄に費してはならない。神を信じて、神の道を歩こうと率直に励むならば、万事はひとりでに、しかもあなたが自分で考えるよりははるかに甘く行く。かくして生活は非常に楽になってくる。というのは、来るかも知れないと思って不幸を心配することは、実際に現在していてそれを耐えなければならない不幸よりもはるかに多く人間の力を消耗させるからである。不幸はしばしば外的な手段や努力で打ち克つことができるが、心配は神に対する力強い信頼によらなければ根本的にこれに勝つことは

出来ない。この経験は誰でもなし得るところである。

ところが、全く敬虔な人々の中にもまた、その誠実な篤信にも拘らずなお多くの絶え間ない思いわずらいの中に生活し、剰えきわめて多くの事柄においてやはり世間並の道を歩んで、特に地上の財宝の評価に関して世間と見解を同じうしている人達がある。この最後の点は別としても、きわめて敬虔な心ばせをもちながら、そういった類の富裕な身分の高いキリスト者が今日非常に沢山いる。これらの人々のもとに、神がともかく暫らく待つのは、たしかに明かな恩恵のしるしといわねばなるまい。なんとなれば、人は神と財とに同時に依り頼むことはできないからである。一か他か、どちらかが心の中で席を譲らねばならない。そこにはいかなる「和解」の道もない。

あなたがたのなやみをすべて主に投げかけよ。
主は、あなたがたのために心を用う。

汝が家族のための思いわずらいを、
キリストにゆだねまつれ。
汝がなし得るはただ思い計らいのみ。

主は往く道、行く末を瞭かに知り給う。

主は憂慮をば好み給わざれど、
汝が捧ぐる祈りを喜び聴き給う。
汝一策を案ずるのみなるに、
主は千策を計り給う。

かくて誰れも勝手気ままに
汝を害うなからんために、
キリストは人の心を流水と導きて
汝に恩恵を賜うなり。

苦しみも喜びも彼の聖手より
安んじて享け、断じて気を落さざれ。
主は速かに　汝が運命を変え能う。
そを嘆きなば、汝が運命はいよいよ悪し。

苦難の汝に来たりしは、理由なく
汝をくるしむるためにはあらず。
ただ信ぜよ、まことのいのちの
植えらるるは、悲しみの日にこそ、と。

（1）「主エホバ、イスラエルの聖者かく言ひたまへり、『汝ら立ち帰りて静かにせば救をえ、平静（おだやか）にして依り頼まば力を得べし』と」（イザヤ三〇・一五）有名な聖句でルター特愛の句の一つであった。

○三月二十五日

いつわりの平安とまことの平安

（タウレル、説教第一二六）

主よ、汝が民が
胸底の深みに抱く平安は、
黄金の高杯に似たりとも、
盛られし水は苦味に満つ。

人の世の旅路は、
休らうためのものにあらず、
ここに休らいを求むるも甲斐なし、
憩うものは滅びん。

人生は、その始めよりおごそかなれ、
たわむれごとの場もなし。
ただ一つある休安は、
大なる目標の確かさのみぞ。

主よ、わが願事を、聴きたまわば、
もはや我が平安を希うまじ。
我が眼は、もはや休安に晦まざらん、
与えたまえ、勇者の力を。

ここ、諸敵のただ中にして

難き仕事の戦いをせん。
天上の祝福の幕屋にて、
我れ、平安の棕梠を翳さん。

○三月三十日

巨人クリストフォルス(1)の如く、断固としてただこの世の最大の主にのみ仕えねばならない。さてその最大の主とは今日、物質的進歩と享楽であるか、学問であるか、芸術であるか、あるいは祖国とその代表者（国民または統治者）であるか、あるいは人道であるか、教会であるか、それとも神とキリストであるか。

これについては自ら決定せよ。しかる後に、正しくかつたましいを尽してこれに仕えよ。

（1）〔訳者註〕第三世紀の伝説的巨人で、「キリストを担う者」の意。生れたのはシリヤ、或る隠者に導かれて改心し、神の愛を体現せんとて、橋なき川の渡守となった。或る日のこと、一人の幼児を背にして川を渉り始めたところが、川の真中にさしかかるや、その小児の重さが遽かに増して、さしも強力な彼が一歩も進めなくなった。その小児こそキリストの顕現であった。その場で彼は洗礼を受けた。それは彼の平生の愛の労苦に対するキリストの応顕であったと同時に、彼が殉教の死を遂げる予告でもあったと思われる。彼は手に持っていた杖をその地中に植えるように告示された。翌朝その杖は棕梠の樹となっていた。彼はカトリック教会では、渡守や航海者の、また急の厄災の守護聖者として憶えられている。

○四月一日

偉大な思想は、大きな苦しみに深く溝を掘られた心の地底からのみ生ずる。このことが嘗て一度も起らなかった処には、或る種の浅薄さと凡庸さとが残る。それはいくら竹馬に乗って背伸びをして見ても無駄である。その竹馬が、宗教的なものでも、科学的なものでも、あるいは哲学的なものでも、あるいはまた人間的な方途や性情でも、無駄である。けれども、誰か余儀なくされることなくして、みのりは豊かだがおそれにみちたこの道に、自ら踏み込む勇気があろうか！また誰か神の聖手の導きなくして、しばしば道に接して間一髪なる深淵のほとりを辿りゆくであろうか！

大いなる深淵より

いざ来れ、海の潮と苦がき死灰よ、
今しまことに汝れは立つ陰府の門べに。
旧き人横たわるなり今際の痛苦に。
新しき人吐息つく、生れしばかりに。

人聞きも、うたてしき地へ道は往きけり、

あらゆる埒の彼方なるおそましき地へ。
漂泊えり、我ら今まで深淵のほとりを、
闇の夜に言い知れぬ想いを抱きて。

決断の降れるを今我れ覚えたり。
妄想の域へこの道は導くなれば。
後方には、はやうつし世の背き去るあり、
我れ刺を得ぬ月桂樹の冠に替えて。

ひたぶるに嘆く心に救を賭して、
わが救主！　汝れにこそこの身をゆだぬ。
戦闘も栄誉も共に汝れがものなり。
死を賜え、主よ！　いざ汝れの生命に生きん！

○四月十四日

「かくせざるを得ずという人のみが偉業を成し遂げる。」これは何たる真理であろう！　それゆ

え我々はしばしばこの「かくせざるを得ず」という境地にわが身を置かなければならない。従って、或る偉大な決意について予め熟慮し、そして、いよいよそのことをなすべき当意と、またなさねばならぬ必然が瞭らかになったら、断固としてそれをなさねばならない。なんとなれば、人間の生涯の最大の瞬間には、つねにある種の悔恨の念かあるいは平常の自然性への復帰が伴うものであるから。これは一つの反動で、やがて堤防のような牢固たる事実に突き当って破れざるを得ない。このようにしてはじめて勝利が得られたというべく、それはこのように決意し行動してこそ容易に達せられるわけである。

○四月十五日

今日は誰れももはや他に仕えることを望まない。まず第一に神から、次にはいずれの倫理的世界秩序からも、いずれの国家秩序からも、いずれの教会からも、いずれの家庭的な絆からも、自由でありたいとのぞんでいる。しかし彼がそのことをある程度達成すると、そのときは空虚の感情に、あるいは野卑な享楽欲に、あるいは陰鬱な厭世主義に陥り、この最後のものは破壊欲にまで亢進することがあり得るのである。(1)

彼はこれとは反対に、自分自身から、彼の情調と性向から自由になることから始めるべきである。しかるのち自ら進んで神と地上における神の大なる事業に仕えるべきである。これが幸福に

到る道である。

人生の学校における最上級は、今やもはや自己の改善に意をもちいることなく己を全く他人の福祉のために捧げよとの天命を受けたときに、達せられたというものである。(2) 我々が想像するところの来世の生活では、おそらく絶えずそのような在り方であろう。

(1) 〔訳者註〕二十世紀の始めにヒルティーが感じていたこの精神状況は、今日民主主義をお題目としているわが国においてもっと一般的な事実となっている。民主主義は身勝手主義の如くである。

(2) 〔訳者註〕ヒルティーと同国の大教育家ペスタロッチも「ただひとのためにのみ。自分のためには何ごとも念わない」ということを生活のモットーとして実践した。

完成

（ローマ六・二三。ヨハネ七・三八。ダンテ煉獄篇第二八及び二九歌）

踏破されたり、汝、辛くして嶮しかりし路よ。
汝、月を経、年を重ねし不安の旅路よ。
キリストの血による恩恵(めぐみ)を、此の身親しく
我れ享けざりせば、夙に踵(くびす)を返せしならん！

然り、血に報ゆるに血！　地獄は所詮免れず、

現世はおのが財宝を易く放たず、
贖代は大にして資力及ばず！
かくては誰か自由をかち得ん。

自由を得んとせば、自由に死せよ。
汝、身をゆだねて神の僕たれ。
これが報酬は此処にては日々の糧、
彼処にして永遠の霊に永遠の生命ぞ。

かくて汝は自由なり、されどただ一つの軛、
愛の絆の強く汝を縛るあり。
かつて想いもよらぬ道なれど、さりながら——
人生のさちとめあてを汝れは見出でぬ！

小径はややに登りゆく、直くあきらかに、
疑惑も回顧も歩みを止め得ず、

嶮しき路も深き淵も危きを脅かし得ず、
狭霧も目標を昏まし得じな。

陽は赫々とさし昇り、
その歓喜の光もて汝を照らす。
主よ、救主よ、汝にこそ感謝を捧ぐ。
汝わがために血を敢て濺ぎ給いし。

汝貫けり——この心ことごとく汝がものぞ！
我も進みてこの意思をぞ汝れに捧げぬ。
汝恩恵の業をひき受け給いて、我をして
ただ汝が中にうつし世をわが終業まで生かしめよ。

真理と力に燃ゆる聖霊
この空しき器にそそぎ入れかし。
聖霊の彼処その仕事場に作し給うものを

あまねく人類の上に溢れしめたまえ！

○四月十七日

人間の身体が、善なるもの真なるものを健康に有益なるものと感じ、悪や不誠実や不純を、これらがどれほど快き形態においてであるにせよ、これらを蔑屈また不健全なものと感ずるに至ってはじめて、その人は彼があるべき、また最善の場合には、あり得る人間となったのである。それまでは最善の原理によるにもかかわらず、なお悪の影響下に立っている。キリストはヨハネ六・五三―五六[1]の言でこのことを意味されたのであるが、これはユダヤ人からは逆理矛盾の教説として受けとられたのである。しかもこれがまたドイツ神秘主義者達の捕捉し難いあの箴言のしかも首肯さるべき意味である、曰く、「具体はあらゆるものの終局である」。

（1）「まことにまことに汝らに告ぐ、人の子（キリスト）の肉を食はず、その血を飲まずば、汝らに生命なし。わが肉をくらひ、我が血をのむ者は永遠の生命をもつ。われ終の日にこれを甦らすべし、それわが肉はまことの食物、わが血は真の飲物なり。わが肉をくらひ、わが血をのむ者は、我に居り、我もまた彼に居る。」〔訳者註〕聖霊のバプテスマによって新生した霊は霊肉を衣せられるからである。肉体が霊体として甦ったのがキリストの復活体である。

○四月十八日

かつて哲学とか神学とか呼ばれていたすべてのものが、真理性が半分しかない言葉たるにすぎ

ないまことに貧弱なものとしか思えないことがしばしばである。それらの言葉は、その表現しようとする事柄の本来の根底に、到底達することが出来ないのである。

ところが、このあらゆる人間の知の暗闇の空に、経験の事実が輝いている。これは自分自身の生活から出て、しかも現実的にしてあらゆる神学哲学の記述の試みを超越する偉大な神についてもつ経験で、それは永遠にして動かすべからざる、しかもあらゆる人間の解明を越えた崇高な真理の星辰の如く燦然と輝いている。

ただかかる経験の事実からのみ、確固たる信仰が生れる。しかもこれは深い神秘主義であって、これを自ら体していないどんな人によっても正しく理解されないものである。他の人々にはこれは一つの「愚」であるが我々にとっては神の力である。

○四月二十七日

もはや快楽を求めない事がなんたる人生の快楽であるか、という事を自ら試めすことなしに人々が信じ得たならば、彼らは皆例外なく、この流儀に改変し、世の中は一遍で改まってしまおう。

人生の大きな危機に際して、我々は常にまず敢行しなければならない。そうするとそれが可能となり、終にはそれが正当であったという見解が生ずる。

新しき国土（くに）

船路果てたり、我れあえて
小暗き潮を渡り来ぬ。
霊どもの船、我をよく
新しき国に　運び来ぬ。

珍らしき国　別の星、
地の楽園と　名づけんか。
いと近くして　いと遠く、
これを知る者　尠（すくな）かり。

遙か彼方（かなた）に　残されし
旧き生活（いのち）の　痛苦（くるしみ）よ。
我れを棄つるを　「幸（さち）」といい、
「聖栄（はえ）に生くるを」　生という。

心よ、これが　祖国ならば、
汝は敢て　欲するや。
外の絆を　棄て去りて、
自由の大気に　耐え得るや。

此の大地より　たじろぐな、
此処こそ汝の　全治の地。
光となりし　聖徒らの
足跡著るく　見ゆるかな。

つねに新たに　自己に勝ち、
歓び躍れ　晨ごとに。
苦しき時期は　はや逝きぬ、
闇は消え果て　光来ぬ！

○四月二十八日

実践的にいえば、人生の重大事は、つねに自己の義務を遂行し、これに反対するいかなる心の傾向にも異議にも多く心をもちいまいと一たび決定的に断固と決意することである。しかるのちさらに、このことを成し得るためには、神を信じ、神と絶えず結びついておらねばならぬという確信が生じてきたならば、事は成り、心は堅確となったのであり、直道はそこに開かれてある。しかし、義務の遂行と神との結合のこの二事が現実とならぬかぎり、宗教と道徳につき、いかに夥しい論議を云々したところで、それはほとんど全く空しい騒音にすぎない。

○五月一日

神は彼の子らのために試錬の炉を決して熱すぎるようにはしない。それとは全く反対に彼はいつもきめられたものより幾らか軽減する。人間もまた、彼らがなすべき以上に毛一条ほども越えて神の子らを害することを許されない。

私は私の生涯のあらゆる困難な時期において、その時期は本来更に幾分長びき、あるいは辛くあり得たであろうしまたあるはずであったという確かな感情を抱いたということを自ら証言することができる。それ故に「さあ、元気よく跳び込め、余り深くはないだろう」といえるのである。

サムエル下二四・一六(1)。歴代上一六・二一、二二。サムエル下一六・一一、一二。

(1)「天の使その手をエルサレムに伸べてこれを滅さんとしたりしが、エホバこの害悪を悔いて民を滅ぼす天使にいひたまひけるは、足れり、今汝の手をとどめよ、と」

五月一日

五月はじめの曇り空、
憂うるなかれ、わが魂よ。
天に向いて霊は熟む。
か弱き殻は震うとも。

終末善ければすべて善し、
いつか必ず死は来たる。
労を惜しまば、生命失す。
いざわが心、世を棄てよ。

誠にいつか黄昏に、

汝、見えん神の陽に。
道はいかほど遠くとも、
信頼みてぞ往き着かん。

既に半ばをうち越えて、
この巡礼の径を経し。
されど未だに受けざるは、
この労働の酬いなり。

汝頭を擡げなば、
栄光の冠を見るを得ん。
汝れを迎えん聖徒らの
合唱の群をも見るを得ん。

呟きもなく旅を往け、
汝れが命数を確く執れ。

旅をつづけよ午さがり、
平和は招く黄昏に。

○五月七日

人間の内的発展もまたもちろん全く段階的なものであって、特殊な天才的素質の人間を除いては、著しく急激な進歩をなすものではない。我らはむしろ自己自身に対して忍耐をもつことを学ばねばならない。確かな高所はいかなる時に達せられたというものであろうか。それはすなわち、自分自身のことを考えたり、すべてのことを知らぬ間に自分の福祉や愉楽の目安に従って判断したりしていることを、全く自然になんらの努力なく放棄することができ、むしろ自己をある偉大なる理念の僕(しもべ)としてのみ観るに至った時である。このような人間を聖書は「神の僕」と呼んでいる。

イザヤ四九・一―六、五〇・四―九。

○五月十一日

すでにボエティウス[1]は彼の有名な論文『哲学の慰め』(五二六年)において、人間は神の生活に参与することによってのみ真に幸福になり得るということを詳論しているが、以来ほとんど千五

百年を経て、なお誰れにとっても、このことに変りはなかった。

このことに際して特に称美すべきは、神が人間のように欺かれないということである。それ故に彼にいくら形式的にだけ接近してみても、曇れる心に太陽の光を呪い入れることはできない。またいかなる宗教的熱狂や感覚的刺戟も、この目的を達することは出来ない。神の身近かに在るということは、これらとははるかに事情のかけ離れた、むしろ全く独特な平静にして平安に満ちた感情である。

出エジプト三四・六。列王上一九・一二。

それでいて、この神の身近かに在るという実感は、あらゆる人間的感情の中で最も強烈なるもので、しかも他をはるかに凌駕している感情なのである。神の共在のこの実感が、心の完全な満足に対してのみならず、またさまざまな抑圧からの精神の高揚と解放とに対して及ぼす作用たるや、友情も恋愛も、その他いかなる感情も到底比較にならないのである。しばしば引用される聖アウグスティヌスの言[2]は、それが全く真実であるには、この点でなお重要な補足を必要とするであろう。

このような力をもった感情が、ある実在的対象から出てくるに相違ないということは、これを自ら知っている人々にとっては、別になんら証明を要しない。彼らはただそれを知らなかった過去の日を残念に想うのみである。

（1）〔訳者註〕ボエティウス（Anicius Manlius Servinus Boethius（480頃～525）ローマの哲学者で政治家。アルビヌス反逆事件に嫌疑をうけて刑死した。その獄中の手記が即ち『哲学の慰め de Consolatione philosophiae』である。ダンテはこれを愛読した。畠中尚志訳（岩波文庫版）がある。

（2）〔訳者註〕アウグスティヌスの『告白』巻頭の言「あなたは人間を、彼が喜びをもってあなたを讃える如く創造り給うた。なんとなればあなたは我々をあなたの所有となすべく創造り給うからである。我々の心は、あなたに安らうまでは平安を得ない」を著者は念頭においているのであろう。

○五月二十一日

真の聖は、神の意志をつねに喜び、楽々と、――然り、さながら自明の如くに行い、かつ堪え忍ぶことである。その他のいかなる聖も本物ではない。

信仰というものにとって悪いこと（あるいはおそらく善いこと?）は、最も強烈な信仰体験はこれを決して語り得ないこと、あるいはこれを語るも、他人にとってはつまらぬもの、あるいは信じ難きものと思われることである。

○五月二十三日

愛は他のすべてのものにもまして、人を賢明にする。愛のみがよく、人間や事物の本質に対し、また彼らを助ける最も正しい道と方法に対する正しい透徹した洞察を与える。

それ故におおかたの場合、何が最も賢明であるかを問う代りに、何がこのこと、またはかのこ

とにおいて最も愛の深い仕方であるかを問うのがよい。なんとなればこの仕方の方が、かの問い方よりもはるかに知られ易いからである。何が愛の深い仕方であるかについては、最も才能の乏しい者でも、自ら欺かれまいとするかぎり、さほどたやすく自己欺瞞に陥ることはない。ところが、きわめて才能豊かな人ですら、単に賢さをもってしては、あらゆる将来の出来事を正しく予見し、かつ判断することは出来ない。

○五月二十九日

祈りと思索とは決して対立するものではない。それどころか、両者は共に真理の完全なる把握のために必要である。自ら探究するにも、また神の啓示にあずかるためにも、他方なくして一方のみでは、両者ある場合のように完全には作用し得ない。

今日もなお神は彼の真の子らには誰にでも、その生涯の決定的な瞬間に、全イスラエルの子らにレビ一八・二―五において告知したことを告げたもうのである。

いま暫らく我慢せよ。
もう心を痛めるな。

素晴しい夏の歓喜が
春のあらしのあとに来る。

○六月一日

神の先見千慮ある徐々たる導きは、このようなことを自ら体験しないかぎりは、誰れも信じ得ない最も不可思議な経験の一つである。それはつねに苦痛と憂慮とを通して行われる。人間はおのがもつ一切のものを犠牲に供する覚悟を絶えずしていなければならない。特に、これのみはわが有と呼んでいるところのおのが意志をこそ、つねに神に全くまかせ切る心構えであらねばならない[1]。そうすると、突然、また新たな段階が開ける。そしてこの段階に来てみると先に起ったことが瞭らかになり、幸にもよき路を選んだこと、今や新たな自由で豊かにされていること——しかも永遠に与えられていること——が特にはっきりしてくる。

なんとなれば神の導きの道では、一たび過ぎ去ったことは再び立ちもどらないからである。これが人間的自己改善をしようとする自己選択の道と大いに異なる点である。このような自己改善の道はおおむね無効な羽ばたきと世間一般のつきなみな考え方への疲れたあと戻りとなるにすぎない。

(1) 〔訳者註〕これは全く本当である。これを完璧に体現したのがキリストである。「汝の意志を成らせ給え」

と提身しておのが意志を神に明けわたして彼は歩いた。すると驚くべきことがどしどし彼を通して現われた。

喜べ

わが心、おまえが捕われていた
その苦悩から、起きあがれ。
おまえの上にかぶさっていた
痛苦の時期はみんな過ぎた。

今日は世界がすっかり奇麗だ、
まるで新たに生れたように。
おまえはこの緑の丘で
もう大部重荷を解いた。

どの小草にも露がきらめく
きらきらした朝日を浴びて、
澄み切った蒼空には

ユングフラウの白銀(しろがね)の冠がひかる。

どの枝にも小鳥がたのしげに
多彩な翼を揺るがせている、
最後の鴉が山へ飛び去った、
その黒い影は還って来ない。

○六月二日

我らの生活に影響を及ぼす超感覚的諸力の存在についてのきわめて確かな信念を私に与えてくれたものは、私の生涯における著しかった出来事がつねに私の意志なしに、然りまことにしばしば私の意志に反して起ったという経験である。(1)

(1) 〔訳者註〕イザヤ五五・八―一一参照。

○六月三日

真に神を信ずる人々は、実際異なった種類の人間であって、世間にあって見知らぬような奇異な感を覚えることが往々にしてあるものである。なんとなれば、この真の信仰は、まことにキリ

ストがすでに言っているように、普通の信仰とはいささか異ったもので、ただに山を移すばかりでなく、さらに難事たる人間の心をも思想をも変転させるものだからである。この信仰は神を愛する魂への神の積極的な近づきなくしては、成り立たない。この神の側からの近づきは、これに比ぶべき何ものもない奇蹟であって、この奇蹟に較べては、この奇蹟から生ずるところのあらゆる異常な作用も霊的な力も自明のこと、ほとんど自然のこととしか思われない。この事実がその昔実際行われたからには、このすべては今日もまた可能であらねばならない。そしてこの救いをこそ我々は今待ち望んでいるのである。

創世四九・一八。マタイ二一・二一、二二。

○六月四日

ヨハネ黙示（三・二〇）にいう如く、我々が、扉を叩き給う神の霊に対して心の門を開くのであって、神が我々の願いに応じてさらに善き存在への門を開くのではないというのは、人間の意志の自由に関する偉大な見解である。それ故、もし我々がそれをしないならば、それだけまた我々の責任は大である。なんとなれば、かかる次第であれば、世にはなし得ぬということはなく、ただ欲せぬということ、即ち目前現在しているすぐさま得られる救いを拒むことがあるのみであるからである。

（1）「視よ、われ戸の外に立ちて叩く、人もしわが声を聴きて戸を開かば、我れその内に入りて彼と共に食し、彼も我と共に食せん」〔訳者註〕これはキリストの本願の角度で、御馳走は要するに聖霊自身である。これに対して山上の垂訓の「門を叩け、さらば開かれん」はキリスト者の悲願で、キリストの本願あればこそ、この悲願は成就するのである。

○六月十日

ブルムハルトその他の歴史的に確認されている奇蹟を行う人の「力」を構成するものは、おそらく単に私欲なき愛であった。この形容詞を付加しなければならないのは遺憾であるが、必要なのである。このことは、彼自身において動揺があったこととこの力が時折減退したことを意味するものであって、それはこのような異常な人間の模倣をする無数の人々においてはなおさらのことである。なんとなればこの愛は、（これと分つべくもなく連関する）信仰と同様に、福音における大きな真珠であって、これを得るためにはあらゆる他のものを棄てねばならない。そしてこの愛は間断なく試煉を受けかつ使用され、どんな瞬間にも現在しているのでなければならない。またこの愛は、火と同じく、絶えず盛んになったり衰えたりする。それ故、つねに一定の水準に保たれるわけにゆかない。のみならず、これは欺かれ得ない。ひとは自分をも他人をも、つまりは信仰ありと思いこませたり説きおとすことは出来ようが、愛はそうはいかない。ここでは真実のみしか考えられない。あらゆる見せかけが試煉の日を身近かに体験しなければならない。そのとき

にまことに怖るべくも報いを受ける。人間性のこの聖所が偽造されるならば、それは罰せられずしては措かないのである。

信仰の鍵はもともと愛である。神やキリストに対して反感のただ僅かばかりの痕跡でもなお心にとどまっている間は、信仰は困難である。のちほどこの痕跡が一たび全く消え去ったならば、信仰は楽になる。神学はこれを超克する助けとならない。本当の信仰に到達する唯一の道はこの反感の除去にある。誰かが自分は信ずることができないと主張するなら、それは大抵の場合正しい。しかしその人は、ひとからじかに非難を蒙るに価するこの原因をもっているわけである。

聖霊降臨祭の前夜

（サムエル下五・二四）

「いまや君ら浄くあれ。」なおもひと日の耐え忍び。
わが昔ながらの信頼よ、いま一たびを耐え忍べ。
すでに動いた、神の恵みは
川と溢れておまえの上に注ぎくる。

おおわが心、気落ちすな！　あと数分だ。
桑の木の間にざわめきをわたしは聞く。
主よ、聖言を宣べたまえ「起きよ、光あれ」と。
その時しも朝が来て、夢はみな終りを告げる。

○六月二十日

内的生活は、鉄を鍛える場合と酷似している。内的人間は絶えず繰り返し、繰り返し、火に投ぜられ、そのつど強い急激な鎚打で鍛えられねばならない。かくして彼は次第に神の欲する形相をとり、神の目的に用いられ得るものと成る。

なお似ておりかつ同時に非常に慰められることは、このような火熱の中で鍛えられたものは、いつまでも堅剛でしかも同時に柔軟なことである。これに反して、自己の計画と精励努力をいくらやってもそれではどこか堅実ならぬものがまつわるものである。

神は神の霊をはたらかせたいと願う人々にのみ与え給うのであって、この霊をただ所有し、享受せんがためには与え給わない。

聖霊降臨節の歌

恩恵に充てる、聖きみ霊よ。
汝れをよく捉え、保つは誰れぞ。
ああ、世に酔える輩に
汝が静寂の如何に乏しき！

汝れ如何にかくも深くは隠されてある、
汝れを知るはいとも内奥なる人のみぞ。
汝れはたましいの故里よりの
春の晨よ。

○七月一日

貫け[1]！ この短言は、内的生活の危機にあたっていくたびとなく、ほとんど魔術的な効力を発揮するものである。

この語はまだ無力になり果てていない理性に、断念してはならぬことを、あるいはしばしば全く肉体的にすぎない気分に屈服してはならぬことを示してくれる。また同時に、残存している一片の善意志に衝撃を与え、無性格な厭世主義や肉体的あるいは精神的印象への卑怯な屈従に対し

て反抗させる。

いわば一つの急突が起る。崇高な魂は再び自由になり、真なるもの、正しきことに立ちむかう。このような瞬間はしばしば全生涯にとって決定的である。それ故、あなたがそのようなものに縛られていると感じたなら、貫け！　同胞教団讃美歌三九三、六七六、六九八。

（1）〔訳者註〕アイヒェンドルフ（一七八八―一八五七年）の「貫く！」という詩を紹介しよう。

貫く！

鷲一羽、弓なす断崖に坐し居たり。
みはるかすわだつみを越え暴風の呼べば、
すでにして大空高く舞いて昇れり。
岩が根のその巣速くも見えわかず、
瞰下せばくるめくばかりの下界なり、
沓として霞むは森か、陸か海べか。
大空に涯はあるとも、
この鷲はいや高く翔りてやまず。

○七月七日

ともかくいっこう知られていないイギリスの聖女、ノルウィッチのジュリアン（一三四二年生）がすでに語っているように、正しい祈りというものは元来自分自身の聴き入れである。[1] なんとな

れば祈りは神が恩恵と愛とから我らに贈って下さるものであるから。「神は我ら自身を自覚して、我らが神の御意に適うことを祈るようになさる。しかも神は、この祈りと我らが神から贈られた善意志とのゆえにかぎりなく我らに報いようとなさる。」我らがかかる消息の域に達したあかつきには、我らの宗教教育は完成されたのである。

ヨハネ一五・七、一六・二四。イザヤ六五・二四。

（1）〔訳者註〕このジュリアンの言は、誤解のおそれがあると思うから、はきちがえない様にしていただきたい。全我を神に投げかけて、神と我とが一つになる関係、内在にして共在の境地、そういう関係をあらしめんとするとき、祈りもこれと同質のものである。その祈りは全我のいつわりなき告白であると同時に、その告白における全内容は投げ出されて、自らはからっぽである。充満は空無である。その空無に同時に、神の意が充満してくる、それがまた自分の祈りとされる。かかる緊張関係、矛盾関係の中に、真の祈りの火花が散る。それを「自分自身の聴き入れ」といったのであろうが、実はやはり、神自らの聴き入れである。なんとなれば神の「吹き込み」がわが真空管の中で谺返えすからである。「われもなく世もなくただ主のみいませり」という心境である。祈りにおいて、神とキリストと聖霊の三一の神は、それこそ神秘的な交りをもって我らに現実に迫り、抱き、支え、力づけ下さる。正直に、率直に、大胆に、祈るべし。祈りはつねに裸なるべし。梵鐘の如く、腹に天空を宿してこそ天韻は発する。すなわち鳴るは天か鐘か、天鐘一如の相である。旧讃美歌五二九「あなうれし、わが身も」参照。

○七月十五日

信仰の本領は、神への努力にあるのではなく、神への帰依（帰入、祈入、南無）にある。我々が神の扉を叩くのではなく、神が我らの扉を叩くので、我々は神に対して扉を開かねばならない。

そうすれば、一切が階段的に全くひとりでにつづいて来る。まず緑の野、次にみのりを約束する穂、次に熟した善い穀物、最後に、善く暮した虚しくなかった生活のあとに、安息のための刈入れ。イザヤ四五・二―五。ヨハネ黙示三・二〇。ルカ一二・三六。

「神を愛する者には、すべてのこと善く役立たざるを得ない」[1]（ローマ八・二八参照）。真にこの真理を信ずる者にとっては、普通の意味においての「幸」「不幸」の概念は、すでに存在しない。その人はもはや、「快楽への渇望と、苦難に対する恐怖とによって昏迷（くら）まされるような人々」の仲間ではない。

ゼパニヤ三・一四―二〇。

（1）〔訳者註〕ローマ八・二八の現行訳はこれとちがい、ギリシア語原典には現行訳が忠実である。

○七月二十一日

他人に与えることを学ぶのは、多くの大事と同様に、ただくりかえし実践することによってである。これを学び得れば、それはまた人生最大の歓びの一つとなる。

詩篇四一・一―三[1]〔原典及び独訳では四一・二―四〕。

（1）「弱者を顧る人は幸なり。神、彼を禍の日に助け給う」（詩四一・一私訳）

○八月八日

小さい歓び楽しみごとが、存在をたのもしいものにするのであって、あの小さな愛らしいアルプスの高山植物のように、幾分硬い岩石の転がっている土壌にのみ繁り栄えるのである。しかも今日まことに多くの人々が、自分の存在を破壊している。それというのは彼らが単に経済上のみならず、特にまたたましいの上で到底堪えられないほどの贅沢に身を溺らすからである。

箴言三〇・八、一五・一五、二二・一一。

○八月九日

人間の生活において最も注目に値することは、享楽欲がつねに苦悩を結果し、克己が、それによって行動する以前にすでに、最高にして最善の愉楽（たのしみ）をいつも伴うということを、ひとはすでに夙（つと）に経験から充分よく知っているということである。

雄健な決心、あるいはさらに善いことは、直接の善い行動は最善の薬である。特に、神経衰弱とか一般に神経病と呼ばれており、そしておおかたは肉体的ならびに精神的欠陥の混合であるような状態においてそうである。

○八月十四日

人生の最難の瞬間は、人間がその自己愛から根本的に離別し、従って神秘家が「滅却」（放下）と呼んでいるところの本格的な死の幽闇に入ってゆかねばならぬ時である。そのあとに続いてくる或ることの約束の、明確な、つねにきらめく微光がなければ、誰れもこの死に耐えないであろう。また誰れもおよそ戦慄なくしてこの死に直面することはないであろう。我らにとって幸なことは、我らはおおかた、やむを得ない事情によって、ただもうせざるを得ないという立場に置かれるのである。でなければ実践への力が欠けるであろう。ところでこの力は、ただ自分をゆだねてしまうことでありさえすればよいので、選択というようなものではない。

しかしこの事態を自ら体験したことのない者は、これを実行しようとするあらゆる人に向って言う、「パウロよ、おまえは気が狂っている」と。

行伝二六・二四。同胞教団讃美歌七三二。

○八月二十一日

正しくいとなまれたどの人生にも、いつかこういう日が見舞う。すなわちその日には、「この世の君」〔サタン〕が検閲にやってくるが、少なくとも意志の上では、もはや彼に隷属する何ものも彼が見出だすことを拒まれるわけなのである。しかしそのとき「最後の力戦苦闘」が始まる。この一戦でなお堅忍することが肝腎である。ヨハネ一四・三〇、一二・三一。エペソ二・二。

シオンは公平[1]をもってあがなわれ、
その立ち帰る者[1]は義をもってあがなわれる。
（イザヤ一・二七）

その意志をあなたの中に住まわせる
信実（まこと）に充ちた全能の神でさえ、
あなたの心を新たにし得ない、
あなたの心が逆らううちは。

ただ義をもって、シオンを贖うのが
神の永遠のはからいである。
あらゆる悪からおのれ自らを
背（そむ）かしめた人こそ自由である。

華美と栄誉とのない生活を、
虚しく倦（う）んだものとあなたは思うか。

然らばこの荘厳な業の
重きをあなたは担い得ない。

（1）〔訳者註〕このイザヤ一・二七は私訳であるが、ヒルティーのドイツ訳原文は、「シオンは公義をもってあがなわれ、その捕囚人は義をもってあがなわれねばならない」である。「公平」または「公義」の原語「ミシュパート」は審判を意味する語で、この場合「公正な審判」の意である。現行訳「悔い改める者」は原語は「立ち帰る者」で、「悔改」ということは、行為的に立ち帰ること、心の方向転換をなすことが原義である。現行訳「正義」という訳は語意が狭くなる傾きがある。「セダーカー」という原語は、むしろ端的に「義」と訳した方がよい。神と人との関係が正しく立つこと、神意が行われる事態を「義」という。そしてこのイザヤにおいては、それが救贖的な角度で意味されているので、恩恵的な義であるから、「恩義」と訳してもよい。イザヤにおいては「義」はしばしば「恵」と同義に用いられている。

それで全節の意味は、シオンをもって代表されるイスラエルの民の中、神に立ち帰った者、すなわち悔改、回心者たち（信仰をとりもどした者たち）は、恵み深い神の救贖の義をもって贖われる、というのである。

なおドイツ訳の「捕囚人」は「立ち帰る者」がバビロニア「捕囚」からの「帰還者」との関連において言われた者と解するならば、「捕囚人」という訳も成りたち得る。

○八月二十五日

我らは宗教的真理をどれもすべて即時に把握するというわけにはゆかない。それとは反対に、宗教的真理は、それに対する我らの感受性の生長する度合につれて、次第次第に我らに贈られるものである。おおかたは、体験や人や書籍によって、時にはまたいっそう直接の方法によってな

される。キリストですら、ある困難な場合には、「これを受け容れ得る者は、受け容れよ」〔例えば、マタイ一九・一二〕と付言しておられる。しかもその最後の説教において、彼はなおいくつかのことを語らずに胸におさめてしまったことを明かに告げ知らせているのである。ヨハネ一六・一二、一三。この事態を補いかつ継続するために、我らが「聖なる」と呼ぶところの霊がまさに存在しているのである。しかし、あなたがこの霊をあなた自身の霊ととりちがえたり、あるいは混同するだけでもせぬように気をつけよ。あるものがあなたのうちに臨み来って、そのものが、あらゆる気分とか傾向とか学識とかによって、およそあなた自身の全存在によっても、妨げられることなく純粋に、つねにあなたのうちで真理を語るのでなければならない。しかしそれはキリストが語ったところのことにつねに土台を置いているのでなければならない。これから離れるものは、偽りの霊の言であり業である。

人間がこの世における自己の天職に迷い、意気沮喪し、あるいは後退せんとするような時期が人生には往々にして襲い来たるものであるが、かかる時期にあたって最も確実な慰励となるところのものは、もともと我らが神を選んだのではなく、神が我らを選び、おのが属となし給うているのだという思想である。ヨハネ一五・一六。エレミヤ一〇・二三。

この思想をもって「屈辱の谷」を通り抜けねばならない。然らば、ついにこれらの苦難の目的

が達せられるや否や、事態は全く自然に善くなってゆく。

○八月三十一日

憂悶の深く食い入る鋭い犁頭が、我らの心に絶えず後から生えてくる外皮をつねに新たに剝ぎ取らねばならない。かくて後、はじめて永遠の真理の実り豊かなるべき新しい種子が、我らの心に落ちてそこに根をおろし得るのである。こういう経過を踏むことなくしては、我らは真に人生の根柢に横わっている本当に真実なる事がらに対して無感覚のままに終るであろう。

ひとは幾多の生活経験を積めば、ついにもはや全く苦難のない生活を願わぬという境地に到るものである。これこそが「永遠の平安の状態」というもので、ここ地上においては、苦難は我らの悪い性情から我らを保護する守護者であり、我らを不断に看護ってくれる番人であらねばならない。然り、然かのみならず、苦難は、そうでなければ即ち我らなお耐え難かるべき生活の単調を活気づけてくれるのでなければならない。

曠野より出づ

（申命二・七）

こころゆくまで我ら憎めり、

今こそ終に我ら愛せん！
汝がためになおも残れる
最終の荷を投げ棄てよ、わが心。

色彩とりどりの此の世の宝の
籾殻にはや飽き果てぬ。
主よ、汝が意志と信実こそ、
これより我らが歓喜なれ。

種々の相のうちに
幸と故里とを求めたりしが、
見出でたる小さき貴きこの真珠、
いざわれは執りて離さじ。

こころゆくまで我ら憎めり、
今ぞ終に我ら愛する！

汝れの夙くも決意せしことの
実践に、今こそ移れ！

○九月一日

人間は次の二つの事によって、あらゆる善から最も力強く妨げられてしまう。その事は誰しもその生涯で一度や二度は直かに経験したことであろう。すなわち、或る人が何か悪いことをまさにしようとするとき、その人は自分に言い聞かせて、これはちっとも悪いことではない、世間一般の慣わしである、こんなことをしたとて結局は善人たるにかわりはないだろう、と。ところがそのことをやってしまうと、彼には突然、今さら立ち帰って赦しを見出だす術もないと思われてくる。この悔改を思いとどまることは特につねにうち退けられねばならない。神はどんな悔悟をも必ず受け入れ給う。その悔悟がどんなに時機遅れのものであろうとも、またその悔悟がどんなに度重ねた累犯の揚句であろうとも。まことに我らの主は力や平安を求めて彼に依り縋る誰れをもしりぞけない。私はもう一度力をこめて言っておく、どんな人をもまことに例外なくどんな人をも。

イザヤ一・一八、四三・二五、四四・二二、四五・二三、五五・一―三。詩篇五一。ヨハネ六・三七。マタイ一一・二八―三〇。

かかる人は後になって反対に、最も信頼できる人であることがしばしばである。なぜなら、彼らは一方において享楽生活の惨めさを、他方において〔魂の〕平安がどんなに幸であるかを、深い経験から学び知り、どちらを択るべきかを識っているからである。

「わがために我れなやみ尽くしぬ、
わがために我れ生き足らいたり。
おのが建物、そは砕け散りぼい、
これが跡より家新たにぞ建つ。

永遠を期してぞ建てられし家、
時限の津浪に埋れはせじ。
天つ焔はそこに燃え立ち、
犠牲の煙ぞ日ごとに昇る。

み怒り去りぬ——戸は開かれてあり——
あわれなる魂、今こそ自由！

行手には涯なき希望と
奇しき時劫の横たわるあり！」

（出エジプト三四・一〇）

○九月十一日

いわゆる人間愛はすべて、神に対する強い愛の根柢がなければ、一個の幻想であり、一片の自己欺瞞である。なんとなれば、この場合ひとは、単にいとも愛嬌ある者たちを愛するか、または自分を愛してくれる者を愛するかにすぎず、いつにてもこれらの条件が脱落すると思われるや否や、つねに著しく急速に決意して、愛を滅ずるか、さらには愛を全く棄ててしまおうとするからである。でなければ、人間愛とは一般に、かなり冷淡な一般的な好意に対するやや美名といったもので、実際はむしろ、飽食した猛獣でさえその周囲に対してもつような無実な態度である。

このような人間愛では、年ごとに幾百万の人間が精神的にあるいは肉体的に餓死しようとも、そのためにこの愛はいたく心をなやますこともなく、あるいはきわめて僅少の耐乏をも自分で担うことがない。

○九月十六日

最も確実な、いつも現在する信仰は歴史的信仰である。神が我らの心情に近いので神を明らかに感じたり、あるいは個人的な経験が我らをあらゆる疑惑から解き放ってくれたりする時が確かにあるにはある。がしかし、他の時には世界歴史に、しかもその中で特にイスラエル民族の運命に我らの心の平安を求めねばならない。イスラエル民族は今日もなお一民族として神に棄てられないでいるのではないか。然るにかのギリシア人とローマ人ははるか昔に消えて跡もない。

またキリストを信ずるにしても、それが歴史的であるときにのみ、真に堅実であることが出来る。ロゴス理念の如き形而上学的内実は、すでに〔キリスト信仰の〕確信のない者にとっては、その論証力は非常に薄弱なものである。

神の正義や慈愛に絶望的になり始めると、たちまち神の存在をも疑うに至るであろう。なんとなれば、義でもなければ、善意もない神は、高尚な人間には耐え難いまた厭わしいと思われる一個の偶像であるからである。

○九月二十五日

キリスト教真理の善き証明にして、キリスト教こそあらゆる崇高な天性の人間の、真理と心情の完全なる平安への渇望を充たし鎮めることの出来るものであるという経験的証明に優るものはない。このことを果す者こそ、悩める人類の真の権能ある救贖者である。

キリスト教は、一般に決して非実践的な理想主義ではない。むしろ反対に、およそ存在する理想主義のうち、ただこれのみが実践され得る、また最も有効なものである。これがキリスト教のこの世界における永続的な意義である。

○九月三十日

一週の満載の仕事の重荷をおろしたあとの日曜日が一番快適であるように、苦難のあとの幸福が最も爽快な、最も無難なものである。

根本的に自己愛から解放されて後、これがなおしばしば立ち現われんとするや、むしろこの自己愛を形体ある悪魔のように憎むに至るならば、そのとき神の恩恵は確実である。なんとなれば、このことたるや、神の内在的な業であって、神が現に生きてここに在ますことなくしては決して起り得ないからである。

高き山地を去りてゆく

いざさらば、汝れ緑なす山地よ。
くれないに花咲き匂う汝嬢野よ。
快き自由の夢は消え失せて、

秋風の誘うままに別れゆかなん。

はかなくも飛ぶが如くに夏は去り、
牛を牧う牧人ははや谷間に降りぬ、
山々の嶺きはみなやがてまた
白銀の衣をまとわん、のこる隈なく。

みどり濃き森よ林よ、いざさらば。
この聖き地の目的は成りぬ。
汝らの泉に飲みし我れは、
新たなるいのちに溢る。

わが心、むなしき瑣事を断ち切りて
健かなり。わが意志も自由を得たり。
わが前に約束の地ぞ横わる、
誰か知るその静けさに神在ますとは。

この山を降りゆく我は別の人。
黄金の休息期を今あとにして、
別れゆく心すすまず——さはあれど、
げに我は求めしことを見出でたるなり。

○十月五日

誰れであろうと神におのが意志を全く捧げたならば、しかもこの意志は彼が神に供し得る唯一つの贈物であり、また神はこれにのみ価値を置き給うのであるが（その外のすべてのものはまことに神の賜である）、そのとき、これは大胆に聞えるけれども、神はその人に神の意志を与えて彼のものとなし給う。かくて神はその後彼に対し、あらゆる彼の願い（それをもしかし神は自ら導き給うのだが）を聴き入れ給う。今や彼はただ願いかつ受けさえすればよい。しかも神は自ら彼を促して願わしめるに詩篇第八一の次の言をもってし給う、「あなたの口をひろくあけよ、わたしはそれを満たそう」〔詩篇八一・一〇（原典は一一節）〕。

けだし神は、およそ我らが神について知るかぎり、かぎりなく愛に満ちた存在であり、神の心をこめて願い給うところは、人間にとって彼が大いに頼みある者であること、然り一切であるこ

とであり、またすでにこの地上において、人間の弱い性質を害うことなくして、およそ能うかぎり多くを彼に贈り得んことである。しかし、遺憾ながら、人性弱くして一度には比較的僅かの幸福にしか耐え得ないのである。

○十月六日

キリスト教はいつまでもそれ自体完全に健全なものであって、絶えずあるいは治癒を求め、あるいは増長してこれに押し迫ってくる不健康な分子や病的な分子をすべて征服し得るのでなければならない。

このことがすなわち、何故にキリストがあのように度々彼の弟子どもから身を引き離して、ひとり寂しく山に登ってそこに新しい〔祈りにおいて神と深く交ることにより〕強化を求めねばならなかったかの理由であったのであろう。

してみれば、特に精神的な不健康者の群が間断なく蝟集してくる形式的な「祈禱治療院」は、それだけ事理(ことわり)に背反したものである。そんなことには誰れも害を蒙ることなしには長きに耐え得ない。

○十月八日

神の秩序に従えば、統治を合法化することは、統治者がもはやおのれ自身のことを顧みず、ただ万人の僕たること[1]に在る。その他のいかなる合法性も誤謬である。すべての主権者はこれによって判断さるべきである。

（1）〔訳者註〕「私は国家の第一の僕である」と言い、民意上達をこれ努めたプロイセンのフリードリヒ（一七一二―一七八六）はかえってやはり民から「大王」として尊ばれ、「フリッツ親父」"Vater Fritz" と呼んで親しまれた。天地万有の創造主、人類の歴史の主宰者たる絶対主権の神が、人類救済のためにその独子をついにベツレヘムの旅籠屋の厩に出現せしめたということ、貧しさとみばえなさのどん底の相においてイエスを遣わしたということほど逆説の極みの事実があろうか！　神の子イエスは「人類の僕」として自らを自覚しかつ献供した。これがまさに「人類の王」にふさわしい無的実存であった。

ルッターの名著『キリスト者の自由』の冒頭の有名な命題、「キリスト者は、万物の上に自由なる主であって、誰れにも仕えない。キリント者は、万物に奉仕する僕であって、誰れにも仕える。」この一見相反する二命題に実は民主主義の根本精神が道破されている。「キリスト者」を人間と置き換えればよい。人格の自主自由は、それが自由なる愛の奉仕としてはたらくときに最も健全であり、社会も世界も本質的な平和へと進展するからである。印度のガンジーはその体現者の最も著しい一人であった。シュヴァイツァー博士もまたそうである。

○十月九日

キリスト教を簡潔な表現においてもちかつ把握しようと欲うならば、全キリスト教は実際ヨハネによる福音書第三章に含まれている。しかも現今なおこれについて、ほとんど二千年の昔と同様の誤謬が我々の間に、キリスト教界のただ中に、存在している。

今日もなお、いかなる正式の教義も、いかなる学問も、またいかなる事業も、総じてこれらが生れつきの性質を変革しないかぎり、我らを充分助けて真の生活に到達せしめない。言い換えれば、キリスト教の意欲するところが人間に自然となり、従って該教が親しみ易く自明なものにならねばならない、あらゆる自然なものがまさにそうであるように。かくて人はキリスト教についてもはや思案したり、あるいは自ら何か企ててみたりする必要がなくなり、むしろ反対にキリスト教に背反するものは自然の反感を惹き起させ、これが克服の必要ありということになるであろう。事態がこのようであるならば、ヨハネが明かに自己の経験からその第一書翰で主張していること、すなわち神の命令は毫も困難なものではないというつねには信じ難いことさえ、実現するのである。なんとなれば一たん自然となったものはすべて、たしかに困難ではないからである。

このことを熟慮せよ。あなたもそこまで到達しなければならない。また到達するであろう。これがこの人生の目的である。それまでは、私と共に、君自身をキリスト教の友であり生徒であると心静かに思うがよい。かくてともかく、我らは全く善い仲間になるのである。というのは、私は私の生涯で完全に自然になりきったようなキリスト者に未だ多く出会っていないから。ところでこういうキリスト者は、(この際、充分真相を重んじて言うなら)新旧両教徒間にかなり均等に分たれており、しかも男性の間におけるよりも女性の間に多いのである。

○十月十六日

信実（Treue）は、まことに、最も美しく最も大切な性質である。信実は動物をも非常に貴きものとなし、彼らをほとんど人間的価値と品位にまで高めるほどである。けれども信実の全く欠如しているところでは、最も才智あり教養ある人間も、社会一般に危害を及ぼす野獣にすぎない。

○十月三十一日

ルカ一一・三六[1]。我らの内心に起る最も善い、最も決安的なものは[2]、概していつも電光的性質をもっている。すなわちそれは別の世界からの恩恵の一閃であり、光明の一輝である。おおかたそれは単に一つの洞見であるばかりでなく、同時にまた積極的行動を起す刺戟である。そこで、この決意を同様に速かに把み、そしてそれを直ちに遂行するのは人間にゆだねられた仕事である。然らずんば折角の恩恵の眼指は過ぎ去ってしまう。しかし我らがこの決意を摑んだならば、この決意は金色（こんじき）の翼ある鷲であって、普通は越え能わぬ障碍をも越えて、我らを逞しく高揚させる。神の国〔天国〕への道はまさに全く独特のものであって、学修の普通の規矩ではなかなか測り難い径なのである。けれどもこれを経験したことのない人は、これを信じようともしないのである。

落葉

一

深みゆく秋、山また谿をさすらえば、
紅染(べにぞめ)の木の葉の落ちゆく。
鳥の歌絶えて聞えず、
この森宿(もりやど)のいずこにも。

霜と雪とはやがて包まん
綾をなす錦(にしき)の杜(もり)を。
いかなれば嗟嘆(なげき)なくこの度(たび)汝れは曰う、
「秋の暮、などかくは遅く来たりし」と。

生来(もと)のわが身に我れは敵となりぬ。
わが身は既に明け渡たされたり。
今や来ぬ、真剣の友なる死、

死のののちに生命は来たる。

二

汝が意志はわが意志となり、不安は平安に。
霊魂は静安を得ぬ。[3]
解かれしは玆に結ばれ、失せたるは見出だされたり。
生命の吹息に我れ生かされぬ。

(1)「もし汝の全身明るくして暗き所なくば、輝ける灯火に照さるる如く、その身全く明るからん」
〔訳者註〕 全身明るからんためには、聖霊の光が衷にともっていなければならない。
(2)〔訳者註〕 この日に因んで一言註したい。すなわち一五一七年のこの日には、宗教改革の狼火が、ルッター自ら期せずして挙げられた。すなわちかの「九十五提題」をヴィッテンベルクの城教会の扉に掲げたのが、はからずも改革への決定的な第一歩となった。真理に迫られ、聖霊に動かされて、ルッターの内心に閃いた霊光が、行動に移された消息は、ここに著者の言うものとまさに符合するものがあったはずである。ただルッターが「九十五提題」を草案し、ねりにねったことは、学的良心による地味な仕事であったが。
その貼紙の見出しにルッターはこう書いた、「真理に対する愛と真理を明かにしようとする意志により、以下の諸条目がヴィッテンベルクで論議されんことを願う。……」
その第一条に曰く、
「我らの主にして師なるイエス・キリストが《汝ら悔改めをなせ…》と言い給うとき、彼は信徒の全生涯が悔改めであるべきを意味し給う」。これは実にキリスト者の大憲章とも言うべき言である。紀元第一世紀に、洗礼のヨハネを先駆として、イエスによって放たれた「悔改」「回心」「転心」の宣言が、第十六世紀の初

め、再びルッターによってとりあげられ、「悔改」（心を回らすこと）の真義が宣揚された。そして今や、二十世紀の中葉、世界史の最大の危機を孕みつつあるとき、三たび絶叫されねばならぬのは、この一言よりほかにない。

（3）〔訳者註〕「最早自己を見まじ、その健康に拝跪すまじと決意した。と同時に私は忽然として元気付いた。元気づくと同時に、他者の他力は私の上にも、儼として如実なる力であった事を知った。一切が彼の誘導によるものの如くに見えた。」（三谷隆正『信仰の論理』より）

○十一月三日

ひとは決して聖につき、はるいは徳につき、あるいは義について余り多くを語るべきではない。義は、聖書が言うように、透徹した慧眼の前には、なおつねに「汚れた衣」[1]にすぎないからである。

人が地上において達成することの出来ること、また他人に裨益することは、神への愛であり、従ってまたあらゆる真と善とに対する愛であり、すべての同胞に対するまことの善意親切である。このことを絶えずおのが身に感ずる人は、最高万能の人生目的を達したというものである。

（1）〔訳者註〕イザヤ六四・六にある言。現行口語訳では「われわれの正しい行い」と訳してある。旧訳文語では「われらの義」。

○十一月十日

善への刺戟も、悪への刺戟もおおかたは電光石花的である。前者に対しては直ちにこれに応じ

て、我らを助けようと差し伸べた手を、実行によって摑まねばならぬ。後者に対してもまさに同様に、直ちに、意志の断固たる抵抗をさし向けねばならない。「かくして人は星にまで登りゆく。」(Sic itur ad astra)[1]

(1)〔訳者註〕ヴァージル『エネア』第九巻六四一行の言。

○十一月十五日

真の知恵がどこから来るかを、他に知りようがないときでさえ、ヨハネ五・一九、三〇[1]の聖句はこれについて我らに諭さないでは措かない。キリストですらこの法則の下にあったのに、どうして我々は、知恵を我ら自身から見出だしたり、あるいは世智の学校で学んだりする僭越を敢えてし、我々に対しても開示され、しかも我々がキリストの言行に明かな実証を見るところの同じ源泉を探ね出そうとしないのであろうか。

ヨハネ七・一五―一八、六・六三、六八。マタイ七・二九。

(1)イエス答へて言ひ給ふ「まことに誠に汝らに告ぐ、子は父のなし給うことを見て行ふほかは自ら何事をもなし得ず、父のなし給ふことは子もまた同じく為すなり」(ヨハネ五・一九)。

「我自ら何事をもなし得ず、ただ聴くままに審くなり。わが審判は正し、それはわが意を求めずして、我を遣し給ひし者の御意を求むるに因る。」

〔訳者註〕このようなキリストの在り方を私は無的実存という。それで、キリストを無的実存者、略して無者といっている。

○十一月十七日

私は、私の生涯において、人間軽蔑者になればなり得た時期が幾度もあった。私がそうはならなかったのは、人間社会の上層階級との相識に由るのでは決してなく、反対に小市民階級の生活や考え方への洞察に負うのであった。

ひとは世の小さき者に対する眼と愛好をもつに至るや、現代の苦患たる厭世感から永久に救われる。これに反して、誰でもなおたとい単に秘かであっても、高きもの、貴きもの、あるいは外観の立派なものを好む傾向を内心にもつ間は、そしてこれは今日まことに教養あるまた半ば教養ある階級においてほとんど例外を見ない現象であるが、そうであるかぎり「この世の君」[1]がなおその権限を失っておらず、従って確実な幸福はのぞめない。付言したいのは、小さいものは普通、とにかくそれを相手どってみようと思えばはるかに興味あり、愛すべきものであるということである。巣でみられる一匹の蟻、あるいは勤勉な蜜蜂一つ、はるいは一羽の鷽どりは、獅子とか鷲とか、いわんや鯨といったものよりもはるかに観る甲斐のある心の惹かれる動物である。それからまた小さなアルプスの小花はどの一つを見ても、きわめて派手なチューリップやあらゆるモダーンな簇葉植物よりもはるかに美しい。人間においてもまたその通りである。この世の小さいもの[2]に目をそそげ。それは人生をもっと豊かにし、もっと心足ろうものにする。

（1）〔訳者註〕サタンのこと。ヨハネ一二・三一、一四・三〇、一六・一一。
（2）〔訳者註〕マタイ一八・一―一四に「小さいもの」に対するイエスの深い言がある。

○十一月二十八日

仕事に際しては、いつもまず第一に最も必須なことをせよ、しかも活潑に、かつ主眼を捉えて着手せよ。これが多くのことに時間の余裕を得るの途である。第二の、これとほとんど同様に善き方途は、不必要な仕事や努力を避けることである。

さて次には、生涯において然るべき時期に、娯楽とか社交の義務とかいわれているきわめて不必要なことを拋擲することが出来るならば、過度に努力しなくとも、そして健康をよく保ちながら、普通の仕事の量の二倍も三倍も担うことが出来る。

○十二月一日

いつか、老年期の始まる頃のある日、ひとは過去と結末をつけねばならぬ。怒りの心もなく、悔いの願いもなく。過去の本を閉じてもはやそれを開いてはならない。その中にあるすべての善きものに感謝し、すべてが善き結末に来たことを特に感謝しなければならない。そして最後には、すこぶる多くのことがもはや起る必要がなく、永遠に片付いたことを感謝せよ。

こうなったら、全く別なものである「永遠の」生活に向って突き進むがいい。その生涯への立

ち入りの諸条件は、ヨハネ一七・三及び六・四にある。前途の見通しは今後無際限なものである。

「のぼりゆく巡礼の旅路で
教えをさらに大きく深く学びつつ、
なおも我らは恵まれた業をはげんで
決して疲れず、断じて休むまい。
またつねに新たな力をもって
聖なる者、真なる者につかえよう。」

（ディーン・スタンレー）

これになお付言さるべきは、これは単に「罪の赦し」であるのみならず、なおそれ以上のこと、すなわち罪の自己忘却であるということである。

「赦す」（Vergeben）と「蔽う」（Bedecken）との間の区別をローマ四・七も詩篇三二・一も立てていると思われる。これは時間的にも互に遠く隔たり得る二つの異なった段階である。けれども人間自身における悪のあらゆる追憶の消滅をもってのみ、神の赦免は完成される。なぜならばま

さにこの痛ましい追憶が未だなお防がねばならない後転の虞いが追憶消滅の暁にはもはやないからである。

忘却の流水においては、およそ生涯におけるあらゆる罪過の追憶、また同時にあらゆる厭わしいこと重苦しいことの追憶が沈み去って、神のかぎりない恩恵の祝福された感情のみが残るといわれているが、あのレーテはダンテにおいて彼岸なる天国界にあるのではなく、なお此岸なる浄罪の山を流れているのである。けれども、あらかじめおのが過誤をすべて正直に認め、真実に悔いた者のみが、すでにこの地上において過ぎた時のあらゆる痛ましい想い出から完全に解き放たれる。

ダンテ『神曲』煉獄二八・一二七、一二八、二九・三、七一、三〇・一四二―一四五、三一・四〇―四二、九四―一〇三。

忘却の川

「赦し」とは恩恵に充てる言葉なり。
さわれ是はいやはての言葉に非ず。
我ら願わじ、われらの罪を
恩恵の座にて想い出ずるを。

我ら願わじ、おのが心の
聖龕にかの追憶のあらんとは。
いとも明るき陽光のもと
新たなる生命今や栄えよ。

我ら願わじ、他人の我らに
なせしところを憶え居らんとは。
「赦し」につきて語るあぎとは、
さなくば、またも胸中に嘆く。

われら願わじ、天つ聖国に
地の思念の到らんことを。
われらは願う、いやはての
陰翳も褪せたる光の川を。

○十二月三日

もしあなたがいつか本気になって聖書を読もうと企てるならば、そしてそれはキリスト教を識りかつ尊重することを学ぶのに、どんなときでもこよなく善き途であり、いつまでもそうであろうが、その時はまずあなたの弱さ、特にその事に気の向かない「旧きアダム」と話し合いをつけて置くのが賢明であろう。そして全く興味索然として来たら、皆目見当がつかなくなって来たら、直ちにもうそれ以上は読まないがよい。

聖書の各篇をすべて識るのは、疑いもなく善いことである。けれどもその中のいくつかは（それでも我らはそれなしで済まそうとは決して思わないが）この段階の初学者には、無意味なあるいはとっつきの悪い印象は与えることは否み難いところである。まず福音書から始めるがよい。これは最も大切なものであって、こちらが誠実であれば誰も感銘を受けないことはない。次には歴史的な諸篇を読むがよい。古代のいかなる他の歴史書も到底これにはかなわない。次に詩篇とヨブ記。次に預言者の諸書、そして最後に使徒たちの書翰、使徒行伝と黙示録、ここから我らの歴史がすなわち始っているのであるから。あなたは箴言、伝道の書、及び雅歌を、古い詩歌や金言の興趣ある作品とみなすことが出来よう。これらの諸書は、仏陀から由来したとしても、または吠陀〔波羅門教の原典〕に載っていたとしても、きわめて高き称讃を博するであろう。

その他、聖書のどの篇を特に愛好するかは全く個人的なことがらである。詩篇第三七及び第七

三の両篇は、「不信の徒輩が幸福を享楽していること」のために、こちらが内的な試誘に陥ったとき、最もよく心を鎮め宥めてくれる歌である。詩篇第九〇はおそらく最古の有名な祈りであって、今日もなお昔時の如く清新にして美しい。詩篇第九一は古来すべての戦士、勇士の愛吟である。ヨハネによる福音書はキリスト教の内的性質を最も善く開示するものである。マルコによる福音書はおそらく直接の証者の生ま生ましい追憶に相応する事実の最も根源的な物語であったが、非常に簡潔なもので、そしてその結末に関しては、私の知れるかぎりでは、批判の論駁を免れ得なかった。けれども読者にして全く誠実であるならば、どっちみち決して充分信憑するに足らぬ歴史的批判よりも、読者自身において証明され得る内的真理の方が、これらの諸書において重要である。

いずれにせよ、豊富な内容と激励の力とにおいて聖書に匹敵し得る書物は現に存在せず、未だかつて存在したこともない。

○十二月五日

「その友らに彼は眠れる間に善きものを与え給う。」これは次のようなことを意味せんとしている。すなわち、彼らは焦って仕事をしたり、諛ったり、あるいはさらによくない方途に訴えて立身出世するには及ばないのであって、そんなことをせずとも、仕事も、生活の資も、幸福な結婚

も、友人も、気力も、健康も、必要ならば休養までも、およそ人生の大切な宝はすべて与えられるということを。さりながら彼らは神の命令に即座に、忠実に聴き従い（「両脚で跛行する」ことなく〔すなわち、二者択一に迷うことなく〕）、働き、神の賜を全く誠実に使用し、これをもっておのが隣人を助けようとしなければならない。

神及びキリストと共なる生活は、世にあるかぎりの最も容易な生活である。それは宥された一種の気楽さすらも生み出だすものである。それは人間の生存を、この世のあらゆる享楽より愉しいものに成し得るし、しかもごく僅かの資力があれば足りる、あるいはむしろ全くなんらの資力をも要しない。というのは、それにはただ神との堅い友情のみが必要であるからだ、もしこの場合「ただ」という小さな語を用うることをゆるされるならば。これは不幸な人たちの本当の助けで、もし彼らがこの助けを知りかつ欲するならば、決して彼らに欠けることのあり得ないものである。

マタイ一一・三〇(1)、一四・三〇、三一、一九・二九。ヨハネ一五・七、一六・二四、三三。第一ヨハネ五・三。マラキ三・一四―一八、二〇。

（1）「わが軛は易く、わが荷は軽し。」

ヒルティー

永遠の生命（訳）

「時限が永遠の如くであり
永遠が時限の如くである、
そう感ずる人は解脱している、
すべてのあらそいから。」

ヤコブ・ベーメ

一

あなたがたが今日の世界において、信仰への瞭かなあこがれがあることと、現今の世界観および教養をもってしては目的を達成し得ないということとの間に、深い分裂を見ているのは全く正しい。これは全く真実である。これに対して私は次のように答える。

あなたがたは人生を永遠の観点のもとに、[1]すなわち、それは永遠のものであるという前提のもとに観察し、それによってあなたがたの全思索と行動を律しなければならない。あなたがたがもし現在の短かい生存をのみ絶えず眼中に置くに過ぎないならば、あなたがたのすべての宗教や哲学も、あなたがたのおよそ人間としての一切の努力も精進も、とかく弛緩した無力なものになってしまい、[2]それはあなたがたを決して全くは満足させないであろう。そしてあなたがたはあなたがたの人生を失う危険にさらされてしまい、その結果おそらく今までより困難な事情のもとに新たに奮闘を始めなければならない。後の服役は現在の服役よりも辛い。

（1）この言は、スピノザ〔一六三二―七七年〕から由来している。それゆえに幾分哲学的市民権をもったものである。

（2）これがむしろ、何故に現今の牧師が往々にしてついに社会主義に転向したかの深い理由である。社会主義は少なくとも同主義にとって唯一である現世生活の改善に力を尽していとなむということである。

これに反して、正しい路にあるということを瞭らかに感じていることは人間の幸福と進歩とに貢献するところ最も大である。ところがまさにこの感情を今日大多数の人間がもっていない。しかもこれは教会やその他の団体の内外いずれにおいても同様である。この文明化した人類は今やまた次第におのがたましいを求めている。このたましいは、「文芸復興（ルネッサンス）」を模倣して単なる感覚の世界と官能的歓楽に浸っている間に、人類から失われたものである。そしてこれはただ、永遠にして不断の存在の光明界においてのみ、再発見され得るものである。(1)

（1）それゆえこの観察は、一九〇八年の『政治年鑑』中の「ザイスの隠された像」という手紙と連関があり、またその展開である。同様な傾向を追求しているものに、一九〇七年十二月の『ドイツ評論（ルンドシャウ）』中のブレンネルハセット夫人の機智豊かな「間狂言」があるが、これも幾分あまりにもありきたりの「修道院（クロスト）」で幕ぎれとなっている。上述の階級の人々　すなわちオーストリアの貴族やアメリカの企業組合財閥にとっては他の方法では勿論だめである。

このような存在についてのこの設問は、一般に真の宗教や哲学に対する実際的な出発点である。永遠の生命があるかないかに従って、すべてそれから先のことに対する展望が変ってくる。そして遺憾ながら附言しなければならないことには、すべての教会が現にやっている宗教的な教説や、さらには現今支配的な哲学は、この根本問題を事実むしろ素通りしているか、あるいは少

なくともただ全く表面的に、しかも他のいろいろな教義を先ずもち出したあとで、彼らの観察と論議の領域に引き入れるに過ぎない。

特にこれは哲学の面においてそう言えることである。哲学は大体において、生命や死に対する実際的な結論を供することをやめた。しかし教会もこのことについてなんら解答を与えず、あるいはなま半可な間違った概念を与えて現世の生涯を誤って解釈するのに大いに貢献したというものである。もし教会が、未来において何がくるか、そしてどのようになりゆくかをあきらかにしかも全き確かさをもって言い得るならば、人々は多くのことを、現に教会自身によってまた教会の同意をもってなされているのとは別な具合に判断するようになろう。

永遠の生命を信ずるか信じないかは、一般に信仰か不信仰かに対する本来の基礎である。この基礎から、キリスト教的と非キリスト教的との両人生観の、それからさき一切の結果が生ずる。それゆえに、再び一般に「永遠の生命」が本当に信じられることになれば、今日の時代の生活は直ちに根本的に一変するであろうと大体主張し得る。

比較的教養のある風族[1]は、全く唯物的な人生観の船が沈みかけてきたので、今やすでにこれを見棄てつつある。このような唯物的人生観は、判断力の乏しい連中には、ヘッケルの「宇宙の謎」によってなら何とかもつことをもとめ得るに過ぎないものである。この「宇宙の謎」たるや、まさに依然として全き謎そのものであるのだが。

（1）〔訳者註〕 鼠族とは、「鼠どもが船を棄てる」というドイツ語の表現が、「万策尽きた」こと、「運命がきわまった」ことなどの場合に用いられるので、著者は多少皮肉を交えてここに用いたと思われる。

さて次に来るものは何であろう。ルクレティウスか、[1] カントか、[2] それとも聖書であるか。[3] ルクレティウスやゲーテは美的享楽の哲学で、順境の人々には適するが、大衆はこれに接して空しく終るまでである。カントは哲学の理論としては全く善いものであろうが、おのが胸中の「断言命法」になんら他の助けなしに常に従い得んがためには、全く力が欠如している。これは万人が各自に試してみることができる。あるいはすでにしばしば試してみたであろう。これが力なくしては、どんな識見も啓蒙もおよそなんらわれらを益するところがない。これに気がついたことは、現代の最大の洞察である。

ましてショーペンハウエル、[4] ハルトマン、[5] ニーチェ[6]などの厭世主義者は、彼らの哲学において自ら不幸な人々であったから、そのような哲学をもって他人を幸福にするわけにはいかないのである。

（1）〔訳者註〕 Titus Carus Lucretius（紀元前九四年頃―五五年） ローマの詩人的哲学者。憂鬱性の人で自殺をした。唯物論的原子論を基底とした『物の本性について』(De rerum natura) という哲学詩あり。

（2）〔訳者註〕 Immanuel Kant（一七二四―一八〇四） 近代哲学はカントに流れ入ってカントから出ている、といわれるドイツの世界的大哲人。

（3）〔訳者註〕 Bibel ∧ biblia = Bücher「本」（複数） 旧約と新約の両聖書より成る。旧約聖書の根幹は「律法」と「預言」。新約聖書は「福音書」とパウロの諸教会への「手紙」が主なもの。モーセに啓示された「律

法」宗教を、イエスはその根本精神において成就し、「福音」を投じた。キリスト・イエスは、神の啓示の言たる旧新約聖書の証示の対象であると同時に、神の言（ロゴス）の「受肉」として、主体である。聖書は教えの書ではなく、神の宇宙創造から完成にわたる大史劇の証言の書であり、このドラマの具体的な主体はキリストであり、支配する意志は神意であり、はたらく霊は聖霊であり、貫く法則は霊法である。

（4）〔訳者註〕Arthur Schopenhauer（一七八八―一八六〇）主著は『意志と表象としての世界』（Die Welt als Wille und Vorstellung）。

（5）〔訳者註〕Eduard von Hartmann（一八四二―一九〇六）ヘーゲル、シェリング、ショーペンハウエルの哲学を統合しようとした。主著は『無意識的なるものの哲学』（Die Philosophie des Unbewußten）。無意識的な不可知なものを宇宙の根柢に置いた。

（6）〔訳者註〕Friedrich Wilhelm Nietzsche（一八四四―一九〇〇）天才的実存哲学者。悲劇的性格者。

それゆえに、キリスト教と聖書が残っているばかりである。これは、文明の人類の、歴史的なしかもすでにいくたびとなく個々人のまた諸民族の生活において実証された遺産としてのものである。

現代の教養ある人々の大多数は、十八世紀末のそれらの人々に似て、当分はまだ「問題の人々」[1]である。彼らはしかし間もなく真剣に求めるであろう、そして数千年前にすでに詩篇第三六篇に詠われているものを遂には見出だすであろう。

「神よ、あなたのいつくしみはいかに尊いことでしょう。人の子らはあなたの翼のかげに避け所を得、あなたの家の豊かなのによって飽き足りる。あなたは川の流れをのませる如くに彼らに歓喜を飲ませたもう〔傍点の個所は特にドイツ語原文に従った〕。

いのちの泉はあなたのもとにあり、われらはあなたの光によって光を見る。」

(1)〔訳者註〕シュピールハーゲン（一八二九―一九一一）という小説家の小説の題名である。

二

以上のことから当然第一に結果する問題は、「永遠の生命」について知られている確実なものは何であるかということである。これは、聖書と教会の権威を度外視するかぎり、ひとが願うよりわずかなものになる。新約聖書でさえ、これについてはとかく多くを語らない。まことに、この分野では、新約聖書そのものにおいてもいくらかの矛盾や、少なくとも不明瞭な点すら発見され得るということは、ほとんどあらそわれないところである。ところで主の言（ルカ二〇・三五）[1]にどうも次のような意味あいをゆるすと思われるものがある。すなわち生き続けるのは、すべての人々ではなく、地上の生活態度が生命の持続にふさわしく且つ生き続ける能力を得た人々のみである。これに反して、他の人々は、自己の中に霊的人格を形成することをしないで、ただ肉体にのみもっぱら奉仕し、しかも本質上ただ肉体にのみ属していたので、肉体とその運命を共にする。これに反して、他の有名な若干の言は、死者の幾兆億に対する一般的な最後の審判を想定しているように思われる。この審判は人間のあらゆる想像を絶するものであって、そのような想像

が試みられた場合には感服するような表現はほとんど見たことがない。[2] これに反してまた、貧しいラザロと富める男との譬話においては、両者とも死後直ちに、これに先行する世界審判なしに、彼らの前生にふさわしい場所に到着した。このことはわれらの想像能力にはるかによく適合する。なぜなら、われらはこの方がより多くあり得べきこと（しかも、キリストの復活にもより善く類似している）と思うからである。すなわち、霊的人格は、死によってその肉体的附属物から解放されて、かなりの期間（おそらく数千年をも認容し得ることだが）名状し難い一種の無感覚状態で、しかも不定の場所に過ごさねばならないというよりは、直ちに、そしてなんらこれにつづく中間状態なしに、生き続けるということである。しかもそれは彼らが地上の生涯において到達した発展段階に可能な様式において生き続けるというわけである。

（1）〔訳者註〕「かの世にはいって死人からの復活にあずかるにふさわしい者たちは、めとったり、とついだりすることはない。」さらにまたヨハネ三・三六、一一・二六、一〇・一八、二八参照。

（2）最も有名なのは、〔ローマのヴァティカン宮殿にある〕シクスティーナ礼拝堂のミケランジェロの壁画である。世界審判のキリストを描いているとされてはいるが、裸身のヘラクレスと言いたいあの像は、洗練された感覚には適しないものである。

人間はなんら最後の審判を要しない。人間は、自分がなし得る状態においてのみ生き得る、ということによって自分自身を審くものである。人間の天国と地獄とは、神からの距離のいろいろな段階なのであって、それは〔死とともに〕今やあきらかになる。われらが、〔今生において〕在るとこ

ろのものとして、〔来世においても〕いつまでも在るのである。いわゆる死は霊的人格が肉体的人格の外被を解き去るに過ぎない。その際この霊的人格の発展が強かろうが弱かろうが、それは問うところではない。がしかしこの霊的人格は今や〔死の彼岸においては〕自らただ独りで、そのさきの生存の新しい諸条件に然るべく適応してゆかねばならない。[1]

（1）ブランデンブルク選帝侯妃の有名な讃美歌「イエス、わが頼み」、同胞教団讃美歌一二六四番や、かの使徒信経もこれ以外のことを意味し得ない。そうでなければ、使徒パウロのコリント人への第一の手紙一五・三五―五〇と直接の矛盾におちいる。ヨブ一九・二六のルッター訳も新版ドイツ語聖書ではこの意味あいに改められてある〔すなわち「私のこの皮膚が砕かれたあとで、私は私の肉体なしで神を見るだろう」という句になっている〕。

これを欣然としてなし得、そしてより完全にこれをなし得ることを妨げるものがとりのぞかれてあるなら、そのような霊的人格は幸いなるかな。

さらば、「幾多の人を怖れにさそう死は、
われらには復活覚醒の呼び声である。[1]」

（1）したがってなんら恐れることはない。霊魂と肉体との結合帯を解く所作も、臆病な苦痛をこわがる人々が想像するようには痛くも長たらしいものでもないに相違ない。もちろんこういった霊肉分裂の死に先んじて苦痛の伴った病気がくることはしばしばある。しかしこれとても大方は、十分に完成していないものを、な

お速かに力強く仕上げる目的をもっているに過ぎない。

三

われわれは以上のことを、大いに進展している個々人の報告から引き出して例証することができる。それは当代の人々からもできる。たとえば、説教者ムーデー[1]の病中記、あるいはケーン僧正の仮死についての報告などが挙げられる。後者の如きは死を「人生の最も貴重な瞬間」とすら呼んでいる。すなわち死は生命への変化にすぎず、死に対する恐怖の方がはるかに悪いものである、というのである。死において主要なことは、この「移り行き」そのものではなく、その後に来るものである。トルストイ[2]も言っている、死は「愉しい出来ごとで、眼鏡を破るだけのことである。その眼鏡を通して今まで世の中を観察していたのだが、こんどはより良き眼鏡に換えられるのである」。彼はさらに言う、「死の心備えのできた峯に立つのは、悦ばしい感じである。この峯の上では、まことにたやすくまた静かに生命の形態が変えられるのである。死もまた生命である[3]」と。

(1) 〔訳者註〕 Dwight Lyman Moody (一八三七―九九) アメリカの伝道者。シカゴで商売をしながら子供に伝道して日曜学校を開き、やがてシカゴYMCAの監督となる。晩年にはシカゴ聖書学院 (Chicago Bible Institute) を創設する。

（2）〔訳者註〕Lev Nikolaevich Tolstoi（一八二八―一九一〇）ロシアの文豪。貴族の生れであるが、農民のために、実践的にまた文筆の上で尽力し擁護した。キリストの福音が彼の人生観の脊椎骨で、暴力革命ではなく、愛と善意による無抵抗をもって真理のために戦う心魂であった。彼の文学にはそのような愛の血が流れている。

（3）マルコ一五・三九〔「イエスにむかって立っていた百卒長は、このようにして息をひきとられたのを見て言った、《まことに、この人は神の子であった》」〕。近頃他界したバーデン州のフリードリヒ大公についても、その臨終の数時間において、彼の気分がこのような著しい高潮を示したと伝えられている。

降霊術（霊交術）的な実験や書物は、このような〔生死の〕移り行きのうえにかかっている外被をはがそうと試みるものである。たとえば次に掲げる、ある女の死者の陳述は、いわゆる霊媒筆記者によって伝えられたそのような出典からのものであるが、少なくとも内的に事実あり得そうなものをもっている。「私は死にましたとき、少しも苦痛を感じませんでした。ただかぎりない静けさ、安らかさを感じました。それから私は目覚めましたが、室の中の私の旧い肉体の外側に立っていました。私はそんなにも奇妙に心地が好いので、言い知れず不思議なおもいでした。それからしかし、私は自分が死を乗り越えたことに気がつきました」。「……私の場合は、死の踏み越えは全く苦しみなしに行われました。……ある人々は、比較的長い時間かかります。他の人々は、瞬間的にすみます。外被は開かれます。内味（なかみ）はとり去られます。こうしてすべてがすぎ去りました……」。「私は死の両側の人生がこんなにも符合するものだとは予想もしていませんでした。たましい（ゼーレ）が肉体を離れても、たましいは以前と全く同じ状態です。真の自己を形成している

たましいは、〔地上では〕知力（フェルシュタント）と身体とを道具として使っていたわけですが、今はしかし、身体をもはや必要としなくなったのです。たましいは知力、知識、経験、思考の習慣、性向などを保持しています。これらすべては以前と全く同じままです。ただ時折、肉体的な外被が次第に脱落してゆくので、その外被から死によって解放された本来の自己というものが暗くなり害われてゆくということが起るのです。……最初の瞬間に私はある種の畏敬の念に打たれました。けれどもこの感じが消え失せると、私の旧い本性がまた現われてきました。そして私は事実、私が今もなお旧（もと）のわれであるということを感じました。ただちがうのは、力と自由をもっと強く感じているということだけです。それはいわば、生命力の高揚した感じでした。――私の病後、二倍も三倍も有頂天にさせてくれるものでしたが――どんな興奮もない心を鎮める感情と結びついたものでありました」。

現代の知名な一人物（サムエル・アームストロング将軍）は、これと全く符合して次のように言っている。「ところで私は今、別な世界を識ろうという好奇心にかられています。彼岸ではすべては全く自然でありましょう。どうして死を恐れることができましょう。死はその友人です」。

このほかに、かつて死に近づいたことのある人は、すでに自分で死についてのある種の印象を得ているであろう。死は断じて、「恐怖の王」だとか、あるいは中世の殺風景な骸骨の男や死の舞踏といった陰惨な心像にふさわしいものではない。これらの心像はその慎重な保存におおかた

は価しないものである。

恐怖の王は死ではなく、赦されていない罪過と、その結果、陰惨な慰めのない神からの離反へと心ならずも転落することである。

それゆえおそらくこう言うことができる。人格が肉体なしに生命を存続することは、高度にあり得そうである。これはまた以前から最も崇高な人々が信じてきたところである。もしこの生命の継続がなかったら、この短かい地上の生涯は、誰れにも全く骨折りがいがある生涯とはならないであろう。おおかたの人々にはまた、さまざまな悲惨の、全く不要な矛盾だらけの総体となるであろうし、そのような悲惨の総体は神的な知恵と義とは相容れぬものであり、またそのようなものは、これを本当に軽減しようとする人間のあらゆる骨折りをあざける。[1] われわれはそれゆえに、このような「生命の変転」を安らかに、喜んですらも、期待するわけである。この生命の変転はいかなる場合でも、ただ善をもたらし得る。より崇高なものを！

(1) 社会主義は、この点において、遂に没落する。すなわち、社会主義が自分の約束をまもることすらもできず、それゆえ大衆の信望をまた失うまでである。その前兆はすでにきざしている。

存続生命（フォルトレーベン）（死後の生命）の様式については、われら知るところおそらくはさらにわずかである。これについてどこかで言われているとしてもそれはすべて不充分な、または空想的な内容[1]のものである。いずれにせよしかし、それはより大なる完全性を目的とする活動また前進展開[2]であろ

う。特に一切の事態が帰着する愛においての完全性を目的とするものであろう。それはこの地上で「安息」という語のもとに想っていて、そして疲れた心や挫けた気力がたしかにしばしばまず第一に何はさておき欲するところのものではない。いわんやなんらかの享楽でもなく、歌をうたえや琴を奏でやですらもなく、これはまたある人々には現世に対する天国の優越を意味する内容ではないであろう、それというのも彼らは地上でそういった楽しみは充分あじわったであろうからである。このようなものは総じて信徒にとって享楽のパラダイスたるマホメット教的概念に属するものである。(3)

(1) 降霊術の霊媒者たちといえども、他界した人々のいる場所やその活動についての詳しい叙述をすることは、非常に警戒している。これについて書かれたものの中で、最も美しいものは、ダンテの「天国篇」のなかの、特にその最初の部分にある。それほど満足のゆくものではないが、ヨハネ黙示七、二一、二二章の中にもある。これらを読むと事態はもっと善いものだろうと、おもわず識らず思うのである。

(2) われわれは、永遠というものを、現世生活の段階的継続としての時限のはてしない系列という形態においてのみ想像し得る。それらの段階的時限の各々は、ある期間をもっており、かつ存在のより大いなる完全性を各々の目的としている。時間も空間ももはや存在しないであろうという主張は空言である。というのは、そのようなことは誰れも想像し得ないからである。

〔訳者註〕死について、ゲーテがエッケルマンに語った一つの個所(一八二四年五月二日、日曜日)をここに紹介しておきたい。「そこで彼(ゲーテ)は非常に快活に言をつづけた、〈七十五歳にもなると、ときおり死を思わずにはおられない。私は死を思うと全く安らかな心地になる。というのは、私の確信によると、われわれの霊魂(ガイスト)は全く不滅の性質をもった存在で、永遠から永遠へと活動し続けるものである。それはあの太陽に似ている。太陽はわれわれの肉眼にはただ沈んでゆくように見えるけれども、あれは本当は決

して沈むのではなく、絶えず輝きつづけるものであるように》と。」ゲーテも「完全性」を追求してやまない明るいたましいであった。

(3) あのカトリック寺院で行われる死者のミサでとなえられる大袈裟な「主よ、永遠の鎮魂を彼らに与えたまえ」(dona eis requiem aeternam, Domine.) という祈りも、それが、親しい死者たちの、人生のあらしになやまされた多情多感な心に関わる場合は、われらを深く感動させることもあるが、あの祈りは充分な真理ではない。

われわれはまたプロテスタント的に「穏かに休む」ことをも欲しない。真の永遠の生命をこそもとうと願うものである。

来世の生活では、現世を去ったたましいにとってもはや教会の分属といったことはないということを、ヨハネ黙示録が蛇足にもその第二一章二二節[1]で、しかも判然と語っている。それゆえに、この短かく、速かに移りゆく地上の生涯のために、こんな教会分属といったことにかくも決定的な価値が置かれるとは理解しがたいところである。これは有益な、まことに必要ですらあるところの教育機関ではあるが、存続生命への条件でもなければ、教会所属員の存続生命への保証でも断じてない。

(1) 〔訳者註〕「わたしは、この都の中には聖所を見なかった。全能者にして主なる神と小羊とが、その聖所なのである。」

ともかく、この問題に終止符をうつために、われわれはこの存続生命をわれらの今の想像器官をもってしては、精密に、それがそうあるらしいようには、描写する[1]ことができない。従ってこれ以上この問題にさらに深く立ち入ることは無益なことである。

こういったことは、この地上では信仰の対象とすべきではあるが、観察の対象とすべきではない。

（1）それゆえに、かの有名な二人の修道僧の物語の中でも、永遠界から帰還してきた僧は「こうである」（Taliter）とも「別である」（aliter）とも言わないで、「全く別である」（Totaliter aliter）と言っている。これらすべてに関しては、『幸福』の「超越的希望」を参照されたい。

四

永遠の存続生命に対するこの信仰は、どの宗教の、またどの有用な哲学においてもその基礎をなすものであるが、これは多くのまた大いなる結実をもたらす。

まず第一に、単に形式的または汎神論的ではない神に対する信仰をもたらす。この神のことは、われらの象徴的な書物や使徒信経などにおいては、いつもその冒頭におかれているが、実際はしかし人間の心の中では決してそのような地位を占めていない。人間の心は先ずこの神より他のいろいろなことを考えるものである。教会が認めるよりは遙かに多い事実上の無神論者が、キリスト教の諸民族の間においてすら存在するのである。存続生命を信じない者は、神を信ずる傾向がつねにほとんどない。然りわれらはさらに進んでこう言いたい、そういう人は神信仰への正しい理由をすらもたない者であると。

証明もされ得ないような、こんな不可思議な認容は、いったい何のためであるか。人生はせいぜい七十年か八十年までしか続かないし、しかもこの期間多くの人にはただ悲惨の堆積があったのみであり、すべての人には労苦の集積があったのみというものではないのか。その果ては術もなく、慰めもなく、言い得べくば意味もなく、永劫の虚無の深淵に沈んでしまうのである！　永遠の神ありとて、このような不断の、嘆ずべき芝居に対して何の必要があろうか。まことやギリシアの神々といったものにこそふさわしい芝居ではないか。かの神々は、黄金の食卓について宴楽にふけり、その地界からときおり彼らに押し迫ってくる涯しない悲歎の叫びに対して心も痛めず耳もかさないのである。かくては、つとにより善き神の像にかの神々がその処をゆずらねばならなかったのも当然であった。この神の像は愛の権化であって、この神は、彼の最も崇高な被造物たる人間を、その短かくして労苦にみちた蜉蝣的な生存のあげく、滅亡にゆだねることはなし得ないのである。

それゆえに神を信ずることは、永遠の生命を想うことと密接に結びついている。そこで教会が、この永遠の生命をその信仰の教えの中で他のすべての教説よりも先頭に立て、永遠の生命の確信を人々のうちに力強く発動させないならば、[1] ほとんど不気味にひろまりつつある無神論を有効に克服することに、現代の教会は決して成功しないであろう。そのようにしてはじめて、このような永生があることが疑いないものとなり、人間は、彼が永生を欲しない時ですら、然り、そ

ればかりでなく、彼が自殺により地上の生活から身を引いてさえ、繰り返し、しかも間違いなく、〔死後の生を〕生きねばならず、そして地上の場合と同じ神に出遭いかつ聴き従わねばならない、ということになれば、始めて教会はまた多くの正しいキリスト者を養成することができるようになる。そうでなかったら断じて不可能であろう。もしこのようでないなら、大多数の人々は、地上の生涯を、可能な場合は万人のために、しかしまず第一には自分と家族のために、できるだけ享楽たっぷりに仕組むことを選ぶであろう。そしてこの責任は自分自身に対してのほか誰にも負わないであろう。[2] けれども、神なくしては、または神から遠ざかっていたのでは、個人においても国民においても、その生活に祝福という神秘的要素が欠ける。この祝福がないなら、何ものも栄えず、最大の興隆も最高の文化も遂にはただ禍害に陥り、破滅に終るばかりである。

（1）もし永遠の生命がないならば、キリストといえどもピラトが彼を見なしたような世間離れの狂熱家以上のものではないであろう。他面にはしかしこの永遠の生命の仮定のもとでは、多くの人々にとって最大の躓きの石であるキリストの復活も、本来の奇蹟なくして解明され得る。われわれはすべて死から直ちに甦るのである。ただ見えるようになし得る全き霊力が充分でないというだけである。教会はこのことをその信徒たちに、実際はどのような状態であるかを到底明かになし得ないのである。

（2）詩篇第二篇はこの点において、今日のためにも、著しく真相を語るものである。ちょうどそのように今日、政治や文学の王者たちは語っている――しかも同様な効果をもって。けれども、彼らにして永遠の生命を信ずるに至れば直ちに考え方が異ってくるだろう。そうならない限り、相変らず厭世主義が支配的である。現世生活だけの楽天家は、余りにも簡単に、余りにも容易に、論駁されてしまう。〔詩篇第二篇。「なにゆえ、もろもろの国びとは騒ぎたち、もろもろの民はむなしい事をたくらむのか。地のもろもろの王は立ち

構え、もろもろのつかさはともに、はかり、主とその油そそがれた者とに逆らって言う、《われらは彼らのかせをこわし、彼らのきずなを解き捨てるであろう》と。」――すなわち天に向って石を投げるような叛逆を、地の権勢ある者も、民衆もやるが、それはいかに徒らなことであるかは、歴史がこれを証している。」

然り、そればかりでなく、このような生活には真個の、永続的な力が欠けている。この力の欠如をわれらは現に到るところで痛ましくも感じている。そしてこの力がないと、哲学や倫理の絶美な教説も、果を結ばぬ空言として終るまでであるが、これに反して、比較的単純な人々こそ、あの学者どもや世智にたけた賢人たちが実現し得ないことを遂行し体験するのである。(1)

(1) なんとなれば、「十字架の言は、滅び行く者には愚かであるが」〔第一コリント一・一八前半〕、彼らには、しかし、神の力であるからである。

〔訳者註〕「十字架の言」とは、「十字架」ということについての言説、という意味でもなければ、「十字架」という魔術的に唱えられる言という意味でもない。「十字架」そのものが、義にして愛なるキリストそのものの表現、贖罪の具体的表現。すなわち十字架という絶言の言、といった意味内容である。このような「言」は直ちにわれらのたましいそのものに迫り、神の義の絶対の権威、絶対無条件のキリストの愛としてわれらを圧倒するのである。この贖罪愛に圧倒されるたましいは、立ちあがること、復活すること、みたまを受けること、ができる。

ところでこれとは逆に、知的本質の生命がいよいよ高く――組織的に段階をなして――発展するやいなや、至高の叡智がこの秩序ある宇宙全体を統治しているにちがいないということ、そして単なる偶然がこの宇宙全体を創造したという可能性はないということが、大いに本当らしくなってくる。

それゆえに、神を信ずるということは、人間にはどんなにむずかしいことであっても、誰でも永遠の生命を信ずるやいなや、直ちにたやすくまた全的に理解し得るようになる。そうなると、不信は極めて非論理的かつ不可解なことになる。

将来の、力強く復活したキリスト教会の第一信仰箇条は、それゆえにおそらく次のように言われねばならないであろう。(1)

「私は永遠の生命を信ずる。」

(1)　信仰は、安息日と同様に、人間のためにあるものである。人間が信仰のために存するのではない。マルコ二・二七「「安息日は人のためにあるもので、人が安息日のためにあるのではない。それだから、人の子は、安息日にもまた主なのである。」――イエスの言」。

五

永遠の生命に対して、またわれらがこの永遠の生命の各段階において出遭い(1)、従ってあらゆる新しきものや不確かなものに際して、ある程度つねに既知にして確実なるものを形成してくださる不変にして愛に充ちた常時現在せる〔聖〕霊に対して、信頼深い信仰を抱くならば、その第一の果は、生においても死においても、人間のあらゆる感情のうちの最も不快なものたる恐怖が消滅することである。生が生涯のおわりにあたってただ進歩と善きものをのみもたらし得るとすれ

ば、われらはなんのために生きることをおそれよう。また死が、われらの高等な生命のさまたげをなす[2]あらゆる妨害物からの速かにして苦痛なき解放に過ぎないとすれば、われらは何のために死ぬることをおそれよう。これが真の勇気と献身的能力との基礎である。この点においては、今や極東の諸国民すら、彼らが道徳や不死の観念において欠陥あるにもかかわらず、われら〔欧州人〕よりも優っている。しかるに、生命と共に一切合切を失うことをおそれている者は、心の内奥においていつも臆病であろう。

(1) 現世においてもわれらはこの〔聖〕霊を苦心して呼び寄せる必要はない。そう思っている人々がかなりあるし、また公認の祈禱の実習はすべてそういった結果をもたらすものであるが。そうではなく、聖霊〔の神〕はつねに近く在りたもう、われらが彼を追い払わぬかぎりは。しかもこのことはわれらの自由にまかせてある。一般に実際信ぜられているよりも多く祈願によって達せられ得るのである。がしかしこれには、つねに聴きたもう神に対するきわめて堅い信仰が必要である。そしてさらに、ヨハネ一五・七に語られている事態が肝腎である。〔「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言があなたがたにとどまっているならば、なんでも望むものを求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」〕

(2) そうなれば、現今誇張されている墓碑崇拝とか豪華な葬儀とかいうものはすべてすたれるであろう。なんとなれば、そういうことは「塵の衣」(肉体)のこと、換言すれば、死後生命を存続する人の転居に関わるにすぎないからである。

精神的なことがらに対して、あらゆる肉体的なことがらの重要性が減じ、従ってまた苦痛の意味が軽くなってくるのは、ただ以上のような信仰の帰結であろう。現今、文明諸国民においては、精神が外面上は高く評価されているにもかかわらず、肉体がなお主役を演じている。およそ

肉体に関することはすべて、最高の重要性をもっている。それゆえ、われらの時代の人々はみな自分らの健康に小心翼々として、絶えず起りそうな危険をあれこれと考えてはおそれおびえ、健康を失うことを何よりもこわがっている。咽喉の中がいがいがするとか、肺に雑音がするとかいっては、医者の忠告に得たりかしこしと従って、故里も職業も妻子もあわてて棄てのこし、転地療養を求める仕末である。このたぐいの人々の中には、全く無益な生活をダヴォースやモントルイ〔の結核療養所〕に、あるいは〔南フランスの〕リヴィエーラ地方に暮らし、その果てはまちがいなく生命を失う者がしばしばある。[1] 身体に対してあまりにも気をつかうことは、直接有害な作用をなすことすらまことにしばしばあるものである。身体はただ僕としてはつねに善いが、主としては悪しきものである。しかも総じてまことに欠陥だらけの器具である。今日の工業や医術のあらゆる補助手段によって、文明人はなるほど、少なくともその上層社会においては、四囲の影響、バチルスや菌類、その他の伝染病の危険に対して、おそらく以前より安全にはなったが、しかしこれに反してその感情がどれほど利己的に、信仰と愛が、総じて理想主義的なものが、どれほどみじめなものになったであろうか。かつてその最善の時代にはしばしば見るべきものがあったのであるが。[2] これでは「英雄崇拝」も銅像設立もなんら役に立たない。これらのことはむしろ、はかない肉体やその欲求に隷属するに至った現代の亜流のともがらの[3]慨嘆すべき事態を示すに過ぎない。

（1）さりとて、官吏の保養や「慰安」が妨げられてはならない。官吏のきわめて緊迫した義務のためにはなおさらのこと。

（2）イサベラ・カイゼルの美しい小説『平和を求める女』は、これを叙述している。

（3）人間が自分の肉体に依存することは、事実まことに大なるものである。しかもこの地上の生涯だけを信ずるということになれば、直ちに自然科学的唯物的人生観全体が当然のことのように見えてくるほど、大なるものである。諸国民がその霊魂の平和を再び見いだすことになるためには、このような人生観の根柢が取り除かれねばならない。他のことを説教しても大した助けとはならない。がしかしこの人生観の根柢的な除去をしさえすれば、すでに救われぬまでに失われた生命を無理な手段を用いて、瀕死の人に休安を与えるかわりに、なお数時間の生命の延長をはかるような医術のしばしばほとんど笑うべき試みはなくなるであろう。

苦難すらも、この現世で最も不可解なものであるが、無限の存続をつづける生涯においては、その大きな意味を失ってしまう。人間の運命は、この現世の生涯だけのものとして理解されようとするなら、説明のつかない場合がいくらでもある。それでは、宗教も哲学も慰安の利目をもちようがない。それであるから、そのような「不平等」や「不公平」に対して憤激が絶えないのは、あまりにも首肯し得るところである。しかし苦難をもって、涯しなく長く存続する生涯のための不可欠の教育手段とみるならば、苦難にあずかっている人も、これを迎え容れる理解を見いだし得よう。そうなれば、その人は、彼の運命の愛に満ちた啓導によって、彼に必要以上に苦しむことがもはやなくなり、彼は栄えゆく死後の生活を迎える能力が与えられることになる。また彼はこのような洞察をもってすれば耐え得る以上に苦しむこともはやないのである。[1] このよう

にして苦難はその最も鋭い成分を失ったことになる。かくてこの苦難を負う人は、おそらくついにツィンツェンドルフ夫人の有名な美しい歌をもって告白することすらできるであろう。

我らを導く聖手にすがって
主イエスよ、我らは敢えて進みゆく。
我らは汝が信実(まこと)を知った。
また身親しく我らは感じた、
汝、われらに荷を負わすとき、
担う力をも与えたもうを。
汝がいつも求めたもうことは、
これを大胆に敢行すべきだ。[2]

（1）これには小品『病める魂』（一九〇七年）と『新書簡集』中の「不幸中の幸」を参照。W・ステッドはこれについて言った、「あなたが信仰があると言っても、もし自らをかなしみはかなむならば、なんの益があろう。あなたの悲嘆の量は、あなたの不信仰の量である」。ヘブル一二・一一、一二、一・一〇参照。

（2）「なやみから真剣な心が生じ、救済から感恩の心が生ずる。忍耐から剛毅が招来され、全托の心から信仰が生ずる。」（ラスキン）

然り、あなたがたは、充分な強さと結びついた苦難というものを、この人生のあらゆる幸福よ

りも選びとるといった境地にすらも到達し得るのである。

ところで、ここまで来れば、人生の終局は近づいたというものである。なんとなれば、それは別な生活からさし来る光線であり、「移りゆき」の前兆であるからである。

六

年をとればとるほどいよいよ足手まといとなり、不如意となるはかない肉体の意義と共に、あらゆる外的現象一般の大きな意義も、消え失せてゆくものである。これに比べれば心根のみは、霊的人格に綜合されて、一般にあらわとなり、肉体の寿命の果てたのちまで残るものである。われらが新しい人生段階に到達するのは、われらの言やわれらの業の尺度によってではなく、われらの精神的性格を形成しているわれらの思索および感情の総体の確固たる内実に従って判断されるであろう。[1] この性格を、われらはすでに地上において、来世の光に堪え得る段階にまで助成し形成せねばならない。それゆえに、これはわれらの主のまことに鋭い言が力強くも表現しているところであるが（マタイ二二・三一）、来世においては、現世で非常に軽視されていた人々が、有名な教父たちや現世で聖者と見なされていた人々よりも、しばしば高位におかれまた先進しているであろうことも充分あり得るのである。問題は愛する能力いかんにあって、これのみが来世に

おいて判断の尺度を成すであろう。その他のなにものも問題とはならないのである。[3]

（1）これが元来、大いに論議された使徒パウロの言、ローマ三・二八〔「わたしたちは、こう思う。人が義とされるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるのである」〕にふくまれている真相である。

（2）〔訳者註〕「イエスは言われた、《よく聞きなさい。取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる》。」

（3）ルカ一一・五二とマタイ二三・一三をも参照。〔前者は、「あなたがた律法学者は、わざわいである。知識のかぎりを取りあげて、自分がはいらないばかりか、はいろうとする人たちを妨げてきた」。後者は、「偽善な律法学者、パリサイ人たちよ、あなたがたは、わざわいである。あなたがたは、天国を閉ざして人々をはいらせない。自分もはいらないし、はいろうとする人をはいらせもしない」。――いずれもキリストの言。〕

われらは特に晩年においては、すなわち他のすべての課題が、ある部分は色褪せ、ある部分は充たされてしまってからは、心根を全く純潔にすることを努めるより優ってなすべき真剣なことはもはやないのである。しかも来世の生活においては、心根があらわに白日に晒されるであろうから、心根が来世生活に適応するようにである。

心根のこの純潔からのみ、「あらゆる理知よりも高尚な」平安が生ずる。そしてこの平安を、ゲーテもある非常に美しい詩に、人生の他のすべての財宝をもってしても充たされなかった彼の心の最も深い要求として詠っている。

「汝、天より降れる者よ、

苦悩をみな鎮める者よ。
倍してみじめなものを、
倍して活きた力で満たす者よ。
ああ、わたしはいとなみに疲れた！
甘美な平安よ――（永遠の平安よ）
来よ、ああ来よ、わが胸のうちに[1]！」

（1）〔訳者註〕これはゲーテの『旅人の夜のうた』（Wandrers Nachtlied）という八行の短詩であるが、原詩の第六行 „Was soll all der Schmerz und Lust?“「苦楽なべてはなにを意味するか?」が、ここでは故意か偶然か省かれている。終りから二行目の「永遠の平安よ」（ewiger Friede）の二語はヒルティーが挿入したものである。

この平安をこそまことに、意識してか意識せずしてか、どの人間の心もあこがれている。しかし心はこの平安を見出だされない、いずこにも。もし永遠の生命を信ずることがなかったならば。

七

財富、高貴、各種の名誉などのような外面的優越はみな、「永遠の相のもとに」（sub specie

aeternitatis）観察されるならば、ただちに価値を失うことは自明の理である。これらのものは大部分真の生活にとっては妨害物であるに過ぎない。福音書のいくつかの言、たとえば、ルカ一六・一五、マタイ一九・二三、マルコ四・一九、一〇・二四、二五といったような聖句は、実在的な、しかもわれら現代人にとっても決して陳腐でない意義をもっている。ところでこれらの聖句は、きわめて敬虔な高貴な人々や百万長者や彼らと非常に密接に結びついている高貴な僧侶階級に不精不精に読まれているに過ぎない。名誉を得ることを好む（ヨハネ五・四四）[1]大多数の人々は信仰をもつことができないということ、また老トマス・ア・ケンピスが「この世の名声はいつも苦悩を伴っている」といっていることは、むしろ文字通りに真理であり、経験から得られたものである。

（1）〔訳者註〕「互に誉を受けながら、ただひとりの神からの誉を求めようとしないあなたがたは、どうして信じることができようか。」

万人の平等、地上の平和など、自由と平和のすべての夢想家の抱く理想は、永遠の生命の信仰を土台としてのみ考え得られるものである。というのは、この永遠の生命においては、もはや闘争も憎悪もないであろうし（ヨハネ黙示二一・三四）[1]、位階も階級も称号も富めるも貧しきも、総じてただ束の間に過ぎ去ってゆく現象にすぎないこれらのものは、もはやそこにはないからである。この永遠の生命を真剣に信ずる人には、これらのはかない優越は、この地上においてすでに

もはやあまり価値をもたないであろう。

（1）〔訳者註〕「見よ、神の幕屋が人と共にあり、神が人と共に住み、人は神の民となり、神自ら人と共にいまして、人の目から涙を全くぬぐいとって下さる。もはや、死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過ぎ去ったからである。」

少なくともこのことをこそ、あらゆる国々の理想主義者は、無神論のかわりに、またこの短かい地上の生活のために享楽のわけまえを求めるかわりに、教えるべきである。このような要求は、彼らの有力な反対派によってつねに拒まれるであろう。(1)

（1）マタイ八・一九―二二参照。心根の重要性をキリストは、マタイ五・二八のまことに人情の機微にふれた例をもって表明している。〔聖句引用の前者。「するとひとりの律法学者が近づいてきて言った、《先生、あなたがおいでになる所なら、どこへでも従ってまいります》。イエスはその人に言われた、《きつねには穴があり、空の鳥には巣がある。しかし、人の子にはまくらする所がない》。また弟子のひとりが言った、《主よ、まず、父を葬りに行かせて下さい》。イエスは彼に言われた、《わたしに従ってきなさい。そして、その死人を葬ることは、葬儀屋〔私訳〕に任せておくがよい》。」聖句引用の後者。「しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである。」〕

八

見る眼ある者は誰れでも疑いなく、現代の人々はその大多数が、来世の生活をもはや正しく信

じておらず、彼らの希望も努力もすべて現世生活の改善に向けてきた[1]という事態を知っている。最も著名な人道主義者も博愛主義者すらもほとんどこの例外ではない。彼らはおおかた永遠の生命の思想からは出発しない。彼らがこの永生の問題を、永生の問題としてさらけ出す場合も、また彼らが手ばなしに決定的な唯物論者ではないにしたところで〔出発点がまちがっている〕。これから生ずるもろもろの結果はどんなものであるか〔次に列挙してみよう〕。

（1）それゆえここに、どの「改宗」も「転心」も始まらねばならぬ点がある。単に限りある生命はなんら意義もなければ、なんら道理もないので、使徒信経の他のどの箇条を信ずるより、永遠の生命を信ずる方が容易であるからである。神を信ずることができないと言うところの今日の多くの人々に対する当座の応答はこれである。すなわち彼らは永遠の生命を信ずることを先ず第一に試みねばならない。彼らが欲すれば、できるのである。

不明瞭で、理想主義に対していかなる場合にも全然不充分な教育。一体どの生徒が今日永遠の生命を確く信じているか。

正しからざる哲学、正しからざる宗教。〔例えば〕今生において「生を充分楽しむこと」。それはなんら他の生活が今生のあとに続いて来ないということをかなり確信しているからである。このような生の十全なる享楽はゲーテ的人生哲学であって、教養ある現代人のおおかたがこれに帰依している。

死に対し、病気に対する恐怖、装体のことに対する過度の心労や保健。然り、それはまた身体

と絶えず増大する身体上の要求に対する精神の隷属である。

無際限の享楽欲と歓楽。かくては貧困者を有効に支援することができなくなる。これに反して無同情が原則となり、少数者の超人主義が擡頭する。ニーチェにおいてその預言者を見いだしたごとく。アフリカですでに大規模にドイツ人によってすら遂行されたごとく。

生活の絶えざる焦燥と不安。人生が短かく、多くの偶然のできごとで脅かされているから。(ただ永遠の生命を知っている者のみが、いかなることに対しても時を掌握している。)

以上の次第であるから、一番善くいったところで、多くの労苦と憂慮と恐怖の連続。しかもそれらの報酬としては、同様に一番善くいったところで、身に感じもせぬ無価値な「死後の名声」を受けるに過ぎない。けれども最大多数者には絶望的な悲惨がのこるのみで、彼らをこの悲惨から救い出す「社会政策」はない。

最後に、敬虔な人々においてすらもまた、キリストの「代贖の義」というまどわしの観念〔の信仰〕となる。この代贖の義によってキリストは、心根と行為においてわれわれがあやまちをおかしたすべてを無雑作につぐなってくださるというのである。[1]

(1) 教会の正教論(オルソドクシー)は通常この真理を表現したものである。人々は安んじてこれに信頼することができる。けれどもこれはもはや全く納得のいく表現とはいいがたい場合がしばしばある。というのは、真理というものは、その性質上絶えず「成長する」ものであるからである。しかも言語は変化するものであるからである。

岩にあたりて砕け散るらめ。」

一一

もし人類に、苦難において与えられる教化の最大の補助手段がないならば、人類はキリスト教をもってしても救いに達するわけにゆかないであろう。「汝を運んで完全の域に到らしむる最も脚早やの動物は苦難である」とすでに中世の神秘家が言っている。〔上述の引用句で「運ぶ」というよりも〕「運び得る」と言った方がもっとはっきりしたであろう。なんとなればすべての苦難が必ずしも完全に導くわけのものではなく、自発的に愛をもって神の聖手から受けとって善用された苦難のみが完全へと導くものであるからである。その他の苦難はただ混乱させたり、邪慳ならしめたり、あるいは虚弱にするばかりである。しかし充分な力と慰めの裏づけある苦難は、人生がわれらの教育のためになす最善のものであり、また特に力の最善の補充手段である。

事実われらが有するおおかたの力と本当の識見とは、われらが苦難の時期に集めた経験から由来している。その生涯において苦難を味わったことの余りにも少ない人は、済度し難いほどに凡庸であり、人間的教化のどんな手段をもってしても進展させることができない。

それゆえにあなたがたも、苦難なくしては決して真の愛に達しないであろう。苦難の欠如は人

この流れより世を救い
地獄の門を閉づる者あり。

すべてにわたる無限の力
聖手にあり、昔も今も。
きずなをばみな彼は断ち、
《運命》の進路を転じ得るなり。

彼を信ずる者はみな
勝利を得ん、いつか必ず。
神の聖顔を仰ぎ見ん、
大なる報いにあずかりもせん。

愛の波浪にうち乗りて
この岸につかざる者は、
人をあざむく海精の

（1）当時生存していた人々の中の常恒的な最幸福者、すなわちこの世界的国家の支配者、アウグストゥスは、「友らよ、喝采せよ。喜劇は終った」との言を吐いて死んだ。

このような状態から当時キリストは世界を救ったのである。

その人自身はユダヤの簡素な一家庭に生長し、古代の教養理想全般に対してはなんら直接の関係に立っていない一人の男〔キリスト・イエス〕[1]に対して霊的な従属関係に身をおかねばならぬことは、教養ある人々にとって今や新たに困難となってきた。教養人はむしろさしあたり、道徳的に低級であった文芸復興時代の力と美とを讃仰しようとするか、または動物的進化以上の理想を不可能とみなすところの単に自然科学的な人生観を信奉しようとするかである。

（1）この点に関してキリスト教はしかしながら非常に簡瞭的である。ヨハネ一四・六〔「イエスは彼（トマス）に言われた、〈わたしは道であり、真理であり、生命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない〉」〕、三・三六。マタイ一一・二七、一二・三二。

しかし、彼ら教養人の中の優れた部類に属する人々にとっては、こんなことでは価値ある人生の目的は全く達するわけには行かないとの感情がすでに再びきざしており、そして明かに増大しつつある。

「悪の大なる潮流は、
無碍（むげ）に世をつらぬき流る。

的ではなく、ほとんど全く見知らぬものになってしまっている。[1] そういうわけで人生の歓喜と人生への正しい力も学びとらねばならない。

（1）家庭においてさえも同様に愛が欠乏している。子らは父を愛さず、兄弟姉妹の間に愛が乏しい。愛は、これを再び新たに学んで身につけねばならない技能となった。

一〇

われわれは今再びかなり正確に、古代世界の末期なるアウグストゥス帝時代のローマ人の立場に到達したようなものである。すなわち、すべての文明国を包括し、極度に完備した武力によってあらゆる内外の敵に備えられてあるところの、外面的平和と形式的正義の国。学問と芸術の隆盛、そしてその快楽がますます一般に理解し得べく接触し得べきものとされていること。快楽の生を全うし現世の美を享楽することをよりよく可能ならしめる心身一般の発展である。しかし一面無気味な不満な感情が随伴する。この感情はこれら一切の上に、解明し難い運命、一種の「宿命（ケー）」または「必然（アナンケー）」が支配していることを覚えしめ、これらがこの生の享楽のただなかにある最も幸福な者をすらしばしば忽然として妨げ、かつ一般に幾千万の人々にこの生の享楽を強引に拒む[1]ものであることを覚えしめるものである。

するのではなく、むしろ教説に従って行動せんとするならば（ヨハネ七・一六、一七）、その教説の真理なることを確信するに至るのみならず、神に対して〔キリストと〕ほとんど同様な関係に立つこと（ヨハネ五・一九、三〇、一四・一二）、万願の成就（ヨハネ一五・七）、および永遠の生命（ヨハネ一一・二六、八・五一）を約束している。彼自身はこれに対して愛のほか何ものも要求しない（ヨハネ一四・一五、二三、二四）。

幸福というものを、ほかの多くの世俗の道で求めて徒労であった人々に、この信仰をもってやってみること[1]をさとすには、以上の指示で実際充分である。この信仰は、今は幸いにも国家からも教会からも強いられることはない。

（1）これを真剣に試みる者は、誰でも、キリスト自身から発しているすべての言は、文字通りに生活に実証されるのを経験するであろう。この生活というのは、これらの真理を理解し、ここに付言するなら、しばしばまたこれに耐え得るように適して来た生活をいう。その他の生活においてはもちろん実現しない。ルカ一〇・二七。ヨハネ六・三五、四四、四七、七・一六、一七。これに反して、今日もなお昔と同じく、人々が多少なりともキリストを避けることによって神に達することは、全く不可能でないにしても困難である。ヨハネ三・三六、八・一二、九・三九、一〇・三六、一二・四七、四八、一四・六。マタイ二三・九、一〇。生れと育ちによって、キリストについて何かを聞き及んでいる者には、少なくともあまり成功しない。けれどもキリストについて知らない人々は、神の忍耐のもとに立っているのである。

そうであるかぎり、今日の世界は宗教改革時代の世界よりも、救いに近いのである。けれども現代はまず第一に愛を学びなおして身につけなければならない。この愛は現代人にはもはや自然

（1）小説においては、たとい好意をもって書かれた場合でも、キリスト教は通常失敗している。キリスト教を代表しているものは、あるいはのろまな勿体振った、または「柔和な」、すなわち優柔不断な牧師か、またはバルチヴァルのような「まぎれもない愚者」か、普通はあわれむべき副牧師であって、この人は雅量のために自分を棄てることができず、ついに彼は貴族的な城主の娘と恋に陥り、そのために没落する。男らしい男は稀にしか現われない。だが時には、そのような男のいないのを嘆く婦人があらわれる。たとえばイプセンに出てくるような。

キリストの「性質」について最近論争が起っているということは、次のような彼自身の言によってみれば、まことに奇怪千万なことである。すなわちヨハネ一四・一〇、ルカ一〇・二一、二二、マタイ一一・二七の如きは、神学上の論議の余地をのこさないものである。しかもキリスト自身によってヨハネ一七・三[1]に、他のすべての「信仰告白」を、その簡潔さと必要な澄明さとにおいて凌駕している充全な「信仰告白」が遺されているようなわけである。

（1）今日までキリスト教会がどれも、これをとりあげなかったということは、教会の知恵にとってプラスになる証明ではない。もしとりあげていたら、用語に関する多くの無益な昂奮動揺を免れ得たであろう。イスラム教（回教）はそのような全く簡潔な信仰の型をもっていて、それほどの信徒にも不滅の感銘を与えるのである。

〔訳者註〕ヨハネ一七・三は、「永遠の生命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることであります」というイエス自身の祈りの一句であるが、学者はこのヨハネ福音書第一七章のイエスのいわゆる「大祭司の祈り」を、そのままイエスのものとして受けとることに批判をくだしているが、ヒルティーはここにイエスのいわば「真言」を観る。

キリスト教の開祖は、彼のもとに来らんとする各人に対して、各人が彼の教説を単に「研究」

神」であって、まことに神はこれを感得し、これに近づき得るのであるが、しかもそれはただ愛することによってのみである。きわめて学殖ある哲学者も神学者も、あるいは宗教改革者すらも、愛においてあまりにも乏しいならば、人類の発展のためには、ほとんど価値がないのである。このことは今まで長い間不明であったよりも、また幾分明らかとなり始めてはいる。

(1) 彼らは今日もなおこう言っていると同然である、「パウロよ、おまえは狂っている。このようなことがらに多くたずさわるのは不健全である」と。しかも今日すでに多くの人々が次のように言っている、「おまえは私をすんでのところで説き伏せようとした。しかし私の位置は当分の間なおこの道を往くことを禁じている」と。行伝二六・二四―二八。さらにマタイ一三・一三―一六、イザヤ六・八、九を参照。

単に、教会制度の改革とか、新哲学とか、自然科学的認識とかが問題であるのでは断じてなく、われらは今や全世界に愛の力を増大すべき急務の前に立っている！

この世も実はただ全く愛にのみ憧憬れているのである。現代の人々に嫌や気がさして来たものはキリスト教そのものではない。実は世人はおおかたキリスト教を全く知らないか、忘れてしまったのである。世人がきらいなのは、また彼らが入ろうともしない教会ですらない。そうではなく、さまざまな形で（一般的とは言えないにしても）存立しているあらゆる宗派の坊主（祭司）気質である。第十六世紀の宗教改革の当初もその通りであった。その当時も、エラスムスやロイヒリンの如き賢明な人文主義者とか、カールシュタットやミュンツェルの如き「社会的牧師」は、世を助けず、教会を復興せず、かえって信仰を一貫し得た人々がこれを果したのである。[1]

如上のことがみな、今日われらが受けている教育にあずかっている多くの人々に不可解に見え、特に彼らがこのことを、それが「商売」であるところの[1]（ここであえて「天職（ベルーフ）」という語を用いないのは、この語は「商売」とは全く別な意味をもっているから〔著者はこの場合もちろん「商売」なる語を皮肉に用いたので、一般職業としての「商売」をけなしているわけではない〕）牧師から聞かない場合には、いっそう不可解に思われるのも、いっこう不思議ではない。しかしこれこそキリスト教のほかの何ものでもない。このキリスト教はすでにほとんど二千年このかた文明諸国のあらゆる教壇から宣教され、系統的に組織された「信仰問答（カテキズム）」によって児童に教育的にたたきこまれ、大規模な「伝道」によって「非キリスト教的」異教世界に布教されているものである。キリスト自身、この一方ではあまりにも不信仰であり、一方ではそのかわりにあまりにも形式的な敬虔に陥っていて、そのために真の精神生活への力を喪失してしまっている時代には、新たに神とのこの結合と神へのこの愛、そしてそれゆえにまた人間への愛を強調するよりほかに何もしなかったのである。それゆえに、諸方面から希望され期待される如く、宗教や教会の新しいなんらかの形態を今創作するといった必要はない。およそ考えられ得るどんな宗教も、その存在の目的は、神と人とに対するこの愛を教えかつこれを促進させるにある。そしてこれを最も完全に果たす宗教が最善の宗教である。神を「認識」するためのみの宗教とか、神を「学問的に」把握するためのみの神学とかは、無益なものである。なんとなれば神は認識できるものではないからである。神は「隠れて在ます

状態を譬えて平和の「流れ」[2]と言い、イスラエルの預言者の他の一人はその神の名において次のように宣べ伝えている。[3]「この町は地のもろもろの民の前に、わたしのために喜びの名となり、誉となり、栄えとなる。彼らはわたしがわたしの民に施すもろもろの恵みのことを聞く。そして、わたしがこの町に施すもろもろの恵みと、もろもろの繁栄のために怒れて身をふるわす」〔ドイツ語原文をそのまま訳すと代名詞多く、意味がとりにくいから、現行日本訳聖書による〕。

(1) これは、「わけのわからぬ」婦人たち、すなわち退屈しきった婦人たちや、働くことをしないで愛にだけあこがれている娘たちにおいて、特によくある場合である。そういったのは今日まことに多数(レギオン)である。

(2) イザヤ六六・一二―一四。

(3) エレミヤ三三・九。

使徒パウロがガラテヤの人々に向って、肉のために播く者は肉によって滅亡を刈りとり、御霊のために播く者は、みたまによって永遠の生命を刈りとるであろう、といったのも、まさにこのことを意味している。この永遠の生命は将来に継続すべきものであるならば、すでにこの現世で始まっていなければならないはずだ。[1]

(1) ガラテヤ五・一六―二六、六・七、八。詩篇八四参照。

九

こともなかったことは、きわめて著しいことがらである。聖書の諸註解がこの点を充分に強調していないということは、[1]註解の欠陥の一つであると私はおもう。

（1）人間性のこの方面は、全く否定し去ったり、無視したりするわけにゆかない。もしそうでなければ、ひとは唯物論者と共に、この悪魔的性質をもって以前の野獣性の遺物とみるか、または人間は一般に悪く卑しいもので、文化によって幾分洗煉されているに過ぎないと見なければならないか、いずれかである。

（2）これらのことはすべて、ヨブ記には非常に詩的に記されてある。またルカ福音書の四章には、非常に生活に即して表現されている。ところでまたマルコ一〇・二八―三〇には、きわめて慰めに充ち、かつ全く如実に叙べられてある。

（3）この反抗は元来、人間がなしまた人間から期待される最大なものである。それゆえに福音的信仰のある女殉教者がコンスタンツの牢獄の壁に刻みつけた「反抗」なる文字は感動的な真理である。

（4）ルカ四・二。何が正しいか、また何をなすべきかを知るために、人間は長時間思いめぐらしたり、いわんや断食をしたりする必要はない。人間がつねに最も手近かな義務を見かつ行わんとするなら、正しいことも、なすべきことも、つねに全く身近かにある。

悪の最大の誘動手段は無聊である。この無聊のために悪は補助手段としてあらゆる可能な玩具を準備しているが、それらのものはみな、それらの目的を果さないで、まもなくさらに大なる荒れすさびをのこすのをつねとする。[1]これが特に多くの婦人のなやみの原因であって、それは次第に嵩じて神経衰弱になるのだが、しかも医者たちはその原因と治療法をあれこれとあらぬ方へと求めて、神からの遠ざかりにその原因を、従って神への立ち帰りにその治療を求めることをしないのである。神と共にさえあれば、いかなる無聊も生活の不満もあり得ず、預言者イザヤはこの

実践道として破壊消耗的な「生存競争」を、他の一切にまさって選びとるならば、人生の春のあるひと時、将来に約束すると思われたことがらが、その後の人生においてついに与えられなかった場合には、その責めは自らも共に負うべきものなのである。

八

悪の霊、すなわち人間のうちにある悪魔的要素、これはひとがこれをおよそ人格化すると否とに関らず[1]、たしかに実在するものである。またつねに同様に人間に対して積極的にはたらきかけようとねらっているものである。この悪霊が熱心に間断なく努力していることとて、人間のたましいを神との結合から分離せんとするに優る何ごともない。悪魔がこの世の諸々の財、名誉、富、権勢などをおのれに属するもの、またおのれにゆだねられたものと称し、おのれに帰服する心構えある者どもに、出来るだけ誘惑するように述べたて、そうでない者たちをこれに反して迫害をもって脅かすならば、それは悪魔が真相を語っているだけのはなしである。ただ彼は、おのれにゆるされている範囲を超えることはゆるされていない。そして彼は反抗に出会うや[2]、直ちにその力がだめになる。それゆえにあなたがたは安んじて、しかも断固として[3]即刻に反抗すべきである。そしてなかんずく怠惰を自ら戒めよ。なまけていると、悪魔は決して遠ざかってはいない。キリストですらこの法則からまぬかれてはいなかったし、彼が活動している間は「試み」られる

ものである。

「今やきずなは断ち切られ、
　悩み悶えし心根は
　　解かれたり万の苦より。
いたではすでに包まれて、
　やみしところは癒え得たり。
　　新ためぬ、愛はすべてを。
聖意こそはわが意、
　いとも平静に、われは坐す、
　　たしかなる甘き憩いに。
われをなやめし以前のこと、
　死せるが如く去りゆきぬ。
　　ささやくは平和の聖霊。」

さてしかしあなたがたが、人生観としてダーウィン＝ヘッケル流の「宇宙の謎」を、またその

とに信実（Treue）[2]を措いてほかにはない。昔のドイツ人はこの関係を〔今の人より〕もっと充全に理解していた。というのは、彼らはこの〔信実の〕念を、当時よく知られていた、家臣のその領主に対する尽忠の念に比較することによってであった。これは、今は全封建制度の崩壊とともに、大部分[3]消え去ってしまった人情である。人間関係にとっては、この信実の喪失は必ずしも有益ではなかった。人間関係はこの喪失によって、もっぱら改善などはしなかった。[4]この〔君臣関係をもってする〕比較は、旧約聖書のそれが花嫁の愛をもってしているより、われらにとってははるかに適切である。[5]花嫁の愛は東方諸国の事情に適合するに過ぎないものである。

（1）マタイ二二・三七、三八〔「イエスは言われた、《心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ》。これがいちばん大切な、第一のいましめである」。申命六・五、一〇・一二。

（2）信実は本来人間の諸性質の中で最善のものである。不信実にして信頼のおけない性質は最悪の性質である。これはいかなる輝かしい特性をもってしても償うことができない。

（3）非常に長い歳月を勤続した従僕や小作人には、今日も稀にこのような〔信愛の〕関係がある。

（4）現代の、法律上平等におかれている人間相互の雇傭契約は、この昔の愛と信頼の関係を全くは補充しない。

（5）〔訳者註〕古来わが国の武士道に流れていた尽忠の精神。楠正成に顕われ、赤穂義士に華咲いたものに、ヒルティーがここに力説する人間の信実が一貫していることはきわめて鮮かである。訳者は現代青年が、歴史に流れてきた美しいものを新しい在り方において生かさんことを切に祈る者である。

第十七世紀の一讃美歌は、この神との平和締結のこの状態に踏み入る第一歩をほぼ次のような詩句で佳く描いている。世人がこのような平和への希求なくしては、決して理解しないであろう

悪を安んじて公表することができる。それはまさに悪が看過されるからである」。

人間の刑罰上の義の理想もこのような形相を成すのであって、この理想に従ってほぼこの種の刑法を作りあげたいと絶えず追求している。

この「世」は残酷で、また同時に非常に矛盾している。この世は原則的に過度の寛容を示すか、それどころか悪を直接に促進させることによって、人々を絶えず悪へと誘っておきながら、悪を行った場合には厳しく非難する。

さらに適切に言うなら、人々が悪を行ったことが知れると、非難するのである。かくれた不道徳はなんら害わない。けれどもそのかわり不道徳は、不徳を行いかつつねにそれをかくしていなければならない人の生活力の根源と生活の歓喜を喰い尽すのである。

神はこれとは異なる。神は一切がうち明けられ、かくしだてなきようにされることを欲する。かくすれば、その審判にあたっては[1]、これに反して著しく思い遣り深く、柔和であり、寛大ですらある。

(1)　神はかつてどのような種類の「寵児」をもっておられたか。ヤコブ、ダビデ、ソロモン、パウロ等〔の如き強情や多情の人々であったが、魂の砕け得た人たち〕でなかったか。近代人については言わないでおくが。

この打ち明けた心のほかに神が求め給うものは愛[1]を措いてはない。さらに適切に言えば、まこ

おしまいである。これがこの愛のすべてのいわゆる「迷妄」への鍵である。ことがらは始めは愛のように見えるが、その根底においてはそうではない。そしてこの欺瞞や自己欺瞞はのちには必ず暴露するか、または欺瞞をかばって多くの絶えざる心労をもってその暴露を避けねばならない。「幸福な」結婚とか、良き永年の友情関係も、そのような、全生涯を通して相互に全き暴露をなんとか避けてきた相互的寛容の関係に過ぎないものがしばしばあるのである。

神、および神と人間のたましいとの間の愛に関しては、事態は違う。近代の一著述家がこれについて次の如く言っているのは正当である。

「だれでも自分の欠点がどこにあるかを知っているので、彼がその欠点に直ちにうち克ち得ない場合には、それがただもう暴露しないように、全力を傾注しなければならない。暴露の瞬間に彼は人々に対して万事休してしまうのである。なんとなれば人間の義は苛酷で仮借するところがないからである。人間の義はそれゆえに、われらの最も崇高な諸能力をも強制して、われらの過誤を隠蔽するような邪道に陥れる。このようにして必然の結果としてくるものは、人々が失望から失望へと転落し、相互に不断に失望落胆を招くことになるので、すべての人々が不幸になるということである。人間の義はただ悪のみを見、これに反して神の義は善のみを見る。神の義の前には実際悪はもはや全く重大なる意義がない。神との交わりが深まるにつれて、悪はたしかに脱落してゆく。何はともあれ悪を隠蔽するために力を用うるの要はなくなる。それどころか反対に、

わたしの使命はその方にある。

おまえを今やわたしは棄てた、
おまえを知ったあげくの果てに。
今やわたしは全くつかもう、
わがたましいの故里の国を。」

七

ところで主要なことがらは次の如くである。しかしこれをあなたがたがはじめて聞く場合には、おそらくその瞬間に驚くであろうが。すなわち、神と共に生きる方が、人間と共に生きるよりも、はるかに容易である、ということである。

神愛の背景と基礎がないなら、人間だけへの愛が最善なものであっても、それは全く相対的関係の上に成り立っているものであって、利己主義の上品な形式の他のなにものでもない。それは絶えざる動揺にさらされており、自己欺瞞や他者の欺瞞のために、その暴露を小心翼々と警戒しなければならないようなわけである。この暴露となるや、おおかた〔人間相対愛のよしなき〕ことは

見出だしはしない。たましいはこの力を実は要求しているし、この力のみがたましいに全き満足を与えるのである。たましいはこの美の瞬間的な大きな印象において、自分の悲惨と世間苦を忘れるに過ぎないから、このような印象が絶えず繰り返され、新しく与えられねばならないのである。

（1）美への渇きが全く鎮められるということは決してあり得ない。この渇きは絶えず新たに満足を求めているだけで、来世生活における未来というものをもっていない。この渇きは、しばしば決して最善とはいえないかなり少数者にとってのみ存在しているにすぎない。たとえば文芸復興期のイタリアの小さな専制君主たちは、その時代の最大の芸術愛好家であり、美術品蒐集家であった。しかも今日もまたときおり全くは非難をまぬかれがたい特権階級の人々がそうである。これに反して、真理への渇きと心情の内的な完全な平安への渇きは静められ得るものであり、この試みは万人がなし得るものである。マタイ五・六、一一・二五。ヨハネ四・一四、六・三五、八・一二、三二、一四・一七、二七、一五・七、一一。

このような美への渇きで満足しようとし、かつ満足できる人は、そうするがよかろう。今日もなお、最優秀の人々の多くの者がそのようにしている。

しかし他の人々は、その生涯の大なる瞬間においておそらくむしろ次のように語るであろう。

「おおこの世の素晴らしきものよ、
わたしはおまえをのぞまない。
もっと善きものが成らねばならぬ、

の流露なしにはいよいよ乏しくなるこの人生に、神の力をひきおろそうとする状態にある。

（1）たとえば、聖フランシスの生涯の宗教伝説の中にあるように、野獣が異常に彼に馴れ親んだというようなことは、決してあり得ないことではない。

（2）〔訳者註〕著者がこのあたりで「神の愛」といっているのは、正に神が主体である「神からの愛」であるが、「この愛」と訳した「愛」は、神からそそがれた人間のうちなる「神の愛」と見るべきであろう。またこの文のはじめのあたりの「神への愛」と訳した「神の愛」にしても、神からの愛を真に受けることなしに、まことの神への愛は生じないから、いつも神からのはたらきかけ、つかみかかりを根源にもつ事態であることを、読者はよみそこなわぬように。

これが現在われらが最も必要としているところのものである。しかしそれにはまず第一に「永遠の火焔のもとに宿り」得る個々人[1]を再び必要としている。

（1）イザヤ三三・一四、ヘブル一二・二九参照。

六

この世界が自然と芸術において提供する美しきものの中の最美なるもの、たとえば「薔薇の小路」から美しき春の朝に眺めたジュネーヴ湖、ミケル・アンジェロのモーセ、またはシクスティン礼拝堂のマドンナ、またはベートーヴェンの第九交響曲といえども人間のたましいを完全にかつ永続的に充たすわけにはゆかない。[1] 人間のたましいはこれらにおいてまさに善への本来の力を

明瞭に表現されたものである。またしばしばその道に明るくない人々によって記述されたものであり、あるいはまた迷誤を招く汎神論と混合したものであったりする。そんなものはおおかたの場合読まぬに如かずである。そういった事態をわきまえている者は、自らしかもよりよきものをもっているが、他の人々にとっては、それはとかくいやらしくまたは迷わせるようなはたらきをするのである。

このことがらのすべての記述は、しかしどうも不完全極まるものである。このことがらに最も近似したものは、おそらくダンテの天国篇第三歌の叙述、または聖書の「マグニフィカート」[1]とハンナの讃歌[2]であろう。

(1) 〔訳者註〕ルカ一・四六―五五の「マリヤの讃歌」のことである。ルッターの有名な解説（一五二一年）がある〔岩波文庫〕。すなわちマリヤがキリスト降誕のとき捧げた讃美の祈りとして伝えられるもので、その起句 "Magnificat anima mea Dominum."「わが心は主を讃える」の第一語をもって全体の名称としたもの。カトリックでは夕べの礼拝（Vesper）のためにこれに作曲したものがいくつかあり、バッハもコラールに作りかえている。

(2) 〔訳者註〕サムエル上二・一―一〇。預言者サムエルの母ハンナの祈りである。

人間の外面においては、神への愛の徴と結果はまず第一に人への愛の自然性である。これは自明のこととなり、それゆえに他人に本能的に感ぜられるのである。とくに卑賤なものはこの点において決して誤らない。動物ですらこの愛には一種の感覚を具えている。[1] また「初代キリスト教界の霊の賜」といわれているもので、今や部分的には再興させようと追求しているものも、それが虚構でなく、真実性をもっているかぎり、ただこの神の愛の流露であって、この愛[2]は、神の愛

の人間愛のあらゆる種類のものや、その愛から招来される幸福の一切を私の生涯で享受してきたが、神の近親感はそれらのものとははるかに別個のものであり、然り、永遠の立場から考えるなら、人間にとって到底耐えられぬものであることを証言し得るのである。

（1）それゆえに、キリストは神を端的に「力」と呼んでいる。マルコ一四・六二〔「イエスは言われた、《わたしがそれである。あなたがたは人の子が力ある者の右に坐し、天の雲に乗って来るのを見るであろう》」〕。神の「諸々の性質」を表現する語があるものとすれば、これこそが最も正しい表現である。――一切の真の力のこの源泉につらなることが、まことに人間の力の秘訣であって、あらゆる人生経験を体験した使徒パウロも、自分が弱いときに最も強い、とまで言っているほどである。第二コリント一二・九、一〇〔「ところが、主が言われた、《わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる》。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰りとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである」〕。詩篇七一・一六〔一八〕、ルカ五・一七、ヨハネ七・三八参照。

また神の近親感は、人々が入神、恍惚[1]、または単なる幻想と言っている一切の事態とはおよそかけ離れたものであって、むしろ一切の現実中の最も偉大にして最も澄明にして最も圧倒的な現実である。それはまた人間の優越性の結果でも発露でもなく、かえって人間はこのような瞬間には、他の場合と全く異なり、全く自己の貧弱さを自覚させられ、神の近親を自分の価値に帰するようなことは思いもよらないのである。

（1）いわゆる「恍惚境的信仰告白」について記されたものの大部分は不明瞭に感得されたものか、あるいは不

べて好都合にもその人に集って来ようとも、この冒険はきわめて不充分にしか果たし得ないであろう。人間は神なしに賢くあればあるほど、その生涯の終りにおいて、生涯の全結果があらわとなるに及んで、必ずやいよいよ厭世的な気分におちいるであろう。(1)

(1) フリードリヒ大王はこれに対する特に古典的な実例である。語り伝えられるところによると、彼は死の直前に、自分は奴隷を統御するのに飽きた、と言ったそうである。救済の途上のこの段階においては（この途のすべての段階においてとはいえぬが）、トーマス・フォン・ケンペンの『キリストに従って』なる小冊子が確かに相変らず最良の道しるべの一つである。

五

神に対する愛から、必然神の創造した万物への真の愛が生ずる。この愛は自己愛の一形態ではなく、いわんや実際の効果を伴わないような単なる思考形式でもない。

この吟味は非常にやさしい。まず第一に自分の中に力を感ずるかどうか(1)によって試される。この力の自覚はこの愛の最も身近かな作用であって、この力の自覚によって人間は単に自分自身と自分の悪い性質を克服できるのみでなく、外的生活のすべての、否、最大の困難にすら怖れなく出遭うことができる。それから人間がこの愛において感ずる幸福や平和によって試される。その幸福感や平和の想いは他のいかなる幸福とも到底比べられないものなのである。私自身は、最良

神とともに生きるか、神なしに生きるかは、本来的にして最大な人生問題である。自余のものはすべて枝葉のことがらに過ぎない。神に関する厳密精確な表現すらも全く重要ではない。人間はこの〔神の現実性の〕ような反論し難い事実を信ずれば足りる。詳細なことは究め難くもあり、それのみでなく多少は個々人の理解力に順応させねばならないであろう。(1)

(1)　あなたがたは、自分の能力に従って神を観念することができる。それは大して問題ではない。なんとなればすべてのものは欠点をとどめているからである。この神観念が特に三位一体の形態で出てくるかどうかは決定的な意義をもつものではない。実は過去とその神学とはこの三一の観念に非常な重さをおき、現今は反対におそらく余りにも軽視しているのではあるが。問題は、神が単なる学的概念であるか、それともまた単にスピノザの学説による「自然」という語の別語に過ぎないといったことでいいか、にある。あるいはまた問題は、ダーウィンの学説に従って、世界の万物は全く自分で「進化」するものであり、その際この進化の出発点も指導的精神も欠けているといったことでいいか、にある。存続しているすべてのものに関するこのような生半可な説明で一時的にも満足をするのは、哲学からも教会からも同時に離反し、疲労した時代であった。今はこのような時代は過ぎ去った。
　またいわゆる「礼拝」も、いろいろな形態をもっているが、それ自体、かなりどうでもいいことである。なんとなれば、礼拝においては、神に奉仕するのが問題ではなく――実は神に奉仕するとは、人格的な献身と愛の業によることである――、神に出来るだけ近づくことが重要なのである。

全く神なしに、ただ自己の力にたよるか、あるいは同時代の人々の絶えざる恐怖のためにその人々を超克してゆかねばならないような人々の善意や悪意をたよりにしてこの一生を送ることは冒険である。この冒険にはだれも耐え得るものではなく、だれでも、たとい外的事情や偶然がす

友とみるよりむしろ敵とみるところのさらに決定的な人間恐怖は、もともとただこれ愛である正しい神信仰よりほかの方途では徹底的にこれを除き得ると思ってはならない。なんとなれば、神を愛することなしに、神をただ「認識する」ということはできないからである。まず神の現実存在についての確かさに達しようとする試みを断固としてしりぞけ、神に愛をもって近づこうと試みよ。[1] この方がはるかに早く達成する。「神を思索しつつ把握」しようとする別の路は、スピノザの神に到らせるのが関の山で、この神は内容の空疎な「概念」に過ぎず、われらになんら関わりのあり得ないものである。

（1）理性は、理性を超えることがらに対しては理性で処理することをやめるにまさって、理性的に自らをあらわすことはあり得ない。（フィリップ・シドニー）

われらは神を「人格」として考えねばならない。なんとなれば、このような実在性（レアリテート）に対してわれらはいかなるほかの思考様式をももたないからである。神の現実性は、諸国民の大きな運命においてあらわれている。この運命たるや、およそものを考えまた歴史を知るほどの人を、唯物論的世界観からは確かに遠ざけさせる必然性をもっている。それのみでなく神の現実性は神の導きに身をゆだねる個々人の運命にはさらに顕著にあらわれている。人々は人生のしばしば小さくはあるが疑う余地のない多くの出来事において、神の現実性と人生の真の幸福を形成するところの神との親交の可能性が確かめられるのを見出だすであろう。

る。幾分神秘的に言えば、神が彼らにおいて、いっそう大なる歓喜と栄光とを体験し得給うからである。(1)

(1) パウロやアウグスティヌスと同種のこれらの著しい変化は、つねに予定説を肯定する論証を成すであろう。われらはこれと同類のものを将来もしばしば見るであろう。「召される者は多いが、選ばれる者は少ない」〔マタイ二二・一四〕との聖言は、これをめぐってすでに幾代も神学者たちが論争してきたのであるが、これはカルヴァンやドルトレヒト宗教会議が解釈したような意味ではなく、選ばれた者とは新時代の初穂、創始者、先駆者である。また前衛すなわち、われらの古代スイスの用語によれば、前進部隊の「失われた僕」である。この個所の誤った解釈（マタイ二〇・一六）はすでに多くの禍いを惹き起した。

無神論は単なる自己欺瞞である。ある場合は人生とその困難についての無知に基づいており、そしてこれは若い人々や順境にある人々によく見られる場合であるが、また他の場合ではさらに多く、自分の生涯に対するこのような潔癖な抑制から脱しようとの徒らな願望に基づいている。かかるたぐいは、おおかた官能的な、あるいはそうでなければ、享楽欲か所有欲の傾向ある人々である。彼らはむしろダーウィンやヘッケルの意味に制限された世界秩序で満足を得たいと思っている連中で、この世界秩序の中ならもっと遠慮なしに「道楽生活をいとなむ」ことができるし、彼らは、彼らにいつも欠けている内的な得心を、多くの同類の、特に新聞紙上での賛助によって、得ようと求めていることは明かである。

「世間苦」、すなわちふりかかってくるかどうか不確かな禍害に対する恐怖感、または誰を見ても

く、優れた性質を与えられ、きわめて恵まれた生活環境に置かれている少数の人々ですら、これを完全に実行することはきわめて困難である。われらは少なくともわれらの間にこのような実例をかつて見たことがない。ではあるが、多少類似した例で、普通のキリスト教と比較して遜色ないほどのものは多くある。それゆえにキリストこそはかえって人間性のこのような洗煉についてはほとんど語っていない。古代哲学の、「いかなる人間的なことも自分に欠けることのないように」というような命題は、キリストにはでて来ない。然り、われらはかえって福音書において、道徳を誇り信仰に熱心なパリサイ人たちがキリストに対して憎悪を抱いていることをいかにも無理からぬことと思わせるような個所を見出だすのである。[1] 事態がこのようであることは感謝すべきことである！ もしそうでなかったら、世界は改良された仏教か儒教の程度以上には達し得なかったであろう。

（1） たとえば、マタイ二一・三一〔「よく聞きなさい。取税人や遊女は、あなたがたより先に神の国にはいる」〕、またはルカ一一・四六、五二、一六・一五〔「あなたがたは、人々の前で自分を正しいとする人たちである。しかし、神はあなたがたの心をご存じである。人々の間で尊ばれるものは、神のみまえでは忌みきらわれる」〕。

今日でも敬虔に育てられた子供らが必ずしも最良の人間に成るわけではなく、かえってまことに欠点多い人々が、一度び回心の決意を固めるやいなや、聖者の域に近づくことがしばしばある。これは普通の言い方で言えば、彼らが自分の今までの人生観のみじめさを経験したからであ

力をもたないなら、別の路を求めなさい。なんとなれば、どうあってもこれはなされねばならないから」。

四

なんとなれば、真の愛の必然的前提たるこの自己客観化、すなわち自己放棄は、神の明かな恩恵と援助なしには容易に達することができないからである。これが、愛に達する自己教育の第二の大信条である。

性来の人間にはまさにこの自己放棄の力が欠けている。人間が性来もっていないところの愛にして始めてこの力を人間に与え得るのである。人間は自分のあらゆる努力精進をもってしても、おおかた自我欲の漸次的な美化を越えて大してさきに達するものではない。この美化は、この自我欲をある程度までは他人に耐えられるように見えさせるだけのことである。この事態に、われらが人道主義とか現代の倫理とかを非難する所以がある。われらは単に人間の「洗煉」をもって満足するものではない。われらは人間をむしろその人間性を超えて導こうと願うものである。これらの人間性愛好者たちの好意的な骨折にも絶えず多くの欺瞞と失敗が結びついている。「人は崇高く、情深く、気立て善くありたいものだ」〔ゲーテ〕。然り、かく言うは易い。だが、あなたがたができるなら、まあやってごらんなさい。大多数の人々が決してこれを実行しないのみでな

のようにして得た洞察を、身に錬成させるにあたって、上掲の著述家が言いあらわしているように、「自分をいつも神の味方に立て、従って自分自身に対して反対党となる」[1]ことによって達することができる。これは可能であり、多くの個々の段階を成して、長い人生の終局においては、おそらく本当に到達し得られるであろう。[2] しかし、ある他の道をとれば、疑いもなくさらに善くさらに速かに事態は達せられるのである。

(1) これは無私となるには、まことに善い方法でさえある。一度試みてごらんなさい。

(2) エピクテトス〔紀元六〇頃―一三八年頃〕とマルクス・アウレリウス〔一二一―一八〇年〕はこの境地に達した。善のこれと同一の途上にいた現代人に、スペンサー〔一八二〇―一九〇三年〕、エマーソン〔一八〇三―八二年〕、カーライル〔一七九五―一八八一年〕、ラスキン〔一八一九―一九〇〇年〕、トルストイ〔一八二八―一九一〇年〕その他なかなか多くの人物がある。われらはこれらの人々を相当尊敬はするが、すべての点において学びとろうとは思わない。彼らすべての欠陥は、彼らの汎神論的な神をわれらは本当に愛することができないという点にある。それは、あのようなことでは実際は結局自分自身を愛し、また全く不当にも自分を高めるに過ぎず、しかもこのことから本当の力は出てこないのである。人間の小さいことと助けを要することとは、神の偉大と偉力とからつねに明かに区別されておらねばならない。これを最も正しく表現しているのは、ヨハネ一四・一三〔「もしだれでも私を愛するならば、わたしの言を守るであろう。そして、わたしの父はその人を愛し、また、わたしたちはその人のところに行って、その人と一緒に住むであろう」〕である。マルクス・アウレリウスのいわゆる『冥想録』やエピクテトスの小冊子はとりわけこの精神の最善の証しである。しかし皇帝アウレリウスがこう言っているのは、なんとそれでも疑わしく響くことであろう、「おのが運命に満足して、しかもその人は正しく行動し愛にみちた心ばせであるので、また内的な平安をもっている、そういう人のように生きることをやってみるがよい。おそらくあなたはこれを成就するであろう」と。われらはこれらのすべての人々に言う、「できるなら、やれよ。しかも自力で。もしあなたが

められた。それでわれらの学校はどれも、この方面の堕落の設備ともいうべきものであった。私自身は、およそ本当の愛というものを、私の人生の第二期に入って始めて見たのであって、それ以前は全く知らなかった。

（1）人生の経験は、主として後年の自己修養の対象である。これがためには、熟慮して円熟した決意がいつも必要である。なんとなれば、性来利己主義である人間というものは、自分の安泰のためには、真の愛に結びついている不便を忍んだり犠牲を払ったりすることを逃遁しなければならないものと、長い間思いこんでいるからである。（しかし、このような不便や犠牲は豊かに報いられるものである。）

愛への第一歩がすでに一つの困難な踏み出しである。それゆえなんぴとも超自然的援助なしには容易にこれをなすことを得ないであろう。この第一歩は自己否定という。換言するなら（この自己否定という語はしばしば誤解され、また種々な偽善への動機をなしているので）、自己からの離脱、すなわち自己自身に対する人間の客観化というものである。

第十七世紀のフランスの一著述家が、次のように述べているのは全く正当である。「人間の、自分を自分自身から引き離すという努力は、人間のすべての行為中の最大なものである。ある人がこのことを達成した場合には、その人は測り難い価値をもっているのである」と。

人々はこの偉大さにある程度までは、利己心というものはいつも害をもたらすだけであって、人生の真の幸福から遠ざけるという理性的洞察によって達することができる。それからまた、こ

（1）第一ヨハネ三・一四はすでに、愛をもって、ひとが「死から生命に移った」ことの証左としている。外観にあらわれているよりもはるかに多くの人々が、一定の年齢に達すると老いぼれ、またはその在存の内奥において懐疑的、厭世的になってしまう。世界は、この意味において一大劇場であるが、その楽屋裏は誰でもが見ておらず、見ようとすらしないのである。実際このような事態から護るものは、信仰ばかりではなく、「愛にあってはたらく信仰」である〔ガラテヤ五・六参照〕。ヤコブ二・一七。イザヤ九・一四―二〇およびマティルデ・セラオ著の小説 "Vive la vie" 参照。この小説には今日の上流社会の真相が描かれてある。

三

しかしながら、どのようにして愛に至るか。あなたがたはこのことについて見当ちがいをしないように。愛とはそう安易なことではない。全世界とその利己的な精神とがすでに愛に逆らって立ちはだかっている。この愛はまた自然の感情ではない。この点からしても、母性愛すらも過大に評価することがあり得る。これはしばしば洗煉された利己主義にすぎず、どんな動物ももちあわせているような感情である。愛は、少なくとも最初のうちは、一大決意である。この決意は、普通の人生観とは全然異った人生観にもとづいている。この理由から、いわゆる「キリスト教的な」愛も、この正しい基礎がときおり欠けているので、幾分不信用を招来した。

それゆえに、ひとは実例や人生の経験の助成によるのでなければ愛を養成することができない[1]。たとえば、われらは教育を受けたが愛には到らず、はるかに名誉心や現実主義の方へ向わし

い。動物すらも愛がなければいじけてしまう。植物界でさえも、これを一時的な掠奪の場と考えて、親身の愛と手入れをもってせず、機械的な技術だけで取り扱うならば、もはや生長しない。あらゆる「社会的援助」でも、それがたとい極端な社会主義国家に注ぎ入れられようとも、このなやみは解消されないであろう。なんとなれば、人間はパンのみによって生きるのではなく、心の中にまた生じなければならない友情と同情をも求めているからである。そうでなければ、すべての「社会政策」はいつまでも空談義に過ぎない。現代の社会主義勃興はすべて、前言したように、援助においては以前より増大しているのであるから、援助が少なすぎるということに対する罰ではなく、愛があまりにも乏しいことに対する罰なのである。

（1）バイエルンのルードウィヒ二世の運命、または哲学者ニーチェの運命は、なんら偶然なものではなく、全く必然的なものであった。「権力への意志」を要請するだけでは不充分である。文化も美術も愛なくばすべて損耗にすぎない。

世界は今や唯一の方法で救われ得るのみである。すなわちもっと愛が、かくしてもっと生命力が、もっと幸福感が増大して再びこの世界に入りこむことによってのみ。

およそなんら客観的なものではないところの、人生の幸福が問題ではなく、幸福感が問題である。この幸福感はほとんど全く、心にもち心に受ける愛によって生ずるものである。

愛の発展と拡張とが、今や人生の課題であり、人生の成長である。(1)

をもって擡頭してきた。この文明世界は、その自然科学、工業、芸術、従来に比して増加してきた貧民階級に対するあらゆる福祉施設、慈善事業にもかかわらず、ギリシア・ローマ文化の末期や、われらの現代と酷似しているいわゆるルネッサンス時代の末期のように、ほとんどまた不満足の同等の段階にあることは、もはや秘すべくもない事実である。かくて、有効な救助策への一般的な憧憬と探索とはすでに起っている。これは、社会の上層階級の進展がなんら自分らにとって充分な慰藉とはならないことを当然にも認める社会主義者階級においてのみならず、結局は同様に不満である上層階級においても起っている欲求である。彼らの幾千の人々が、彼らが眼前に見ているよりもっと幸福な生活をあこがれて焦れ死に、あるいは、倦怠に対する尋常の手段を尽したあげくに荒れすさんだ倦怠の中に死滅してしまうのである。また特に上流社会層の婦人において圧倒的であるように、無職有閑がさらにこれに加わると、彼らは必ず無気力、「世間苦」、また多くの場合は神経過敏、あるいは種々の形態の肉体上の、また精神的な疾病[1]に陥ってしまう。現代のあらゆる欠陥あることがらや理解に苦しむことがらの原因は、愛の欠乏と愛への渇望とである。ショーペンハウエルやその学徒の如き冷厳な厭世主義者すらも、この欠乏を感じて、あらゆる絶望的対策を求めた。多くの名誉心も誇大妄想も、愛へのわけのわからぬあこがれに過ぎない。また婦人たちの甚だ非難されている虚栄も媚態もすべて、短時日なりとも愛を強要せんとする試みに過ぎない。子供らは愛を受けることがあまりにも乏しかったので、もはやうまく育たな

も、われらが求めている完全なものではない。

であるからわれらはなおも愛なるあわれむべき言のもとにとどまろう。この言もまたこの世における真に救済力をもつすべてのものとひとしく荊棘の冠をいただいている。

私が自分の生涯に全く満足していると、あなたがたが思うならば、それは大きなまちがいである。もしも私が人生をもう一度始めからやり直し得るとするなら、私は真の知恵も、否、真理そのものすらも得ようとは望まず、かえって真の親愛（いつくしみ）を得ようとねがうであろう。なんとなれば、いつも幾分疑わしさをとどめるところの真理とは何かとの問題は全然別として、われらはつねに親愛を通してこそ真理に到達するということは、その反対よりもはるかに確実であろう。哲学および心理学の全将来は、もしもこれらにおよそ将来があるとすれば、おそらくまさにこの出発点にかかっているであろう。

絶望と誇大妄想との間を動揺しているわれらの時代を、再び愛を目的として教育することは、今やきわめて主要な問題となってきたことが、私には全く疑いないことのように思われる。これに反して、上品な利己主義や虚栄心をもたらす結果になるのが、従来のわれらすべての学校教育の主要な努力であったのだが。今や、この従来の学校教育の結果に対する反動的要求が不可抗力

か。この力を助成促進する方途は何か。この力を得るにはまず特別な神学とか、哲学とか、あるいはまた接神術とかを要するのか。それともまた特定の組合とか団体とかに属することを必要とするのか。あるいはこれは、可能性として、なんらの準備なしに、正しい人の子なら誰にでも達し得られる範囲に存する力であるのか。

これらの問題に、われらはここに簡潔に、われら自身の人生経験の及ぶかぎりにおいて、答えようとおもう。

二

この力はきわめて知られた名称をもっている。あまりに周知であるために、ほとんど人を失望させる。またあまりに濫用され誤解されているために、これに代えるべき他の言を人は見出だそうとしばしば誘惑されるほどである。[1] しかしながら、とかく「人間的なもの」に、「あまりに人間的なもの」にまで堕落しやすいということは、探索の世界であると共に誤謬の可能性多きこの世界においては、およそ偉大なるもの、およそ真なるものにどうしても附随しがちな欠陥である。

(1) ショーペンハウエルは「同情」を、人間の唯一の善良な性質と見なそうと主張している。しかしこれとて

等はすべて悲しむべき末路を辿った。過度の富はたしかに破滅の源である。

また一般的な「啓蒙」や正しい国民経済、社会政策、それのみかまた優れた国家組織、あるいはまた国家および公共団体の憲法も明かに万人にとって善をなす力の源泉ではない。道徳や正義さえも、これらの言葉に、この力そのもの以外のものをおよそ表わすとするなら、やはりこの力の源泉ではない。

それゆえこの力は、ことの大小を問わず、貧富のわかちなく、教養の有無に関わりなく、同様にかつ絶対的確実性をもってはたらくものであり、誰れにでも達せられ、いかなる特性も要らず、いわんや「超人気質」の如きを必要としないものでなければならない。この力は、なるほど人間がそれをもはや全く探索追及するを要しないほどに自然でも性来でもないが、しかし人間の一素質に適合して、その素質が第二の天性に成り得るほどに、錬成可能なものであることを要する。

そして最後にこの力は、つねに、人生の各瞬間に現存しているものであり、またこの力をもっていないすべての人々の欠かさぬ病気である「世間苦」のみならず、人生の終末とこれに続く不確実な未来に対する恐怖にうち勝ち得るものたるを要する。

この力の名称は何であるか。どうしたらこの力は発見され得るのか。この力の邪魔ものは何

教養ある諸国民がその欠陥を痛感しはじめているこの力がなんであるかと、あなたがたは思うか。このことに関してはっきりすることは、あきらかに改善への第一歩である。

多くの人々は、今日この力を体力、すなわち身体の完全な健康に求めている。だから治療術の偶像化が生じた、それが団体的なものであろうと、非団体的であろうと。また転地療法、治療術または教育における強健術などをほとんど狂的に追求するに至っている。そしてすべてが無効に終るか、または老齢や病気がこれらの希望を水泡に帰せしめる場合には、全く絶望してしまう。

ほかの人々は「知は力である」という豪語を鋳造した。しかしどんな知が力であるのか。そしてそれぞれの時代で最も知識があり、または知識があると信じていた人々が、果して実際最も幸福であり、また最も善良であり、同時代のすべての人々に福祉をもたらした人々と成ったか。

またほかの人々にはおそらく富、すなわち、われらの西方の友ら〔アメリカ人〕の「全能のドル」が、力の秘密を蔵しているのである。ところで富が果して本当に一国民あるいはただ一個人をすら持続的に偉大かつ幸福にし得るか。それとは反対の実例を誰れでも充分に知っている。[1]

(1) ロックフェラー、ハリマン、セシル・ローズ、そして富裕な商業国家であったツロ、カルタゴ、ヴェニス

一

善をなさんと欲することと善をなし得ることとの間には、多くの人々にとって越ゆべからざる大きな深溝があるということは、今日あまりにも知れわたっている真理である。彼らは、おそらくその青年時代においては、人間のあらゆる努力の目的が太陽に輝う山頂のように眼前に横わるをあきらかに見、かつ見たところ速かに到着し得るもののように見た。ところが、彼らがその山に近づいてみると、そこには暗い幽谷があって、これを降りてはじめてはるかに高く登るには、多くの人に勇気と力が欠けていた[1]のであった。デモステネスがアテネの人々に、国民が「善を欲するに至らしめる」ように勧告したが、それだけでは、たといこのことは人間教育一切の最初の目的ではあっても、到底不充分である。国民にさらに告示しなければならないことは、善を行う力が国民に生れついていないなら、その力はどこから来るかということである。全く自力で高い目的を追求する人々か、それとも自分たちの目的達成を助け得る力をまず発見することを求める人々か、どちらがついに優って目的に迫るかは、全く問題であるように思われもしよう。

(1)　ダンテ地獄篇第一および第二歌。

「われは愛の息吹くなべに心をとめて、
彼女のわが胸中（うち）に口授するままに、
書きとどむる一者なり」

ダンテ『神曲』煉獄篇第二四歌五二―四行

力の秘密 《DAS GEHEIMNIS DER KRAFT》

かくて本論説は必然、愛を主題とする次の『力の秘密』への展開を約束するものである。

なお〔　〕内はすべて訳者の註である。

けてみた。その各々の内容に従って試みに標題をつけるならば、およそ次の如くであろう。

一、人生を永遠の相の下に見よ。
二、霊的人格性は死後の生活に存続する。
三、死後もまた活動的生命である。
四、神信仰は必然永生信仰を内実とする。
五、永生信仰の現世生活に与うる実力。
六、心根はすべからく純なるべし。
七、現世規準の価値判断の空しさ。
八、単なる人道主義、観念的信仰もまた空し。
九、永生を現実に把握すると、人生は一変する。
一〇、人生の目的は神の意志を行ずるに在る。

特に、「人生の目的は何であるか」の設問に始まる第一〇節は、ヒルティーの人生体験の総括的文字といっても過言でないであろう。神意を体現するところに、実に人生の本質と目的と至福がある。これは、各自が各自らしくなし得るところで、万人に可能な、また万人が追求するべき至境であるとなし、それは同時に、必然的に、対人的、対社会的には愛を根柢の性格とする。さればこそ、神の愛の永生をしっかりおのが生命とせよ、と彼は叫んでいる。

『永遠の生命』について

原書では“Sub specie aeternitatis”（永遠の相の下に）が正題、„Ewigs Leben“（永遠の生命）が副題になっている。一九〇八年の降誕節の二、三週間前にその初版が出た。この『永遠の生命』（全五九頁）は次の『力の秘密』（全一〇六頁）と共にヒルティー晩年の珠玉的姉妹篇である。両者とも小冊子、純白に金字の装幀、その内容にふさわしい。

共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）において、イエスが歓喜のおとずれ即ち福音として語った主眼は「神の国」（マルコ、ルカ）であり、「天国」（マタイ）であった。そしてこの「神の国」「天国」の内実は如何。「永遠の生命」が即ちそれである。これを語るイエスの消息を力づよくつたえているのがヨハネ福音書である（ヨハネ三・一六、三六、四・一四、五・二四、三九、六・二七、四〇、五四、一〇・二八、一七・二二、三等）。福音書のヨハネに照応する如く、ヒルティーは諄々として「永遠の生命」のおとずれを説きまた告白している。

全文は十節から成る。著者はそれに番号を附けなかったが、訳者は読者の便宜にもと思ってつ

（4）ヨハネ一一・二五、二六〔「イエスは彼女（マルタ）に言われた、《わたしはよみがえりであり、生命である。わたしを信じる者は、たとい死んでも生きる。また、生きていて、わたしを信じる者は、いつまでも死なない。あなたはこれを信じるか》」〕。

（5）〔訳者註〕Rudolf Ihering（一八一八―九二）ドイツの法学者。法学に革新的な方向を与えた。ローマ法の精神について劃期的な論説をなした。

それゆえに、この書の読者よ、あなたが誰れであろうと、どんな過去をもっていようと、「純潔な生活をする勇気を奮いなさい」「信仰の戦をりっぱに戦いぬいて、永遠の生命を獲得しなさい。あなたは、そのために召されたのです」〔第一テモテ六・一二〕。

「心よ、現前のものをつかめ、
汝が意志にあるものを。
げに永く汝は臥していた、
かくもはかなきものに縛られて。

勇気を奮え、永遠の生命を得べく。
汝も使命があるからだ。
思念をもはや執着させるな、
死へと滅びゆくいかなるものにも。

意味であり、「救贖」(Erlösung)[2]の意味であり、彼によるところのわれらの低劣な動物性からの解放の意味である。なんとなれば、彼への依存によって[3]、われらは事実この低劣な動物性から自由になり得るからである。それはすでに地上においてであって、死後全く別な存在になって始めてといったことではないのである。そのようなわけで、われらはわれらの真の人生目的の認識とその不屈の追求へ、かくしてまことに死からの確実な復活[4]へと成熟しゆくのである。合目的的なことは、イェーリング[5]がある有名な本の中で詳述しているように、実際またつねに正しいことなのである。彼はこの思想をただ充分深くは把握しなかったまでである。

(1) このような神と共に歩む事態のはじまりは、すでに古代にあった(民数二三・二一―二三)。またいろいろな民族において見ることができる。

(2) 詩篇四九・八―一三では、われらが今日信じているこの〔救贖の〕可能性に絶望している。しかしこの救贖の力は外から来なければならない。救贖はわれらの中にはない。それゆえに救贖はどのようにしてもわれらの中に生みだされ得るものではない。道徳教育は、人間の理性や道徳力を悪の習慣よりも強力なものとみなすが、それはあらゆる道徳教育の誤謬である。道徳教育はそれゆえにその高い目的を達しない。特別優れた人物において、ただ非常に部分的に達せられるにすぎない。これに反して、全く単純な人人が別な路で〔すなわち、キリストにおのれを全托して〕、完全に目的を達成することができる。サムエル上二・四。歴代下一六・九、一五・三―七。ローマ六・一四―二二。

(3) 唯物主義者でさえ、今や再び禁欲主義に還れとか、少なくとも生活様式の単純化を説きはじめている。しかしそのための力を彼らはどこから得るのか。彼らが今日まで教えてきたいかなるものからもその力は与えられないことは確かである。エレミヤ一七・五―八。イザヤ四五・二二。マタイ七・二四―二九、一三・四五、四六。

の、奴隷をもちたいのではない。

この自由意志をもってする愛を、われらはこの地上において学ばねばならない。ひとりこの愛のみが、より善き永遠の生命を嗣ぐべきわれらの能力をもっぱら決定するのである。まだまだ不完全なこの世の生活においてすらすでに、愛が次第次第に勝利を得てゆかないかぎり、内的に孤独の人になってしまう、たとい厭世家や偽善者にならなくとも。きわめて天稟優れた人にして、持続的な憂鬱症の中に、そして遂には精神錯乱状態の中に破滅する場合がしばしばある。それは彼らがあまりにも愛に乏しく、それゆえに人生においてまことの喜びを感ずることあまりにも少なかったがためである。

自由意志をもってする愛で、神の意志と最高度に合一して生きた人は、地上に有史以来[1]今日までもちろんただ一人、キリストがあったのみである。それゆえに彼はまさしく「神の子」と称われた。そして彼の超現世的な全存在、その肉体死からの彼の復活すらも、彼には自然的なことであって、世人が普通見なしているような並み外れたことでは決してなかった。それはまさに、彼が絶えず神の霊に満たされていたからであった。神の意志に順うなら、程度は低くとも、われらすべてそのように成るべきであり、成ることができるのである。そしてこの事態がまことに、そうでなければ不可解な次の言、すなわち、キリストがわれらの「初生の兄弟」であるという言の

不公平になる。けれども――そうあなたがたはおそらく言うであろう――われらは彼らをあまりにも愛しすぎることがあると。あなたがたはこれを本当と思うか。愛は、それが単に秘かな利己主義でないならば、すなわち、われらが、自分の固有の幸福感情のゆえにではなく、彼らを彼らのゆえに愛するならば、愛することは決して非常に危険なことにはならないであろう。しかしこれとは反対にこう問われるなら、すなわち、どのようにひとは彼らを愛し得るか、彼らが愛するに価しないものであるのに、と。すると応答はこうである、神への感謝の愛から、そしてまた神の力によって、と。エゼキエル一一・一九、二〇「そしてわたしは彼らに一つの心を与え、彼らのうちに新しい霊を授け、彼らの肉から石の心を取り去って、肉の心を与える。これは彼らがわたしの定めに歩み、わたしのおきてを守って行い、そして彼らがわたしの民となり、わたしが彼らの神となるためである」。

愛は、しかし、感情中最も崇高なものである。これは、単なる外観で満足したくないなら、強制もされ得ないし、買うこともできない感情である。人間は天性崇高であればあるほど(動物においてすら同様な場合があるが)、いよいよもってその人はすなわち愛へのいかなる強制にも抵抗し、彼のこの最も高価な自由のためにおのれを守るのである。それゆえに両親が、子らの愛を強制しようとしたり、あるいは、両親がこれらの試みの無効をすでに洞察していながら、心の中で「私はおまえを愛するように強制はしないが、おまえに自由は与えない」と語るようなことをしたりすれば、それはあやまりである。まさにこの自由こそ子供が要求しているものである。

神すらも愛を強制することができず、また強制しようとはなさらぬ。神は自由意志をもってする友と僕(しもべ)をもちたいと思っておられる。神は、「畏怖」が隷属のもっぱらなる動機であるところ

活を考えている少数者は、つねに世界のたましいである。彼らの活動がどのような方向に流れてゆくとも、社会は彼らを欠くわけにいかない。しかし人々はみな、彼らの面前ではたとい彼らが何も言わなくても、道徳的負債感をこのような人物に対して抱くのである――たといそれが、世には平均以上の高尚な目的があるという事実を表示するだけでも。この国〔北アメリカ合衆国〕においては寛容で美しい品性がかつてないほどに必要である。それは金儲けの技術によって一般に思想の平俗化が生じたからである。」――エマーソン。

(2)〔訳者註〕「イエスは言われた、《よく聞いておくがよい。だれでもわたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、もしくは畑を捨てた者は、必ずその百倍を受ける。すなわち、今この時代では、家、兄弟、姉妹、母、子および畑を迫害〔〈迫害〉という訳は、アラミ語聖書によれば、〈労働〉〈仕事〉の意と解すべきものらしい〕と共に受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受ける》。」

(3)〔訳者註〕マタイ七・一三―一四「狭い門からはいれ。滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そして、そこからはいって行く者が多い。命にいたる門は狭く、その道は細い。そして、それを見いだす者が少ない」。

われらが共同に生活する環境におかれている人々に対しては、神への不動の愛に根ざしている真の愛こそが、生活態度の規範としてただ一つの全く真実なものである。これに反して、良き行状や礼儀についての他の規準などはつねに欠陥を暴露するであろう。それゆえまたしばしば、「社交会」の紳士、淑女で、きわめて上品な教育を受けてはいるが愛が欠如している人々[1]よりも、全く醇朴な人々の方がはるかに真の内的な確かさと、他人に慈善を施しつねに親切に迎えてやるという、より善き手際よさを備えている。

(1)　人々を全く正しくかつ公平に「批判する」ことは決してできない。それは試みないがいい。われらは彼らを愛するか愛さないかのみが可能である。愛さない場合、われらは彼らに対してただちにかつ全くたしかに

いる。そしてこれは此岸でも彼岸でも、どんな人にも達せられるから、これはまた同時に、よく誤解を招いている神の正義の最善の弁護でもある。これは「幸福至上主義（オイデモニスムス）」ではなく、人生の真の認識[1]である。これらの洞察はもちろん無価値でもなければ、あまりに安価でもない。すべてはこの世で——そしておそらく来世でも——選ばれ、また犠牲によって買いとられねばならない。あなたがたは、この道をゆけば、それ自体当然もってよい人生の諸希望を、それからおそらく青年時代のすべての友人を失うであろう。しかし、その代りにあなたがたはその損失を豊かに償われるであろう。福音書はこれを「百倍」（マルコ一〇・二九、三〇[2]）とすらいっている。しかも私の知る限り、これを敢行した人にして、このことを否定した者は絶えてない。この「狭き路[3]」こそは辿り易く、この路を往く者は多くないが、キリストはしかしながら万人にとって最も辿り易い路と呼んでいる（マタイ一一・二八—三〇）。そのわけは特に、この路が確実に真の幸福へ導くものであり、そういう意識を確かに各段階において抱いているからである。また、人々は自分の最大の患難も損害も、それらが過ぎ去って、あるいはそれらに善く耐え得て、はじめてそれとわかる、というようなわけであるから。そこまでは、この狭い路を一歩一歩導かれてゆく。しかも、ときおり前途を予見する意識の稲妻によってのみ照らされるところの恵みある薄闇の中をしばしば辿りゆく。

（1）これらの人々こそ国家に重きをなすのであって、他の人々はただ妨げとなるばかりである。「より善き生

ば、これは結果として神および自己自身との内的合一を来らせるからである。そしてこれはさらに真の幸福感を生み出す。この幸福感は万人が全く自然に追求するところである。(1) そしてこれこそ、万人がこの地上で達し得る最善なるもの、然りそれどころか、唯一の全く優秀なるものである。

(1) 幅の広い隊列をなして若い男女の群が、「幸福の追求」をしながらわれらのそばをざわめき過ぎてゆくのを、実に日々われらは見るのである。しかし最大多数の人々はこの幸福に到達し得ない。それは彼らが、神の意志と彼らの人生目的に適合しないことがらにおいてこれを追求しているからである。

この世に長く生き、人生の善きこと美しきことをしばしば経験したならば、ここに次のことを附言してさしつかいないと思われる。すなわち、世人が通常地上の幸福と呼んでいる事態の最高の瞬間も、神のみもと近くに在るとの実感によって人間のたましいに生じ得るところの浄福感には到達し得ないということである。これらの浄福の瞬間は、これを体験する者にとっては、神の存在のきわめて活き活きした証しであり、また絶えず神のみもと近くに在るところの死後に存続する生活の証しである。この死後存続の生活はそれゆえに「永遠の浄福」といわれる。この「永遠の浄福」は、恒久的状態と見なされるこのような瞬間の一大総和より以外のなにものでもない。これは真実の、また経験し得られる、誰れにでも達し得られる幸福である。それは地上では当分まだ必然的に教育的な苦難と結びついているが、来世では、より純粋な形において存在して

あった。だからこのような組織形体は、文明世界の現状に対する後退の動きとして排斥さるべきものである。それゆえにニーチェの超人主義や、普通はこれと結びついている文芸復興期崇拝は、単なる隔世遺伝（アタヴィスムス）であって、これが、いわば白人の専制主権者をいただいているアフリカ植民地においてのように事実となってきたら、それは犯罪である。

このことは結局またすでに引用した幾分苛酷に聞える福音書のあの言、（ルカ一六・一五）すなわち、人間のあいだで高い一切のものは、「神の前では忌みきらわれるもの」[1]である、ということを説明する事態である。あらゆる超人主義とあらゆる貴族的高慢とは、実際神から祝福を受けず、人を不幸にする。

（1）このような超人の輩や、「種族の純潔」を保持してきた旧い貴族社会には、しばしば全く動物的な顔、獅子のような表情、猛禽のような鋭い眼光、あるものはまた羊や馬の顔つきなどを見る。これとは反対に、高尚な動物のなかには、すでに人間との類似性や人間的道徳の萌芽が見られる。日本人が日露大戦（一九〇四―五年）で倒れた忠実な軍馬のために公けの記念碑を建てたことは、感動的な美挙であり、われらヨーロッパ諸国民の深く慚愧したところであった。動物が人間に似ていること、われらが青少年の頃教えられた以上であるとは、われらが喜んで信ずるところである。しかしこのことから、われらが動物になりさがるはずであるなどという結論は出てこない。それどころか、あらゆる動物虐待は（動物解剖を含めて）排斥すべきであるとの結論だけは引き出せる。

このことから幸福の概念が生ずる。幸福は、自分の人生目的を正しく認識し、断固としてこれを追求するにある。宗教的にこれを言いあらわせば、神の意志を行ずることである。なんとなれ

（1）それゆえにわれらは古生物学には単に第二義的以下の興味しか感じない。そして猿人（ピテカントロプス）がたとい創造の全く別の時代においてわれらの祖先であったとしても、猿人を詮索するよりも善いことをしなければならないとわれらは思うのである。

同様にまた、社会主義が多少弁護しているような畜群的な共同生活において真の生存と進歩とを見るのは誤謬である。歴史上つねにそのような初期状態について擡頭する個人主義は、われらの諸民族においてすでに到達し、もはや棄てようとは思わないところの、より高次の段階である。(1)

（1）動物でも高等な種類のものになると群生はしていない。また老齢になれば群から離れる。過度の結社生活や党派生活もまた、たしかにわれらの人生目的をさまたげる。従って高尚な種類の人間を全く満足させるということは決してないであろう。

今日の人間は誰れであっても、おのれ自らにおいて固有の、独自の人格である。この人格はどんな他の人格とも等しくはなく、また等しくあってはならない。人格は、あらゆる人間的な媒介なしに、直接、神と結びつき得るものであり、個体として誰れからでも尊重されねばならないものである。正しく理解すれば、人権、法律上の平等、信教の自由、および民主主義（デモクラシー）などの思想はこの事実に基づいている。貴族主義的な国家形体および世襲的階級（カースト）組織〔インドの四姓、すなわちバラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャ、スドラの四階級の如きは典型的な例〕などはどれも前代に属するものである。その時代には、動物界においてのように、強者が弱者の上に主権を握るのは、自明のことで

一〇

現世生活はどんな目的をもっているか。

われらはすべてなかば動物的本質をもって生れてくるのであるが、この動物的本質から精神的人格に発展してゆく他に、いかなる他の目的ももたない。一般に言いあらわして、これが人間らしい人生目的である。そしてかの有名なゲーテの言はこれと符号する。すなわち、地の子らの最高の幸福は人格である、というのである。

それゆえに、動物的な享楽生活や、動物に類似する欲求および機能をあまりに強く顧慮することは、たといそれらのことがらがこの世ではなかなか必要であるにせよ、それは当然われらの人生目的からの離脱であり、以前の状態への隔世遺伝的頽落である。この観点からすれば、以前にわれらはもっと動物に類似していたのではあるまいかと、今日多くの人を不安ならしめている問題も、全く別な光を浴びて現れてくる。そのような生活がわれらの背後に横わっており、またわれらがそのような動物的生活にあって、ついに今日の生存にまでやっと向上したということは、あり得る。しかしこれをさらに詮索することは全く無益であり不可能である。そして動物生活をもってわれらの継続的な現世生活とみなすのは、滅法な誤謬であり、退歩ではないか。かつてそうであったとしても（それが個体としてであろうと、集団としてであろうと）、それは全く過ぎ去ったことであって、我らは最早決してそのような事を強くまた喜んで想い起すようなことはすまい。(1)

汝はすべて天界を楽しむことができる。
けれどもこの世で楽しみは拒まれている。

この世の千紫万紅は汝には色褪せるのだ、
さき頃まではまだ輝ようていたのだが。
汝はもう悪そのものを憎むなよ、
ところで善にのみ汝の花環を渡すがいい。

どんなこの世の運命にも汝は悲嘆くまいぞ。
どんな偉そうなことをも意に介すまいぞ。
だが汝は今や前よりは限りなく善く愛し得る、
この愛によってこそもうこの世で天国が覗けるぞ》。」

〔コロサイ三・一―四参照〕

て、この途こそ卓越したものである。そしてこの自己教育のみが、本来一切のことが依存している「回生」（ヨハネ一・一二、三・三、六）[2]を生み出し得るのである。それゆえにわれらはおわりにあたり、現世生活一般はいかなる意義をもっているかという特に実際的な問いに再び立ち帰るのである。

（1）永生自覚の事態が事実であるかどうかは、次の二つの徴候によって最もよくみとめられる。その第一は夢においてである。夢においては、もうはるか以前に克服してしまったと思っているのに、怒り、妬み、官能性、恐怖、怠惰、名誉心、といったものがなおしばしばあらわれる。夢の中で善となった程度に、われらは実際確実に善となったのである。その次には、箴言の「ある人の道が神に嘉せられる時、神はその人の敵どもをもその人と和らがせたもう」（箴言一六・七）のである。そして同様に、その人を敵どもと和らがしめたもう。これはさらに善いことである。ひとはさらに、自分の思想を支配する習慣と他人の思想に対しても精緻な感覚を次第に得るようになる（ヨハネ一一・二五）。誰れかに対する親切な想いは、効果があらわれないことはなく、これは最も貧しい人々においてもできるところの大いなる慈善である。

（2）〔訳者註〕「しかし、彼を受けいれた者、すなわち、その名を信じた人々には、彼は神の子となる力を与えたのである」（ヨハネ一・一二）。「イエスは答えて言われた、《よくよくあなたに言っておく。だれでも新しく生れなければ、神の国を見ることはできない》」（ヨハネ三・三）。「肉から生れる者は肉であり、霊から生れる者は霊である」（ヨハネ三・六）。

「主は言いたもう。《おお、汝（おまえ）、悔ゆるな、
汝がこの世に背を向けたことを。

限度を幾分越えたとおもわれるところの愛と信仰からの閉め出しの状態のほかのなにものでもない。これらの状態は場合によってはすでに永続的なものと想像することができる。しかしこのようなたましいも愛と信仰の一微光をさえとらえ得るならば、この状態を脱却して救いに近づくのである。

「希望が一点の緑をさえとどめるならば、
彼らの呪いのために《永遠の愛》が帰り得ないまでに
人が全く失われてしまうことはない。」

〔ダンテ『神曲』煉獄篇第三歌一三三―一五行――この詩句は訳者の註〕

たましいが、その無限にわたる全生涯の中で、なんといってもこんなに短かい地上の期間の生活態度が思わしくなかったからといって、永遠にしかもとりかえしのつかぬまでに堕地獄の罰を蒙るのだというような観念が別にあるが、これは忌むべきものである。それは復讐心の強い神学者どもの脳味噌の中にしか発生し得ない観念で、彼らは自分たちの似すがたに神を創造したわけである。(このような刑罰は現世の刑法にとってすらも、刑罰執行権の不均衡な誇張であろう。)一九〇七年度政治年鑑中の論説「タルソのサウロとバルーク・スピノザ」を参照せよ。そこにはドルトレヒトの教会会議の判決が語られてある。

人々は、この地上ですでに永遠の生命の中に在ることと、その精神の方向と心根とを自覚するやいなや、直ちに自分の思索と行動が全く別様になっていることに気づくであろう。[1] これがさらに私の経験によれば、内的進歩のずばぬけて有効な挺子であって、どんな他のものも到底比較にならない。青年の教育はさりながらつねに現世の生活に主眼が向けられていなければならないものではあるが、この教育に永生自覚の途が用いられ得るならば、それは教会がその信者を真の信者にするために用い得る最善の途ではないか。ところが現実は大半そのような真の信者ではない。けれども教育よりもはるかに重要であるところの、その後になさるべき「自己教育」にとっ

魔神どもの前に跪くとき、
志ある民、贖われて、
汝が宮々に詣でんために。[1]」

（1）原詩はクナップ作、同胞教団讃美歌九六二番。〔六行目で〕「魔神どもの前に跪く」とある。それはわれわれにはほとんど通用しない。これに反して、いろいろな自然力や魔神的な天分に恵まれた人々に対して、ほとんど拝跪にひとしい「尊敬」を感ずる徒輩が沢山ある。しかもこのような宗旨がなお隆盛の途上にすらある。
原詩の「汝が神殿に」（単数）のかわりに、複数形をおいた。なんとなれば、当分のところ、また見極め得るかぎり、われらはキリスト教の諸派が合体帰一するとは信じ得ないからである。

九

永遠の生命は、ひとたびこれを信じ始めるならば、すでに現世においてこの生命が始められねばならぬことは全く確かである。この永遠の生命は突発的、暴力的事件によってとか、幾分われらの意志に反して起るような激変によって始まり得るのではなく、現世生活の全く自然的継続でなければならない。[1] それは普通想像されるよりもはるかに自然的ですらある。

（1）地獄もまた、すでにしばしば現世において存在するところの悪人たちとだけの交際とか、現世であり得る

第一ペテロ一・二五、イザヤ四〇・八、第一コリント二・五〔「それは、あなたがたの信仰が人の知恵によらないで、神の力によるものとなるためであった」〕、同七・二三〔「あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。人の奴隷となってはいけない」〕、同一三・九、第二テモテ二・二三、第一ヨハネ二・二七〔「あなたがたのうちには、キリストからいただいた油がとどまっているので、だれにも教えてもらう必要はない。この油が、すべてのことをあなたがたに教える。それはまことであって、偽りではないから、その油が教えたように、あなたがたは彼のうちにとどまっていなさい」――油とは聖霊を意味する〕。

〔訳者註〕著者が、ある意味でプロテスタントの憲章の如き「代贖の義」の観念を、「まどわし」とまで言っている大胆な警告に注目すべきである。安価な、「無雑作」な気やすめとなり、お題目の如き信仰内容となっている観念的な信仰の事実に即した警告である。「代贖」が真理であるためには、代贖を信受し、その内実が聖霊の内住の事態を起すのでなければならないからである。ここに引用されている第一ヨハネ二・二七がそのことを語っている。

いたるところ、これが現在の状況である。このような状態を教会は十分に阻止しなかったので、今後教会改革が不可避なわけである。

「されば聖声よ、《成れ！》と告げよ。
汝が霊気を吹き来たらせよ。
この暗き地上に
死者の甦らんために。
人々が偶像に仕え、

間をかたくなにし冷たくする、不親切にし近づきがたいものにする。最良の天分を賦与されている人々すらもこのような欠陥に全くはうち克ち得ない。然るに自ら苦しみを味わっている人、または生涯においてすでに多くの苦難にあずかった人は、いま現に苦難の中にある人々の情感や要求に対してかなり強い感じをもつことができる。現世において愛は苦難によって産み出だされる。だが愛に満ちた来世の生活においては、現世の意味においての苦難を――われらはそう推測するのであるが――全く無用とし得るものであるならば、[1]その生活の諸条件は全然別なものであるにちがいない。

（1）この点が、この来世の生活のうえに漂うており、かつ福音によってすらもあきらかにされなかったところの不明な点の一つである。来世生活は、なんらの苦難なしに真の愛をどのようにして豊かにもち得るものであろうか。

苦難なくしてキリスト教は理解されない。何ごとも苦しむことができず、または苦しまんとしない人々にキリスト教を伝えるのはほとんど全く無益である。そうでないとそのことからかえって悲しむべき生半可と偽せ物が生ずるまで[1]で、これに比すれば哲学的克己主義（ストイツイスムス）の方がよほど優しである。この克己主義は感情の抑圧減退にその本質があるのではあるが。

（1）それゆえに次の言は正当である。「人生のあまりにも多くの歓楽を荷うよりもむしろ苦難によって私は自分を鍛えよう。」

「私の弟子となろうと思う者は、日々自分の十字架を負って私に従いてきなさい」〔マタイ一六・

二四、マルコ八・三四、ルカ九・二三、ヨハネ一二・二五参照]。あなたがたは、われらの主のこの有名な言において三つの重要な点に注目せよ。第一、苦難への意志なしに弟子たらんとすることは不可能であること。第二、われらは自分自身の十字架だけを負うべきであって、おそらく決してのぞんで来ないことのために意を用いたり、それを気にわずらったりする必要はないこと。第三、われらは十字架をただ短かい一日だけ負えばよいので、どの新しい日も新しい力をもたらしてくれる。そしてこの力も一日以上のために与えられるのではないということ。もしそうでなければ、力の大いなる蓄積のために、とかく力の由来する源泉を忘れ、力を祈り求めることを忘れてしまうであろう。まことにしばしば過去の苦難の試錬に際してつねに私を助けてくれたのは、素朴な老トーマス・ア・ケンピスの次の言葉であった、「勇気を失うな、勇敢な人であれ。然るべきときに慰めはあなたに来るよ」。それからまた詩篇作者の次の言も慰め深い真理をふくんでいる[1]、「あなたがわたしをこらしめなさるとき、あなたはわたしを大きくして下さる」[詩篇一八・三六（ルッター訳ドイツ語聖書）。邦訳では三五節であるが、意味がずれている。ルッター訳の方がヘブライ語原文に近い]。

（1）この人生の主題における経験的諸命題はそのほかになお次の如くである。

苦難はこれに慰めが伴うときは、ひとを強めこそすれ弱めはしない。しかもわれらをさまざまの小さな困難や過度の苦悩から癒さんがために、神が用い給う主要の手段ですらあること。

二つまたは一般にそれ以上のいろいろな苦難が同時にのぞむときは、単に一つの苦難に耐えるよりかえって容易であること。

長い間の幸福で甘やかされた人々は臆病になっていて、あらゆる異常なものが来るのを怖れ、さらにはあ

らゆるなみはずれた行動をとることをこわがる。それゆえ、こんな人々はおおかた善なることを推し進めてゆくには全く無用の人間で、善の促進のために何かをしようと思うときは、こういう連中はのけものにした方がいい。

「苦難の大なる祝福は、永遠なるもの、不滅なるもの、そのために生くるに最も価値あるものに関して達観を得ることにある、と思われる。」（ヘンリー・ドラモンド）

「おのが身に大なる悲哀をもつことにも優して他人に対する尊敬の念を増させるものはない。――それは人間性の深淵に到らしめる。――幸福においてわれらは浅薄であって、他人をもそのように思うものである。」（C・バクストン）

文学の上でも、まず苦難なくしては、決して偉大なものや真に善き作品が作成されたことがない。苦難がはじめて人間の中になみはずれた思想をもたらしてくれる。テニスンやカーライルはそのような例であり、ダンテはさらに大なる実例である。これが欠けている著名の詩人がなかなかいるが、彼らの言には真の力がない。

艱難の助力なしにいかなる人間も大なる進展に耐えない。それゆえに艱難を払いのけてはならない。一難を払いのければさらに重き一難が追随してくるにすぎない。宝石はこれを完璧なものに仕上げるにはいよいよ琢磨されるのであるが、もろもろの教会の模造の硝子器のみは、相変らず旧態のままで、琢磨に耐えないのである。

ところでわれらは――このことはあなたがたがよく気をつけて下さい――多くの敬虔な人々の伝記にあるように、不断の無益の戦のために撃たれ、疲れ果てたあげくに来世の生活へと救いあげられるようなことは欲しない。またわれらは半ばまた全き降伏状態で敵の生活の中を押し分け進むようなことはしたくない。信仰のないいわゆる正直な人々においてしばしばそういう事態は見

受けられるが。しかしわれらはわれらの地上の生存の終幕において屈せず、敗けず、戦士の栄誉をになって暗黒の門を突破し、勇士と義士の崇高なる英雄殿の広間に凱旋せんことを欲する者である。(1)

(1) あなたがたはこれに対しておそらくなお次のように異議を唱えるでもあろう、「キリストでさえ十字架上で出血のため疲れ果てて死んだではないか。それも一人の弟子が彼を裏切り、他の弟子が三度び彼を否み、そしてすべての弟子が彼を棄て去ったあげくの果てに」と。しかしキリストは、彼が確かにそしてあらかじめ知っていたように、復活し、彼の仕事を今までよりも力強く新たに開始した。復活がなかったならば、もちろん人々は、キリスト教とエピクテトスの克己主義といずれがよりよいかを疑い得るであろう。

それゆえに、「健康は人生の幸福に必要でない。ただ愛のみが必要である」(1)との命題は、もしこれがたしかに信ぜられるならば、今日もなお苦悩の全世界に、特に女性にとって、終局を告げしめ得る信仰箇条である。健康はそれ自身貴き宝ではあるにしても、ひとは健康なしにも非常に幸福であり得る。けれども愛なしには、いかなる人間も、きわめて天賦豊かな人でも、幸福であり得ない。あなたがたはこれを心にかたく銘せよ、いつまでも!

(1) このほかになお労働が必要である。労働なくして健康を保つことは出来ない。

「嗚呼げにつねに戦いつねに苦しまねばならぬのか。
永遠の幕屋に到るには、ただこの道だけなのか。
神はわれらを創造して歓喜と享楽に到らしめたまわぬか。
苦難を受けて諦念せざるを得ないのはどうしたことか。

この《ざるを得ない》は天界に、神の永遠の深慮に、記されてある。
多くの暗い小路で従順を学ぶの要がある。
これが天父の聖旨、神の神らしき決意である。
それゆえ、魂よ、鎮もりてあれ、これぞ最初の《必然》である。

おまえは更に世の途と風習で心読し得る、
悪人のにくしみは善人をいたく厭わしめることを。
その歩み天的になるにつれて、忌みきらわれるはいよいよ確か。
これは古来のとりひきで第二の《必然》というものだ。

この《必然》は心に必要、心には苦悩の訓練が要る。
憂慮と苦難にあってのみ心は救いを真剣に求める。
やわはだの花の小路でおまえの脚はとかくよろめく。
だからおまえの救いは打ちて鍛えることにある、これが第三の《必然》だ。」

（グロイツェンベルクによる）

一二

ところでこの愛に対するこれらの大いなる要求には疑いもなく大なる困難と障害とが途に立ちはだかっている。それは単に現代思潮に反するものといったことではない。この現代思潮は〔愛とは〕対立する諸世界観のいろいろな欠陥をときおり認めはするが、それでもなおその解毒剤を「われらの時流には属しない」ものと説明している。それはまことにそれ自体としては正しい。これはさらに経験をつむにつれて変化しなければならないであろう。そしていわゆる「時代精神」ほどそれらの経験によって変化し易いものはない。それゆえ、ひとびとはこれに対してはまじめに心配するほどのこともない。これは比較的うち勝ち易い。

愛の実際の障害は、むしろつねに不変常恒の人間の自然性にある。この自然性には明らかに神的な胚種が発達の可能性として存在しているが、その他の部分は、人間を動物からもはやほとんど真面目に区別しないダーウィンの学説に合致するように見える。(1)

(1) それゆえ、今までの弱い理想主義に対して幾分不信の念をいだいていた人々は、この進化論にほとんど無

抵抗に帰依してしまった。この進化論は、結局貧弱な局限された地球論であって、決して「宇宙の謎」を解決せず、そして人間の精神を充分に満足させるものではない。

愛の正反対は第一に恐怖である。愛さない者は、恐れる。もしあなたがたが人間を知る人々の仲間になりたいと思うならば、この点を計算に入れることが出来るし、そうしなければならない。最も残虐な人々は、しばしば最も恐れを抱く人々である。外観は非常に欺くことがある。最も強い人々においても同然である。ルッターはその青年時代、すなわち神を愛することを学び知るまでは、聖アンナや時々悪魔を恐れた。ナポレオンでさえ、彼の無邪気なオーストリア生れの妃を恐れた。すべての自然人は相互に怖れあい、同様にすべての動物は人間を恐れる。ただ愛のみが恐怖を放逐する。(1) 愛と恐怖は並行して存続し得るものではない。それゆえにルッターもひとの親たちに忠告して、「幼年時代に人間の心に恐怖の根が生えるようなことをしてはならない、そんなことをするとその人は恐怖を決して再び根こそぎにすることができなくなるから」と言った「ルッター自身恐怖のためにひどくなやまされたから、これは彼の切実な告白である――訳者」。今日かくもひろまっている神経衰弱の主要な原因は、「世間苦」である。すなわち人間や未来一般に対する不確実でありながら不断の恐怖である。これについてはキリストも語っている。(2) そして事実上、ただキリストにつらなることだけが恐怖から人間を完全に解放するのである。

（1）第一ヨハネ四・四―一八参照。

（2）ヨハネ一六・三三〔「これらのことをあなたがたに話したのは、わたしにあって平安を得るためである。あなたがたは、この世ではなやみがある。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝っている」〕。

これがこの世だけを観ての「救贖」である。そしてこの世間苦〔Weltangst という語だが、「生活苦」と訳すと経済問題がとかく主な内容の如くひびくから、「世間苦」とした〕から普段どうも解らない現代のいろいろな現象の説明がつくことがいくらでもある。この世間苦の直接の結果であり同時にまたその原因でもある神経衰弱の非常な増加ばかりでなく、まだ全く不確実ではあるが人間の能力のなんらかの増大を約束する（空界の征服、ラジウム等）新発明に対するほとんど熱狂的な有頂天や、非凡な力の展開（北極探検の成功、ナポレオン崇拝の再興）を示した個々人に対する同様な歓迎もまたそういった現象である。それゆえに、人を誇大妄想に導きながらそれでもなおこのところ多くの人々を魅しているニーチェの遣り方なるものは、全くもちあわせてもおらずまたかつてあったことのない力を身につけている如く妄想し、誇大な言辞でしばらくの間人を欺くというものである。これはすべて欺瞞である、すなわち自己欺瞞であり、また他人をも欺くものである。しかしその根拠は世間苦と、これに耐えんがために不確実ながらより大なる力をあこがれているまでのことである。

恐怖となんら特にちがわないものは心配であって、通常未来に対する恐怖を心配といっている。恐怖と心配（フールヒト　ゾルゲ）の両者はあらゆる感情の中で最も不快なもので、すべての他のなやみより悪性のものである。この両者は悪を行わしめ、あらゆる大きな悪行は通常最後の原因をここにもっている。ひとはおそれを抱くやいなやどんなことをしでかすか、自分でそれを経験してみるまでは、なんぴとも信ずるわけにゆかない[1]。

（1）ペテロはいつもこれに対する古典的例証である。誰がすでに自ら経験しなかったといえよう。〔恐怖と心配は信仰の世界では禁物。ペテロが信仰と恐怖の明暗交錯の自分をしばしばイエスの前で暴露したことは、福音書でよく見受けるペテロらしいすがたであるが、ペンテコステを経て聖霊が内住したペテロは使徒行伝

で見るように全く別人の感がある。」

愛に対する他の障害と反対は虚栄であり[1]、これをダンテは浄罪山（プルガトリオ）で心配のすぐ傍においているが、しかし特に妬み、貪り[2]、怒りである。これらは人間の自然性に属しており、愛によってこれらのものが制御されないと、直ちに外面にあらわれるものである。殊に老年においては、他の点では全く善良な人間でありながら、いつも一種の怒りっぽい気分に包まれている人がよくあるものである。それは彼ら自身の大きな禍いとなるまでである。そのような怒りっぽい人間が、その家族や僕婢や、「もの言わぬ被造物」にさえも——被造物はそのために神に叫んでいるのである——いかに多くの苦痛を与えているかは、すべてが総決算を迎えるあかつき[3]に、彼らがはじめて身をもってつらつら知ることになろう。

（1）虚栄は力の反対である。性格の弱さの典型的な証拠であって、有名人にこれがあると、われらは最も不快な念に襲われ、しかもこれはその人々のすべての善き方面を害いかつ疑わしくするものである。

虚栄ならびに、その別な形態に過ぎない名誉心とは、愛と直接に相提携しないというわけではないが、愛の前提たる信仰とは合致しない。ヨハネ五・四四〔「互に誉を受けながら、ただひとりの神からの誉を求めようとしないあなたがたは、どうして信じることができようか」〕。なんとなれば真の信仰は必ずひとを謙遜にするからである。謙遜は、信仰をもっていると主張しているすべての人々の信仰を試す最も確実な認識の徴証である。あなたがたもこのことに留意しなさい。

（2）貪りは単に将来に対する心配の一種であるが、すべてを支配する強烈な習慣になることがあり得る。しかもこの習慣は老年にいよいよ増進し、遺伝的なものになることさえある。

（3）けれどもまさにその時、ひとびとはそのような動物や人間を苦しめる者をゆるしたり、その粗暴を、往々

にしてある如く、「奇癖（オリダナリテート）」とみなしたり、いわんや興味あるものなどとしてはならない。そのような粗暴は実際は性格的な弱点であり、愛の欠如である。完全に怒りの感情からぬけでることは、内的進歩の大なる徴候の一つである。動物さえもこれを直ちに感知するのがつねである。

これにはさらに若干のやや難かしい問題が結びついている。

（一）われらは不信者をも愛すべきか、そればかりでなく神を憎む人々をも愛すべきであるか。聖書の有名な一節はこれをまともに禁じているように見える。[1] われらはそれにもかかわらず、愛が賛同を意味せず、または無頓着ないわゆる「寛容」を意味しないかぎり、彼らをも愛すべきことを敢て勧告する。彼らが信者から憎まれたり、避けられたりして、より良くなることはどの道あり得ない。

（1）歴代下一九・二。

最も難しいのは、高慢でひとりよがりで冷淡なパリサイ人やその他の「貴顕」や「高官」に対する愛である。このような人々に対しては、われらの主においてすら愛が非常に強くあらわれているわけではない。[1] これらの人々は今日、本当に悪い人々よりもはるかに多くある。たとえば私は全くの悪人を見たことを想い出すことができない。せいぜい文芸復興期とさらにわれらの現代の理想にかなり近かった人々くらいのものである。[2] ユダですら、もし彼が徹底的に根本的に悪人であって、最後の瞬間まで偽善者でなかったならば、おそらくもっと救い易かったであろう。

（1）ルカ一三・三一、二三・八、九。この人〔ヘロデ〕は、だが「国主」であった。これらの二ヵ所はすべての宮廷牧師にとっての恰好のテクストである。「高貴の精神、」そしてこれのみがこの際もちろん重要なのであるが、この精神はキリスト教にとって大なる障害である。そのため、非常に高貴なキリスト者に対するある種の不信は全く理由ないことではない。

（2）私が思い起す最低の人々は、われらの先生の一人――その人はすべて理想的なものをあざけり、たとえどのような月並みの心情をも当然とみなしていたが――と最も平凡な種類の個々の党派的政治家とであった。これに反して私自身が、私が弁護しなければならなかったいろいろな殺人者においてすら、善に対する根本的反感をもっている者に出遭ったことがない。そして非常に低級な性質の婦人たちにおいても事態は同様であった。

（二）　ところで主要問題として動かぬものは直接の敵に対する愛である。これはかなり長いこと人生の旅路を歩いている間に、幾度びかは知らぬが、誰にでもめぐりあたる問題である。

どの人間もその生涯において敵をもつものである。それがその人の悪い性質のゆえでないなら、かえってきっとその人の優れて善い性質のゆえにである。それゆえしばしば耳にする「彼は敵がなかった」という哀悼（ネクロローグ）の辞は、事実に相違しているか、名誉章でもない。

このような敵人を愛することは容易ではない。そして経験によれば、ひとがその復讐を神に委ねる場合にのみ(1)、これをなすことができる。しからば神は、彼らが実際真理そのものの敵である場合には(2)、われらが自らなし得るよりも、もっと正しく公平に、しかもしばしばもっと鋭く復讐の途を見出だし給うのである。

（1）〔訳者註〕ローマ一二・一九―二一「愛する者たちよ、自分で復讐をしないで、むしろ、神の怒りに任せなさい。なぜなら、《主が言われる。復讐はわたしのすることである。わたし自身が報復する》と書いてあるからである。むしろ、《もしあなたの敵が飢えるなら、彼に食わせ、かわくなら、彼に飲ませなさい。そうすることによって、あなたは彼の頭に燃えさかる炭火を積むことになるのである》。悪に負けてはいけない。かえって、善をもって悪に勝ちなさい」。さきにはイエスを信ずる者を迫害する急先鋒であったサウロ（後のパウロ）は、復活のイエスにダマスコ途上で出遭い、回心してからは、キリスト・イエスの愛の御霊の人パウロとなり、驚くべき世界伝道の旅を殉教の死にいたるまでつづけた。

（2）そこで神がアブラハムに与えた約束、すなわち創世記第一二章三節の「あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう」は、早晩たしかに実現する。そうすれば人々はそれで充分に満足することができる。イザヤ三三・一二―一四。

彼らになお何か善きところがあるかぎり、彼ら自身の判断に彼らをまかせておくことができる。彼らは然るべき時期がくると、われらが彼らになすよりも強くかつ正しく自分に対して非難をなすのである。どんな事情のもとでも彼らに対して愛を全く棄てるようなことをしてはならない。その際、敵の存在と生存権をもはや是認しないような冷淡な無頓着や侮蔑をもって、「あなたは殺してはならない」〔出エジプト二〇・一三、申命五・一七〕なる禁令を犯すよりも、むしろ憎しみの方が比較的良いというものである。そのような復讐心の深い執念深い人々からは神は必ず遠ざかり給う。われわれが敵のためにもはや祈願することができなくなったら、われらの本質の一部は神と全く関わりなきものとなる。

敵というものはおおかた神の有効な道具であって、この道具によって神はわれわれの中に何か

を果そうとしておられる、との見方はこの際一つの助けである。「主はすべての物をおのおのその用のために造り、悪しき人をも災の日のために造られた」〔箴言一六・四〕。敵が友よりも役立つということは異常なことではなく、私の生涯でもしばしばそうであった。それゆえにルカ福音書第六章二七節の愛敵の誡命は「しかし」をもって始まっている。この節の前節には非常に注目すべき言が先行しているが、それを人々はとかく見過ごすか無視するのをつねとする。それは特に今日の新聞紙上の名声にもあてはまる言である。すなわち、「人が皆あなたがたをほめるときは、あなたがたはわざわいだ！　彼らの祖先も、にせ預言者たちに対して同じことをしたのである」[1]。

(1) 普通の敵手に対する正しい平静な態度は、創世二六・一二―三一に適切に述べられてある。次の諸節にイスラエルの知恵の真珠が蔵されてある。箴言二・七、三・五、三〇、三一、三五、四・七、二四、一〇・七、二二、二九、一一・二四、一二・一、一一、一四・二六、一六・四、七、一七・一一、一八・一〇、二二、二〇・一四、二三、二一・二二、三〇、三一、二五・六、一一、二六・二一、二二、二七、二八・二〇、二三、二七、二九・二五、三〇・五。

単に何か腹立たしく思われる人々、あるいはその人々の人がらが同情を呼び起させないので、よく言われるように、「どうも虫が好かぬ」といったような人々に、早く良い機会をとらえて何か友情を示さねばならない。それはそのようなすべての反感を著しくやわらげるものである。

最も愛し難い人はおそらく悪人ではなく、かえって一方では愚直な利己主義者である。彼らは自分の利益と便宜は権利と信じ、自分の周辺をとりまく一切のものがこの権利に服従するのは自

明のことと思っている。兄たちという者はとかくこういう類いである。さて他方では自信たっぷりの裕福な敬虔家である。キリスト自身、元来は名誉ある名称であった「パリサイ人」という名がもはや決して人類の記憶から消えさらないほどに、[1]この類いの人々をこの名称をもって特色づけた。ある富めるパリサイ人がキリストに〔キリストを招いて〕大いに敬意を表したと思っていたが、町に知られていた罪ある女を、この貧しい真理の説教者〔イエス〕が彼よりも優れた者となしたとき、この富める男が少なからず不満に思ったことは疑う余地がない〔ルカ七・三六―五〇参照〕。「これらの理想家たちはこのようなものである」と彼はひとりで思ったであろう。こんな理想家どもからは遠ざかって、自分自身の「狭い範囲」にとじこもるに如かずと思ったであろう。

(1) ルカ七・四四―四八。マタイ二二・三一。

このような事態はおそらくいつまでも変らないであろう。そして愛敵はつねに全く易からざる要求であり、課題である。われらは実例として、パウロがこのことにおいて非常に優れていたようにも見えない。(第二テモテ四・一四、第一コリント五・一一―一三)。けれども、自分が正道を歩いているかぎり、どんな場合にも敵などを怖れるに及ばない。そしてこの境地から、敵に対する正しい態度がおのずから発生してくる。

もし私があなたがたに忠告することをゆるされるなら、あなたがたは、人間の心のこれらの悪

い性質や善の最も有力な障害と戦うにあたっては、試煉の瞬間に無力を暴露するような善き計画だとか教訓だとかをもってせず、積極的に対抗力あるものをもって立ち向いなさい。そしてそれこそ愛であって、愛はそれらの悪しきものとは和合はしないが、神の助けによって次第次第にそれら一切に打ち勝つ。

私がここに愛の妨害物として罪についてなにごとも語らないのは、あなたがたにおそらく奇異に思われるであろう。あなたがたは、これによって事態は単純化され、一点に帰着されるのにと思うであろう。神学上の理論はもちろん「罪」について非常に多くを語っている。がしかし少なくとも私の願うところでは、この罪観念を特に生長の途上にある世代に真に解明し、従って充分厭わしいものと思わせるまでには到っていない。たとえば、神意に反して行動するといったところで、未だ正しくかつ経験から神を信じてもおらず、神意を確実に認識することはできないものだと主張している連中には、解りようがないのである。

使徒パウロはいわゆるローマ人への手紙において、殊にそのはじめの五章において、罪がキリスト者にとっても異教徒にとっても本性上何であるかを解明するのに非常に骨折っている。それが効果あったかはしばらく措くとしよう。罪は、人間の霊性の帰趨に逆行するものである。罪は人間を向上前進させてより高い霊的存在に到らせるかわりに、動物界と同類のものに退歩させ

る。これを全く非神学的に言えば、一種の隔世遺伝（アタヴイスムス）をもっているものである。こう言えば、これだけですべての場合に通用してしまう。「人生享楽者流（アウスレーベ・ロイテ）」の見解によるところの生活必需品や少なくとも大目にゆるされている「生活の魅力」を構成している多くのものは、このような罪観念に照らせば面喰ってしまう。また他方では、これと反対の側〔禁欲的なあり方〕へと誇張することも不可能ではなく、人類の歴史上すでにしばしばあったことである。

愛の観念のただなかをこの分裂が貫流している。ここに全く正しい限界を見出だすのは、今日の世界においては再び困難となるであろう。

箴言第三一章一〇節、マタイ福音書第一九章七―一二節。

＊

「悪霊にあざむかれたる、
婚姻の聖所を棄てたる、
優雅婦（みやびめ）をもたざる者ら、
難きかも真理の把握。
貞淑妻（さよきつま）　黄金（こがね）に似たり、

善き子らは恵福の果なり、
この恵福　焦がれて得じな、
禁断の路ゆく人に。

地はおろか天上にても
美装なり崇高き妻は。
汝がためにこの大聖所
永遠に在れ、ドイツの民よ！」

それゆえに以上が愛に対立する妨害物であって、前述したように、人々は単にこれを回避するばかりでなく、これに対抗する訓練をもって打ち勝ち、そして除去してゆかねばならない。人は――このことはあなたがたが善人の救いの道で直ちに気がつくところであるが――われらの宗教教師たちがその狭い処世知でわれらに厳しく教え込もうと努力しているような具合に、「罪からまぬかれる」わけにゆかない。それはおおかた成果をあげない。修道院の壁のかげやその他の遁世生活においても同様無効である。むしろひとは罪に対して積極的に敵対を宣言し、そしてときおり手袋を公然と顔のまともに投げつけなければならない。

現代においてキリスト教にまさに最も欠けているものは、特に青年の心を引く英雄的特質である。スペインの騎士パスカル・ヴィヴァス、かのシッド[1]とそのキメネ、それからクロムウェル[2]の勇敢な清教徒、またはワルデンス派[3]やカミサルド派、または近代のキリスト者のなかでは豪胆なゴルドン・パシャ[4]は青年の心に感銘するものである。これに反して青年は、今やキリスト教の一大軍旅を成している高貴な老婦人やヴィルダームート[5]の物語風の裕福な牧師や、「涙にうるんだ眼」の感傷的なキリスト者などにはほとんど心を引かれない。このあまりにもなまやさしい状態に一つのかなり力強い調子をもたらしたのは、救世軍の功績の一つである。

（1）〔訳者註〕スペインの国民的英雄、Rodrigo Diaz de Vivar（一〇三〇―九九年）のムーア人的異名で、Cid はアラビア語の「主」から由来する語。豪胆な傭兵隊長で、部下から「ますらお」（el Campeador）と呼ばれていた。生涯はなかなか波瀾にとみ、一〇九四年にはムーア王国ヴァレンシアを征服した。スペインのアラビア人に対する勝利に大なる役割を果したので、叙事詩、歌劇、小説などの好題材となった。

（2）〔訳者註〕クロムウェル（一五九九―一六五八年）については、畔上賢造訳、カーライルの名著『クロムウェルの書翰及演説』を紹介する。私にとっても忘れ難き感銘の書であった。

（3）〔訳者註〕一一七六年にリオンの商人ヴァルデスによって創設された巡回伝道の一派で、使徒的清貧と使徒的伝道を範として立ちあがった素人運動である。祭司主義やもろもろのサクラメントの必然性を拒否したので、一一八四年に破門されたが、南仏、北伊、ドイツ、ボヘミヤ、ハンガリー、ポーランドに広まった。十三、十四世紀に、流血の迫害を受けてほとんど根絶の悲運に遭う。しかしなお遺れる者が宗教改革に際してカルヴァン派にくみして真理の戦をつづけた。この流れは現代にまで及び、欧洲、南北アメリカを通じて八万を越える信徒をもっている。

（4）〔訳者註〕ゴルドン（一八三三―八五年）については、徳富蘆花の『ゴルドン将軍伝』の一読をお奨めす

る。私も青年時代に深い感激をもってこれを読んだ。

(5)〔訳者註〕Ottilie Wildermuth（一八一七―七七年）ドイツの家庭小説、少年少女文学の女流作家。

義しい、人生の風雨に耐える信仰は、あらゆる真の愛の基礎であるが、このような信仰は、事実に基づいている。この事実とは神の力と助けの体験であって、これを体験した者にとっては疑い得ないものである。このような体験を生涯に未だもったことがない限り、信仰は弱い、しばしば全く動揺する、または他人の意見に左右される感情にすぎない。

このような不動の信仰を得んがためには、まさに人生の苦難の時期と戦闘の時期が役に立つ。これらの時期は、このような体験（そしてそれと共に神の顕現）を最もはやく招来するからである。(1)

(1)　詩篇一二六篇。

いわゆる幸福な月日にあっては、このような体験ははるかに稀であり、また「幸福への欲求と苦難に対する恐怖が愚かならしめ」(1)ている人々には、このような体験は全然起らない。

(1)　ダンテ地獄篇（インフェルノ）第二歌一一〇行。〔ヒルティーのこの引用句は、シュトレックフス訳によっている。この場合適切であるからであろう。イタリア語の原詩によれば、「利を求め、害をのがれる」という内容である。〕

神に対する真の信仰はおよそ一切の真に善なるものの基底たるものであるが、かかる信仰は本来、全く神の実存と恩恵の継続的体験より他の何ものでもない。

従来しばしば試みられてきたところの、〔信仰に関する〕あらゆる博学なる定義はわれらにとって

何の役にも立たない。

一三

人間のあらゆる道徳は、それが原理的にその人に明かに意識され、それへの決意が固まったとしても、なお不断の訓練が必要である。いかなる徳性もしっかりときまって、はっきりとあきらかに、攻防に備えて立ち現われること、あたかも主神ゼウスの頭から女神パラス・アテネが出現したようなわけにはゆかない。その反対に、大なる徳性というものは、しばしば小さな習慣の蓄積からのみ成り立ってゆくものである。これらの習慣は次第に形成されてゆき、それらの一つの習慣は他の習慣を支持し発展せしめ、ついにそれらの習慣が第三者の眼には渾然たる統一体の如く見えるに至るものである。しかるにその徳性の所有者はその個々の石材の成立史を非常によく知っており、そしておそらく来世の生活においてはじめて据えられようところの要石を待ち望んでいるのである。

愛に導く習慣は次の如きものである。

批評せず、また出来得べくば決して否と言わぬ習慣。多くの全く善良な人々がこれと反対の習慣をもっていて、そのために非常にうるさがられ、また他人に対して妨げとなり得るのである。

このような人々はどの本をも、また出会うどの人をも「判断」しないではおられない。「あなたはあの人をどう思いますか」とは、他人に対して彼らが絶えず発する問いである。それによって彼らはまことにしばしば、事物の然るべき知識もないのに判断をくだし、かえってその判断を取り消さねばならない羽目におちいる。あるいは（これはさらに悪いことだが）公認の真理に反対したり、より善い知識に反対して誤謬を固執するようなことになる。またなかには同様にその眼や唇に永遠の否をふくんでいる人もなかなかいるものである。[1] ひとは彼らに語りかけているうちにこれに気がつき、かたらいをそれ以上続ける興味をすっかり失ってしまう。詳しく観察してみると、一家族においては、ひとが思うより、見解の重大な相違ははるかに少ない。多くのことはどっちへ転んでもさしつかえないことであり、多くの相違は単に見かけだけであり、相違は表現にあって、内実に存するのではない。もしあるひとが共同の生活をいとなむべき人において、その人が「否」というべき充分な理由のない場合には、その人はいつもよろこんで「然り」ということを予知しているならば、人生はいかほど快適になることか、またその際主要なことなのであるが、愛はいかほど容易になることであろう。一方ひとは、そうでない他の人々とはもはやほとんど交際したくなくなる。なぜなら彼らを何かにつけて強いなければならないし、またはまず骨折って説き伏せなければならないからである。それのみでなく、彼らがもともと自分から同意し欲求することをさえ強いたり、説き伏せたりしなければならないこともしばしばである。それゆえ

に、出来るかぎり然諾の習慣を自ら養うがよい。このことは人生を気楽にし、[3]愛の心根に適合する。また同様に些細なことはいつも些細なこととみなす習慣をつけよ。

（1）私は有名な一衆議院議員を知っていた。その人はどの会話においても自分の応答をいつも「否」をもってはじめていた、賛意がその直ぐ次に続いてくる場合においてすら。

（2）ひとは、われわれがすでに別な個所で述べたように、しばしば「否」を「然り」への修正の形に仕立て、これによって他人にもっと容易に消化させることができる。

人生においては、どう行動してよいものだか、迷う場合が限りなくあるものである。二つまたはそれ以上の途が同じように可能に思われ、そして正邪善悪の普通の法則によれば、どちらの途をとっても同じようにさしつかえないと思われ、単に便宜性の問題であるような場合がある。このような場合に、大部分の人々は結局、彼らの利益や、しばしばまた単に彼らの便宜に最も適合する途を選ぶ。あなたは最も愛に充ちた路を選ぶことを貫き徹しなさい。その際さらに次のことに留意しなさい。人々がすることを好まないような〔天的な〕愛の行為は特に恵福（さいわい）であるということを。このことを経験すると、それが力となってそのような愛の行為が容易に出来るようになる。

つねに様相にも親しみがあらわれるように習慣づけなさい。写真師が要求する程度までする必要もないけれども、今日汽車や旅館の食堂で対坐しているおおかたの人々よりも、もっと親しみのある様相が大切である。

だれにでも軽々しく、荒々しい言や軽蔑の言を発しないように。しかるべき場合に親しみのある言を用いることを決して怠らぬように。

つねにすべての卑賤な者や弱小な者に非常に親切でありなさい。これはそのような人々にとって彼らの圧えつけられた生活に一閃の陽光となり得るからである。[1] あなたがもしもっと控え目でありたいとの要求を感じた場合には、それはいつも上に向ってなさるべきで、決して下に向ってなさるべきではない。

（1）特に、たとえば郵便局員、鉄道従業員、給士、またその他の若しめられ、しばしば不親切に取り扱われている人々に対しては、このことは二重の義務である。ところが多くの教養ある人々がこれを全く怠っている。

動物や植物にもあなたの親切をわけてやりなさい。それはまた愛の練習の一つである。

几帳面も信頼されるに足ることも同様に愛のために必要である。約束を果さぬこと、期待されている手紙を書かないこと、受信人にとって心配が軽減されることになるような電報を打たないこと、手紙に切手を不足に貼ること、勘定を直ちに支払わぬこと、借金を出来るだけ早く返済しないこと、金銭を受け取ったとき領収証を直ちに送らぬこと、などのたぐいを決してなすべきで

ない。たといひとがこのような悪い習慣や怠慢に対して、愛と忍耐とを失わないとしても、相手方がこれを失うのである。[1]

(1) われらはこれに一つの除外例をもっている。それは全く不必要な質問や要求には応答しないことである。これはしばしば最も愛に満ちた遣り方なのである。

人目をひくような贅沢はなんでも避けなさい。それは単に節倹の心構えからのみでなく、他人に羨望嫉妬の念をおこさせないためでもある。

無駄な訪問はせぬことである。いずれにせよ、訪問される人の仕事の時間には[1]なおさらのこと。

(1) ここになおおそらく賢い処世の規則として付言してもよかろうことは、あまり強くベルを鳴らさぬことである。それは神経質な人や静かに仕事をするのを好む人にはうるさいし、また訪問者に対する不利な予断を起させるからである。

心付けといったたぐいの自発的な贈物に関しては、その分量は少なすぎるよりもいつも多過ぎるようにすることである。

どうしても愛することのできないものは、これを棄てなさい。思念(こころ)の中でももはや断じてそれ

と関わらぬがよい。ただしこころの中で殊に憎しみの念を保持してはならない、たとい憎しみを言にあらわさなくても同じことである。この内心の憎悪の怒りが原因となってかなり多くの人が内面的に正しく前進せず、また多くの教養ある家庭において、下層社会に現にあるような実際の喧嘩や口論もないのに、不和の精神が漂うているようなことになる。

この意味においてキリストすらもついにユダを彼の愛の団体から追放した。そして彼はわれらにさらに良い忠告を与えてくれた。「死者をして死者を葬らしめよ」[1]と。特に今日よく見受けるところの非常に瑣末な党派的闘争や教派的紛争においては、その事件に一切関与しないことが良き習慣である。[2]

(1)〔訳者註〕これはマタイ八・二二とルカ九・六〇に出ている聖句であるが、口語訳ルカ福音書では「その死人を葬ることは、死人に任せておくがよい。あなたは、出て行って神の国を告げひろめなさい」という句の前半をなしている。ヒルティーがここでこの句を引用した意味は、神の意志すなわち神の義にそむく者を「死者」と観て、ユダのような叛逆者と彼が内通した相手の徒輩を指したところにあろう。ただこのイエスの言の原意は、案外註解者が気がついていない。すなわちアラミ語聖書によると「ミッタにマッタを葬らせよ」という句で、「ミッタすなわち葬儀のことをつかさどる町人をして、マッタすなわち死にたる者を葬らせよ」という意味である由(益本重雄氏のアラミ語聖書研究による)。イエスはアラミ語で語られたのであるから、多分こういう意味が原意であったろう。

(2)ことがらには、すでにそのことがら自体の中に存している上昇と誇張に安んじて放念しておけばいいものがなかなか多くあるものだ。そんなものはやがておのずから消滅してしまう。すべての人間の仕事には忍耐を要する。また不正の中にもそこに附着している真理の核を求めてやまない正義というものがある。そのような忍耐や正義を失うには及ばない。あらゆる悪の中にもなお一片の善を認識するのは、ただ愛のみがよく

教える大なる技能である。この善によって悪がともかく保たれているのである、けれどもまぎれもない悪は瞬時にして崩壊してしまう。シェクスピアはこのことを彼の作品の一つで次のように表現している、「もし人々が注目して濾し出すならば、悪しきものの中にもなんらかの善のたましいが宿っているものである」。

あなたは、人間というものはおおかた愛する価値のないものと難ずるかも知れないが、それは理由なきことである。人を出来るだけ愛し、どうあっても誇ったり悩ましたりしないように心がけねばならない。ルッターは全く正しく次のように言っている、「神の言と業とをいつも最初は不可能とみなすものである。それから非常に簡単に容易に驚くばかりおのずから出来るようになる。けれども、それを見ることなしに[1]、まずもって信じなければならない」と。

(1) ヨハネ二〇・二九参照。

ひとはおよそ人間を見るに、そのあるべきすがたをもってせず、そのあるがままのすがたをもってしなければならない。そして愛をもって彼らを何かよりよきものにするように、忍耐深く祈求しなければならない。これがあらゆる教育と社交の原則であり、またその目的である。なぜなら、もしそうでないとすると、自分自身のためにテーベの砂漠の中の隠者生活をあらゆる交際よりも選び択るやも知れない。そして多くの人がそのように生きる欲求を一時はゆくりなくも起した。たとえば私もその一人である。けれどもこれは人生の目的ではない。また厳しい修道院生活も一般には人生の目的ではない。愛をもって活動していた「この世の人々」は、ただ自分自身の

たましいの救いをのみ念としていた修道院の人々よりも、たしかに修道院も僧庵もない[1]永遠界においては先になるであろう。

（1）けれどもおそらくわれらの将来においては、新教の胎内にも再びこのような集合所が生じて、人生に倦怠を覚えた人、または深く傷ついたたましいが少なくとも一時的に、静寂と隠遁の中で力を養うことができるのである。

もしひとがつねに行為をもって愛を練り、またこれを他人に示し得ないならば、少なくともつねに愛にみちて考えるように試みねばならない。これだけでも非常に善きことであり、折あってかやがて行為にあらわれる習慣を目ざましておくことになる。

われらもまた自ら、経験によって確信していることがある。それは他人に対する愛にみちた記憶、おそらくまた故人の記憶すら、われらの内的進歩に大なる関係をもち得るものであり、多くの危険に対する見えざる防禦となっているということである。これはきわめて貧しい人々や重症患者でもなお可能な善行である[1]。

（1）これがまたいわゆる「代禱」の意味である。いのりの言が問題であるのではなく、実際愛して心に留めていることが大切なのである。

もしあなたがこの瞬間何も善きことのなすべきものがないか、ましてや無聊を感ずる場合には、――無聊といったことになってはならないものだが――誰かに何か少しでも喜ばせることも

がなと考えるがよい。そういったことを考えるだけであなたはよろこばしくなり、それを実行したあかつきにはもっとうれしくなるのである。おおかたの徒然（つれづれ）なる人々は、そのような時に、何か享楽を追求するか、――これははるかに失費多く、無効なことであり、しばしば不可能ですらあるのだが――または他人を苦しめるようなことをする。ところがこれが彼らの普通の楽しみとなっている。徒然（つれづれ）なる人々においてはつねに好いことがない。

卑賤な人々、たとえば郵便配達人、市街掃除人、点燈夫、そのような多くの他の人々に親しくなるように努めなさい。これらの人々のそばをあなたは日頃無関心に通りすぎている。これらの人々は、通常取ろうとのみして何も与えようとしない高貴な知人よりもはるかに感謝の念をあらわすであろう。隣人の犬や猫とすら、それは私が自分の経験からわかっているのだが、まことに晴れやかなよき知己となることができる。

ひとはどんな仕事（ファルバイト）でもただ愛をもってしなければならない。そうでなければ仕事はすぐいやになるか、または余りにも疲らせるかである。元来は強めるはずの仕事がかえって然るべき果を結ばない。

普通人の普通の閑談となっているところの、人々のうわさばなしをする習慣は、真面目にやめなければならない。そんなことからは人のそしりのほか何もでて来ない。そうでなければ、人の讃仰やいわゆる「崇拝」となり、これも誇張であって、真理にかなったことなどはめったに出て来ないものである。(1)

(1) 詩篇三四・一三―一五。

ひとは人間を個人的に遇しなければならない。交際や教育には類型的鋳型はない。(動物の仕込みですら同様である。)それゆえ、「教育学(ペダゴーギック)」といわれているものは、つねに疑わしい「学問」である。むしろこれは一芸術であって、芸術家たるを要する。その際の規則は、人々が彼らと交わる人の愛を信ずるに至るようにしなければならないことである。その他のことはまさにこの愛からおのずから生じてくるはずである。

「人を見たら狼と思え」(homo homini lupus)〔文字通りに訳せば、「人は人に対して狼」である〕という悪い言は「人を見たら友と思え」(homo homini amicus)に変更されねばならない。そうでなければすべての人道論も平和論もなんら役に立たない。逢うほどのあらゆる人において友愛の心意を予想することは、ともかく賢明にして大いに合目的的である。はじめはあてが外れることがたといあるとしても、かまわない。この場合、すなわち他者がこのことを感ずるなら(そうでなければ勿論だめだが)、厭世家たちが思っているよりはるかにしばしば本当である。試して見よ!

以上は愛の小さな習慣の一群であって、これは読者各自本来の経験によってなお容易に増大され得る。

殊に徹底的な悪人、悪辣な迫害者、またはあつかましい人、押しの強い利己主義者[1]等に対しては、それに関して何らの熟慮もなしにおのずから身にそなわっている習慣的な愛なしには、貫いてゆけるものではない。そうでなければ、にくしみと人間侮蔑という猛獣が、あなたが熟慮に達しないうちに、いわゆる人道主義の弱い柵をつきぬけ、または人間愛をつき破って出てしまう。

(1) このような利己主義の徒輩との交際は、誰れでも避けるわけにゆかぬものであるが、われらの主キリストですら彼らからは遠ざかっているすべを知っておられた。けれども、静かに、苛酷にならぬように。そうでないと事態はさらに悪化するからである。ルカ一二・一三、一四。さらに一一・八とマタイ一五・二三―二八参照。

最後に、あなたが善良な、愛にみちた思想をもっているなら、これはおおかたは神の霊感[1]によるものであるが、直ちにこれを実行にあらわして、これをとり消しのないようにしなければならない。そうでないと、次の瞬間には、一種の虚脱や無関心の状態が起って来て、遂にはあなたは、自分自身や他人が、単なる善き決心や、美しい話術であざむかれることを学ぶまでである。

(1)「守護天使」がいて、これが見えないが人間の側に立っており、その人々に善良な思想を吹き込むものと

信じている人がなかなかいる。ときおりこれは本当にそうであるように見える。ところでこれとは反対の場合も不可能ではないが、それはわれらに不快な仮想である。

一四

人は誰れでも老年期において、その人のもっていたいろいろな才能が、時には最も優れた才能すらもその人を多少見棄てるような時期が次第に近づいてくるものである。また感能もいくぶん鈍くなり、そのために感能上の印象やあらゆる外界のものに対する関与も減少してくる。人生行路における人間の最も信実な道づれである記憶力さえも、若干の方向においては減退し始める。それゆえに、地上の生存だけしか知らず、来世生活に関しては僅かなそして同様に非常に魅力的とは言い難い観念をもっていたに過ぎなかったギリシア人は、青年の花盛りに死ぬ人は恵まれた神々の寵児であると解明していた。

根本的なことがら[1]における真理の真実の理解のみは、人生の終りにあたって増大してくる。けれども、もしある一つのことがその人間を万事に積極的に、活動的に、思い遣り深くさせ、かつ生活を愉快にいとなむように保持するのでないならば——すなわち愛がかくの如く一切の力とならないならば——、その理解たるや、ひどく厭世的な傾向をもった全く消極的な能力に堕してし

まうであろう。

（1）特に歴史、哲学、心理学、および宗教に関する場合にそうである。すなわち、一時的な学課の「通り一遍のはなし」よりもさらに深い把握と洞察とを必要とする限りにおいてそうである。

それはその人間が愛をもっていることを前提としてのはなしである。なぜなら、愛は老年期においてはもはや容易に達せられるものではなく、単に保持されるに過ぎないからである。愛が性来の利己心に対して勝ち優るには、老いぬさきに愛の境地に達していなければならない。

さてこれこそが結局人生終末試験、すなわち「卒業試験（マチュリテート）」であって、これが精神生活の上級への進入を正当づけてくれるわけである。

われらは——小さい例証は日々眼前に横たわっているから、ただ大きな実例だけを引証してみれば——わが国の最近数世代の最も才気煥発せる人物の一人なるベンジャマン・コンスタン[1]の生涯の最期のような心境を望みたくはない。この人は世俗的な意味からはきわめて成果ある享楽的な生活をしたあげくに自分について次のように告白している、「私は生涯において判然と不幸な経験をしなかったにもかかわらず、車裂きの刑場にある哀れむべき罪びとよりも甚だしい魂の苦悶と死の苦悩をしのんで来たという一事だけは確かである。また私は大いなる数々の苦痛の原因であったので、この苛責を受けるに価したということ、また私は平静にして規則正しい生活への憧憬のために幾度びとなく身を焦がしたということ、またそれら一切にもかかわらず、決してまた

どこにも平和を見出だせなかったということも同様にたしかなことであった」[2]と。

（1）〔訳者註〕Henri Benjamin Constant（一七六七―一八三〇年）は Constant de Rebecque コンスタン・ド・ルベックとも称われる。スイス系のフランスの政治家、作家、共和的自由主義者。同じ立場に立つ女流作家スタール夫人との恋愛関係あり。ナポレオンの独裁政治に反対して追放され、亡命中、ゲーテ、シラーとの友交あり。"Adolphe"（一八一六年）という告白小説はロマン主義文学の代表作の一つとして有名。

（2）ある評論家がこのことについて、この人の生涯の全印象を、「見よ、〔これが〕人間だ！」という罪ほろぼしの言で包むことができるといっている。われわれはこの意見にはくみしない。人間の運命がこういうものである必要はない。

〔訳者註〕この「見よ、〔これが〕人間だ！」（Siehe, ein Mensch!）の出所はヨハネ福音書一九・五のラテン訳 "Ecce homo"（Siehe!〔hier ist〕der Mensch!）であって、「見よ、この人だ」という意味である。すなわちピラトが荊冠紫衣のイエスを祭司長たちや下役どもに見せたときのさけびである。

またゲーテのような人生の最期ものぞまない。彼はすなわちエッケルマンとの対話において、七十年を越える生涯の間、ほとんど一カ月と幸福であったことはなかったと説明している。あるいはカーライルのようなものぞまない。彼はついに自分の妻に対するわがままについて詮方なき後悔の念で苦悩した。事実彼の妻にとっては、彼との結婚生活は余りにも苦しいものになったのであった。またビスマルクのようなものぞまない。彼の晩年は君主に対するいわばアキレスの恨によって悲痛なものにされた、というのは君主がビスマルクの最愛の玩具であるところの権勢を奪ったからであった。

これらの偉人英傑にとって、確実な死後の名声も、無数の崇拝者のあらしのような喝采も、何

の役に立っただろうか。このようなことは、この世を平和に送り、今やかの世で平和に歓んでいる単純なる「善良な人々や信実な人々」の深い満足に比べたならば、結局何の意味があるのか。

かの偉大な人々においては、彼らの性格の織りなす、その他の点では実に輝かしい織物の中に純粋ないつくしみという縫い込みが欠如していた。彼らが、この純粋な愛しみというものをもっていたなら、われわれから充分共感・同情を要求する全き理由をもち得るものを、この欠如のためにわれらの彼らに対する共感・同情はうすらぐのである。

あなたがたは、これらすべての人々が、かつて地上で送ったと同様な生活を、唯一可能な永遠の生活においてもいとなんでいると考えることができるか。まさかそんなことはあるまい！

それゆえ、「最善の賜を追い求めよ」(1)。

(1) 第一コリント一二・三一、および一三。詩篇一六―二〇。

〔訳者註〕 パウロはコリント人への第一の手紙の一二章と一四章で、「霊の賜」のことをしばしば述べて、霊のたまものの多様性と、各人によってそれが多様であることそのぞましく、有機体的関係において、各人がその霊のたまものをもって相頼り、相助けて実存共同体を成すこと、あたかも各肢が相たすけて人体を構成するようなものであることを、説いている。すなわち聖霊は一であるが、霊のたまものは多である。そしてたまもののうち最大なるものは愛であるから、これを慕い求めようと勧めて、第一三章において、愛の何たるかを、いわゆる「愛の讃歌」と呼ばれるような詩文をもって語っている。愛は実はたまものの極致であり、たまものを越えたものでもある。聖霊そのものが愛の権化であるからである。「愛は聖霊の固有の名である」(Amor est proprium nomen Spiritus sancti) とはトーマス・アクイナスの名言である。

けれどもこれは勿論決してそう早く達せられるものではない。また教会の人たちが時折すでに規定したような一般的な簡単な「手段方法（メトディスムス）」によって達せられるものではない。あのような「手段方法」は人間性に適合しない。そうではなく、それはたくさんの段階をもった非常に個人的な路であって、しかもつねに力が増大してゆく路である。この路はまさにダンテがその『浄罪山（プルガトリオ）』において観るが如く描写してくれた。(1)

(1)　またはバンヤンが『天路歴程』において、またユング・シュティリングが『郷愁』において。ゼカリヤ一三・九参照。

利己主義というものは、そのいかなる形態においても、すなわち粗野にして物質的かつ享楽的な形態であろうと、精巧にして審美的かつ道楽的な(1)形態であろうと、あるいは崇高にして哲学的な形態であろうと、思慮ある人々を満足させることができないという確信は、まず第一におおかた体験を通してのみ得られるもので、しかもしばしばまことに徐々にである。

それゆえ『ファウスト』第二部にこう言っている。

「霊界の崇（け）高き一者
救われぬ、悪しき者より。
絶えず努（つと）めて励む者をば、

我ら贖い能うなり。」　〔一一九三四―七行〕

これが、われらの近き将来の課題として大規模に形成されるであろうところのものである。[2]

(1) 特に今日音楽の形態において婦人たちの間に優勢であるような。

(2) イザヤ三五・三―一〇。ゼカリヤ一三・八―一〇〔邦訳では九節まで〕。

同時に個々人においては次の如きクロムウェルの言がさしあたり有効である。「私は私の欲しないことを知っている。私の欲することは、行動に移る時が来たときに知るであろう」と。

次に来るそしてまことに危険な時期は徒然である。これは福音書もよく知っており、そして正しく記述している時期であるが[1]、短期間で終り得るものである。どんなたのしみもない生活というものは、それが仕事と結びついている場合でも、あまりにも刺戟がなさすぎるものである。さてそこには愛が加わらねばならない。しかもそれは力を与える神の愛が加わらねばならない。この新しい愛の形態において単にだれか人に依存するというのではいけない。単に人間依存をやっていると、「あとの欺瞞は時折さきの欺瞞より悪質である[2]」。エレミヤ一七・五―九。

(1) マタイ一二・四三―四五。「信仰問答書」は普通これを無視し、中間段階なしに、直ちにキリストによる救贖を招来せしめているが、それは福音に全的に一致しているとはいえない。

(2) それが両親であれ、兄弟姉妹であれ、子らであれ、友人であれ、夫婦であれ、人間に過度に執着するこ

と、あるいは人間に対して自己を完全に犠牲に供することは、この意味においてしばしばまさに破滅的な結果をもたらすものである。かくてかなり多くの生命を、特に婦人の生命にしてはるかに崇高な愛のはたらきをなし得るはずのものを、隠れた残酷な殉難に供するに至らしめる。ここに正しい限界線を見出だすのは、しばしば大変困難に思われる。しかしこれは、神を正しく愛することをしないで、慣用語が正しく言っているように、人間を「偶像化」している人々に対してだけのことである。この両者は両立するものではない。

かくの如くにしてはじめて真の向上が起ってくる。

もしあなたがたが、私が推定するように、この点に立っているならば、あなたがたはその場合、すべてのそれからさきのことの基礎として、来世生活があるということ[1]をつねに確信していなければならない。それからまた現世生活は、われわれを性来のほとんど全く動物的性質より、かなり霊的状態にまで教育し、かつこれを可能ならしめる[2]目的をもっているということをつねに確信していなければならない。この目的への道は、神の御許(みもと)べにあることと労働との中を通っている。

(1) これが第一の信仰箇条であつて、われらの歴史的な信仰様式におけるように最後のものではない。この歴史的な信仰様式の順序では信仰はさらに困難なものである。これについては私の小著『永遠の相の下で』〔本訳書では『永遠の生命』〕を参照せよ。

(2) これに対して根本的な相違をなすものとして、現世での「生活をたのしみ味わい尽す」ことが対立している。そこには来世生活は考えられてない。

さてあなたがたは、個々のことのこれからさきのすべての導きを神にまかせ得ることを次第に

経験するであろう。『幸福』第三巻所載の「わがなんじになさんとするは、驚くべき事なり」〔出エジプト三四・一〇〕を参照せよ。

あなたがたはまた、かつて存在したあらゆる宗教や哲学の中でキリスト教がはるかに優秀なものであることを間もなく明かにさとるであろう。

あなたがたはさらに、苦難はこれに対する力が充分にあるなら、人間の進歩のためには不可欠なものであり、苦難において鍛練を経た人々にはつねに曇りない幸福よりも、むしろ歓迎さるべきものになり得ることを洞見することをまなぶであろう。

そして最後にあなたがたは、この世で勢力あるすべての力という力の中で、愛こそはるかに絶大なものであって、あらゆる妨害にうち勝つ(1)、という慰め深くまた勝利にみちた確信を獲得するであろう。

(1) これが少なくとも整然たる発展行路である。もちろん少なくとも見かけはもっと急激な回心もまことにしばしば起るものではある〔行伝一六・三一〕。しかしこの信仰は、元来は勝手な決心にすぎず、また多くの人々にとっては一種の絶望的な行為で、後ほど経験によって真の確信に変貌しなければならないものである。――われらはピリピの獄守のその後の物語を知らないが〔行伝一六・二三―四〇〕、パウロ自身の伝記はよく知っている。彼は回心のあとでなお長い年月を静寂な場所に遣わされ、しかるのちはじめて宣教を〔神から〕ゆるされるに至ったのだが、そのかくれたる時については彼自身めったに語らずまた非常に言少なにしか語っていない（ガラテヤ人への手紙第一、二章）。いかに多くのその後の「回心者」にまさにこの静けき中間時が欠けていることか！　ただ上述の如く、この最初の決意がおおかたキリストに対する単純な短期

の結合であることだけは確かである。

愛は最大の力なりとのこの最終の確信は、時間的には個々人の生涯において最も晩くあらわれてくるのがつねであり、また個人の全精神生活の最善の成果たるを意味するが、この確信がさらにこの成果を得たる多くの個々人を媒介として、物質的生存競争のために絶えず相互に武装している現代諸国民間により大なる普遍妥当性を達成するならば、世界はこの今日の苦悩と窮状から根本的に助け出され得るであろう。それまでは、「国際平和」の、「国際福祉」のといってみたところで、それはいつまでも単なる美しい夢に過ぎない。

世界は今や一方において、十八世紀の末葉におけるが如く、世界の多種多様な追求をすべて支配するところの満足な確信を再び求めている。それは世界がこのような確信をドイツの哲学にもイギリスの進化論にも見出だせなかったあげくのことだからである。芸術も美の崇拝さえも、普通の官能主義にまで次第に堕落することがないまでも、おおかたは間違った麻酔剤たることが暴露されたのである。そしてそれはおよそ上層階級に対してのみの快楽であって、これに反して「民衆にとっては鰯鮫の魚卵の塩づけ」であったわけである。

世界が思い焦がれている信仰は、教訓的な教義的教会的な信仰ではない。十六世紀において信仰が残念ながらついにそんなものになってしまったのであったが。そんな信仰ではなく、活き活

きとしたキリスト的な信仰で[1]、形式とは極めて無関係なものである。そのような信仰にまで、人心は再び拡大され、新鮮にされねばならない。それからすべての人々がすべての人々に対してとっているあの一般的な無関心はやめられなければならない。かつては「新時代」の合言葉（シッボーレツ）〔ヘブライ語〕であったところの「自由」の概念が次第にこの「無関心」にまで同化してしまったのである。

（1）今やこの信仰を招来するには大いなる決意と大いなる忍耐とを必要とする。「つねに決意していること、どんな努力に際しても正義を眼目としていることは肝要である」とは、崇高なマルクス・アウレリウスの日誌に見える信仰への善き言である。この人の古い騎士の像は今日もローマのカピトルの広場に立っている。ただ、その当時の人生観を言いあらわしているところの結尾の一節は当を得ていない。「しかし思想生活においては理解し得べきものをあなたの導きの星とせよ」と。

この短い地上の生涯においては、まさに不可解なるもので、しかも実在しているものがある。この地上の生涯は、これよりはるかに長い生活の一段階を形づくっているにすぎない。かれらが「永遠の相のもとに」生きなければならないかどうかは、当分はなお枝葉的なものによって熱情的に動かされているわれらの世界の主要問題である。しかし、理解し得べきことにいっそうきびしく固執している魂もあるということは、あまりにも常軌を逸脱せんとの傾向ある時代においては一つの恩恵であり必然である。

単なる自由のかわりに、共存を求めることは、これと密接な関係がある。単なる自由は、まことにそれ自身では、単に消極的なものまた破壊的なものであって、事実頽落していた人々の旧い結びつきを大部分ぶち破ってしまったのである。最近のいわゆる「社会的」結合というものは、元来愛にもとづいたものではなく、単に共通の利害に、または単に共通の憎悪にもとづいているものであって、すでに全く不満足なものたることが明かとなっている。人々は何はさて措き、再

び愛をこそ身に学びとらねばならない。然るのちにはじめて社会的キリスト教、または博愛主義、労働の団結や組織について真剣に語ることができる。また人々はまず個々人の改善から始めねばならない。しかるのちに全体の改良に歩を進めることができる。これを達成する最も容易な道は、今日もなおキリストに結びつくことにある。然り、キリストに結びつくことであって、単にキリストについて語る人々に結びつくことではない。かくの如き結びつきによってのみ、あらゆる害悪、特に世間苦を克服する力は来る。この力はあなたがたがキリストに結びつかないかぎり、自分自身のうちにはつねに見出だし得ないであろう。

それゆえに、あなたがたがもし病気を感じ、その他弱さを覚え、圧迫を蒙り、生活に失望し、意気銷沈し、または萎縮や孤独を感じたときは――愛を生きんとの決意を固めるか、その決意を新たにせよ！　これはあなたがたを助け得るであろう。

愛は一切に勝つ！

Amor omnia vincit.

＊

「今一度（いちど）成らんとぞ思う――

うつし世の過ぎゆくまえに
されどなおこの大地の上に
平和の国の建たんことなり。

崇高さと自由の人と、
自己よりの解脱者の国。
善の精神に信実を尽くす
真と信との人の結合や！

徒らのお寺院参りは
全一なるこの民はせず。
聖民なる均しき徴、
人みなの胸中にぞ見ゆ。

唯一人とどまるとても、
この人はうち勝たれ得じ。

これぞげに愛の力ぞ、
ものみなにうち勝つ愛よ。」

『力の秘密』解説

『力の秘密』は一九〇九年のクリスマスの直前に出版された。ヒルティーの召天したのは十月十二日であったから、この小冊子は遺言のようなものである。『永遠の生命』とこの書と、それから最後の『永遠の平和』(Pax perpetua) の三者はおのずから三部曲の如きものとなった。

『力の秘密』の「秘密」(das Geheimnis) という語は、他の訳語としては「秘訣」「秘義」「奥義」などが考えられるが、結局「秘密」とした。この書の場合、この「秘密」なる言は、「隠れた源泉」といった意味あいである。力の源泉は実に愛で、ヒルティーの思索と体験の総括は実にこの愛であった。愛は彼のたましいの髄の本質であった。「生命」の問題も、「平和」の問題も、たましいが愛を呼吸していない限り、生命が真の生命ではなく、平和が真の平和ではあり得ない。

ヒルティーはこの小冊子を十四段階に区分しているが、訳者は便宜上これに番号をつけた。その各々に標題を試みにつけてみるならば、およそ次の如くであろう。

一、善への力は何か。　二、現代社会の愛の欠乏。　三、いかにして愛に至るか。　四、自己

放棄。五、神に近づく。六、美の虚しさ。七、神への信愛。八、悪霊の実在。九、愛の力の増大こそ全世界の急務。一〇、現代文明爛熟の危機。一一、苦難の体験と愛。一二、愛には怖れなし。一三、小さきものへの愛。一四、愛は一切に勝つ！

［　］内はすべて訳者の註である。

老使徒ヨハネが愛を説き且つ告白したように、ヒルティーも、現代世界を救う道はただ一つ、愛を生きるにあり、と絶叫している。彼のおだやかな論説の奥に烈々たるものを感知する。神愛の独一なる体現者はキリストであった。この愛にのみ、力の源泉があり、「力の秘密」が宿っている。この愛のみがにくしみの世界を和らげ救ってゆく。このようなのが「愛の勝利」である。ヒルティーは正にこのキリストの愛の証言者、体現者の貴き一人であった。ヒルティー特愛の詩人ダンテの『神曲』の結句は、ヒルティーの晩年のたましいの姿を語るが如くである。

「されど今やわが念願と意志とは、
あたかもひとしくめぐる車輪の如く、
日輪と諸星を動かす愛に廻りてありき。」

（「天国篇」第三三歌一四三―五行）

おわりに

本巻『百世の師ヒルティー』の第一から第三までは『提言』（主筆、出射義夫教授）という月刊誌に、一九七四年（昭和四九年）五月より丁度二年間、一九七六年（昭和五一年）四月まで、「百世の師ヒルティー」と題して、執筆寄稿したものに基づいて編纂した。

ヒルティーの生涯を素描したあと、彼の主要著書にぶつかって、各著書の本質を自らつかみ、ヒルティーの精神と思想を説きつつ、筆者自身の告白をそこに織りこんだ。原書からの引用文は、原則として白水社版『ヒルティー著作集』の各巻の訳文に依った。ここに、各巻各項の訳者である氷上英廣、斎藤榮治、前田護郎、杉山好、登張正実、小塩節、岸田晩節、国松孝二、菊盛英夫の諸氏に感謝の意を表する。但し、『眠られぬ夜のために』上巻、『永遠の生命』、『力の秘密』は筆者が訳したので、それを用いた。

後半に掲載した『眠られぬ夜のために』上巻抄訳は、紙数の関係もあって極めて少量しか載せ

られなかったが、この中にヒルティーの本質躍如たるものがある。『永遠の生命』、『力の秘密』は、解説にも記したように、ヒルティー晩年の珠玉姉妹篇で、不滅の文字というべきであろう。その全訳を載せることを快諾してくれた白水社の好意に感謝している。

ヒルティー自身の望むところは、彼の著作を通して、読者が聖書そのものに親しまれんことであるにちがいない。読者は、文中の聖書引用の箇所に来たら、出来るだけ聖書を開いて、引用句のみでなく、その前後を読んで有機体的に把握されんことを。

一九七七年八月一日

小池辰雄

★著者略歴

一九〇四年二月七日東京生れ。高等師範附属小学・中学校出身。水戸高校を経て東京大学文学部ドイツ文学科卒業。東京陸軍幼年学校、陸士、陸大教官、終戦後一高、東大教授、停年退職後、現在は独協大学教授並びに独協中学・高校校長。その間に昭和医専・医大、早稲田大学、東京歯大等のドイツ語講師を務めた。

内面歴としては木高・東大時代から、無教会の内村鑑三・藤井武・塚本虎二のキリスト教集会に相前後して列席したが、一九四〇年より武蔵野の自宅にて原則として日曜毎に聖書講義を開いて今日に至る。その集会を武蔵野幕屋とも東京キリスト召団とも称している。

著作活動としては、かつて「旧約知識」及び「キリスト教常識」両誌の同人として、また「曠野の愛」及び「曠愛新書」の主筆として執筆。その他ヒルティ、スピーリー、ベルジャーエフ等の翻訳、学術論文等多数有り。

©一九七七

小池辰雄著作集　第五巻

百世の師ヒルティー

初版発行　一九七七年八月三〇日
再版発行　一九八四年二月二十九日

著者　小池辰雄

発行　小池辰雄著作刊行会
東京都武蔵野市吉祥寺東町
四ノ一五ノ一九(〒一八〇)
TEL　〇四二二(二一)三四三三
(振替)　東京五―六一三一八
(責任者)　片井義二

印刷・製本　中央精版印刷株式会社
装幀　前野洋一

頒価　三五〇〇円(送料不要)

●小池辰雄著作集（全十二巻）

改正頒価、各巻三五〇〇円（送料不要）、分買自由。　＊印は既刊

＊第一巻　無者キリスト（一九七五）　（三版）
＊第二巻　芸術のたましい（一九七六）　（再版）
＊第三巻　無の神学（一九八二春）　（初版）
＊第四巻　詩篇珠玉集（一九八〇）　（再版）
＊第五巻　百世の師ヒルティー（一九七七）　（再版）
＊第六巻　随想集（一九八二暮）　（再刊）
＊第七巻　聖書の人ルター（一九八三）
第八巻　旧約聖書抜粋（一九八四）
第九巻　新約聖書抜粋（一九八五）
第十巻　随筆集（一九八六）
第十一巻　詩歌集（一九八七）
第十二巻　一日千年（一九八八）

口座番号	東京5―61318
加入者名	小池辰雄著作刊行会

●申込みは郵便振替にて